

---

# 元魔王様、頑張る!

ブレオドラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

元魔王様、頑張る！

### 【Nコード】

N1245V

### 【作者名】

ブレオドラ

### 【あらすじ】

異世界に召喚され魔王になった俺と、その眷属になった友人A、B、C、D、X はやりたい放題にして日々を過ごしていた。だが魔王でいられる期間が終わり元の世界に帰ってきた俺たち。大半の力を失ってしまいました元の学校生活に戻ろうとするも以前とはやはりどこか違う。さてさてこれから先どのような人生になるのか？それはすべて自分次第である。

## プロローグ

「オッス！おら魔王！いつちよ頑張るか！」

「死ね」

…あまりにひどいこの言葉。淀みまくった空気がドアの外まで感じられたから精一杯明るい感じを作って入室したのに…

「ちよつとひどくねえ？俺はさあ この切ない空気を「今ふざける場合じゃないのはわかるだろ」 あん！？てめっ誰に口聞いてんだ？」

「ストップ！いきなり喧嘩すんな。和也は少し落ち着いて。大祐も切ない空気を感じたなら冗談は控えてくれ」

A が生意気にも俺に言うてきやがった。もう一人注意された和也ことB はふてくされた顔をしている。仕方ないな、大人な俺が合わせてやるう。

「んで、今日は何があつたんだ？」

慈愛にあふれた笑顔でA にとりあえず聞いてみた。

「キモ！ 実はジョニーがさ、いつもの連中に絡まれたみたいで」

「いや、絡まれたっつうか絡んだっつうか…」

Dが複雑そうな顔をして話しに入ってきたから、失礼なAをぶん殴ってからDに詳細を聞いてみた。

まとめるとC（通称ジヨニー、本名 本庄 瞬）が曲がり角から出てきた奴とぶつかって切れて襲い掛かり返り討ちにされた。アホじゃねえか？

「アホじゃねえか？」

「アホじゃねえよ！この俺にぶつかってきたんだぞ！マジありえねえよ！本当ならぶつ殺してやるところだぞ！」

近い近い顔が近い。Cのやつ興奮してるからつばが飛んでるし。

Bもその時のこと思い出してんのかゆがんだ顔をしている。

「はあ、んでぶつ殺そうとして返り討ちにあつたんだべさ。もうアホなことはやめようぜ。何回同じ事すれば気がすむんだ？」

ホント、こいつらは懲りないねえ…これで6回目だぞ。いい加減現実を見ればいいのに。

「うるせえよ！なんで人間ごときに道を譲らなきゃなんねえだ？本当の力があればあんな連中どうとでもできるのに」

「そつだ。俺たちから見れば弱すぎる連中に頭を下げるなんて御免だ」

Cが叫べばBもそれに続く。面倒な二人組つすよこいつらはホントに。AとDも溜め息をついてるし、Xも………Xはエロ本を読んだ（二次元的な女の子の）

仕方ない、ここは俺ががつつり言ってやるか。

「俺たちが魔王や魔人だったのは昔のことです。今はもうただの人なんだぞ。いい加減過去の栄光的なものにすぎるのはやめろって。現実を見なさいって」

途端に静かになりつつも不貞腐れた顔をするBとCを見てもう一つ溜め息を突く俺。

そう、ここにいるのはかつて魔王と呼ばれ世界を好き放題にしまくった俺こと、笹川 大祐。

そしてその眷属、一般に魔人と呼ばれた、Aたちなのである。

しかし悲しいかな現在はその力の大半を失った悲しい一般人な俺たちなのである。

## 1話 悩んでるオレ

ここは火星、つまり地球のお隣さん。地球で魔法技術が見つかったのは結構昔で、後の火星にできる国、その初代皇帝となる日本人が、人類初めて火星に到着したのも昔のことだ。

んで初代皇帝が作ったその国、誰も呼ばない正式名称『新陽皇国』、通称『開拓者』で生まれた俺は十五貴族の家系でもなければ、どつかの裕福な企業のボンボンでもなく、ごく一般的な家庭に生まれた。

しかし普通な俺の周りには美形な幼馴染だったり美形な兄妹だったり普通じゃないやつらがいたがここでは関係ないから忘れよう。

…トラウマだったし…そんな感じでイケメンじゃない俺は中学では1番でも高校では中の下くらい、っていうレベルの学力で、魔法や探索、戦闘も普通なレベルだったから当然彼女はなし。

切ない人生を送っていた。

そんな日常の中でいろいろフニヤフニヤしてモゴモゴして引きこもってウラーっ！てやってたら、運命の日が来た！思えばあれが俺の運命を大きく変える最初の分岐点だったんだろう。そう、異世界への旅立ちである。

現在、魔法と科学が大きく進歩している開拓者では異世界の存在を確認している。

ただこれは本当に異次元にあるのか別の惑星へ物理的な距離をワ

ーブしてるのかはわかっていない。

……え〜〜〜わかりにくいか？んじゃ簡単に言うと宇宙船で時間さえあればたどり着けるのか、宇宙船では絶対にたどり着けないのか、どっちなのかはまだ不明ってことだ。

話は戻って俺とA・B・C・D・Xは異世界へと旅立った。

そしてそこで魔王とその眷属になった。半端なく強くなった俺たちは初めて手にしたその強大な力に溺れて、やりたい放題にやった！

具体的な話はここでは割愛しよう。いつか機会があれば語る日も来るだろう。

ただ俺たちは本能の赴くままに犯って、殺って、やりまくった！

そして1500年ほど過ごしたあと、開拓者へと帰還した、『力を持たない状態』で。

なぜか？それは異世界への旅立ちには2つのパターンがあることに起因する。

1つは『ゲートアウト』と呼ばれる魂のみが異世界に行くパターンである。

これは面白いことに肉体は開拓者に残っていて異世界では全く同じスペックの肉体が新たに用意されそこに魂が宿り異世界探索を行うことになる。

その後異世界で時間切れ、もしくは死亡すると魂が開拓者に戻ってきて元の肉体に入る。そしてこの場合は異世界で数年の時を過ごしたとしても開拓者では数時間しか時間がたっておらずまた普段の日常生活に戻るのである。

ちなみに異世界での膨大な経験や知識などで元の肉体に戻った時に性格が変わるだろう、精神が変質するだろうと初期のころは予測されていたが、実際は変化がほとんどない。

体験者曰く本とか動画、伝聞で経験したような感じ？だそうだ。俺たちも何となく違うがそんな感じだった。

もう1つのパターンは『ワールドアウト』、肉体ごと異世界に旅立つパターンだ。

この場合は異世界と開拓者とともに時間は流れ異世界で数年過ごして帰ってきたら開拓者も数年のときが過ぎているのである。おまけに異世界で死んだらそのまま死んでしまい開拓者には戻ってこない。



これらのことは起きる現象をわかっけていても原因はさっぱりわからんらしい。俺自身はいくつかの仮説を立ててるけど証拠はない。ま、名前と現象だけわかっけてればいいだろう。

ゲートにしるワールドにしるいつ起きるかわからんしな。人生で複数回経験するやつもいれば人生で1度も起きないやつもいる。てか99.9999999999%の人間は遭遇することはないしな。俺たちは遭遇したけど…

また話がそれたな。異世界で1000年以上過ごしてるのに学生な時点でわかるだろうが俺たちはゲートだった。つまり魂だけ。

その世界の神っぽいやつは魔王がなくなるといように魔王を倒したものがその返り血を浴びることで新たな魔王になるという在り来たりなシステムをつくっていた。

魔王の力は肉体に力が宿るもので、だから当然元の体に戻った俺たちには魔王の力はない。

それでも俺やA、D、Xはその戦闘経験を、魔法知識その他もろもろを利用し訓練してゲートアウト前とは比べものにならない位強くなったが（それでも魔王や眷属だったころの足元にも及ばない）、

BとCはいまだ過去の栄光が忘れられず訓練も馬鹿らしいと拒否している。

「いっそ見捨てようと思うこともあるが1000年以上を共に過ごした仲間と思うとちょっと複雑である。」

「ただ俺も他のゲート経験者同様性格は異世界訪問前とそんなに変わってないので正直うざくなってるのは否定できん。」

「…あ？B、Cは性格変わってんじゃないかって？あいつらはもともと引きずるタイプの人間だよ。」

「…ホントこれからどうしよう。」

自室のベッドで今日の放課後のことを思い返す。

「ほらいつまでも愚図ってないで訓練しに行くぞ。身体能力は昔よりがつくり下がってるけど戦闘経験はたっぷりあるんだし、ちゃんと修行すればそれなりに強くなれるって。」

「俺らに訓練なんて必要ないし！」

訓練を拒みまくるB君です。男には気が長くない俺はちょっとイラついてきた。

「んなこと言ってるといつまで経っても良い女をゲットできないぞ！切ないチェリーのままだぞ！」

「うっさい。俺は童貞じゃないし！」

マジ切れなB君です。

「この世界で、今の体は童貞だろ……」

今日初めてXが発言した。あいつはシモの話にだけ食いつくなあ  
〜。

おっと、BのやつはXに食って掛かっている。今のうちにCを誘って  
みるか。

「おいC 「俺も訓練しない」…そうですか」

「ジョニーはなんでそんなに訓練したくないんだよ？強くなれば上の  
研究室に行けるし、そうしたら十五貴族の本家は無理でも分家の  
分家の分家の女くらいなら知り合えるかもしれないぞ。十五貴族の  
人間は分家だろうとみんな美形だし良いじゃんか。」

Dがメガネをクイツとしながらジョニー（通称ジョニー、本名

本庄 瞬 俺だけは（って呼んでる）に話しかける。

俺も全く同意見だな。強い＝強力な魔法が使える＝頭がいいはほぼ必ず成り立つからな。一部では知識とかすっ飛ばして感覚で魔法を使える奴もいるけどそんなのは超レアキャラだ。

強い力を持つ十五貴族の人間とは上位に上がれば必然的に知り合えることになる。貴族の人間は美形ばかりだからな。特に御剣、華月、七浄の次期当主の女はスタイルも良いし俺の好みのストライクだ。

「この身体じゃ努力したって十五貴族に敵うはずない！仮に行けたとしても俺たちの顔じゃ相手にされるはずねえし！」

瞬間シーンとなる部屋。自分たちの外見について触れるなんて！やるうはとんでもない地雷を踏みやがった！

あとはもういつも通りだった。俺とA、D、Xは訓練に、BとCは2人でどっかへ行った。最近はこんな感じで2つのグループにな

りつつあるなあ…どうしよう。一応俺がリーダーだし何とかしなきゃなあとは思っただけだね。やる気がね…

最後の方に言った Cの言葉を思い出す。

「今俺たちがやんなきゃいけないのは訓練じゃなく元の力を取り戻す方法を考えることだろ！？それなら俺だって喜んでやるよ！」

このセリフに対してDは無理だとか、過去のこととはどうだとか言い返していた。そしてそのまま喧嘩別れみたい感じになって訓練して家に帰宅というわけだ。

「ハァー…」

溜め息ばかりついてる俺。なんでこんなに悩んでいるのか？  
実は魔王の力を取り戻す方法を『知っているから』だ。

## 2話 とりあえず今後の方針

「おつす!」

いつものように挨拶をしながら教室に入っていく。既に教室にいるのは半分くらいかな。

「おう、おはよう」「うつす」「おはよー」

俺の隣の席の西川を中心に3人で話をしていて、クラスメートが挨拶をしてきた。椅子を引いて席に着いた後、西川が話しかけてきた。

「隣の組の三坂さんの話聞いたか？」

「? わかんない。たぶん聞いてないな。」

三坂さんというのはあれだ。よくいう学園のアイドル、高嶺の花ってやつだ。カワイイ、スタイル良い、勉強運動魔法ができる、性格も良いという漫画に出てくるヒロインみたいやつだ。確かに顔は貴族級にカワイイし胸もでかい!憧れるのはわかるが、俺はかつて魔王だった時に同等かそれ以上のレベルの娘をたくさん自分のものにしてたからな。周りの連中ほどは夢中になってない。でもやつぱ付き合えるなら喜びまくるな。

「2つ上の先輩でイケメンで強いつて有名な先輩いるじゃん?」

「あゝ確か池田だっけ？前に三坂さんに告ってフラれてたよな。」

「そうそう。そいつがまた告ったらしくてさ、でフラれたんだけどそしたら何がダメなんだ」とかどうしたら付き合ってもらえる？とかしつこく粘ったらしくて。」

あーそれはいくらイケメンでもやっちゃいけないことだよなあ。俺たちみたいな残念組がやったら即ストーカー扱いだろうしな。んでどうなったんだろう？

「三坂さん自身は単純に恋愛に興味がないらしいんだけど、それを言ったらために付き合えとか、経験してみれば考えが変わるとか言ったららしい。それであまりにもしつこいから次の小大会で優勝できたら付き合ってやるって言ったらしいよ。」

「マジか？スゲー無茶言うね。」

小大会ってのは毎年行われる武術大会とか戦闘大会とか見たいやつのことだ。各地域で『小大会 予選』があつて勝ち抜いた人が『小大会 本選』に出場する。ちなみに年齢制限はなく誰でも出場可能、優勝者には豪華褒美が待っている。ただ貴族の血筋は厳選されて出場するらしい。若い才能だったり新しい人材を発掘するという目的も兼ねているので強すぎず弱すぎない人が大会に出場することになっているらしいが詳細は不明だ。そんで小大会で好成績を収めたら優勝賞品とともに5年に1度行われる大会、通称『大大会』または『本大会』『世界大会』といくつかの名で呼ばれる大会への本選出場権をもらえる。ちなみにこの本大会は貴族も制限なく出場可能だ。勝ち抜くのは難しいがその分優勝賞品はやばいらしい。

んで小大会はてつとりばやく自分の能力を示すいい機会だからた

くさんの人が出場する。おまけに地球の人間もやってきて名を上げようとするからさらに大会のレベルは上がっている。小大会、大会以外にも戦闘をする大会はあるが、火星全域で行われるこの2つの大会出場者のレベルは飛びぬけている。そこで優勝しろなんて、絶対付き合いませんと宣言するようなものだ。

「じゃあ先輩は諦めたのか？」

「それが逆に張り切ってるらしいぞ。昨日も訓練所で遅くまで頑張ってたつて。マジ身の程知らずだわ。三坂さんは俺の嫁なのに」

気持ち悪いことを言うクセ毛の松田君。とりあえず流すことにしよう。

「はあくいつそ俺も出場して……」「無理だろ……」「イケるって！諦めなきゃなんとか……」

グダグダ話してる松田と西川。三坂さんのことはひとまず置いて、大会かぁー。出てみようかなと少し思ったり。今の自分の力を存分に出し切ってみたいなあ……なんて考えながら端末をいじろうとしたらミツクが話しかけてきた。

「そういえば大祐の友達でBとCだったけ？本名わかんないけど。昨日駅の近くの裏路地っばいところで殴られてたぞ。」

「…ウソ!？」

「なんか最初は肩がぶつかっただけで、相手側が謝っただけでそれを無視して掴み掛って返り討ちにされてたっばい。」



「ってことがあったらしい」

放課後のいつもの訓練所でAたちに話してみた。もうどうしようもない。あいつらはマジでどうしようもない。さすがにみんな呆れ顔だし。珍しいことにXまで呆れてる。下ネタじゃないのに反応するなんて珍しい。

「さすがの俺も呆れるくらい馬鹿だったことだよ。」

え？今、声に出してたか

「顔に書いてた」

ホントか？気をつけよっと。

「それより、どうすんだ？いよいよメンドクサイことになってきた

ぞ。このままじゃ大きな問題を起こしかねないぞ。」

あいつらは小物臭が半端ないから、なんだかんだ言って大丈夫だとは思うけどな。でも問題がおきてからじゃ遅いし。一度腹を割って話し合う必要があるかもな。

「今度みんなで落ち着いて話し合ってみよう。それで今後の付き合い方を決めることにする。場合によっては完全に別れることもあるかもな。ゲートアウトする前は正直仲良かったわけじゃないし。異世界で一緒に過ごしたときは仲間だったけどこっちに帰ってきたら元の身体とか感情に引きずられる部分もあるしね。実際最近ゲートアウト前のように顔見知りだっという認識になりつつあるんだよな俺は。」

「それはわかる。俺もそんな感じだから」同意するA。「確かになあ」とXもいう。

「待つて。確かにあいつら、最近ひどいけどそれでも仲間じゃん。そんな簡単に切り捨てるなんて」

「Dの言うこともわかるけどな。何度言っても直らないじゃんあいつら。」

「だからって」

「じゃあどうすればいい？俺たちは努力して強くなるうとしてる。あいつらは『努力はしたくない。でも強くなりたい。そして一番の本音は力を手に入れて好き勝手にしたい』って思ってるだけだぞ。」

「だーかーらーそこは説得してあいつらにやる気を出させれば良い

「だろ？」

「山彦、山彦。少しは現実を見よう。あいつらは楽しただけだから訓練なんてしないぞ」

俺の代わりにA が言ってくれた。ちなみにDの本名は 東山彦 です。アルファベットは俺以外使ってくれない。コードネームみたいで格好いいのに。

「それに俺たちはあいつらの親じゃないんだし。なんでやる気を出させるまでやんなきゃなんないんだ？もともとウチのチームの方針はやりたい奴がやる！ってのが基本だろ？やる気がない以上放置プレイでいいだろ。」

Xが続けて言う。そして俺も

「もし仮に魔王の力を取り戻す研究をしますって決めたとして、研究するのは俺で、補助はお前ら3人。あの2人は何もしないで結果が出るのを待っただけのような気がするし。D はどう思う？」

何か言い返そうとして、でも黙り込むD。実際その情景が思い浮かぶのだろう。

「D は俺らと違ってゲートアウト前から仲が良かったからな。かばうのもわかるけどそれにしただって限度はある。お前がどうしても一緒に頑張りたいって思うならお前がやる気にさせる方法を考える。幼稚園児でもあるまいし、わざわざあいつらの機嫌とって訓練させるなんてことはやんねえぞ。良いか？」

「…わかったよ。」

「何度も言うが次に会う時に一度じっくり話し合おう。Dもそれまでに何とかする方法を考えておけ！あいつらがやる気になってくれるならそれに越したことはないし。……とにかく結論はその時にだそう。」

そして次の日。

昨日は予定外に熱く語り合った後、休憩をはさんで訓練をした。微妙に浮かない顔をして帰ったDが気になってたが一晩経って落ち着いたのか今日は特に問題なさそうだ。では本日のメインの議題を出しますか。

「次の小大会に出てみよう！」

「……は？」

期待を裏切らない反応だな。我ながら素晴らしい案だと思うけど……だつて

「次の大会で優勝したら三坂さんと付き合えるらしいんだよね。だから出場するぞ」

「三坂さんて誰？」

AとDが不思議そうな顔をしてる。同じ学園なのはXだけだからな。知らないのは無理ないけど。

「うちの学校で一番かわいいって言われてる人。しつこくコクってくる先輩に優勝したら付き合ってたって言ってたらしい。胸が大きいし大祐好みの女だが、貧乳好きの俺にはいまいち魅力が感じられないな。」

「マジか。じゃあ俺も駄目だな。俺的には大き過ぎず小さ過ぎないくらいが…」

俺の代わりにXが答えてくれる。そしていつのまにか胸のサイズの話に切り替わってる馬鹿連中。こいつらもなんだかんだ言って飢えてるのかも。

「冗談は置いといてだ。出場する理由は、今の自分たちの実力を確認するつてのがある。それにいつも自分たちだけで訓練してるから、たまには知らない連中と戦うことでいろいろと勉強になるだろうし。」

「俺は別に出る気ない。」エロ本読みながら喋るX。せめて本から顔をあげる。

「バカ、いい成績を残せばカワイイ貧乳彼女ができるかもしれないぞ！？女の子に『カッコいいです』とか言われてリア充になれるかしれないぞ？」意外と乗り気なAが言う。

「…マジか。どうしよう…」

簡単に乗せられるなこいつは。説得はAに任せちゃおう。あとはDはどうするかな？

「出るのはいいけど個人戦？団体戦？」

そーいえばそれを言ってなかったか。

「自分の実力の確認も兼ねてるからな。個人戦だ。」

「ふーん。まあいつか。」

「よしDも参加でいいな。あとはエロ太はどうする？」

ちなみにエロ太はXのことだ。本名は佐々門 風太な。俺のこいつらへの呼び方は気まぐれで変わる。意味は特にない。

「これを機会にリア充になろうと思います」

よし全員参加で決まりだな。久しぶりの実戦だしわくわくするな。やっぱり俺は多少なりともバトルジャンキーの気があるのかも。

「さてさて今後の方針が決まったことで、具体的な日程を話すのだ。今年の小大会は3か月後の8月だ。予選への登録は各自でやっつけよ。これからの訓練は基礎的なものに加え対人戦を行うようにしよう。同時に魔法を使うために必要な魔法式もそろそろ集めるようにしよう。今までは肉体の強化と魔力の強化、制御がメインで魔法はすでに持ってた魔法式の分だけだったからな。文句がある人は？」

「」「異議なし」「」

「よし！では今週から大会まで、水曜日の放課後はダンジョンに潜って魔法式回収を行うことにする。潜るダンジョンは」

「ちよつと待って。何で水曜日？休日とかにがつつり潜った方がよくない？」

「ハイ、良い質問だねA君。できれば話し終わってから聞いてもらいたかったが、他のやつらも不思議そうだし答えよう。」

1. がつつり潜る気はない
2. 週末は他の人もいっぱい混雑する可能性がある。最悪入れない場合もあるし。
3. 金銭的にも平日の方が安い。毎週行くつもりだからなおさら。

以上のことを説明したらAは首をかしげて再び聞いてきた。

「2と3はわかるけど、1はどうして？良い魔法式を手に入れるなら深いとこの方が効率良いだろ？」

「今から複雑で高度な式を手に入れても解析、稼働、運用、応用までいけないだろ。それに俺たちの魔法媒介はそれほどの容量がないからな。高度すぎるとそもそも使えない。」

「うーんでも…っていう気持ち微妙にあるっばいけど一応納得はしたみたいだな。今回は優勝目指すわけじゃなくて実力を測るため、久々の実戦を楽しむためだし良いだろう。んじゃあ、良い時間だしそろそろ今日の訓練を始めますか！」

### 3話 ダンジョン探索

天井が白く発光する石で造られた通路を進んでいると俺の感知範囲内にモンスターが踏み込んできた。

「右からゴブリンが来るぞ」

「わかってますって。そらよっと。」

俺の警告を軽く流しAは火の玉を3つほど放った。下級魔法のフアイアーボールだ。5匹のゴブリンのうち2匹が燃えた。

「1発はずしてるぞ〜めんどくさい。」言いながら装飾のない実用一点の大剣を構えるXことエロ太（構えるまでエロ本を読んだ）。エロ太が迫ってきたゴブリンに突っ込むのと同時にDも二本の短剣を構えて飛びかかった。エロ太の一振りですべて2匹が吹き飛びそれに驚くゴブリンをDが切り飛ばしていた。

「うん、余裕だな。ま、こいつらはゲートアウト前の俺らでも余裕で勝てたしな！」

「いや、お前はさっきから何もしてないじゃん」

気分よく言う俺に対してDがボソツとつぶやいた。うるさい奴め。リーダーは指揮を執ってるから戦わなくていいの。こんな上層じゃやり応えのあるモンスターは出ないんだし。

「おい、魔法式が出たぞ。誰か欲しい奴いるか？」Aが呼びかけるが欲しがる奴は誰もいない。もうみんな持ってるしね。



「誰もいないだろうしさっさと先に進むぞ。予定では深層まで行って1時間ほど狩って帰るつもりだからな」

「うー」「了解」「そうだな」

そうして俺たちは次の階層への道を探し始めた。

現在俺たちが探索しているダンジョンは開拓者の首都から少し離れた場所にあるLV3ダンジョン『エリベイト』である。LV1〜3までが下位、4〜7が中位、8〜10が上位の魔法使い向けのダンジョンである。今の俺たちは中位のダンジョンが適切だが、久しぶりということもあってまずは下位のダンジョンに潜っている。

今回ダンジョンに来たのは魔法式の回収が目当てである。ダンジョンにはモンスターがいて、モンスターを倒すと魔法式が現れるようになっていいる。この魔法式は一般的に魔法素材やマジックアイテムの作成、あるいは既に出来上がってるものに対するエンチャントに使われる。あとは魔方陣に組み込んでおくとかだな。

そもそも魔法には大きく分けて2通りのパターンがある。1つは

完全に自力で行うものだ。印を結ぶ、詠唱するなどによって魔方阵を用意し魔法を発動させるのがこれだ！この場合だと魔力の供給が止まると魔方阵も消えてしまうため、実戦では多くの魔力を消費する。

もう1つのパターンは魔法式を使うものだ。あらかじめ魔法式を組み込んだ魔方阵を用意しそこに魔力を流し込めば魔法が発動する。魔法式によって魔法陣を作った場合は魔力がなくても魔方阵は消滅しない。さらに実際に魔法を使う場面ではただ魔力を込めればいいだけだから、詠唱したりするより早く発動できるし消費魔力も少なく済む。

例えばエンチャントで剣から炎が出るようにしたとする。自力の場合は魔力を止めると炎が消えてしまう。もう一度炎の剣にしたかったら再度詠唱して魔法を掛け直さなきゃいけない。魔法式の場合は炎が消えてもまた魔力を流せばすぐに炎が出るのである。

そんなわけで俺たちを含めた魔力量の少ない連中はみんな魔法式を集めて魔法を行うのが一般的だ。本当は上位の魔法式が手に入ればいいんだけど、今からじゃあとても間に合わない。魔法式を貯める媒介もそんなに容量がないしな。そこで今回の大会では下級と中級の魔法をメインで行くつもりだ。

「結構潜ったな。竜也ー今何階だ？」エロ太　が竜也（Aのこと）に聞く。

「地下25階だな。そろそろ中級レベルのモンスターが出始めるぞ。」

A が答えると同時に前方の十字路の右の方からモンスターの気配がする。足音を消して近づいてくることを考えるにおそらく中級モンスターだな。

「右から来るぞ。注意しろ。」

「マジで？俺気づかなかった。てことは中級だな。」

「ようやく本番か。」

俺の言葉に反応しエロ太は大剣を構えDは短剣を構えた。

「何が来るかわかるか？」Aが俺に聞いてきた。

魔力を耳に集め聴力を強化する。あー個人差はあるけど簡単な身体強化なら魔力の操作だけで可能だ。

「足音が微妙に金属っぽい音がする。このダンジョンで金属を含むモンスターって言ったら」

「メタルウルフか！ラッキー！俺の身体強化に使えるぜ。魔法式は俺がもらってもいいか？」

エロ太のお願いに対し俺たちは頷いた。さてさてモンスターはこちの様子をうかがっているな。俺もさすがに集中するか。たぶんこいつらだけで大丈夫とは思っけど念のために剣を抜いた。

エロ太とDが前衛に俺とAが後衛のフォーメーションで十字路まで徐々に進んでいった。

接敵まで残り、5 : 4 : 3 : 2 : 1 : 0 !

「おらぁー！」

掛け声と同時に剣を振り上げ曲がり角に潜んでたメタルウルフを切ろうとしたエロ太に対し、体長2メートルほどのメタルウルフは即座に横に跳びそれを回避した。同時に短剣に仕込んだ魔方陣を発動させ雷をまとった双剣がメタルウルフの顔面を横から攻めた。

しかしこれも体勢を低くすることでウルフは回避した。

「グルラララー！」

弱点である雷を嫌ったのかAから大きく離れそのまま後衛に向かっってきた。Xは大剣を背負いなおしている。てかもう少し考えて動いてもらいたかった。いきなり後衛が責められるっておかしくね？連携の訓練も今後は考えなきゃいけないな。

「サンダーアロー！」

考え込んだ俺の横でAが目の前に浮かび上がる4つの魔法陣から雷の矢を打ち出した。

足止めのために微妙にタイミングがずれて飛来する雷矢に対し、足を止めるウルフちゃん。

「そらー！」

戻ってきたエロ太の大剣が尻尾を切断した。

「グギャアアア」

叫びながら距離をとるウルフ。元の場所から見て左側の通路に入り込んだ。それを追いかけてよとする双剣使いに対し大剣使いは

「まあ待て。」とバカなことを言い出した。訳が分からず当然いらつとしたDは

「何言つてんだ？早く殺さないと仲間を呼ばれるぞ！」

「だから敢えて呼ばせよう。そうすれば探す手間が省けるし。俺の魔法陣を作るには4体分くらいの魔法式が必要なんだよ。」

これに対して割と慎重派なDは当然反論している。

「良いのかリーダー？」とAが聞いてきたけど、もう遅いもの。めっさ遠吠えあげてるもの。責任はエロ太にとらせよう。はあ、最近溜め息ばかり出る俺様。

「Dもう遅い。手負いはXがやれ。俺とDは通路側を」警戒すると言いかけた途端凄いいスピードで仲間が駆けつけてくるのを感知した。

「構える！来るぞ！」

口げんかをやめすぐに全員は構えると同時にやつらが現れた。

「おいおいおい」微妙にひきつった顔のAが言う。「……」  
「無言でDがエロ太を横目でにらむ。「今度の外食のときは俺がおこるよ」冷や汗をかきながらエロ太が言う。

やってきた通路から見て右側から5匹のメタルウルフ正面から8匹、計13匹が十字路の真ん中に、そして手負いのウルフの背後から11匹のウルフ様が出来てきた。

「文句は後で言うことにして、あいつら来るの早過ぎね？」

「確かにな。」

Aたちの疑問はもつともだ。遠吠えから十数秒しか経ってない。けど隠れてるモンスターの気配がするし、あいつらが原因だな。

「それぞれの後方にゴブリンの気配がする。たぶん変異体だな。」

「そういえばこのダンジョンにはモンスター使いのゴブリンがいたな。そいつらの能力で狼どもの身体能力が上がっているのか。」

「おまけに指揮官がいるから組織的な攻撃をしてくるぞ！油断するなよ。俺が十字路側をやる。三人で手負い側をやれ！」

「了解！」

返事を聞くと同時に意識を切り替える。まずは目の前の連中を片付けなきゃ。

剣を抜き全身に魔力を循環させ身体能力を底上げする。久しぶりの緊張感に心がゾクゾクしてくる！

よし！

俺が前に出ると狼も4匹が先頭に向かってきた。

右手の剣を床に突き刺し魔力を流す。魔法式による魔法が発動し前方の床に半径5メートルほどの氷の円ができた。横並びに向かってきた4匹は滑って動きを止める。

もらった！一気に近づき4匹の首を剣で切り飛ばす。

「ゴガアアウ！」

今度は氷を飛び越えて3匹が飛びかかりさらに2匹が氷を迂回し左右から攻めてきた。

「三重障壁」

俺の周囲に薄い魔力の壁ができ、そこに突っ込むウルフたち。三重の盾のうち二枚まで壊されたが残りの1枚が狼の攻撃を止める。動きが止まった5匹をそのまま切りつけ倒したけど…

思ってたより弱い。個体ごとに強いやつと弱いやつがいるのかなと思っただけど、どうやらメタルウルフという種自体が今の自分と比較すると強くないようだ。

俺たちの実力はゲートアウトの前までは下級だった。俺の今の実力は異世界での戦闘経験と帰還してからの訓練で中級の真ん中くらいだったと思っただけど予想以上に強くなってたらしい。……………そういうえばこっちに戻ってからはいつも仲間内でのみ訓練して中級の

相手と関わることもなかったもんな！一般的な中級の力を見誤っていたぜ。

後ろの気配を確認すると徐々に慣れてきたのか、あるいは緊張が解けたのか他の三人も問題なく戦えてる。

最初の緊張感は必要なかったか。ちょっとテンション下がっちゃったな。気合が空回りした感じだ。いや、強くなってるのは良いことだけだ。

この様子からすると、こここのダンジョンに出現するモンスター程度なら多少無茶をしても大丈夫そうだな。

ためしに今の自分の全力を開放してみようかな。ウルフも今はビビてるのか動きを止めてるし。

一度大きく深呼吸して意識をまた切り替える。

魔力循環を最大に切り替える。簡易身体能力強化最大。

専用魔法式起動、スピード・パワー・知覚上昇。

詠唱による『雷』、『風』のエンチャント完了。

よし、準備完了！



足や腕から雷がほとばしり、風のおかげで体が軽やかになった！  
実にいい感じだ！けど自力の魔法によるエンチャントだから魔力消  
費が半端ねえ〜ぞこれは。

見れば後ろからウルフに乗ったゴブリンが姿を現している。それ  
によって動揺していたモンスターも臨戦態勢に入ってるようだ。

狼たちは変異体ゴブリンによって身体能力がさらにアップしてい  
るのが高まった知覚によって理解できた。

だけどそれでも今の自分の敵ではないことがわかる。

さて、さっさと終わらせようか。

#### 4話 ダンジョン探索2と現状確認

「おゝ亜種ゴブリンからでてきた魔法式は下位のだけどレアタイプだ！」

「あ、てめー！？ そののは俺が倒したんだから俺に寄越せ。」

「もう遅いー。俺の剣の中に入っちゃったし！」

「まだこっちにあるから大丈夫だ。とりあえずさっさと終わらせて休もうぜ。」

エロ太とDの言い合いに疲れた顔をしたAが割って入って言った。俺がメタルウルフを瞬殺した後は（本当にすぐ終わった。狼もゴブリンも反応する前に切り飛ばすことができた。） 3人の戦いを鑑賞していたけど、前衛2人は自分の標的に夢中になってたせいで何体か後衛のAに襲い掛かってたしな。

杖を構え攻撃魔法メインで戦うAは本来遠距離から戦うタイプだ。余計な魔力を使ったんだろう。

俺が指揮を執ってる時はまだマシだけど本格的にチームワークを向上させる訓練もそのうち必要だな。これが中級レベルのダンジョンだったら致命的なことになってたかもしれないし。

お、そろそろ作業もひと段落したみたいだな。

「回収終わったな？じゃあとりあえずレストエリアに向かおう。次

の階層にあったと思うけど。」

「ちよつと待つて。……えーと確かに26階にレストエリアあるな。」

俺の言葉を受けてDが携帯端末で情報を確認する。

一般的にLV7 までのダンジョンは出現モンスターの種類と階層、回収できる魔法式、トラップの有無、通路の構造などが公開されている。スリルを求めるものや訓練などで必要があるもの以外は基本的にそれらの情報を確認しながら探索する。

今Dが検索したのはダンジョン内に存在する休憩所のことだ。そこはダンジョンにもよるが基本的には水道もしくは泉などがあり水分補給ができる。またトイレもついたり中には自販機を置いてあるところもある。

商品補充とかどうやってるんだろうか？ちよつと疑問だがそれは置いておこう。

そんなわけで作ってきました、休憩所。来る途中で何体かのモンスターに遭遇したがどれも問題なく倒せた。そして現在、俺は端末に記録された戦闘記録の見直しをして、他の連中はトイレに行ったり飲み物を飲んだり休んでる。

「ふゝすつきりした」とトイレからDが戻ってきた。

「全員そろったし、ここまでくる間に気付いたことを話すぞ。」

3人ともだらけながらも頷いた。

「まず連携についてなんだけどこれは帰ってから時間をかけて考え直そう。それよりも今の個人の實力のことなんだけど…」

「あー中級であれだけ数いたのに意外と余裕だったな。」とエロXが言う。

「そう、次回以降降る予定のダンジョンはLV 4〜5くらいでメタルウルフ級のモンスターが2、3匹ずつ出るような階層だけって考えてたけど、もうちょっといけるかもな。」

「でも俺は魔力がキツかったんですけど。山彦（Dのこと）も風太（X）もウルフに抜かれて俺んとこにモンスターが来てたんですけど」言いながら2人をジロツと睨む。

2人は微妙に引きつりながら顔をそむけている。

「今回は見逃してやれ。それは今後の課題ってことで。」俺の言葉を受けて仕方なしと言わんばかりに溜め息をついたA。ま、でもそれほど怒ってるわけじゃあないようだ。

「んで、話を戻すけど1年前、俺たちが異世界に行く前の実力がLV 2〜3 相当だったから今はLV 5くらいになって思ってたんだけどもうちょっと上でも行けるかもな。」

「マジで？実はそんなに強くなっちゃってるの俺たち？」

俺の言葉を聞いてX が嬉しそうに言う。

ただ申し訳ないがちょっとだけ違うんだな。さっきの戦闘記録を確認したあと、グローバルネットに接続し簡単に中級の実力を見てみたけど、俺たちの身体能力などの基礎能力はそれほど高くない。

「戦闘経験による差だろうな。相手の動きを読んだりとか戦いのテクニクとか。お前から3人の基礎能力はLv 5くらいで俺が6くらい。ただしエンチャントなどで一時的に高めることは可能だけだな。」

「そっか。いやそれでも十分だ。そもそも中級に上がるのが昔の俺の目標ってか夢だったからな。実際になれるとは思ってなかったし。」

嬉しそうにAが言う。確かに戦闘を行う魔法使いの中で70%は下級かもしくは中級の下だ。レベルにすると1〜4あたりである。

そもそも開拓者では国民のほとんどが魔法を使える。ただ一般人は店で売られているライター程の火を起こす、ちよろつと水を出す、懐中電灯くらい光を出すといった簡易型魔法式が埋め込まれた道具を使う程度のものだ。

そこから一歩踏み込んで魔法を扱う者たちの中で戦闘を行わない者たちをメイジと呼び、戦闘を行うものをバトルメイジの頭文字をとって『BM』と呼んでいる。一部では魔法騎士、マジックナイトだとかいう人もいるがそんなのはどうでも良い。

BMのうち7割は4以下で5〜7の中級の真ん中から上は27%

くらい、上級の8〜10は3%ほどだ。そこから考えると「LV5」というのはそれなりに強いと考えられるのだ。

「個人的にはもう少し上に上がるつもりだけどね」とDは言う。

「今の俺たちの強さはどれくらいかな？ちょっと簡単にまとめてくれよ。」

その作業は俺がやるの？良いけどめんどいんですけど。

仕方ないけど……じゃあ、レベルで表すと

「SとかAで表して。そっちの方がゲームっぽくてかっこいい」と訳の分からない注文を言いやがった。まったく……

「SSSS、SS、S、A、B、C、D、E、F、で表現して能力値はだいたいの平均でまとめるぞ。下級はEかFって考えるよ。」

名前	三柳 竜也 (Aのこと)
武器	杖 ティンクルロッド
体力	D
魔力	B
力	E

敏捷 D  
魔法技術 B

備考 遠距離タイプ 自然系の下級全般、中級の一部の魔法を主に使う。

名前 東山彦 (Dのこと)  
武器 双剣 ツインファンゲ

体力 C  
魔力 C  
力 C  
敏捷 C  
魔法技術 C

備考 近距離タイプ 主に武器へのエンチャントによる属性付与を  
行い戦う。

名前 佐々門 風太 (Xまたはエロ太のこと)  
武器 大剣 山割

体力 B  
魔力 D  
力 B  
敏捷 C  
魔法技術 D

備考 近距離タイプ 身体能力強化系の魔法を使う。

名前	笹川 大祐
武器	剣 ロングソード（改良により魔法式の容量は多くなっている）
体力	B
魔力	B
力	B
敏捷	B
魔法技術	S

備考 オールラウンダー 魔法技術は高いけど魔力量の問題で強いのはあんまり使えない

「だいたいこんなところか。もちろんこれは平均だから実戦では高くなったり低くなったりするけどな。」

「ん？どうかしたかなA君。」

「これはー防御力はないのか？」

「や、DとEは防御系の魔法使えないだろ。それに例えば剣とかで身体に直接攻撃されたら誰だって傷つくだろ。筋力でパワーは変わっても防御力はそんなに変わらんべ。」

「うーん……まあそういうことしておくか。」



何こいつ？せっかく俺が頑張ったのに文句あるの？

「この評価の基準に合わせるとメタルウルフは？」

「平均D、ゴブリンによる強化と数が多かったからCとBの間くらいかな」

「なるほどなるほど。」

「ちなみにゲートアウト前の俺たちはEとFばっかだぞ。一部でDがあるくらいで。」

「魔王時代は？」

「俺が全能力EXだ。お前らはSSS〜Sのあたりだな。」

「EXって…てか俺たちはSSとかってことは開拓者の中には使徒級のやつがいるってことか？」

「EXはSSS以上のものが全部そこだ。貴族の本家の当主とか次期当主とかの中には使徒級はいると思う。それに異世界でもたまたに使徒級の人間もいただろ？どっかの国の剣聖だとか、あとは最終的には俺のペットにしたけどミルベリーとかも人間の頃から強かったじゃん。」

「あゝ確かに。てかミルベリーとか懐かしいな。あの身体は懐かしい・・・」「大祐しか触ってなかったよね。俺も一度くらい・・・」

いつのまにかエロ太とAは話が脱線しているな。でも確かに懐か

しい。サラサラした金髪に翠の瞳。スタイルも抜群で俺好みの巨乳で！あとは……

「おーい！そろそろ狩りに戻ろうぜ。時間も押してきてるぞ。」妄想の世界に入っていた俺たちにDが呼びかける。

「おっと。もうこんな時間か。このダンジョンは30階までだったな。じゃあ行くぞ野郎ども！」

「「「うい〜」「と気の抜けた返事をする3人。油断しているとひどい目に合ってしまったのに。」

まあいい、とりあえず出発しますか。

30分後。地下30階。

現在ひどい目にあってます。

「うおーい、また来た。山彦はそっちを抑えてて。俺があっちを叩

き割ってくる！」

そう叫びモンスターの群れに突っ込んでいくエロ太。向かう先にはメタルウルフ3匹にノーマルゴブリン5匹、ボーンバットが8匹と大量でございます。山彦ことDはAに近寄ろうとするモンスターを相手にしている。AはDとエロ太の援護。俺？俺は3体のミノタウロスを相手にしているよ。

「フリーランス」

Aの杖の先に浮かぶ魔法陣から8本の氷の槍が飛び出す。エロ太が相手にしていたモンスターが5体倒れ魔法式になった。

しかし一息つく間もなく新しいモンスターが現れさらにさきほど出現した魔法式に魔力が集まり再びゴブリンとボーンバットになった。

「もーやだ。泣きそう。終わらないぞこれ。Xの責任だかな。」

双剣を振り近づいてくるボーンナイト（下級兵）を切り伏せながら泣き言をいうD。切り伏せられたボーンナイトはまた再生し襲い掛かってくる。

「これは俺だけじゃねえよ。てかおまえにも原因はあるだろ。」言い返しながら大剣を盾にして飛来する火球を防ぐ。Xの後ろには新手的コボルトメイジが出現していた。

「集中しないとやられんぞ。部屋の魔力が切れるまでモンスターの再生は続くからな。体力と魔力の配分に注意しろよ。」

Aは全体に声をかけながら杖に魔力をため、「岩突隆起」というと同時に杖を地面に突き刺す。

モンスターの足元から50センチほどのがった岩が飛び出してくる。それによってコボルトメイジの足が動かなくなったところをエロ太が大剣で横払いをし一掃した。

しかしこの部屋、『トラップハウス』効果ですぐに再生する。

「あーあーあーあーもうやだ。もう泣くホント泣く。」Xが叫び声をあげる。

3人が流すBGMを背中に聞きながら戦っていた俺はミノタウロスを5回倒したところだ。そして5回目の再生が始まった。

なーんでこんな状況になったのか？それは少し前にさかのぼる。

30階までは問題なく降りてきた。新規のモンスターの出現ポイント、通称狩場と呼ばれる場所を確認した後、ボスモンスターがいるかを確認しに行った。

ボスモンスターはその名の通りそのダンジョンで一番強いもので特殊な魔法式をくれる。

そして一度倒されるとしばらく出現しないが魔力がたまるとまた新しく出現するのである。

例えば今いるダンジョンだと3体のミノタウロスがボスだがこれは中級ダンジョンでもエンカウントするモンスターだ。しかしボスと

して出た場合の方がより優れた魔法式が手に入る。その分少し強くなっているがそれほど大きい変化ではない。そんなわけで割とボスはいないことの方が多いんだが、今回は出現した。おまけにしばらく誰も来なかったのか護衛のモンスターまで揃っていた。

そのため一度撤退したのだがXが音を立て気づかれてしまった。数が多いので有利に戦える場所を探してここだ！とDが入り込んだ部屋はなんとトラップ部屋で、部屋の魔力が尽きるまでモンスターが再生するという罠だ。部屋から脱出は不可、状況によっては新規のモンスターが召喚されるというおまけつきなわけだ。

さっきメタルウルフにしたようにエンチャントを使い瞬殺しようかとも思ったがあれは魔力消費が激しすぎるしモンスターは再生するため無理をせず戦っている。

目の前ではミノタウロスの再生が終わり再び襲いかかってきた。もうホントにめんどくさい。

帰ったらDとXのおごりで高い料理を食ってやる！と考えながら俺はミノタウロスに意識を傾けた。

## 5話 大会間近

「ただいまー」

「あら、お帰りなさい。今日は早かったのね。」

家に帰ってきた俺を母さんが出迎えてくれた。外見はそこそこきれいってところだと思う。実の母親を評価するのは微妙な気分だけど。

「お兄ちゃんおかえり。」居間から妹も顔を出してきた。こいつもかわいい顔をしていると思う。親父も弟もそうだけどうちの家族は俺以外みんな整った外見をしている。俺だけ残念な顔。なのに兄妹と分かるくらいには似ているという不思議さ。

俺だけ頭でかくて足短いんだよなあ…やばい、涙が溢れてくる…

「今日は帰ってくるの早いね。ってかなんで泣いてるの大丈夫!？」

「大丈夫。最近目は目から汗を流すのが俺のブームだから。」

え？と戸惑う妹を無視して食卓へ向かう。晩飯食ってさっさと寝なきゃな!

「あんた早く帰ってくるなら連絡しなさいよ。今日はカレーだった

からいいけどご飯の準備するのも大変なんだからね」

「いや、来週から大会だから今週は無理しないって言ってあったよね」

「……………まあいいわ、ご飯にしましょ。」

流しやがったな母さん。まあいいけどさ。今日はメンタル的に疲れてるから早く休みたい。

「はい。味わって食べなさい。里奈 ご飯用意できたから健介呼んでー。」

「わかったー。」

俺の前にご飯が用意された。里奈（俺の3つ下の妹）が健介（俺の2つ下の弟）を読んでもるけど先に食ってしまおう。……いただきます。

飯を食った後は風呂に入ってアイスを食べながらダラダラしていた。そしてテレビに飽きた俺は自室のベッドで横になっている。寝る前にベッドの上で物思いにふけるのはこの世界に帰ってからの俺の癖だ。

小大会地方予選開催まであと1週間ほどだ。既にダンジョン探索は1週間前に切り上げている。

3か月前エリベイトに潜って以来、毎週のようにダンジョン探索をしていたが初回の反省を生かし中級ダンジョンの浅い階層のみの探索だ。ホントももうトラップに引っかかって持久戦になるのは勘弁だと全員が感じたのでトラップがないと分かっているダンジョンばかり探索した。

ちなみにあのトラップでは結局1時間以上戦い続けた。魔力も体力も何度が限界になったのでポーションやエーテル(メイジ向け製薬会社マホテックの商品。品名の由来は某ゲームより)のほとんどを使い切ってしまった。

そうして俺はミノタウロス×3を14回殺し他の連中に至ってはメタルウルフなど同じ個体を20回くらい倒してたはずだ。ようやくトラップの魔力が尽きて再生が止まり戦いもやんだものの得られた魔法式は1回倒した分だけだ。訓練にはなったけどアイテムの消費や得られた魔法式から考えるとマイナスだった。

それ以降はよく考えてダンジョンを選んでたが、探索の成果は微妙なところだ。他の3人はそれなりに補強できていたが、俺は既同等以上の魔法式を持っているか、あるいは手に入った魔法式の容量が大きくて媒介の中に入らないという状態でそんなに補強できていない。その分詠唱による魔法を鍛え、より少ない魔力で魔法を使用できるようにはなったがそれでも魔法式を用いた場合よりはたくさん魔力が必要となる。油断は禁物だ。

さて大会の話に戻るが今回の大会ではうちの学校からなんと45人の男子が出場するらしい。例年だと2〜3人が出場すればいい方



だからこれは異例なことだ。

地方の大会や学生向けの大会なら別に出場者が多くてもおかしくないが、今回の大会は開拓者全体での大会だ。出場者のレベルもほとんどが中級以上だろうに良く出場する気になったものだ。あ、うちの学校のバトルメイジ（BM）は下級だらけで中級は1人もいない。俺とX は中級だが公的な試験は受けてないし学校では大人しくしてるんで知られていない。普通のメイジとしてなら何人か中級はいるんだけどね。BMは魔法を使うために勉強と戦うための身体能力と総合的に求められるからなかなか大変だ。

学校で一番優秀とされているのが以前にちよろつと出てきた池田先輩だ。三坂さんに告ってフラれた人ね。彼が公式でBM LV3相当の認定をもらっている。このLVつてのはLV3のダンジョンが適切って意味でLV3をクリアできるってわけじゃない。前に言ったが世界中のBMのうち70%はLV1〜4だがLV4は10%くらい。つまりLV1〜3は全体の60%ってことを考えると池田君はなかなか優れてはいるのだ。ついでに池田君のステータスは簡単に表すとしたのようになる。

名前	池田	（下の名前はわかんねえ）
武器	剣	ロングソード（通常版）
体力	D	
魔力	E	
力	E	
敏捷	D	
魔法技術	D	

備考 特になし。一般的なLV3よりちよい上位の実力。

この池田君を筆頭に他の男も三坂さんと付き合うために大会へ出場するらしい。もうホントにバカ。

三坂さんは可愛いんだけど俺はそこまで夢中ってわけでもないだよなあ。や、エロいことしてもいいよってんなら喜んでくれるけどさ。今回の大会への出場はあくまで自分自身のためだから女とかは関係ない。

そう学校の友達に伝えただけだけどクラスメートたちは意味深な微笑みを受かべただけだった。俺が日常的に会話をする数少ない女子のうちの一人はもう露骨に軽蔑の混じった視線を向けて「これだから男は……」とか言ってたし。

まあ、俺が出場するって話をしたら隣の席の西川や松田も参加するとか言い出したしな。気持ちはわかるけど下心丸出し連中と一緒にしてほしくない……

あ、ついでに西川と松田のデータを出すと

名前	西川 順次郎
L V	2
武器	剣 ロングソード（通常版）
体力	E
魔力	E
力	E
敏捷	E
魔法技術	F

備考 LV2の前衛タイプ 平均

名前 松田 騎士(ナイトと読む。ちょっと残念な名前)

LV 2

武器 杖 下級用一般杖ver 2

体力 F

魔力 E

力 F

敏捷 F

魔法技術 E

備考 LV2n後衛タイプ 平均

こんな感じだな。異世界に行く前の俺たちもこんな感じだった。これが普通。学生の中で、上位でも下位でもないところって感じた。

まあ、このレベルだと間違いなく地方予選で終わるだろうし俺にはあんまり関係ないな。

さてさて、大会のことを考えるのはこのくらいにして今日のことを思い出してみよう。

今日はB、Cと久しぶりに会話をした。腹を割って思ってることをすべて出したんだが…結果はダメでした。Bは俺たちの言い分を

わかってくれたのか静かに聞いてくれたが、Cはダメだった。まったくもって意見を曲げずそもそも俺たちの話が聞こえてたかも怪しかった。

てなわけでもう諦めました。BはいまさらCを一人にはできないとCと一緒に帰ってつた。ま、Bにならもし必要なら力を貸すくらいはするけどCは無理、俺たちは関与しないことにした。B、Cと同じ学校で幼馴染のDはもう少し説得してみると言ってたんでそっちに任せて、俺とAとエロ太は放置する方向で。

そんな感じの話し合いだったから今日は疲れた…

ぶつちやけ俺は魔王の力を取り戻すことに反対ではない、けど賛成でもないって立場だ。昔できたことが今できないことに苛立ちを覚えることはあるがそれ以上に引きこもりだった自分が、自分で努力して何か1つ誇れるものが欲しいっていう願いが強い。あとは自分の限界を知りたいってのとかかな。

それに魔王の力を取り戻してもやることがないというか、魔王の力でやりたいこともない。Cはおそらくは昔と同様に気に食わないやつをブツ飛ばして、好きな女を犯してとやりたいんだらうけどそれは不可能だ。

なぜならこの火星には神がいる、とされている。実際に過去に凶悪な力を持つものが暴れたり異世界から危険な存在が漂着し、貴族や軍人でも敵わなかった際には神がそれを滅ぼしたという記録が残っている。だから俺たちが魔王として暴走すれば負けるのは俺たちであるという予感がある。

一般にも神がいるというのは広まっているがそれを信じてる人はあまり多くない。まあ、実際に見たわけじゃないし記録も最も新し

いので250年前のものだからな。半信半疑でも無理はない。

ただ俺は神が『いること』を信じている。正確には『いてもおかしくはない』と思っっている。なぜなら異世界において魔王を生み出したのはその世界の神だからだ。俺たちは神の意を受けて暴れまわっていた。このことは魔王であつた俺しか知らなかつたが、だからこそこの火星にも神がいてもおかしくはないし戦えば負けるだろうと考えている。

初めてこのことをみんなに話したら「じゃあ、力を取り戻した後には大人しくすれば良いじゃねえか」とこは言つたがそれなら力を取り戻す意味もないし、そもそも大人しくするのは無理だ。

なんせ魔王だからな！性欲や破壊衝動がものすごい湧き出てくる。抑えようと意識して我慢できるレベルじゃあない。だから俺はそれを……

いろんなことを考え過ぎしているとなんとなく時間が気になり時計を見る。

そろそろ寝ないとヤバいな。最近は研究で遅くまで起きてたから体が夜型になっている。大会に合わせて昼型にならねば！

寝ようとしたがなかなか寝付けない。しかたなく睡眠を誘発する魔法を自分にかけて眠りについた。

そして大会の日まで、学校に行き、放課後は簡単な訓練、家に帰り寝る、そうして過ごしているうちに惑星間標準時において規定される火星の8月3日午前9時。

今年の小大会予選が始まった。

## 6話 今年の王者は君だ！予選会開催

『今年の王者は君だ！目指せチャンピオン！大会！第8エリア  
デルンダロン地方予選』

「え？何あれ？あの頭の悪そうな大会名。誰考えたの？」いや、マジで疑問。馬鹿なの？

「そうか？毎年あんな感じだろ。去年は『優勝すれば可愛いあの子にモッテモテ』って名前にして批判されながらも押し通してだろ。」  
とクラスメイトで同じく大会参加者の松田が答えた。

「うーそんなことよりボクチン緊張がやばいんだけど。泣きそうなんだけど。」

「ボクチンってどうした西川？緊張で頭やられたか？ついでにメガネは忘れたの？棄権すれば。」マジで西川がおかしくなったのかも休憩室につれてくべきかな？

「今日はボクチンな気分なんだ。突っ込まないで。あと今日はコンタクトだ。」

「あ、あそこにいるの池田先輩じゃないか？うわ、あの人もこの予選会に出場かよ…終わった…」

「ウッソ…あー…三坂さんとのラブラブ学校生活が終わっ

た。  
」

俺の前で西川と松田が激しく落ち込んでる。こいつら本気で付き合うつもりだったのかな？

ちょっと引き気味の俺は周囲に視線を向けた。凄い人だ。この会場の参加者だけで数百人はいると思われる。

「そついえば佐々門も出るんだよね。まだ来てないみたいだけど。」

立ち直ったのか松田が聞いてくる。佐々門？誰だ？

「佐々門……………あーエロ太は別のエリアから出場するって言ってたぞ」

やばいやばい。本気で誰かわからなかった。そろそろコードネームで呼ぶのはやめようかな。本名がわからなくなる。

「別のエリア？同じエリアの別の予選会場じゃなくて？」

「そう別のエリア。たぶん第30エリアだと思うけど。」

「え……………ホントに？なんでわざわざ別のところから？」



「さあなんでだろうな？俺もよくわからん。」

俺と当りたくないからだろうな。なんだかんだ言ってみんなやる気だったし上位に食い込む意思はあるだろう。少なくとも本選までは行けよってチームとして命令しておいたし。同じとこだと俺とぶつかって敗退する可能性はあるからな。たぶん他のAやDも別エリアだと思っし。確認しておけばよかったかな。

ん、どうした西川？

「30エリアって隣のエリアだよな。うわーボクチンもそうすればよかったかな。確か今年は実力者があんまりいないって話だし。佐々門のやつ本気で三坂さんをゲットするつもりかな。やばい負けられない！」

「確かにー！三坂さんのはじめては俺のものだし。ビビってる場合じゃねえな！」

気持ち悪いことを言い出した二人を無視してもう一度周りを見る。意外と知った顔が多いな。あ、あいつはうちの学校のやつだ。あそこのも。

「間もなく開会式が始まります。選手の皆様さんは会場中央まで下りてください。観客の皆様さんは着席してください。」

アナウンスが聞こえた。そろそろ本番だ気を引き締めるか！

開拓者は50のエリアに分かれている。日本でいうところの都道府県だ。首都があるのが第1エリアで今俺たちがいるのは第8エリアだ。エリア番号は隣接してる部分でつながるのではなく、人が住み始めた順番につけられている。なので俺たちがいるエリアは首都に割と近い場所だ。

各エリアの地方ごとに予選があり勝ったものがエリアの本選に出場、その本選で勝ったものがエリアの代表として小大会の本選に出場できる仕組みだ。日本の大会で言うなら地方大会、県大会、全国大会みたいなもんかな。火星には国が1つしかないから全国大会「世界大会」だけだ。

試合形式は毎年違っていて去年はずっと1対1の戦いだっただ。一昨年は予選では5人ずつのバトルロイヤル形式だった。今年は何になるのかはまだわからない。楽しみだ。

おっとそろそろ開会式が終わるな。

「……以上で開会式を終了します。つづいて選手の皆さんに連絡します。出場手続きの際に引いていただいた抽選くじ番号1〜60までの方はその場に残ってください。その他の方は客席の方へお上がり下さい。」

「えっなんで」「お前何番?」「俺は55」「何やる気だろう?」「まさか……」「この形式は多分」

周りの人が一斉に話し出した。だよな〜これはおそらく60人単位のバトルロイヤルだな。

「大祐とマツツンは何番?ボクチンは25なんだけど?」

俺が208で松田は199だな。となると一緒か。

「俺と大祐は一緒だな。よろしく頼むよ!これって多分バトルロイヤル形式だろ。協力しようぜ。」

「おう!こっちこそ頼むわ。ただ勝者の人数が気になるが。」

「たぶん10人くらいは残すだろ。じゃなきゃ今日1日で終わっちゃうし。予選は3日間やる予定だろ?」

「3日目は延期の場合の予備日だ。だから2日間だな。どうなるか微妙なところ。」

「ちょっと待って！？ボクチン1人？1人でいきなり戦えって？」

西川泣きそう。面白いけど周りも移動してるし俺たちも行く。

落ち込むに西川を置いて松田と2人で客席に向かう。

会場は大きなアリーナで中央の広場を観客席がぐるっと囲っている。今日は平日で学校の授業もある日だ。観客席にはあまり人がいない。俺と松田は同じ高校のやつらを見つけみんなで最前列に座った。

他の人とも話してみたが俺と同じ試合なのは松田だけらしい。俺たちの前の試合にたくさん人が固まってしまったみたいだ。ちなみにイケメン池田は第2試合のようだ。

「これより試合の説明を行います。今大会では60人ごとのバトルロイヤルを行ってもらいます。この会場では参加者がおおよそ480人ほどなので本日は8試合を行います。試合時間は30分で各試合は1時間ごとに行います。」

「各試合では勝者を5人とします。制限時間を過ぎても5人以上残

った場合はそのグループの勝者は無しとなります。また制限時間内に5人となりましたら、そこで試合は終了します。」

「本日勝ち残った40名が明日の決勝に進むことができます。決勝についての詳しい説明は本日の最終試合が終わってから説明いたします。以上で説明を終わります。各選手の健闘を祈ります。」

女の声でのアナウンスが終わり、説明を受けて再び仲間内で「うわー」とか言いそうになっているところで男のアナウンスが聞こえる。

「これより、会場内の結界を作動させます。第一試合の選手の皆さんは会場に書かれています線の内側にお入りください。」

選手が動き終わると結界が試合会場を包んだ。

この結界は攻撃が外に出ないようにするためのものであるが、中から外に人が出ることは可能である(当然出たら失格である)。また試合が終わる、あるいは結界の外に出ると傷を癒やす性質がある。たとえ結界内で死んでも蘇生ができるすつつつごい結界で俺にも仕組みがわからない。会場の四方におかれている魔法機械のようなものが結界を作動させてるようなんだが。いつか調べてみたいな。

「大祐大祐、ニッシーのやつすつごい緊張してるんだけど。ウケる。」

ホントだ。凄い震えまくってる。まあ、あいつは勢いで参加しただけだからな……同校のやつは他にも3人ほどいるみたいだ。名前はえっと……………

「マツキー、比留間、ヴェルナルだ。全員をみんなで応援しようぜ！同じ学校なんだし！」とさわやかな笑顔を浮かべる池田先輩。

うーんいい人だなあ。三坂さんも付き合ってやればいいのに。

「ちょっとちょっと口に出てるよ。俺泣いちゃうよ。」

こんな感じでみんなでわいわいやってるうちについに試合が始まった！

いきなり飛びかかるやつと様子見のためかまったく動かない人の2つに分かれた。

そして3分もたたないうちに個人で行動する人はいなくなつて3人4人のチームが10ほどできています。同校の4人は同じチームとなつている。

個人で動いたものはみんなどこかのチームを組んでる連中にあつさり倒されていた。

…そして試合開始5分後にはどのチームもにらみ合つたまま動きを止めた。

「え？今回の大会つてチーム戦だっけ？」「いや、違つけど」「俺たちのときはどうする？」

最初は応援していたが完全に硬直した試合のせいで、みんなそれぞれ話し始めた。

しかしなるほどねえ。この会場はほとんどが下級B Mだから大規模攻撃がないもんな。おまけに能力もさほど差がない、あつても複数で挑むことで渡りあえるレベルだからこんな結果になつてるんだ。てかこの地方大会のレベルつてこんものなのか？予想の百倍は低いんだけど。いつも見るのは首都で行われる本選だから知らなかつた。

「大祐、なんかみんな全然動かないんだけどどうしてだ？」と松田が聞いてきた。

「しっかりしてよ松田君。見ればわかるでしょ。僕と組む予定なんだからしっかりしてくれないと！」

「と言おうか悩んでると、俺がわからなくて困ってる風に見えたのか池田先輩が代わりに答えた。」

「みんな同程度の實力だからね。どこかのチームと戦えば体力も魔力も消費するだろ？だから勝っても今度は違うチームに襲われる。實力が近い分体力がある方が有利に決まってるから当然負けてしまう。つまり先に動いたところから負けてしまうんだ。」

「なるほど〜でもそうになると時間だけが過ぎてくんじゃありませんか？」「うんだからこの試合のカギは……。」

松田と池田の会話を聞き流しながら試合を見る俺。この試合は勝者なしだな。



30分後

「試合終了です。5人以上の選手がいるので規定によりこの試合の勝者は無しとなります」

アナウンスが響き渡ると同時に切られて倒れている人も含め選手の体が癒えていく。

1分後には瀕死だった人も自分の足で客席に上がってきた。試合はクソだったけどこの技術は凄いマジ凄い！

西川含め同じ学校の人たちがこっちに来た。みんな微妙な顔をしている。ま、いきなりの試合だったし試合内容も微妙だったし不完全燃焼なのだろう。

近づいてくる彼らを「おつかれ」と出迎えた。

簡単にみんなで話した後はそれぞれ仲のいい友達同士でこの試合についての感想を話し始めた。

「何が何だかわからなかったよ…気が付いたらボクチンの試合が終わってた。」

例に漏れず微妙な顔をした西川が言う。

「いきなり試合だったからな。全体的にみんな緊張してたっていうか戦う準備ができていなかった感じだったし」

「そう！それ！もう少し時間がほしかった…。あー！三坂さんとの付き合いが終わった。」

「いや始まってさえないだろう。」

「始まる予定だったの！この試合をきっかけに！」

「ちよつと待てその後輩たち。三坂さんと付き合いするのは俺だ。そこはゆずらねえ！」

「あーんぶざけんなよ。あの子と付き合いするのは俺だ。」「いや、俺が……」

松田と西川の話の聞きとがめた先輩たちが会話に加わり、カオスな状況になってきた。もう無視しよう！と思ったところで

「第二試合に出場する番号61〜120までの選手は控室の方に集合してください。」

この後のことは簡単に話そう。試合もレベル低かったし。

まずさっきの西川の出た第1試合は途中小競り合いはあったものの試合は動かず、試合終了間際になってみんなあわてて戦いだしたが、時間切れで勝者なし。

第2試合は池田率いる我が東心峰学園勢5名が勝ち残った。池田の指揮のもと上手に試合を運んでいた。敵が残り半分くらいになったところで他のチームが組み始めたが連携はうまくいかないし、ずるいことを考えて池田チームごとまとめて全員倒そうとしたのかランダムに魔法を打つやつがいておかげで敵はさらに減っていた。そいつは池田達以外のやつに倒されてたし、もう凄かった。なんかすごかった。で結局学園勢の勝利だ！

第3試合は東心峰から11人の参加だった。これは余裕と思われるが他のチームはすべて結束していた。個人で参加したであろう中年にさしかかる前くらいの男、ドゥークというやつが上手くまとめあげ学園勢をぼこった。

そのあとはドゥークが暴れて終了。残り6人になった時点でドゥークは他の5人を同時に吹き飛ばした。よって勝者はドゥーク1人である。

こいつは間違いなく中級だ。やっぱり多少は中級が混ざっているよな。安心した。

第4試合は俺様と松田が出場だ。けど特に何もしてない。東心峰と同様にデルンダロン地方にある学園 西海陽学園（レベル的にも東心峰と同じ地方では上位、惑星上の進学校の中では下くらい）からの出場チーム3人が見事なチームワークで他をやっつけてくれた。俺と松田？ 離れたところで見てたよ。西海陽の連中も『俺たちのおかげだぞ』みたい顔をしてたんでありがとうと松田と二人で言っておいた。

西川はズルいと拗ねていたけど男なんでシカトした。

そのあとの試合に特筆することはない。結局俺たち東心峰学園から8人、西海陽学園5人、おっさん7人、若い兄貴が3人、おぼさん1人に俺と同じ中級であろうドゥークの計25人が決勝へと駒を進めることとなった。

「本日の試合は以上で終了しました。この会場での予選からは5人までがエリア大会への出場が可能となっております。明日10時の試合では25人でバトルロイヤルを行います。その他のルールにつ

きましては本日と同様です。また……」

「つかれた~~~~メンタル的に」

夕方前に試合は終わったのに帰ってきたのは太陽が完全に沈んでからだ。

さつきまで学園で明日の作戦会議を行っていた。議題はドゥークと西海陽とどう戦うかだ。めんどかつたんで俺は適当に頷いておいた。とりあえず池田に従うとのことだった。

しかしホントにレベルの低い大会だったな。うちの会場が特別なのか全体が低いのかどっちだろう？

エロ太たちに他の予選会場についてメールで聞いてみると「テラワロス」「弱かった」「小さな会場だから仕方ない」とだけ返ってきた。

…まあ、問題なく勝ったようだな。Aの言うとおり上に行かないと強い奴には会えないか。本選には必ず貴族が出場しているはずだ

から全力を出す機会はあるだろうし。

力を隠す気はないけど最低限の実力も持たないやつにマジで戦うのも馬鹿らしい。

できれば明日戦うであろうドゥークが本気になれる相手でありますよつに。そう思いながら寝ることにした。

## 7話 第8エリア代表選抜大会

『今年の王者は君だ！目指せチャンピオン！大会！第8エリア代表選抜大会』

試合会場に掲げられた頭の悪い大会名を見ると微妙な気持ちになっ  
てしまう今日この頃。みなさまはどのようにお過ごしでしょうか？  
私は無事、地方予選を突破しエリア大会（県大会みたいなもの）  
に出場しています。今日8月10日はその予選が行われる日です。

「おーい、だいすけー。」

お、やっと松田が来たか。受付終了まであと10分だったのに。

「はあはあ、すまん。緊張でなかなか寝れなくて寝坊した。他の人は？」

「もう中に入ったぞ。ちなみに俺も受け付け終了してる。お前も早く  
いかないと不戦敗になるぞ。」

俺の言葉を聞いて慌てて受付へ向かう松田。どうやらホントに寝坊  
だったらしく普段のクセ毛に寝癖がプラスされて髪がもうヤバい  
ことになってる。まるでライオンだ。

そんなことを考えながら俺も会場の中に入った。

会場の中にはそこそこの人がいる。とはいえ平日だから客席の半分が埋まる程度だ。会場そのものの大きさは地方予選大会に比べ二回りほど大きい。さすがにエリア8の中心都市の会場だけはある。

受付を済ませたライオン（松田君）と二人で先輩との集合場所へ向かう。そこには既に二人の先輩（ちなみに2人ともイケメンだ。優等生っぽいのが池田で不良っぽいのが華柳）がいた。地方大会で勝ち抜いたのは俺たち4人とドウークなのだ。

2人に近づくとこっちに気付いた池田先輩が話しかけてきた。

「おーなんとか間に合ったか。ギリギリだったな。」

「すみません池田先輩、華柳先輩。寝坊しました。」

「おつせーぞ！今回は事前情報でエントリーの順番で試合が決まると言ってたろうが。お前が遅れたせいでたぶんお前だけ別の組の試合になるだろ！チームから1人減っちゃまったじゃねえか。」

いやいやこれは本来個人戦であってチームって発想がおかしいけどねって思うけど周りの参加者たちもチームを組んでる様子が見て取れる。まあ、1対1なら勝ちあげれないやつも今回のバトルロイヤル形式（事前にアナウンスされている。おまけに前回と同様に勝



ち残れるのは複数名なのもわかっている。）ではチャンスがあるからな。

しかし団体戦は団体戦で別の大会があるのになんでこんな形式にしたんだろう？運営側の考えは謎だなまったく。

「まあまあ、落ち着いて。まだ確定したわけじゃないんだし。松田、君は何組目の試合になった？」

「それが一番最初です。」

俺たちとは違うね。俺たち3人は5組目の試合だから。しかも確か1組目には…

同じことを考えたのか華柳先輩も怒りの代わりに憐れみを浮かべて

「1試合目は確かドゥークも同じなはずだぜ。ドンマイだな。遅れてきたのが悪いしな！三坂さんは俺たちに任せろ。」と言った。

それを聞いた松田は見るからにテンションが下がりがくりだった。もう完全に試合をあきらめてる顔だなこれは。確かに松田の立場なら仕方ないけどね。

そんなことを話しているとアナウンスが鳴り開会式が始まった。偉そうな人の話は聞かずに華柳先輩と池田先輩は作戦変更について話をし松田は落ち込みまくっている。

俺は作戦を聞きながら周りの人たちを見ている。

どうやら思っていたよりも強そうな人が少ないな。地方予選よりはレベルが高くなってるとるし中級B Mも何人かいる。しかし上級は一人もいなさそうだった。確かに元々上級はほとんどが首都にいるけど、エリア8もそこに大きな地域だ。1人もいないのはおかしくないか。

疑問に思い池田先輩に聞いてみると、

「なんだ知らなかったのかい？今回の大会はほとんど上級者はいないよ。」と言われた。

「????? みんな首都の大会に出たり、予選免除ってことですか？」

上級者の一部には予選免除という特権があるからそれを使ってるのかと思いついてみると

「いや、そうじゃなくて大会に参加する人自体が少ないんだ。木星に新しいダンジョンができたのは知ってるかな？」

「なんかそんな話をちらつと聞いた覚えがあります。」

確か大会前にクラスで話題になってた覚えがある。

「新しく作られたダンジョン群にはかなり高性能だったり、完全に新規の魔法式が大量にあるらしく上級者はほとんどがその探索に回っているよ。」

「初耳です！全然知らなかった……………」

「エリア代表として本選に進めれば上級者もいるだろうけどね。大会レベルの調整役の貴族代表とかあるいは地球からの参加者とかね。だけどそれ以外の上級者はほとんどいないはずだよ。」

「うわー知らなかった。三坂さんの話を聞いたときに突発的に出場しようと思ったただけだからな。テレビもあまり見ないし。ホント情報って大事だわ」

俺が頭を抱えてるのを見て笑いながら池田先輩は話を続けた。

「俺と三坂さんの話は知ってると思うけど、上級者を相手に勝てるなんて俺も思ってたないさ。中級者相手だって正面からやればほぼ負けるだろうし。いつもどおりのレベルの大会なら出場しなかったかもしれないけど今回はいいとこまで行けると思うんだ。優勝が無理なのはわかってるけど簡単には諦めたくないしね！0%の優勝確率が今回はほんの少しだけ高くなってる。そのほんのわずかな可能性でも俺は掴み取って見せるんだ！」

なんか熱いことを言い出した先輩。いつのまにか話を聞いてたのか華柳先輩も「俺だって負けないぜ」とか言っている。松田でさえ

も琴線に触れたのか、やる気になってるのがわかる。

ま、それはどうでも良いんだけど…

それにしてもだから今回はバトルロイヤルなんだな。上級者がいないってことは派手な魔法も少ない、つまりエンターテイメント性に欠けるってことだ。下級と中級の試合でもそこそこ盛り上がるようにするための演出なんだろうきつと。

良く考えれば今回はいつもと違っていて試合日程から考えてもわかるよな。地方大会も例年7日くらいかけてたのを今回は2日だったし。自分の注意力不足にちよっとへこむ。

しかし上級者があまりいなくなると今回の大会は力試しには向いてなかったかもな。少なくとも俺は中級者相手に負けることはないだろうし、今会場にいる人の中にも俺を超えるやつはいないと思う。

一気にテンションが下がった俺はぼんやりしながら時間をつぶしているうちの開会式が終わった。

松田が出る第一試合は30分後の開始らしい。なので今は4人で客席の方にいる。作戦を聞かれないようにするために周りに人がいない場所を選んだから普通の声で会話をしている。

今回の試合は1試合につき30人の参加で、その中から3人が勝者となる。試合の数は10試合なので最大で30人が予選突破となる。そして予選勝者同士が1対1で戦い、勝ったものがエリア代表として世界大会に出場できるというわけだ。例年エリア代表は1人から多くて5人までだったのが今年は3倍の15人と大人数になる可能性がある。

池田先輩が言ったように今年はホントに上級者が少ないらしいな。人数を無理やり増やして観客を楽しませようって考えが出まくってるな。おまけに一度の大量に戦わせることで試合数も少なくなっているし。上層部は今年は乗り気じゃないってことかな？

そんな感じな大会だから松田もまだ希望を捨てていないようだ。先輩たちに必死にアドバイスをもらっている。俺が見る限り松田の組は中級が2人あとは下級だ。うまく立ち回れば予選突破できなくもない。

「基本的には逃げる。そうすりゃドゥークが他の連中をブツ飛ばしてくるから。」と華柳先輩は言い

「そうだな。1人ではドゥークにどう頑張っても勝てないだろうし他にも中級がいらないとは限らない。ヤナの言うとおり戦いから離れたとこで身を守るのがベストだな。」と池田先輩も言った。

「でもそれだと勝ち上がった時に1対1でぶつかる可能性があるじゃないですか。ここで倒しておいた方がいいと思うんですけど、いっつっつたい、痛いです先輩！」

華柳先輩が松田の顔にアイアンクローを決めていた。がつつり極

まってるしあれは痛いだろうなあ……

「バカかお前は！予選で中級をつぶしときたいから4人で同じ組になろうって決めたのに寝坊したのはお前だろうが！」

話しながらイラツと来たのかさらに力を込める先輩。それに対し松田は涙目になって謝り続けている。自業自得とはいえさすがに可哀そうになったのか池田先輩がヤナツちを宥めて解放してあげた。

しばらくして松田は顔をあげた。ちょっと赤くなってるけど黙っておこう。

「でも松田、1対1の戦いのことなんて勝ってから考える。そもそもお前だけが逃げる戦法をするわけじゃないと思うぞ。仮にも地方大会を勝ち抜いた人たちだし下級の人はどう戦えばいいかちゃんと理解していると思う。」

「笹川の言うとおりだな。いくら上手く逃げたって狙われないとは限らないんだし。正直あとは運だぞ。」

「だね。ただ松田の有利なところはドウークが中級だつてわかっているところだ。使う魔法の威力も少しは知っている。それは他の人にはないアドバンテージだよ。」

「……そうですね。……あとはもう始まらないと分からないですね。」

俺、華柳と池田先輩の言葉を受けて神妙にうなづく松田。ようやく覚悟が決まったらしい。

「そろそろ始まる時間ですね。俺も控室の方に行ってきます！」と言った後、3人の声援を受けながら階段を下りてった。

「先輩たち、実際のところどう思います？」

「運次第だな。」

「運だね。」

簡潔な言葉が返ってきた。

ですよねー狙われなきゃ勝てるし狙われたらどうにもならない。まさに運だな。そもそもこのエリア大会に俺以外の3人が出られたのもラッキー以外の何物でもないし。

眼下の闘技場には選手が入場してきた。当然その中には緊張した松田や余裕の表情を浮かべたドゥークもいる。周りの選手を見て自分が勝つのはわかりきっているのだらう。そんな様子がかがえた。

上級がないこの大会ではまあ、それも仕方ないかなと思える程度の実力がドゥークには確かにある。

この間の地方大会の決勝には俺たち東心峰学園から8人、西海陽学園5人、おっさん7人、若い兄貴が3人、おばさん1人にドゥークが進んだ。このうち中級は俺とドゥークだけだ。

この25人でのバトルロイヤルは、俺たちが8人で固まって西海陽が5人で固まっていた。他は3、4人で集まりドゥークだけが1人でいた。

俺たちは前衛に俺、松田、華柳で真ん中に池田ともう一人、後衛に3人という配置で戦いに臨んだ。

試合開始と同時にすべてのチームがドゥークに対して魔法を放った。どうやら池田が各チームの代表と打ち合わせていたらしい。他のチームとしても中級を先につぶしておきたいから攻撃することに賛同したのだろう。

炎、雷球、岩の礫、カマイタチ、さまざまな魔法が襲い掛かるが如何せんどれも下級魔法、でさらに公式魔法だ（公式魔法は一般的に体系化された魔法のことで方法や効果がすでに知られている魔法のこと。）左から飛来する魔法は簡易障壁を張ることで、右側には中級魔法、『火爆殺』で吹き飛ばすことで無効化してしまった。つ



いでにこのとき右側にいた西海陽はぶっ飛ばされ敗退となる。

ドゥークは次に正面にいる2つのチームの片方に火爆殺を放ち、同時にもう一方に対して槍を構えて突撃した。

あー言い忘れたが魔法の発動は魔法式によるものだから魔力を込めて即放たれてる。まあ、詠唱破棄みたいもんだから魔力のある限り連発ですぐに発動できるんだ。ちなみに詠唱型、つまり魔法式を用いない魔法を使うのは上級のほんの一部だけだしな。俺は使うけど。

話は戻るけど、そもそも下級と中級じゃスピードもパワーも違う。正面から突っ込んできたドゥークによってあっという間におっさんたちは貫かれていた。

この間、俺たちも見てただけではなく池田の指示のもと魔法を放ち続けていたがドゥークはおっさんたちをうまく盾に使いすべて防ぎ切る。

うちのチームの連中では貫通するような魔法は使えなく、俺以外で唯一貫通する魔法が使える池田が行動に移ろうとする頃にはドゥークはこっちに迫っていた。

焦りまくる自陣に対し向かってきたドゥークは前衛にいた俺の心臓めがけて槍を突き出す。相手は下級だという考えから本人にとつては適当に、されど松田たちにとって十分に早い一撃が向かってく

る。

これを俺は「う、うわぁ」とか言いながら偶然を装って剣で叩き落とした。

いや、別に全力で戦ってもよかつたんだけどめんどくさくて…

槍をはじかれたドゥークは一旦後退する。

その顔には驚愕が現れていた。

まさか自分の攻撃が防がれるとは思っていなかったんだろう。適当とは言っても下級なら軽く仕留められるレベルの攻撃だったのだから。

その間に俺は「先輩頼みます」と言い横にダッシュして距離をあけた。

それを目で追うドゥーク。おそらく俺が中級であることに気づいたんだと思う。視線には警戒が含まれていた。

意識が俺に向いている敵を前にして、ここがチャンスと言わんばかりにちやつかり俺についできた松田以外の人たちは池田先輩がとめる間もなく突撃し返り討ちに合う。

結果として逃げた俺と松田、突撃しなかった池田先輩に偶然残った華柳先輩とドゥークの5人が生き残り、規定人数となったため勝

ち上がることになった。

## 8話 意外な結果

「キタ！俺の時代だよこれ！天も俺と三坂さんが結ばれるのを手助けしてるよコレ！」

めちやくちやテンションが高くなってマツダが大きな声で叫んでいる。

「おい！三坂さんは俺の嫁だ。勝ち上がったのは凄いがそこは調子に乗るなよ。」

「ヤナのもでもないからな。これから俺と付き合ってもらおう予定だからな。」

松田の発言に華柳先輩と池田先輩が食いついてる。正直俺はどうでもいいんで

「俺はみなさんほど三坂さんへの興味はないんでその話は置いときます。それよりまさか松田が勝ち上がるとは！」と、無理やり話題を変えることにした。

「あゝそれは確かに。ここまですごいと思ったのに松田が生き残るとは！」

「すげー意外な結果だよな。正直驚いた！」

「そーいえばまだ言ってなかった。おめでとう！」

「おめでとう！」

「あざーす！でも実はこれが俺の隠れた実力つすよ！」

大喜びをしている松田と驚きつつもそれを祝福する俺たち。

エリア大会のバトルロイヤル1試合目、勝者は中級2人、そして松田となった。

ぶっちゃけ松田は何もしてないんだけどな。他の参加者はみんな中級2人がぶっ飛ばしてたし。松田は逃げ回ってただけだしなあ。

しかーし、それでも勝ち残ったのは事実である。運も実力のうちという考えには俺も賛成なので素直に祝福しよう！おめでとう！

そんなこんなで1試合目から意外な勝者が現れた本大会2試合目以降は大方の人間が予想していた、『中級が勝ち上がり余った枠に下級がちよこつと入るだろう』という予想を覆して進んでいく。

2試合目、勝者は下級が3人という結果になる。

この枠の中級は1人しかいなくレベルで言うと4だ。一方で勝ち上がった3人の下級はレベルで言うと3であり、もう少しで中級になるという強さであった。おまけにこの3人は組んでたらしいので今回の結果は順当なのかもしれない。

3試合目、勝者は中級が3人。普通の結果だ。

4試合目、勝者は下級が3人。レベルは1と2！

この試合には中級が30人中19人という、下級には厳しいものだともみんな予想していた。実際に戦う中級者たちもそうだったのだろう。下級にはほとんど意識を向けず同格の者たちに集中していた。どうやらここでの参加者たちはチームを組んでいないメンバーがたまたま多く出場しているようであった。

試合が始まり中級同士の戦いの余波で勝手にいなくなると思われていた下級は松田と同様にただ逃げることだけに集中していた。結果として中級の半分が脱落しても下級は8人が残っていた。

このあたりでさすがに周りの下級を先に潰そうかと考える者はいたが、かといって下級を襲おうとしたら他の中級に隙をつかれて自分が倒されるのは目に見えている。よってほとんどの人が強いやつを先に片づけることにしたようだ。

しかしその判断が間違이었다。実力のあるもの同志が積極的に

潰し合ったせいで、勝ち残った中級も片腕がなくなったり魔力を使い果たしてしまったりしていた。

で最終的には逃げ回ってた無傷の下級三人がボロボロで何もできない中級をブツ飛ばし勝ち上がるという結果になった。

そして俺たちの参加する5試合目。

出場者は中級が3人で残りは下級のBMだ。そしてこの試合はみんなどこかのチームに所属しているようだった。

具体的には

Aチーム 俺、池田（レベル3）、華柳（レベル2）

Bチーム 中級2人（ともにレベル5）

Cチーム 中級1人（レベル4）、下級4人（レベル3と2が2人ずつ）

Dチーム 下級5人（全員レベル3）

自分から戦ったのはこの4つで他の15人は何チームかに分かれ

ていたが、戦わず逃げ回ってたからどうでもいい。

試合開始時の自分がいる場所は自由に選べるがチームごとに固まってそれらが円状になる傾向がある。

この試合では上の4チームが会場の中央で四角形の形を作り、残りの連中は試合会場の隅に逃げていた。

良い感じに緊張感が高まってる中、5試合目が始まった。今までの試合はすべて開始とともに実力者が動いて積極的に敵を倒していたが、先ほどの試合の結果を受けて今回はみんな動かなかった。

会場の端の方へバラバラに逃げている15人の多くはただ逃げることに集中しているが幾人かは機会を見て仕掛けようとする意志が感じられる。中央の連中は前の試合の二の舞にならないよう慎重に構えていた。

「いけつち、どうする？」

「まだ動かないで。4チームの中では俺たちが一番戦力的にきついでから。」

「だからこそ先手を取って主導権を握った方がいいんじゃないか？」



「可能ならするけど、どうやってやる？」

「……………あゝそれは……………」

「難しいだろ？だから状況を見て動くしかない。相手の手札もわからないしな。」

「なるほど。」

「笹川も良いな？」

「了解です。」

池田先輩の指示に従い俺も華柳先輩も構えたまま周りの様子をつかがい続けた。

実際のところ外から見ればBチームとCチームがお互いをけん制している感じだな。彼らから見ればAチームとDチームは消耗する時ならともかく真正面からの戦いでは負けることはない。

だからこそ軽く注意するだけで意識の大部分は中級がいるチームに向けられる。

ちなみに俺が中級と気づかれていないのは2つの理由からだ。

1つは公表される公式レベルが2であるということ。これは力を

隠したいとかじゃなく試験に行く時間があるなら修行してた方がいいと考えて公式レベルをあげていなかったことによる。

ほとんどのダンジョンでは潜るのにレベルは関係ないからな。新規に作られたダンジョンのみが管理設備が整っていないため上級のみと制限されるが、調整されたダンジョンでは申請すれば誰でも潜れる。まあ、普通は自分の能力を超えるところには行かないからな、怪我するだけだし。

んで話は戻ってもう1つの理由は俺の魔力コントロールが優れているからだ。

魔力量は少ないけど魔力のコントロールは世界最上位だと自負している。なんせ1500年以上も生きてるわけだし。そんなわけで他の中級は見るからに強そうな気配を出してるが、俺からはレベル2相当の力しか感じないってわけだ。

別に全力で戦ってもいいんだけど『人間』としての俺は最強ってわけじゃないからな、そこまで圧倒的な力はない。中途半端に全力を出した結果、注意人物とみなされ多人数で襲われてもめんどくさいことになる。

力試しが目的で出場したわけだけどこいつら程度じゃ意味ないしな。やっぱ上級相手じゃないと！あくまで1対1の実力が知りたいわけだし。

そんなわけで本気を出さない俺なのでどのチームも本格的には警戒していない。

すでに試合開始から5分は経過した。軽い牽制的な魔法の応酬があったが魔力の無駄遣いと判断したのか今はどのチームもじっとしている。外部にいる【逃げる戦法組】に対し牽制で飛ばした魔法は全部回避され誰も敗退者はいない。

「どうすんのこれ？このままじゃいつまで経っても動かないぞ」

焦れたのか華柳先輩が池田先輩に問いかけた。

「確かにそうですね。下手したら地方大会のときみたいに勝者なしになる可能性もありますよ。」

俺も池田先輩がどうするか気になったので聞いてみた。

「わかってる。わかってるけど俺たちからは動けない。それに時間が気になるのは他のチームも同じだ。焦ったチームから負けるぞ。」

「他のチームも同じならこのまま時間切れになるぞ。ホントにいいのか？」

「時間切れになったらその時は諦めよう。」と苦笑した池田先輩が言う。言ったあとに「でもそうはならないように今考えてるけどな。」と付け足した。

そのままさらに5分が経過。

試合は完全に停止していた。

観客の方もトイレや売店へ行くのか席を外す人が増えてきた。さすがに松田はじっと試合を見ているけど。

飽きました。さすがに飽きました。

てなわけで試合を動かすために数十秒前から周りに気付かれないようにこっそり詠唱をしておいた。既に準備は万端であとは俺の意思ひとつで魔法が発動し試合が動くことになる。

ここで少し魔法の解説を！

魔法には魔法式型と自力型がある。

魔法式型は魔法式を組み込んだ魔方陣を媒介に入れる。BMの場合は自分の武器に組み込むのが基本だから剣とか杖に組み込み魔法を使う。この時、魔法は“媒介”から発動する。

例えば氷の魔法、『アイスニードル』を使った場合は剣や杖から氷柱が飛ぶ、あるいは剣や杖の近くに魔法陣が浮かびそこから氷柱が出る。数や大きさは使い手次第だが発動は必ず媒介付近からで、遠くの相手の足元から氷柱を生やしたり頭上からいきなり氷柱を出現させたりはできない。

まあ、厳密にはできるようにする魔法式があつたりするけどそれは上級者だからここでは関係ないな。

一方で自力型の場合発動場所も自分で自由に決められる。文字通り“自力次第”だ！

当然コントロールも難しいし、魔力も多く使うのであまり好まれない。なので自力型を使う人は上級の中のさらに一握り以外はほばいない。

これが一般的な常識である。

そんなわけでした。現在、空高くに存在する魔方阵に気付いている人は選手、観客ともにいない。上級がない試合で空から攻撃が来るなんて誰も思わないだろうからね。

みんな周りを警戒するだけで動こうとする者は誰もいない。

よし、行こう！

覚悟を決めて魔法発動最終段階に入る。

使用する魔法は中級魔法『サンダーボルト』 中威力の雷を降らす魔法。

対象は外野の下級たち全員、そのあと時間差をつけて中央の各チーム全員（弱めるが自チームも含む）。

使い手を不明にするためにするためにこの魔法で倒すのは外野の逃げる組だけだ。

また試合を動かすことが目的なので中央に対しては威力を下げて雷の数を増やす。

準備完了。

予想通りかなりの魔力、俺の全魔力のおよそ3分の1を持ってかれた。が、このあとの戦闘に大きな影響はないと思う。魔力もうま

くコントロールして誰も魔法陣には気づいていない。

そして

「サンダーボルト」

小さな声で囁いた。

その瞬間、天から15の雷が降り注ぐ！

逃げる戦法組は反応する間もなく焼かれる。

それと同時に鳴り響く雷鳴。

「なっ!?!」

急な展開にどのチームも呆然とし周りを見渡す。外野にいた15人は全員焼け焦げて倒れていた。

中級3人と池田君はすぐに自分を取り戻し空を見上げる。と、そこには半径5メートルほどの魔法陣が存在した。

「魔方陣!?!詠唱型か!?!」

「誰が…」

驚きの声をあげたBチームの2人の言葉を聞き、他の連中も空を見上げそこにあるものに驚愕した。

(こいつら今隙だらけなんですけど。やっちゃおうかな) って思ったけど自重した。どうせすぐに次のが来るし。

誰がやったんだ？観客を含め皆がそう考えようとしたとき、魔法陣から紫電が漏れ出す。

バチバチと音が鳴り、魔力が高まる。2発目が来るのが嫌でもわかった。

「ちい、また来るぞ！」

「ウツソ！？どうするどうする？」

池田先輩が叫び華柳先輩はパニックてる。

冷静な人は防御魔法を展開し、それを見た他のものもそれに続く。

そして全員が防御した途端に再び閃光が降り注いだ。

今度の雷には物理的な力が備わっていた。防御魔法の上から各選手をバラバラに吹っ飛ばす。



1 発、2 発、3 発、4 発、5 発、……………

「クッソー…キツイ」「もう持たない」「うー…」「あああああ  
あああ」

雷の轟音、地面が吹っ飛ばす音に紛れて選手の悲鳴が聞こえる。

状況を確認しようにも雷の閃光で目が眩み、絶え間なく降り注ぐ魔法によって位置が動きまくっている。魔法が止まるまで耐えるしかなかった。

うーん…実際のところ、最初の外部にいた連中に使ったのと違って今降っている雷は見た目は派手で物理的パワーは強いが感電させたり、焼いたりする能力は低い。だからこそ何発も打てるのだが誰もそこには気づいていないようだ。ひたすら防御に専念してる。

全員に20発以上の魔法が浴びせられたところでようやく魔法陣が消滅した。

地面からは土煙や蒸気のようなものが所々から立ち上がり、吹っ

飛ばされた土石が乱雑にまき散らされている。

土が崩れる音や煙のシューツという音以外には何の動きもなく会場は完全に静まり返っている。

俺の近くには2人の先輩とBチームの中級が1人（メガネの20歳過ぎくらいの男・フツメン）、Dチームの3人がいた。どうやらDチームの残りの2人は今の雷でやられたらしい。

Bのもう一人の中級（マッチョな不良っぽい奴）とCチーム全員は俺たちから離れたところで倒れているが全員まだ動けそうだ。

「ちくしょう…なんだってんだよ。」

そう言いながら身を屈めて雷雨を乗り切った中級フツメンが起き上がる。

その後ろから俺は愛用の改造ロングソードを振るった。

ヒュツという風切音とともにフツメンの首が飛んで行く。

「中級討ち取ったり…!!!」

空気を読まず叫ぶ俺。

そしてそれを呆然と見ているほかの連中に対し俺は

「先輩たち！何やってんすか！？今がチャンスですよ！」

言いながら近くにいるDチームに襲い掛かる。

「…お、おう！そうだな！」「よし！行く！」

我に返ったのか俺に続く先輩たち。それを見て他の連中も試合途中であることを思い出したのか動き始めた。

俺は敵3人の中の一番弱いであろう遠距離タイプの学生に切りかかった。他の2人が味方を助けようと俺に攻撃をしかけたとき先輩たちが到着し、

「笹川はそいつを！俺たちもそれぞれぶっ倒すぞヤナ！」

「了解！」

とそれぞれの相手と定めた人に襲い掛かった。

遠くでは中級マッチョとCチームの全員が戦っていた。個人の能力ではマッチョが有利だが相手は5人、かなり接戦となっている。当然こちらにアクションを起こすことはないだろう。

俺の方は距離をとろうとする相手に対してびったりマークし離れないで戦っている。先輩たちもなかなかの接戦となってるのでそちらが片付いたらとどめを刺そうと思う。

そんな感じでしたら早く戦っている。

池田先輩は相手とほぼ同格。わずかに池田先輩が強いと思うが気を抜けば簡単にひっくり返る程度の差ではない。けど先輩はその辺をすっかりわかっているので大丈夫だろう。

問題は華柳さんだ。相手は1つ上のレベルだからかなり手こずっているようだ。

正直、先輩たちが勝とうが負けようがどうでも良いけど後で文句言われても嫌だし助けることにしよう！

俺の相手が距離を開けようとバックステップした瞬間、剣を地面に突き刺す。そしてそのまま俺の前方の足元に薄い氷の膜を作った。

俺の相手はジャンプして浮いてた足が氷につくと思いっきり滑って転んだ。その拍子に頭を打ったみたいで気絶してしまいそのまま敗退となった。

……ダサすぎでちょっと可哀そうかもしれない。

せめて剣で攻撃すべきだったかと場違いなことを考えつつ

「うおりゃー！」と叫びながら華柳先輩の援護に向かった。

ここまでくれば特に問題なく戦いは進んだ。

俺の加勢により2対1と前後に挟まれ相手は動揺する。そこを華柳先輩が攻撃し決着がついた。

一方で池田先輩は全身に傷を負いながらも一人で相手を倒したようだった。3人が近くに集まると先輩たちの傷を簡易型の魔法で治療した。まあ、止血程度のものだけだ。

治療しながらもう一方の試合を見ると中級マッチョはかなり消耗しているようだ。Cチームの方の中級もボロボロで下級は既に1人しか残っていない。

「池田、どうする？攻めるか？」

「……………」

「治療終わりっす！止血程度ですから無理は禁物ですけど。」

「いや、それでもありがたい。ありがとな!」

「確かに。助かるぜ!」

「いえいえ、俺が一番楽な相手でしたから。それよりもどうしますか? 向こうの人たちも俺たちに気付いてますよね?」

マッチョたちとは距離があるが、先ほどから両チームともにこちらを意識に入れるようにしている。結果として戦いとしては膠着しつつあるようだ。

「2チーム合わせても3人。しかもボロボロ。今なら勝てるんじゃないか?」

「いや、下手に手を出すとあそこで手を組まれる可能性がある。何せ勝ち残りには3人だからな。それにボロボロとはいえ中級だ。格上相手に油断は禁物だ。」

「確かにそうっすね。なら戦いが終わるまで待ちましょう。」

「いや、それも駄目だ。時間が経つとやはり手を組む可能性は高くなる。」

「じゃあどうする?」

「笹川がさつき使った手でいこう。ちょっと見たけど地面を凍らせて滑らせてただろう? しかもあの氷はかなり滑りやすくなるように調整されているよな。あれはどれくらいの距離から使える?」

「ただ滑らせるだけの氷で良いならここからでも使えます。けど面積は小さくなりますよ？それに剣を刺した位置から氷の線ができちゃうから避けられる可能性がありますよ。」

「発動させた場合、あそこに届くまでどれくらいの時間がかかる？」

池田先輩が目標地点を指示しながら言う。

「3秒くらいですかね。」

「じゃあ、避けられないようにタイミングは俺が言う。合図したらすぐに発動してくれ。」

「了解つす。」

そう告げ剣を突き刺し、いつでも発動できるようにした俺。

俺たちが作戦を練っている間にも戦いは続いている。

マッチョは見た目通り接近戦が主体らしく相手側に果敢に攻め入っている。それに対する2人は中級が相手の攻撃を前で受け止め、もう1人が後ろや横から魔法で援護している。そうしてだいぶ疲労した両チームは拮抗している。

しかし、ついに均衡が崩れる時が来た。

いつまでも動かない俺たちを見てさっさと目の前の2人を倒した方がいいと判断したのか、マツチヨは俺たちへの警戒を下げ力のすべてをCチームの2人に集中した。おそらくサンダーボルトやパートナーが敗れたこと、疲労などによって判断が鈍ってたんだろう。

これに対していまだに俺たちの動きを警戒しつつ戦っている二人はマツチヨに押され始め、ついに下級の男が倒された。

最後の仲間が倒されたことで動揺する敵に向かってマツチヨは突撃する。この勝機を前にして頭の中から俺たちのことは完全に消えていた。

俺たちに背中を向けた状態で突撃するマツチヨに対し

「今だ！」

先輩の意を受けた俺が魔法を発動させる。

剣の先から地面に冷気が伝わり、マツチヨの足元めがけて氷の線が出来ていく。

あと一歩で攻撃範囲に届く瞬間に足を滑らせた。

「なっ!?!」



驚きながら仰向けに転倒するマツチヨに対し、チャンスと言わんばかりに切りかかるもう一人。

けれどマツチヨも接近戦を得意とする男。転びながらも迫る男に對して攻撃を繰り返している。

結果！互いの攻撃が直撃しあう。

そしてそのまま重なり合うように倒れ動かなくなった。

相打ちである。出来過ぎなくらいに見事な相打ちだった。

「試合終了です！勝者、笹川、池田、華柳の3選手となります。」  
審判の声が響き渡る。

こうして俺たち3人も次のステージへ進めることとなったのである。

## 9話 次の試合の組み合わせ

試合終了のアナウンスの後、結界の修復機能が作動し会場と選手の再生が行われた。

敗退者は泣く人、落ち込む人、来年こそは！と決意する人など様々であるが勝者となった俺たちは気分よく試合会場を引き上げる。

そして観客席に戻った後、松田を含めた4人で勝利を祝福しあった。

松田と華柳先輩のテンションが尋常じゃないくらい高かったけどそれも仕方ないことだろうから無難に合わせておいた。

正直なところ俺たちの勝利を予想していた人は誰もいなかったと思う。中級がいるチーム勝つか、下級の中での上位の選手が3人いるチームが勝つと予測されていたからだ。

一通り喜んで落ち着いた頃に次の試合が始まった。

6試合目、勝者は中級が1人に下級が2人となる。

この勝者3人は1つのチームっぽかった。俺たちの試合を見て、下級が相手だからと言って嘗めてかかってはいけないと思ったらしく、実力のある連中は最初に逃げ回ってる人など確実に勝てる相手から潰していった。初めに打ち合わせでもしたのか、狙う相手がかち合うことなくスムーズに戦っていた。

そして実力あるチームだけとなった段階で本格的にぶつかり合い最終的には一番チームワークの良いところが勝利した。

7, 8 試合目はそもそも中級がいなかったので勝者は合わせて下級6人だ。

9 試合目の勝者は中級2人と下級1人。  
ここも同じチームの3人が勝ち上がった。

そして最後を飾る10 試合目がなんか凄かった！

中級が5人で残りの25人が下級という試合だったんだけど、5対25で戦っていた。いや、見る人は俺も含めビックリだったんだけど中級 vs 下級という試合になっていた。

見た感じ今日初めて会ったと思われる人同士が上手くまとまり、見事に拮抗した試合となっていた。この試合の鍵を握っていたのは下級チームの指揮官の可愛い感じの女の子だ。

普通なら5対25と人数に差があらうと、広範囲の攻撃方法を持つ中級が勝つのが当たり前だ。

しかし学生っぽい女指揮官が上手く状況をコントロールし対抗して見せた。

長い攻防の末、10人の下級の選手が残ったのだ。もちろん女の子も残っていた。そしてこの後は各チームに分かれ戦い最終的には優秀な指揮官のいるチームが勝利した！

本来は個人戦なのという突っ込みは置いて、見事な指揮に会場の観客は惜しみない拍手を送った。

もちろん俺も心を込めて拍手を送らせてもらったぞ。基本的には個人戦がメインな俺だから指揮のレベルは高くない。

女の子（美咲ちゃんて名前）は初めて会った人に限定的とはいえチームを組むことを同意させ、さらにはそれらを上手くまとめ中級に打ち勝った。

団体戦はそれほど得意じゃない俺にとっても学ぶことの多い試合だった！

以上で2日間かけて行われた予選プログラムは終了したわけだけど勝者をまとめると下記のようになる。

中級（レベル6） 1人 俺（公式ではレベル2）

（レベル4〜5） 8人 ドウークもここだ。

下級（レベル3） 11人 池田先輩（3の上位）がここ 美咲ちゃんもここ（公式では）

（レベル2） 7人 松田（2の平均） 華柳（2の上

位）

（レベル1） 3人

このレベルは基礎能力で判定されるものだから戦いの上手い人や

強い魔法式を持つてる人なんかは1、2段上のレベルのやつを倒せたりするけど、まあ それはどうでも良いな。

問題なのはこの中から世界大会へ出場できるのは15人であり、そのためには次の1対1の試合で勝利しなければならぬということだ。

その試合の組み合わせを決める抽選がこれから行われる。

「やばい、緊張してきた。なんとしてもレベル1の3人の誰かと、百歩譲って同レベルの誰かと当ってほしい！」

松田は両手を握って祈りまくっている。華柳さんはそれに同意しながら

「あゝ確かに。ここから先は味方とかなないからな。最悪中級とさえ当たらなきゃ何とかなる。池はどうだ？」

「俺も同じ意見だ。世界大会まで出場できればある程度の面目はたつしな。それに今回みたいに特殊な大会でなければ本選に出場するチャンスなんてなかなか無いしな。」

「例年は上級もいますし、そもそも今回みたいにバトルロイヤル形式なんてそんなにないですしね。1対1のトーナメント形式ならここまで下級が残ることなんてあり得ないですし。本来なら俺や大祐がエリア大会で勝つこと自体有り得ないですからね。……あー！ーこのチャンスを逃したくないー！ーい！神様！ヘルプミー！」

暴走する松田を3人で苦笑しながら見る。

気持ちはわかる。

これを逃せば一生本選に出ることなんて無いというのは松田の実力から考えて事実だろうし。

「落ち着け松田。何とかなるさ。最近のお前はなんかついてるし！  
現にここまで勝ち抜いてるしな！」

優しい俺が松田に声をかける。

「確かに運は良さげだけど、ってかなんでお前はそんな落ち着いてるんだ？」

「ここまで来たら慌てても仕方ないだろう。お、人が出てきた。そろそろ始まるな。」

俺の言葉を聞いた3人が同じ方向を見る。主催者とアナウンスをしてたっぽい女の人が出てきた。後ろには箱を抱えたおっさんがいる。

おそらくあの中にクジが入っているのだろう。

三人が台に登ると台の後ろに名前の抜けた試合の組み合わせ表の立体映像が大きく浮かぶ。

「予選を勝ち抜いたみなさん、おめでとございます。」と主催者がうんたらかんたらと述べ、次いで隣の女性が話し始めた。

「みなさん、次の試合の対戦相手を決める抽選を行います。くじを引く順番は予選の試合順となっております。また同試合の方の順番は登録番号順となります。それではさっそく1試合目の勝者三名から順に壇上に向かってください。」

女性の声に促され並んで壇上に向かう選手たち。次々とくじを引いていくがスクリーン上にはまだ名前が出てこない。最後にまとめてわかるようだ。

5分後、組み合わせが発表された。

俺たちの結果は

俺 VS レベル3の女子学生      荒川 美咲（指揮の上手かった人だ）

池田 VS レベル3の男子学生      ケン＝マクリファス

松田 VS レベル1の男子学生 奥平 斗夢

華柳 VS 毎度おなじみ中級のドワーク・キサント

となった。

俺（念のためにそう見えるようにした）、池田先輩、松田もほつとして、特に松田は大喜びをしまくってたが華柳先輩の組み合わせがわかった途端、黙り込んだ。

「あああああつあ…ドワークとだあ……………」

4人の中でただ一人中級と戦うことになった華柳先輩はすんごい落ち込みまくっている。さすがの俺も直視できないくらいに落ち込んでる。

池田先輩も松田もなんて声をかけたらいいかわからないように黙っている。

「……………うううううう……………松田く変わってくれ……………」

「え、いやそれは無理じゃないですかねえ…もう決まっちゃいましたし。」

「あん！？てめえ先輩に対して何だそれは？少しくらい気を使えや、コラ！鼻フックやんぞてめえ」



そう叫びながら指を松田の鼻の中に突っ込んだ。

うわ〜近づきたくねえ。俺はちょっと離れていよう。

「ヤナ。もう決まった以上どうにもならんだろ。てかそんなところに指突っ込んで汚くないか？」

池田先輩の声を聴いて落ち着いたのか松田から離れる先輩、そして松田は赤くなつた鼻を抑えて涙目になっている。

微妙な空気が流れる中、次の試合の細かい説明が始まったのでとりあえずはみんなそつちを聞くことにした。

「はあ……」

説明が終わり、帰宅しようとしているが約1名がずっと溜め息をつきまくっているので気まずい空気が流れている。

池田先輩が気を使って俺と松田に先に帰るように言ってくれたので俺たちは喜んで帰宅した。

「いや〜先輩は気の毒だけど正直俺はすげえ嬉しい。相手はレベル

1の人だしおそらく本選への出場は確定したようなものだ。」

「確かに。もしかしたら松田は我が校始まって以来の現役での本選出場じゃねえ？」

「だよねだよね。お前はどつだ？相手はあの可愛い女の子だよね？大丈夫そう？」

一応聞いてくるもののおそらく松田の中では俺は負けるともっているんだと思う。

「相手はレベル3だけど華柳先輩よりはマシだろう。ドウークと当ることを考えたら美咲ちゃんだったと思うけどあの娘と戦う方が楽だよ。」

「確かに。先輩尋常じゃなく落ち込んでたし。」

こんな感じでグダグダ話ながら俺たちは帰宅していった。

翌日、登校し教室へ入った途端、俺は殴り飛ばされた。いや、あまりにも急で回避しなかった。全力ではないというのも感じてたからとりあえず受け止めた。

「裏切り者！ずるいぞおまえら！」

西川が割と本気めに叫んできた。忘れてるかもしれないが西川は地方大会で敗退したクラスメイトだ。

周りを見ると松田や他の連中が苦笑してるのがわかる。

「三坂さんがくボクチンの三坂さんがお前らに汚される！」

涙目になってるのがちょっとキモかったので無視して自分の席に向かった。

「おっすー！」

「おはよう。それとおめでとう！」「おめでとう！」

「ありがとう！でもまだ首都の本選に出場できるかはわからないけどな」

「でも、ここまで行くって凄いつて！次の試合は土曜日だろう？俺見に行くから。」

「俺も行く」「私も行きたい。池田先輩も出場するんだよね？」「華柳先輩もでしょ。」「じゃあみんなで行かないか？」「いや、あんたとはいかないけど。こちらは女子で行くし」「なんで？」「だってあんたは……」

こんな感じで俺と松田の周りにいるんな人、ギャル系とかオタク系も含めて普段は話さない人も集まってわいわい騒いでいる。

「マジで俺の華麗な活躍を見せたかったね。中級を含めた敵の攻撃を軽やかなステップでかわして「お前は逃げてただけだろ。」「おい————そういうことは言うなや！」

「はあ、松田がここまで行けるならボクチンにも可能性があったのに……はあ」

松田の誇張話を訂正したり西川を慰めたりしているとクラスメイ卜の中でも割とよく話す女のグループが話しかけてきた。

「笹川おめでとう。凄いじゃん！地方大会で終わると思ってたのに予想と全然違う。」

こいつは寺島 優香。可愛くもなくブスでもなく、スタイルも良くも悪くもない普通のやつだ。

一般的にどこにでもあるようにうちのクラスにもグループがある。イケてる系、ギャル系、オタク系、真面目系、一匹オオカミ系、そして俺や寺島みたいなどれにもあてはまらない普通系。松田や西川もちよいオタクではあるがもっとディーブな連中がいるので普通系だ。

で普通系同士よく話す寺島はニヤニヤしながら話しかけてきた。

「本命は睦美ちゃんだと思ってたけど三坂さんだったんだ。あんた本気で三坂さんと付き合う気だから出場して、愛の力で勝ち残ったんでしょ？」

「いや俺は」

三坂さんにはそれほど興味ないと言いかけたところで

「大祐、三坂さんと付き合うのは俺だ！そこだけは譲らん。」と松田が割り込んできた。

それを聞き周りは勝手に盛り上がっている。

あゝめんどいからしばらくは大人しくしていよう。

周りの連中と松田はどんどん盛り上がっている。松田のやつ、自

分がまだ一度もまともに戦っていないのを完全に忘れているな。あんまり大きなこと言って恥かいても知らんぞ。

「い、ごめん。ここまで盛り上がるとは。」

「別にいいさ。気にしじゃないよ。」

珍しく素直に謝る寺島に対し手を振ってこたえる。

そんなことよりも新しい魔法がなんかできないか端末をいじって試行錯誤しよう！そっちの方が有益な時間だ！、そう思い、鞆をあさる俺に対し寺島がまた話しかけてくる。

「でもあんたホントに三坂さんには興味ないの？」

「ないわけじゃないけど、この大会に出たのは無関係だな。」

「へ〜」

「それに今の松田を見ると残念な奴にしか見えなくないか？」

「うん。可哀そうな人だよな。」

「あーはなりたくないし、積極的に付き合いたいとは思わないな。やれるならやるけど。」

「……………」

「ボクチンの三坂さーん」

「うるせえぞ西川。お前は一人でへこんでろ。」

知らない人が見れば寺島フラグが立ってるのかと思うかもしれないが、実はこいつは松田が好きなのを俺は、というより俺たちみんな知っている。

三坂さんに夢中の松田を止めるかどうか悩むが、どうせ松田が本選優勝することはないだろうし、放置しておこう、面白いし。

「寺島寺島、松田には『三坂さんより私を見て』ってはっきり言わないと伝わらないぞ。」

「うるさい。」

西川が殴られた。余計なこと言わないで正解だな。

…さてと、担任の睦美ちゃんが来るまであと5分くらいある。

俺は周りの喧騒を気にせず静かに端末をいじることにした。

## 10話 朝礼と全校応援（前書き）

今回の話は日常パートになります。

次に主人公の本格的な戦闘描写が出るのは13話となりますので、もうしばらくお待ちください。



## 10話 朝礼と全校応援

「おはようございます。みんなちよつと聞いてください。」

教室に入ってくるなり、担任の三上 睦美 先生は大きな声でそう言った。

この人は教職についてまだ1〜2年の新人教師で本来は副担だったが元の担任が盗撮で捕まったので繰り上がって担任になったというわけだ。

見た目は可愛い童顔で巨乳。おまけにそこそこのお嬢様でずっと女子校だったらしく男に免疫がないそうだ。

あ、あとちよつと頭が弱い。というか生徒に対して強く出られないっぽい。

そんなわけで割といろんな男子にちよつかいかけられている。

その筆頭が俺だ！

ただここ最近には訓練ばっかで大人しくしてたから久しぶりにいじってみようと思う。

俺は先生のところまで近づくと

「おはよう睦美ちゃん。今日もカワイイね。」

「おはよう。あと睦美ちゃんじゃないでしょ。三上先生って言わなきゃダメでしょう!」

ちょっと怒った顔を作って言う。うーん個人的に童顔の年上ってツボなんだよな。からかいたくなる。なんでだろ？

「いやいや睦美ちゃん。それどころじゃないんだって。聞いてよ。」

言いながら先生の両手を取り自分の指を絡ませる。睦美ちゃんが解こうとするより早く

「睦美ちゃんは知らないかもしれないけど俺、エリア大会の決勝に進出したんだよ。凄いつしょ。」

「知ってます。そのことについて話しが　　ってその前に手を離しなさい。」

ちょっと本気で離れようとする睦美ちゃんを俺の方へ引き寄せる。

キヤツと可愛い声を上げる睦美ちゃんに真面目な顔を作って言う

「俺、睦美ちゃんの彼氏にふさわしい男だって認めてもらうために

頑張ったんだよ！」

「えっー!?!」

いきなりの話に驚く睦美ちゃん。毎回同じようなことを言ってるんだからそろそろ耐性ができてもいいんじゃないかと思うけど面白いから伝えないでおく。

「何度言っても本気にしてくれないからこの数か月は一生懸命に修行したんだ。俺が軟弱だから相手にされないのかと思って………だから最近はあるまり話しかけられてなかったでしょ？」

「え、や、あ、うん。」

顔を赤くしながら答える先生。

以前は毎日話しかけられていたのにここ最近はや最低限の会話をしていなかったのは事実だ。

いや〜押しに弱いかわいい女ってのは良いね。それに俺的には睦美ちゃんは顔で人を判断するタイプじゃないってところも評価が高い。

「ホントは毎日話しかけたかったけど結果を出すまでは我慢しようって決めてたんだ。俺が本気だつてことを睦美ちゃんにわかってもらいたかったから」

「……………」

目をそらしたまま何も言わない先生。

「俺の気持ちはわかってくれた？」

「……………え、あ、でも笹川君は生徒で私は教師だからそういうのは……………」

睦美ちゃんは先ほどよりもさらに顔を赤くして答える。

何度も言うのが気弱な大人の女性は素晴らしいことだと思えます。普通の女にこんなことやったらビンタされて終わり、下手したら性犯罪者扱いされかねないし。

ちなみにこの間、他の人は特にこっちに注目せず友達と話している。最近は少なかったとはいえ、以前は毎日見られた光景だから誰も気に留めていない。

うちのクラスのイケメングループは年上がダメなのかわからないけど睦美ちゃんは対象外らしく話に入り込んだりしてこない。他のグループには睦美ちゃんにあこがれている人がいるけどチキンだから助け舟を出したりはしてこない。そんなわけで俺の独壇場だった。

うつむいた睦美ちゃんの顔を上げさせてその瞳を黙って見つめる俺。

それに対し睦美ちゃんは目をきよるきよるさせてパニックてるのがわかる。ホントなんでこんな簡単にお持ち帰りされそうな人が純潔を守れてるんだらう？世の中不思議だわ。

「笹川くあんたからかうのもいい加減にしなさいよ。」とさすがに見かねたのか寺島が言ってきた。

「寺島てめ！余計なこと言つな。」

「あ、笹川君、やっぱりまた私をからかったの！もう！」

真実に気付いた先生が頬を膨らませて怒ってる。怒ってる顔も力ワイイってか微笑ましい。

「先生もいい加減慣れなよ〜こいつがアホなことやるのはいつものことですよ。」

「笹川君、真面目な顔して言うから冗談か本気かわからなくて。」

「こいつの場合はいつつもふざけてるだけですよ！ …はあくそんなんだったら同年代の人で女慣れした人に口説かれたら大変ですよ。」

「普段はちゃんとお断りしてます。でも生徒が相手の場合、直接的に言っただけじゃダメかな〜と思って。」

「そんな甘いこと言ってるから笹川みたいのが調子に乗るんですよ。もっとはつきり言ってるやらないと!」

ガミガミと姑みたいに説教する寺島。先生は生徒に説教されて落ち込んでいる。でも今現在も手を繋ぎっぱなしだから怒られるのも無理はないと思うけど。

はあ、先生の手は柔らかくてすべすべしてますな。なんて考えていると松田が近づいてきた。俺はめんどくさくなるのがわかったから即座に睦美ちゃんの手を引きその場を離れる。

「寺島くヤキモチ妬いたからって先生にあたるなよ。」

「はあ、あたしが誰に妬いてるって?」

「だから大祐に直接言えばいいのに。」

「はあー!?!あいつに何を言えって?」「いや、だから先生じやなく私を見」

いろいろとごちゃごちゃ言ってるのが聞こえる。避難してよかった。

「そっかあ。寺島さんは笹川君が好きなんだあ。」

俺と手を繋いでいる人はなんか勘違いをしている。なんて説明しようか悩んでると西川が近づいてきて話し始めた。

「松田もいい加減寺島の気持ちに気付いてやればいいのにな。」

それを聞いた先生は疑問を顔に浮かべて聞いてきた。

「どういうことですか？寺島さんは笹川君が好きなんじゃないんですか？」

「睦美ちゃん違うよ。寺島は俺じゃなく松田が本命。んで松田は別のクラスの三坂さんに憧れているの。さっき寺島が話に割り込んできたのは単純に睦美ちゃんを助けようとしてだよ。」

俺が未だに言い合いを続ける寺島と松田を指しながら言うとそうなんだと納得したような顔で頷く。

「しかし松田も何で気づかないかね。あんなにわかりやすいのに。」と西川に聞いてみる。

「寺島が一番話しかけるのはお前だからな。」

「でもあれは直接松田に話しかけるのが恥ずかしいからまず俺のところに来るだけじゃん。第一毎日見てれば流石に本命が誰か気づくだ

る。」

「気づかないふりをしている可能性も考えられるな。松田は三坂さんラブだから。………んでそれよりさっきから気になってただけどいつまで手を繋いでるんだ？リア充だぞっていう自慢？」

ジト目で繋がれた手を見ながら言う。

「あっ！？」と気づいたように慌てて離そうとする睦美ちゃんだが俺は離してあげない。むしろギュッと固く握りしめて問いかける。

「そんなことより教室に入ったとき何か言いかけなかった？」

「これまた「あっ！？」と、今思い出したようで慌てて全体に告げた。

「今日は特別に朝礼があるので急いで体育館に移動してください。」

さっきから他のクラスがぞろぞろと廊下を歩いてたのはこれだったのか。



そのあとは急いで体育館へ向かった。他のクラスはもう移動が終わってしまっていたからなおさら急いで。

睦美ちゃんは何とか手を離そうとしたけど体育館の入り口前じゃないと離さないと主張する俺を諭す時間がもつたいなと思ったのか、諦めてそのまま手を繋いで移動した。

この件についても一部の睦美ちゃんファンを除いて無反応だ。もう慣れてるしね。

遠足っぽい行事のときなんて駄々こねまくって行き帰りずっと手を繋いでたし。

周りの女子とか睦美ちゃんファンの男からは冷たい視線を浴びてたけど…

それで今、体育館のステージに俺、松田、池田先輩、華柳先輩、エロ太の5人と校長がいる。

体育館についた後、全クラスがそろったということで校長が話し始めた。

話が長くて疲れたってときになってようやく終わり、今日の本題エリア大会の決勝進出者が呼ばれた。

「お、エロ太。お前もちゃんと勝ったんだな。」

「いや、メール送ったじゃん。」

「俺は男のメールはチェックしねえ。着メロでわかるからな。」

「コラ。静かにしろ。」

ふざけながらぼそぼそ話す俺たちに対し池田先輩が注意する。

「すみません。」

会話をやめた後、体育館を見渡すとほとんどの女子は池田先輩が華柳先輩を見ているようだった。

その中で寺島だけはガチで松田だけを見ているのがわかる。面白いので俺は西川に視線を送ったら、それに気づいた西川は寺島にちよっかいをかけて殴られている。

残念ながら俺やエロ太を見てる女学生はほぼいねえ。ちよっと泣きそつだ。別に好きな人はいないけど、こんな場面なのに注目され

ないのは悲しくなる。

松田でさえいるのに。

エロ太も同じことを考えたんだろう、少しテンションが下がっているようだった。

悲しみを胸に宿しながら教師の列を見ると睦美ちゃんと目が合った。

少しだけ顔を赤くして下を向く睦美ちゃん。

『大祐のテンションが80上がった。リア充度が-60から+120へ上がった』

頭の中に流れたテロップを感じているとエロ太が羨ましげにこっちを見てる。

勝ち組と負け組に分かれた瞬間であった。

アホなことを考えていると校長の話が始まる。

まず一人一人、お褒めの言葉をいただいた。我が校で学生のうち

にここまで勝ち進んだものはいないらしく素晴らしく名誉だみたいなことを言っていた。

で、問題は次だ。今週の土曜の試合の日は全校応援をやるそうだが、ただエロ太は違うエリアの大会なので残念ながらそつちには応援に行けない。4人が出場する方の大会に行く。急なことなので強制はしないがその日は部活などの取り組みは休みで教師は皆出席だそうだ。

ちなみに移動はこの町にある転移施設から大会が行われる街の転移施設へと移動し、そこからバスで15分ほどだ。転移施設はそこそこの値段がかかるが学校負担にしてくれる。

この話を聞いて

俺はぶつちやけ外野はどうでも良いので特に感想は無し。

松田は勝てる試合と思われるので喜ぶ。

池田先輩も三坂さんにいいところ見せられると喜ぶ。相手も同等レベルだし面白い試合を見せられそうだからね。

エロ太は関係ないんでどうでも良い。

華柳先輩は……………ムンクの『叫び』みたいな顔をしていた。決してイケメンがやっていいことじゃないけど、それだけシヨツクが大きかったと思われる。

まあ、全校生徒の前で負けることが確定してるからね。気持ち

わからないでもない。

そんなことがあつたりしながら時間は流れる。

松田は三坂さんのことばかり話すから寺島の機嫌が悪くなって大変だ。主に西川と俺が八つ当たりされている。

先輩たちには会っていない。ここから先は個人戦だからだ。聞いたところによると二人の先輩のテンションは正反対らしい。

俺はクラスメイトと普通に過ごしながら試合の日を待つ。

睦美ちゃん？特に何もしてないよ。睦美ちゃんは別に俺に対して惚れてるわけじゃないだろうしな。モテない男の勘違い現象になっても切ないし、あれ以来はからかってません。

エロ太たちとの訓練はしていない。大会が終わるまでは自分でコンディション管理するように話し合ったからだ。

エロ太自身は何をしてるのか不明だ。会場が違うから特に全校応援に関するプレッシャーはないだろうし。

それぞれがいろんな気持ちを抱えて日々を過ごしてき

ついに決戦の週末になった。

11話 三坂さんの初会話 (フラグは立ちません)

今日はエリア大会決勝の日だ。

決勝と言っても勝者は一人じゃないし、1試合やって勝てばそれで次の大会に行けるんだ。華柳さん以外はみんなリラックスした状態で試合が来るのを待っていた。

「今日の応援はどれくらい来てくれるかな？三坂さんが来るならいいと見せなきゃな。」

松田がニヤニヤしながら言えば池田先輩も

「俺の相手はレベル3だからな。接戦になると思う。だからこそ見て面白い試合になるだろうし三坂さんのためにも負けられない。」

「2人ともホント、三坂さんのことではいっぱいですね。確かに綺麗でスタイル良くて、性格も良いらしいですけど。そういえば松田は一目惚れって言ってたけど、池田先輩はどういうところに惹かれたんですか？」

俺の質問に困った顔をする先輩。

しかしすこし悩んだ後に話し始めてくれた。

「最初はちょっと良いな程度だったんだけどな。自分で言うのも何だけど俺はあまり女に困ることってなくてさ。だからいつものように声をかけたんだけど拒絶されてさ。ま、そんな人もたまにいるから方法を変えて口説いてみたんだけどそれでもダメでさ。」

「さすが三坂さん。俺の嫁。」

松田の言葉は意図的に聞き流し俺と池田先輩は話を続ける。

「何をしても、どうしてもOKが貰えなくてさ。それでムキになって何としても口説き落としてやるって思って話しかけてるうちに人柄とか、性格っていうのかな。そういう部分に惹かれちゃっていつの間にか本気になってたよ。」

照れてるのか鼻の頭をかきながら先輩は言う。

「へえ…失礼なことですけど外見で判断してやりたがってるだけだと思ってました。」

ホントに失礼な言葉を聞いても怒らず苦笑いして

「まあ、最初はそうだったから何とも言えないけどね。今は違うよ！外見が優れてる女ならいくらでもいるからね。俺たちの学年にも



倉山っていつのがいるし。」

「知ってます。綺麗ですよ！遊んでるらしいですけど。」「そう  
そうそれで……………」

「ちょっと俺も仲間に入れてくださいよ。てか大祐！お前は女に興  
味ないみたいこと言ってるけど睦美ちゃんにいいところ見せたくない  
のか？」

「お、あの噂ホントなの！？三上先生が笹川とできてるって！」

「そんな噂あるんですか？知らなかった。」

「お前、あんな堂々と手を繋い歩いてたら噂になるに決まってるだ  
ろ。」

「手繋いで歩いてるのか！？松田、その話をもっと詳しく！」「言  
つときますけど俺は別に……………」「笹川は黙ってる。良いですか池田  
先輩実は……………」

こんな感じですつと落ち着いた状態で会話をしていた。1人を除  
いて。

今、俺たちがいるのは試合会場の選手の集合場所だ。昨日もされ  
たが改めて今日の予定を話すために集められている。

観客よりも早い時間に集合するように指示されたために、全校応援でどのくらいの人が来るのかは不明だ。

女子に人気の2人の先輩がいるために女の子はそこそこ来ると思われる。ただもしかしたら今日で華柳先輩のファンはいなくなるかもしれないけど。試合の勝ち負けよりも今の華柳さんのテンションがやばいからね。男らしくないというかなんとというか。思った以上にメンタルが弱いらしい。

あと、俺と同じクラスの連中はみんな来ると言っていた。なんせ俺と松田と2人も出場するからな。正直めんどそうなものもいたけど全員で行こうという流れには逆らえないだろう。

睦美ちゃんも来るだろうけどしばらくちよっかい出すのはやめとこう。まさか他の学年でも噂になってるとは。

…お、係員が入ってきた。また説明が始まるな。

どうせ昨日と同じことを言うだけなんだろうに大変だなあ…

昨日聞かされた今日の予定やルールについてだが、今日は1対1の試合が15組分ある。バトルロイヤルときは会場丸ごと使ったが今日は結界の範囲を調整することで戦闘範囲を狭くするそうだ。1試合につき最大30分で、地球標準時で9時30分開始だから17時までだな。

試合の組み合わせは既に決めてある。うちの学校の人はみんな昼からだ。

松田が13時開始で、華柳さんが13時30分、俺が14時30分で池田先輩が15時30分だ。

予想通り昨日と同じ解説があった後、俺たちは客席にいった。

今日は休日で決勝戦という扱いなので今までよりかなりの人がいる。ところどころ大量の空席があるがそこはうちの学校のように団体での予約席なのだと思う。

「うわーすげえ人がいるな。なんか緊張するかも。」

あたりを見渡しながら松田が言う。

「確かに。予想以上の人だ。ドキドキしてきた。」

「こんなたくさんさんの人の前で俺は負けるのか…ハア…」

華柳先輩の言葉に対して俺たちは互いの顔を見合わせ無視するこ  
とを確認し合った。

池田先輩がこの日まで何とかして立ち直らせようとしたけど結局

落ち込んだままだったそうだな。あまり強く言つと逆ギレするそうだし…そんなわけでムシムシっと。

試合までは時間があるし暇だからどっかに俺好みの女の子がいかな〜と観察してると知ってる顔が何人かいた。

「あ、あそこ見てください！校長とか先生が何人かいませんか？」

「ホントだ。向こうもこっちに気付いたみたいだな。行ってみるか。」

「それなら荷物も持って行った方がよくないですか？たぶんあつちに座れとか言われると思いますし。」

「そうだな。じゃあ移動しよう。」

鞆を持って先生たちのところへ向かっているけど、これが意外と遠い。大きな会場だから仕方ないんだけど。人も多いからすばやく移動できないしな。

5分くらいかけてようやく目的地に到着つと。

先生方に挨拶をして、体調とかを聞かれた後は池田先輩が代表して先生方と話している。睦美ちゃんとかはまだいないみたいだな。池田先輩が他の人について聞いてみると学生の引率で昼から来るそうだ。

俺や松田と関わりのある先生はみんな引率側みたいなので俺たちは2人で少し離れて席に着いた。

「しっかし露骨に池田先輩鼻屑などこあるよな。」

松田の視線の先には池田さんを囲んで話す先生方がいる。

「まあ、仕方ないさ。我が校は元々進学校とは名ばかりのところだったから。その分期待も大きいんだろ。なんたって池田さんは久しぶりの大器だし。」

「そうだけどね…」

言いつつもちょっと不満そうな松田。

「それに俺たちにかけてくれた言葉も適当なものではなかったし良いじゃないか。あとは自分で結果を出して見せつけるしかないだろ。それに華柳先輩よりはマシだろ。」

「確かに。先生たちもなんて声をかけたらいいかわからない感じだったもんな。」

「そうだよ。そんなめんどいこと考えるよりことより可愛い女の子探そうぜ。視力強化してみるよ。あそこの可愛い女の子のパンツ見えてんぞ。あれ、たぶん紐だな。」

「マジで！？どいどい？」

さっきまでのことは簡単に忘れてパンツウオッチングに励む松田。第一試合はあと10分ほどで始まるからそれまで俺も一緒にスカートの観察することにした。

やがて時間となり試合が始まる。

第1試合、第2試合と順調に進んでいくが特筆すべきことはないな。今までと違って1対1だから下級が中級に勝つことなどなく、個人の実力がそのまま勝敗へとつながっている。

中には派手に血が噴出する試合もあるが観客で具合の悪くなる人とかはいない。これは試合会場の結界によるものである。

試合で用いられている結界はホントに優秀で、以前言ったように試合で傷ついたり死んだ人でさえも再生することができる。これが選手のための効果で、観客に対しては見る人に合わせてモザイクのようなものがかかるらしい。らしいというのは俺自身は視覚を阻害

されたことがないからわからないんだ。

観客の中には血を見るのがダメな人や中には幼い子供を連れてくる人もいる。そんな人が首を切断される場面を見たら大変なことになるだろうが、結界がその個人個人に合わせてモザイクをかけたか、あるいは完全に中の試合を見えなくしてしまうらしい。

ホント凄いや結界なんだ。なんとかして結界の解析をやってみたいな。

結界に対する考察、試合観戦、スカートの確認、やるべきことは多く、充実した時間はあっという間に過ぎていく。基本的には松田と話していたが、時折先生方や先輩とも会話をしつつ時間は経つ。

11時を過ぎたあたりから松田は緊張し始めたらしくソワソワし出した。

そして現在は12時。

昼休みは勝手にとれということ、試合は関係なく行われている。

松田がついにスカート鑑賞にも熱が入らないくらい緊張し始めたころに学校の連中が来た。

多い！めっちゃ多い！予想では半分くらい来ればいいかな程度だったがほとんど欠席なしの状態らしい。松田なんてもう泣きそうだ。クラスメイトの連中とあいさつをした後、西川と相談の上で寺島に松田を連れて行くよう頼んだ。寺島は最初、またからかうつもりかと勘繰ってきたけど松田の緊張っぷりを見て状況を悟ってくれたらしく、連れてってくれた。

「大祐大祐、あいつ大丈夫かな。死にそうなくらい緊張してたけど。」と、心配そうな顔をして西川が言う。

「寺島に頼んだから大丈夫だろう。恋愛感情抜きにしてもあいつは面倒見がいいしきつと落ち着かせてくれるさ。」

本音としてはあいつらを二人きりにするのが面白いつてだけなんだがな。

西川もそこはわかってるらしくニヤリと笑った後は特に何も言わなかった。

「笹川」と誰かが俺を呼んでいる。誰だろう？と思い振り向くと同じクラスのイケメングループの連中がいる。こいつらとは悪い仲間じゃない。男同士ならどのグループとも割と話せるんだ俺は。

「どつしたマイク？」



「松田と華柳さんはやばい顔してたけどお前は大丈夫か？」

こいつは室田マイク。日系と白人のハーフだ。イケメンだ。

どうやら心配してくれたらしい。後ろのイケメンたちも心配そうな顔をしている。

顔も良いし、性格も良いしでなんなんだこいつらは？だからモテルのか？なんて考えつつ心配してくれた友達に返事をする。

「俺は大丈夫。あの2人が心配で自分が落ち込むどころじゃないしな。」

「なら良いんだけどよ。松田はともかくあの華柳さんがあーなるくらいだからプレッシャーとかすごいのかと思って。」

「池田さんもそうだけどあの2人は三坂さん目当てだからな、本人の前で戦うとなるとビビるんじゃないか？俺は三坂さんを狙ってないし。」

「いや、でもお前は睦美ちゃん目当てだろ？」とマイクは言う。

やっぱり本気で狙ってると思われているのか。ちょっと自重しようと心に決めた。そしてこの話題をそらそうと

「そついえば睦美ちゃんは見たけど三坂さんは来てるのか？まだ見てないけど。あの人がいないなら2人もプレッシャーが減るだろうし。」

「三坂さんならあそこにいるぞ。」

マイクがさした方を見るとそこには三坂さんを中心に5人ほどの女子がいた。

「やっぱり三坂さんは断トツでカワイイな。は〜ボクチンも運が良ければ今頃この大会の選手だったのに。」

「周りの女も可愛いんだけどな。三坂さんはその中でも特別だな。」

「俺的には巨乳なのがポイントだ。」

順番に西川、マイク、俺のセリフだ。俺の言葉を聞き何か引っかかったのかマイクが聞いてきた。

「あれ、笹川は睦美ちゃん派で三坂さん派じゃないだろ？」

「んー????????? なにその睦美ちゃん派って？」

「室田、こいつは睦美ちゃん派のことを知らないよ。てか睦美ちゃん派の人はこいつの前で睦美ちゃんの話あんまりしないから。」

「あ、そうか」とマイクは頷いた。

俺も何となく話の展開は読めるけど…

「もしかして睦美ちゃんて俺が思っている以上にそんな人気あるの？」

この質問には二人がしつかりと答えてくれた。

？ 男子学生の5割が三坂さん派。3割が睦美ちゃん。残りはその他。

？ 俺がちよつかいかけまっくてることを知らない人はいない。

？ 他の男子が睦美ちゃんにちよつかいかけたら本人に凄い怒られた。

？ なので俺は睦美ちゃん派から相当妬まれている。

？ 教師の中でも睦美ちゃん狙いはそこそこいて俺は嫌われている。

どんなラブコメだよ！と思い、俺は本気じゃないんだよと説明しようとしたとき、「すいませーん。ちよつといいですか？」と声がした。

今度は誰だよ！たく！そう思い振り返ると三坂さんたちがいた。話しかけてきたのは三坂さんの友達だけ。

マジでなんなのこの流れ？メンドイなあ…

話しかけてきた理由の要点をまとめると以下の感じだ。

？ 睦美ちゃん派の俺の大会出場動機は三坂さんと関係ないだろうからノーマークだったのに今の会話で三坂さんの名前が出てたから気になった。

？ 三坂さん的には誰とも付き合う気がない。先輩がしつこいから絶対無理だろう条件を出したのに勝ち残ってる人が4人もいる。ヤバい。

？ なので俺に三坂さん狙いなのか優しい友達が確認した。

という流れらしい。表情を観察していると、三坂さんは本気で恋愛そのものに興味がないというよりは、近寄ってくる男が煩わしいようだ。昔から男が寄ってくるからうれいと思うより鬱陶しいんだろうな。

そんな三坂さんを助けるため周りの女の子はなんとかしようとしているように見えて実は2人の先輩目当てで何とか引き離そうって考えのやつがいるな。

三坂さんは頭も良い。どうやらそれらの裏もわかってるみたいだ。

女の付き合いは大変だなあっと思いつながら適当に話していると西川とマイクが場を盛り上げて会場内のレストランで昼ご飯を一緒にすることになったらしい。

明らかに三坂さん目当てだ。こつこつやつらがいるから恋愛をしないんだろつきつと。

ちなみに俺は三坂さんのことはどうでもいいと説明済みだ。

「俺は試合の準備があるからいいや。みんなで楽しんできて。」そう言つと、男の数が減り嬉しいんだらう西川とマイクは「そっか。頑張れよ！」と機嫌よさそうに言う。女子もイケメンで気の利く『マイク』と一緒に楽しいんだらうテンション高めだ。

みんなでそろそろと移動した。

ふう、やっと静かになつたぞ。

だいたいもう12時過ぎてるんだ。今からレストランなんて行つたら松田の試合が始まつてしまふ。

俺は鞆からコンビニで買ったパンを取り出し食べることにした。

俺の周りだが、みんな食事や買い物で出かけてるのか人が少ない弁当を持ってきてる人もいるが普段俺が話す友達はここにはいないようだ。睦美ちゃんはいるけど女子と一緒に食べてるみたいだな。近づいたら仲間に入れてくれるだらうけど噂の話を聞いた今は自重中。

そんなわけで一人でモグモグ昼食を食つてると“三坂さん”が隣に座ってきた。

三坂さんが西川たちの視線を嫌がつたのに気づいてたんで何となくこうなる気がした俺は黙って三坂さんを見た、パンをモグモグしながら。

俺「(モグモグモグ)」

三坂「……………」

俺「(モグモグ、ゴクン。ズズー) 牛乳をストローで吸ってる」

三坂「じーーーーー」

俺「(ズズー、ゴクン。) ふう〜」

三坂「じーーーーー」

見つめあう二人に対し周りの好奇と嫉妬の視線が痛くなってきたので聞いてみた。

「嫌がらせ?」

「そんなつもりないよ。」

「でも周りの視線がやばいよ。嫌がらせ?」

「そんなことないよ〜」

ニコツと可愛い顔で言うこの人を見て思う。

結構“いい性格”してるなこいつ。

「ただね、西川君と室田君だっけ？露骨な視線が嫌で。その点笹川君はそういうのを感じなかったんで。それに今レストランに行ったら同校の応援もできなくなるしね。」

「え？じゃあ何。俺もいやらしい視線で見たら立ち去ってくれる？」

言っつて、制服の上からでもはっきりわかる胸部のふくらみを見せる。

「今日のブラは赤だね。勝負下着でしょ？」

「残念違います。それよりそんな露骨に嫌がられると傷つくんですけど。」

「周りの視線を見てよ。泣きそうなんだけど。」

客席に戻ってきた人もこっちを見てるのがわかる。俺の周りには人がいないからなおさら目立つんだろ？うなあ…先生たちもこっち見てるし、睦美ちゃんたちも見てるし。池田先輩や松田たちがいないのが幸いだ。

「わかった？俺はひどい嫌がらせにあってるの。どっか行って。」

「拒否します。どこに座ろうと自由なはずですよ。それに仲良い人はみんなご飯に行ってるもの。」

「一人でいればいいでしょ。俺もさっきまでそうしてた。」

「一人でいたら下心丸出しの男が寄ってくる。」

「俺も下心丸出しだから。」

「わたしは昔から男に変な目で見られてたから、絶対とは言わないけどある程度下心あるかないかくらいわかります。」

「ホントだってエッチさせてくれるなら喜んでするよ。付き合いたいとは思わないけど。」

「うわ!？」

汚いものを見るような目でこっちを見てくる。だったらさっさと離れるよな。

「さっさと離れるよな。」

口に出して言うてみました。

「今のセクハラ発言はなかったことにしておける。優しいでしょわ  
たし?お礼に少し話し相手になってもらうね。」

「なかったことにしないでいいから違うところ行ってください。」



「そんなことよりさ、今日はいい天気だね。」

そう言っつて空を見上げる。天井部分は現在開放されてるため雲一つない空がよく見える。

「なんで？なんで急に天気なの？この会話の流れで。もうめんどくせー。三坂めんどくせー。」

こんなやつは、さん付けやめて呼び捨てにしてやる。

「まあまあ良いじゃない。もうすぐ松田君だっけ？の試合始まったら誰も気にしなくなるよ。ね？」

可愛い顔で微笑みながら言っつ三坂に毒気を抜かれた俺はため息をついてもう諦めた。

そんなわけで無視して携帯端末を開いた。横でごちゃごちゃ言ってるのを適当に受け答えし、他の会場の戦績をしてみる。

どうやら他のエリアで戦ってるAもDもエロ太も無事世界大会本選へと出場できるらしい。

情報ページの横にメール画面を開き3人にお祝いメッセージを書いていると

「あ、これうちのクラスの佐々門君だよ。勝ち上がったんだ。」

俺の端末を覗き込みながら微妙にテンションが下がった顔をして言う三坂。顔を近づけないでほしい。視線がさらに痛いから。

「三坂はあいつと同じクラスだったか。でもなんでテンション下がってんの？あと顔が近いんですけど。」

メールを打ちながら聞いてみた。

「だってあの人もなんか厭らしい感じで見てくるし。クラスの男子たちと話してて『俺は貧乳が好きだ』って言ったのに運動のときとか私の胸見てくるし。私目当てで出場してるんだったら嫌だもん。あ、今の発言は他の人に言わないでよ。自分でも上から目線っぽくてダメかなって思うし。」

「あゝあいつは口ではなんだかんだ言うけど実際は可愛い子なら何でもイケる男だからな。あと顔が近いんですけど。」

メール送信完了っと。

「ホントどうして男って胸ばかり見るの？顔とかで判断するの？おかしいと思わない？」

「俺も巨乳が好きだぞ。E〜Gカップが好みだ。巨乳なら性格は気にしない。顔が良ければ大丈夫。CやDカップの女の場合はその人次第だな。性格とかも判断材料になる。あと顔が近いんですけど。」

「ふーん」と言いながらジト目で見てくる。てか顔近いんですけど。この距離感で話されちゃ女に免疫ない奴はコロツと言っちゃうかもな。

「もてない男の簡単に惚れちゃう現象ってわかる？」

「何それ？」

三坂はかわいらしく首をかしげて聞き返す。外見がいいのは得だよな。何をしてもよく見える。これがブスだったらとっくに殺意を覚えてるんだろっな。

「もてない男、特に童貞はね、ちよつと優しくされたりすると簡単に惚れちゃうの。普段女に相手にされない分、ちよつと優しくされたり必要以上に近い距離で話しちゃうと惚れちゃうの。ひどい奴だと、『この女は僕が好きなのかも』って勘違いしちゃうの。女の子にとっては社交辞令やただのクセであつても勘違いしちゃうの。わかった？わかったら顔を離してください。」

「大丈夫だよ。私も処女だから。」

「違う！そこじゃない！俺の話聞いてた？どこに食いついてんの！

「さつきからだけど初めて会話する人と話す内容じゃねえよこれ」

おかしくね？前半しか聞いてなくね？あと、俺は童貞じゃないし。異世界でやりまくったもの！……………まあ、この世界では童貞だけど……………

なんか話に聞いてた『三坂さん』とここにいる『三坂』は違う。噂は当てにならない。

「冗談は置いて、笹川君は私が近づいても自然体でしょ？だから大丈夫だよ。」

「それは俺が女慣れしてるからです。」

なんせ魔王だった時は何人も美女を常に侍らせてたからな。たとえどんな美女だろうと今さら緊張したり舞い上がりすることなんて無いさ。

しかし試合前なのに精神的に疲れ切ってしまった。もうこれ以上は抵抗しないで気の済むようにさせてやろう。松田の試合もあと15分で始まるし。

そんなわけでここからは無駄な抵抗はやめて三坂に話を合わせておいた。その過程で三坂の名前が京子であることが判明し、以後京

子と呼んでも良いそうさ。

なお、お互いに恋愛感情はないことを明記しておく（俺の性欲は別です。）。

## 12話 東心峰勢、行きます！（松田と華柳編）

いよいよ始まります。我らが東心峰学園の4人の試合であります。

松田君は結局まっすぐに選手控室に行ったらしくこっちは戻ってこなかった。既に対戦相手とともにフィールドにいるがここから見る限り落ち着いてるようだ。どうやら寺島が何とかしてくれたいらしい。

てか寺島の空気がおかしい。顔は赤いし、夢見心地なように見えポワ〜とした感じだ。

もしかして……………進展あったな！？

戻ってきた寺島に話しかけに行こうとしたら隣に座る三坂、改め京子が服をがつつりつかんで離さなかった。本人的には男避けでも周りにはそう映らなかったらしく、居心地が悪いです。

周りもそうだけど一番きついのは校長の近くに座る池田先輩からの視線だ。もう眼圧で殺人が出来そうなレベルで見てる。それに気づいてるのであろう京子は俺の体をベタベタ触ってくる。あとで先輩に弁解しに行かないといけないかも。

幸いなのは西川やマイクがレストランから戻っておらずこの場にいらないことだ。お楽しみの昼食を京子にすっぱかされたうえ俺んと

ここにいるとなったらどんな目で見られるかわかったもんじゃなし。

「それでは間もなく時間となります。両選手は開始位置についてください。」

アナウンスが響き渡り両者が20メートルほど離れた位置で向き合う。

続いて結界が作動する。言ってなかったかもしれないが無色つていうか透明なガラスのようなものだと思えばよい。見た目にはそれほど問題はない。

ついでだけど1対1の場合は選手の首にマイクがつけられる。会話が観客にもわかるようにするための配慮だ。もちろん聞かれたくないことは遮断できる。それらは首のマイクが選手の思考から判断し勝手に調整してくれる。

徐々に静まっていく会場。

開始時刻まであと1分を切った。もうすぐだ。

「準備は良いでしょうか、……………試合、開始！」

開始の合図と同時に広がる歓声。

俺たちの席ではみんなが松田に声援を送っている。

ちょうど試合フィールドを挟んで対角線上には対戦相手の 奥平斗夢 の学校であろう応援が声援を送っていた。

「行けー松田 ぶっ殺せー」「ガンバレー！」「松田君落ち着いて戦うんだぞー」「そこだ魔法をぶち込め！」「いけー」

クラスに関係なくみんなが声援を送っている。池田先輩や他の人も京子のこと是一時置いて、松田に対し声を張り上げている。ただ一部ではまだこつちを睨んでる人がいるが京子も試合に集中しているし、俺も気にせず松田に声援を送り続けた。



松田の対戦相手はレベル1ということもあり松田の余裕勝ちと思われたが意外と接戦となっている。

松田は後衛タイプだが相手は前衛で剣を振るタイプだ。身体能力では相手の方が高い。おまけに松田はここまでの試合で一度もまともに戦っていない。

それに対して相手は、先日のバトルロイヤルは逃げっぱなしだったがおそらくは地方大会ではしっかり戦っていたのだろう、松田よりも戦い慣れしていた。

距離を取ろうとする松田に対してしっかりと攻めかかり離れないようにしていた。松田はこの距離では強い魔法を使えば自分にも影響があるので使えない。

しかし松田も負けてるわけではなく爆発するような魔法は避け、下級魔法『アイスニードル』で攻撃したり初級魔法『つむじ風』で土埃を起こすことで牽制したり、またはかわしきれない攻撃は下級魔法簡易障壁『壁』で防いでいた。

敵の奥平は松田の攻撃を避けることで体勢が崩れた状態での斬撃だから『壁』を壊すことができない。

こうして戦いは拮抗していた。

「ねえ、どうなると思う？」と京子が聞いてきた。

「松田の魔力が相手の体力か、先になくなった方の負けだな。」

「そうだよな。相手の人は身体強化の魔法しか使えないみたいだし。」

奥平はさつきから切りかかるだけで攻撃魔法を一切使っていない。レベルも併せて考えると使わないのではなく使えないのだろう。

二人とも基礎能力が高くないのでこの攻防も長くは続かないだろう。

その予想通り3分後には二人ともバテバテになっていた。

「ガッパッパッパッガッパッパッ」  
「ガンバレー」  
「今がチャンスだ」  
「頑張れ！」  
「行け」

みんなは必死に応援しているが一人はゼーゼーと荒い息を吐き動けないでいる。

それを見つめる寺島はもう泣きそうだ。それでも「頑張つて」と囁いてるのがわかる。

本当にベタ惚れなんだなあ。いつからなんだろ？こんな場違いなことを考える間も両者に動きはない。

だが体力と魔力では一般的に体力の方が回復は早い。このままでは負けてしまうだろう。みんなもそれがわかつてるのか徐々に負けたかかっていう感じが出てきた。

お、今頃になって西川たちが下の階段から観客席へ上がってきた。

ちょうど良いタイミングと思い京子に断ってから西川たちのもつに行く。

「西川！」

「うお！大祐か！？いきなりびっくりさせんなよ」

「それより試合見る。松田がやばい。」

「やっぱりそうなのか！？」

「そこだ。一緒に応援するぞ。」

そう告げ声援の内容を西川に伝える。にやりと笑って親指を立てる西川。

「よし、前へ行くぞ！」

「おう！」

「まって俺もやる！」

マイクもついてきて3人で一番前へと行く。

到着つと！ここはちょうど校長たちが座っている位置だ。

「おい、お前ら席に……………」

いきなりあらわれた俺たちを池田先輩が注意しようとするがそれ

より先に俺たちは叫ぶ

「セーのツっっ！まっっっだあああああ——」

肩を掴もうと近寄ってきた池田先輩が耳を抑えた。かなりの大音量だからな。

当然松田もこっちに気付いたようだ。

対戦相手の奥平もこっちを見る。

観客席も何事かと静かになった。

「寺島が泣いてるぞ……出来たてほやほやの彼女を泣かせるんじゃないねえ……」

「ちょっとあんたらー！」

後ろで寺島が真っ赤になって怒鳴ってきた。無視無視。

「できたてほやほやの彼女を泣かすんじゃないねえ！ガンバレコノヤロー……！」

「ちょ……っど。やめて……」叫びながら寺島がこっち

に来ようとするが他の女の子が抑えてくれている。グッジョブ！

他の人たちも状況がわかったのか全然知らない人たちも

「彼女泣かせんなー！」「根性見せろー！」「良いとこ見せてやれー」  
「裏切り者がー死ねリア充」  
「寺島のために頑張れやー」

口々に叫び始めた。一部おかしい声援もあつたが会場は学校関係者以外の人たちも松田を応援し始めた！

「よし寺島！こっち来い。お前もここで応援しろ。」

「む、無理だよこんな状況で。恥ずかしすぎる。てか何で付き合っていること知ってんのさ。ついさっきのことだよ！？」

「西川、マイク行くぞ」

寺島の言葉は無視しそれだけを告げた俺は彼女の元へ向かった。二人も俺が何を考えたかわかったらしく黙ってついてきた。よく見ると池田先輩もついてきた。

そしてそのまま

「キヤーちよつと下ろして！」真っ赤になった寺島が俺たちに運ばれている。

池田先輩も一緒になって運んでくれた。ノリノリだ！

周りの人も俺たちが運んでる人が寺島だと分かったのかこっちにも注目している。

「到着つと。ほらお前が応援してやれ！」

「ううゝ恥ずかしすぎる…先輩助けてください」

「松田のためだよ！応援してあげよう。」

池田先輩にも言われた寺島は「ううゝ」とうなだれた後、「あとで覚えておきなさいよ！」と睨んできた。



寺島もそれなりにノリのいい女だからな。

覚悟を決めたのか大きく息を吸い込み

「負けんな松田——————！！負けたら別れるぞ——————！！」

この後のことは推して知るべし。会場を味方にし、数十分前にできたばかりの彼女の声援を受け奮起した松田は奥平に打ち勝った。

みんなはこれを愛の力だ〜とからかっていたが実際は精神の高揚で魔力が高まったんだらう。魔力は質、量、回復どれも精神状態が大きく左右するからだ。

先輩を除いた前で叫んだ三人は松田につかまる前に上に避難した。校長を始め先生方に「とりなしお願いします」と言ったら笑顔で引き受けてくれたからしばらくは先生たちと話し込むだろう。

いろんな人に話しかけられながら、上方の席に向かった。

どうやらみんなの頭からは俺と京子とのことは抜け落ちたようだ！ほっとしたぜ。

京子と言えはあいつは〜と思い見てみるとレストランに行っていた友達と話してる。放っておいて大丈夫そうだな。

169

そしてクラスメイトが固まってる場所へ到着。

おまえらよくやった！と祝福の言葉を投げかけられる。

いや、俺たちが戦ったわけではないんだけどね。

そんな感じで興奮した友達と話している。あ、マイクはイケメン、ギヤル混合グループの元へ行ったけどね、そこも盛り上がっているようだ。

次の試合まであと10分ほどだ。

松田は赤い顔をして客席に上がって俺たちを探したが池田先輩につかまりそのまま先生方の元へ連行された。先ほどからつかまってネタにされている寺島と一緒に試合とカップル成立の祝福をされている。

それを見ながら西川が

「あゝついに松田と寺島が付き合うことになったか。」

「なんだよ。お前実は寺島狙いだっただのか？」

「違うよ。ボクチンは三坂さん狙いだよ。そうじゃなく松田に彼女つてのが」

「あー三坂さんと言えば大祐の野郎が」

近くに座ってる虎川原が急に話に割り込んできた。マズイ！

「ちょっと待て虎川原！それは」

あわてて虎川原の口を抑えようとする俺を押しつけて西川が尋ねた。

めんどくさいことになるのがわかりきってるので逃げようとしたときさらなる面倒がやってきた！

後ろに三坂 京子がいた。そして当たり前前の様に隣に座りこむ。

「お疲れさま」。凄いことするね。面白かったよ！」

最高にかわいらしい顔で言う三坂さん。完全に俺をからかいに来たのがわかる。周りの視線がすごいもの。

「ちょっと松田と話してくる」と、立ち上がって逃げようとする俺の手を？まえて「まだ先生と話してるから邪魔しちゃだめだよ。」と強引に座らせる。

そしてそのまま手を握った状態で話しかけてくる。

西川たちの視線がヤバイ。これ以上ひどいことになる前に手を打たないと！

「あのね三坂さん」

「京子です。」

「それよりね、三坂さん。どうして君は  
京子さ」「京子です。」「……………ううう京子。」「京子です。」「京

「はい。なんですか？」

「京子とは本日が初めて会話した日ですよね。」

「そうだね。」

「少し変だと思わないか？」

「何が？」

「こっやって一緒にいるのが。」

「友情に時間はない関係ないと思うの。」

「本音は？」

「大祐といると私への視線が減る。」

そうですね。その分俺が睨まれてますもんね。

ただ救いなのは京子とは反対にいる西川や虎川原は会話を聞いて

いるので俺が被害者なのをわかってくれたっばい。それでも多少嫉妬の視線はむけられてるけど。

「西川、この人にちよつと注意してやって。」

「え？俺が？」急に話を振られた西川がテンパっている。その隙を逃さず京子は先手を打った。

「そついえばさつき西川君も前で応援してたよね。ああやって友達を応援できるのって格好いいよね！」

これまた憎たらしいくらいに可愛い笑顔で話しかける。

「え、あ、や、あーーそんなこともないというか」

西川はやられた。この様子だと虎川原に助けを求めても無駄だろう。

京子の友達に助けてもらおうと女子たちの方へ眼を向けるも、俺が見た瞬間一斉に視線をそらされた。

「無駄だよー私は男避けが欲しい。あのコたちは池田先輩とかのフアンだから私が大祐といてくれた方がありがたいの。目的が一致してるから助けてくれないよー」

.....ひどい.....

落ち込む俺に虎川原が声をかけてくれた。

「お前も大変だな。さっきはなんでお前にと思ったけど事情は分かった、お前は睦美ちゃん派だし三坂さんのにも安心して男避けに使えるもんな。俺はお前の味方だ。」

なんていい奴なんだ。と感動する俺の前で京子に積極的に話しかける。便乗して西川もだが。

…うん。良い奴だよ。決して俺をダシにしたわけじゃないと信じてる。

それから華柳先輩の試合が始まるまで西川と虎川原、他に数名いつも一緒にいるやつが京子と話していた。

俺は余計なことにならないように黙っていたよ。この時もずっと手は繋がれたまま（周りからは見えないようにしてたけど）だった。

もしかして睦美ちゃんも今の俺のような気分だったのかな。

もう少し人の気持ちを思いやれるようになってうと決心したところで華柳先輩がフィールドに登場した。

対戦相手は中級BMであるドゥーク・キサント。正直結果は見えてる。

応援はファンの女子と仲のいい友達が頑張ってるが他の連中は結果が見えているのだろう。

松田のときほどの声援はない。

俺も大人しくしていた。

結果。



ドウークは空気の読める男だった。

華柳先輩を応援している人がたくさんいるのがわかったのだろう。瞬殺はせずにある程度手を抜いたうえで接近戦を行った。

そしてそこそこの接戦を演じた上で華柳先輩を倒した。ドウークの実力を知らない今日初めて来た人は良い試合だと感じただろう！

先輩の名誉は守られた。

華柳先輩もそれを屈辱と取るタイプではないらしくむしろほっとしていた。

観客席に戻った先輩は先生たちに善戦をたたえられファンの女の子たちと仲良く話し始めた。

あ、負けたからか京子に対しては特にアプローチはありませんでした。

さて、次は1試合挟んで俺の番です。

今大会最初の難関。

戦う相手は公式レベル3

荒川 美咲。

集団戦で指揮の上手な俺の1つ上の学年。

イーザン・ポッター学園（イーザン・ポッターは創立者の名前）  
の生徒会長。

俺と同じく実力は“中級”の相手だ！

13話 東心峰勢、行きます！（元魔王編）

俺はフィールドの真ん中で対戦相手の荒川 美咲と向かい合っている。

彼女の容姿だが顔は綺麗系で肩までの髪を後ろで束ねポニーテールにしている。肌は白くツヤツヤだ。胸は鎧ではつきりとは分らないがDくらいで程よい大きさ、身長は165センチほど、で170に届かないくらい俺と大して変わらない。しっかりと訓練しているのだろうホットパンツのようなものと金属製の膝当ての間から見える太ももはいい感じで引き締まっている。

銀色の鎧の金属部分は必要最低限と言ったところからおそらくは機動力優先の剣士型のBMだろうと思われる。鎧をつける金も必要もない俺のラフな格好とは違って完全戦闘モードだ。

もうすぐこの美咲ちゃんとの対戦だ。

俺の試合の番になったとき、仲の良い男友達と女子からは面白がった声援を、多くの男子から罵声を浴びてきた。

それもこれもすべては京子のせいだ。あいつが途中まで面白がってついでくるから嫉妬にかられた男からいろいろ言われたんだ。お

まけに睦美ちゃんとも少し話しちゃったから尚更視線が痛かったし。

池田先輩は応援してくれたが必死に自制してるのがわかった。

正直、罵声を浴びせられるよりきつかったんですけど。

そんなわけで俺の精神は切なくなっている。

けどそんなことを言ってる状況でもないか…。

対戦相手の美咲ちゃんは公式ではレベル3となっていたが間違いなく中級の実力だ。

前回の試合での指揮能力、戦術眼、そして今、目の前で発する気配がそれを物語っている。

幸い俺の実力は気づかれてないようだが戦えばすぐにはれるだろう。まだ粗削りだけどこの女の才能は本物だ。将来間違いなく上級に届く器だ。

だからこそ地方大会でのドワークがそうだったように一太刀合わせればバれる筈。みんなに中級の実力があることを気付かれるだろうが仕方ないな。

俺は覚悟を決め目の前の敵に集中する。

「それでは準備はよろしいでしょうか。……………試合、開始！」

同時に美咲が凄いスピードで突っ込んできた。

明らかに下級を超えるスピードだ！

これは真実意外だった。俺を格下とみなし力を抑えて下級として挑んでくると思っていたのに。

だからこそ俺は油断してる間にぶっ倒す気だったが、むしろ俺がヤバイ！

美咲は射程範囲内に入ると同時に首を狙って剣を横に振るった。

俺が慌ててそれをはじき返すと、美咲の眼が一瞬大きく開く。

しかしすぐさま大きくバックステップすると同時に切っ先をこちらへ向けて魔法を放つ。

中級魔法『フレイムキャノン』 目標にあたると同時に爆発する魔法だ。

「チイツ！」

いきなりの展開に舌打ちが漏れるが体は動かし続けている。炎弾が届く前に地面にロングソードを突き刺し3つの魔法を発動させる。

『ロックストライク』によって地面から岩が突き出る。そこに炎弾があたり爆発する。

爆発で吹き飛んだ土石は『つむじ風』で受け流し『遮断障壁・耐火』によって熱波を防御する。

土煙が舞う中、敵の気配は正面からする。

魔力循環による強化、同時に魔法式による身体強化を最大にし一気に後方に飛び煙から脱出！

前方は土煙が未だ舞っている。

向こうに動く気配がないからこちらも剣を構えたまま様子をつかがう。

しばらくしてお互いの姿が視認できるようになる。美咲はしつかりと構えた状態でいたが無傷の俺を見てさらに意識を集中させたようだ。

観客の声は聞こえない。ともに下級と聞いてたはずなのにいきなりの中級レベルの爆発が起き思考がついて行かないのだろう。

「美咲ちゃんだったっけ？いきなり仕掛けてくるのは意外だった。君が中級の実力だと気付いてなかったら油断してやられてたよ。どうしてマジで来たんだ？」

首につけられたマイクで拡大された声が会場に響き渡る。

「特別な理由なんてないわ。ただなんとなく全力で仕掛けようと思っただけ。でもそれで正解だった。あれを無傷で防ぐ以上あなたも下級ではないわね。」

「なるほど。勘が鋭いのは良いことだね。ホントは君が力を隠して

る隙に一気に片を付けてしまおうと思っていたのに。……………  
……んじゃあ、まあお互いの実力を確認したところでそろそろ始め  
ますか。美咲ちゃんは切り合いと撃ち合いならどっちが好き？」

「どちらでも」

「ならせつかく距離あるんだし撃ち合いからはじめよう」

俺は宣言すると剣の切っ先を敵に向ける。

剣より少し前方に小型の魔法陣が30ほど現れる。

その中心からは太い氷柱が現れていた。

下級魔法『アイスニードル』

ただし先の試合で松田が使った際には一度につき1本、連続で3  
連射までだったが、これは1度に40本が魔力の続く限り撃ち出せ  
る。

美咲を見ると彼女の前にも同じだけ魔法陣が存在しその中心から  
は下級魔法『フレイムアロー』が確認できる。

正面から迎え撃つつもりなのだろう。

緊張感が高まる。



お互いが魔法陣に魔力を流し込み氷柱が炎の矢が太く大きくなつていく。

そしてそれが限界まで来たとき

「行けー！」「行きなさい！」

両者同時に打ち出す。

二人のちょうど中間の位置で炎と氷はぶつかり合う。

300...600...900...3600...4900...7200発、と  
下級とはいえ凄まじい数の魔法が次々と放たれる。

氷は炎によって蒸発させられ、炎は氷にかき消される。

両軍がぶつかり合う中央では双方が拮抗し、溶かされた氷による水蒸気で真っ白になる。

それでも撃ちだされる魔法は止まらない。

互いに譲らず、すでに放った魔法は数千発にも及ぶ。

いつまでも続く状況を動かすために先に動いたのは俺だ。

新たに2つの魔法陣を作り出すと威力は中級にしてはそれほどもないがスピード、追尾性能に優れる『風玉』を発動させる。

そしてアイスニードルを使いつつ、中央を迂回させ美咲の左右から挟撃するように攻撃を放った。

これに対し美咲は完全に防御が遅れる。

正面は水蒸気で視界が妨げられているなか、いきなり左右から魔法が飛んでくる。

まさかこの撃ち合いの中でさらに別の魔法を繰り出せるとは思っていなかったのだろう。

左右から迫りくる魔法が風玉だとわかると一瞬で状況を判断。

ギリギリまで炎で氷を抑え風玉が近づいた瞬間、炎を止め片側の風玉を魔力を込めた斬撃でかき消す。

迫りくる数百の氷柱をもう片方の風玉にワザとぶつかり吹っ飛ばされることで回避した。そして即座に体勢を立て直し、足に魔力を

集めスピードを上げている。

彼女のスピードを考えると氷柱では避けられると判断した俺は30の魔法陣を15ずつの2つに分け融合。イガ状に棘が突き出た1メートルほどの氷弾を2つ作る。

それを風玉に包み込み、魔法陣が壊れるのと同時にこれを放つ。

そしてそのまま相手の動きを見る。

が、美咲はこれをフレイムキャノンを2発撃つことで吹き飛ばした。かなりの魔力を使うはずだが魔力消費を考えている場合じゃなかったのだろう。

遠距離戦では不利と考えそのスピードを生かし突っ込んでくる。

最初よりも数倍速い。魔法の選択を捨て直接迎え撃つ。

そして始まる剣戟。

払い、降りおろし、突き、とお互いの剣が交差し合う。

金属同士がぶつかり合い甲高い音を響かせる。

両者は一瞬たりとも立ち止まらず剣を交えあう。

しばらくして拮抗した状況を変えるために今後は美咲から動いた。

美咲が筋力を増加させパワーを高めたのがわかる。

「ヤバイ。」

そうつぶやき一旦後退しようとする俺だが美咲がそれを許さない。後退すると同時に魔法を使う作戦は美咲も愛用するので読まれてる。

徐々に押され始める俺。

スピードもパワーもそれほどの差はないが武器の性能差が大きかった。

俺が使用するのは『ロングソード』。改造により魔法式の内臓量は上昇しているが剣としての能力は下級っていうか初級のものだ。

一方で美咲が使うのは片手用の長剣、『ゲイルペイン』中級用の剣だ。値段は10倍以上違う。

俺の魔力と魔法式によって強化してるとはいえこれ以上正面から

ぶつかり合えば壊れる可能性がある。

正直いつひびが入ってもおかしくない状態だ。

よってさきほどから真正面から撃ち合うのではなく回避するか、受け流すことで攻撃を防いでいる。

美咲もそれをわかっているのだろう一切手を休めず責め立てる。

彼女のスピードは間違いなく上級に届くレベルだ。これは完全に誤算だった。

このレベルの戦いになると魔法式に魔力を注ぎ魔法を使うのと、剣を振るうのでは断然剣を振る方が早い。なので松田のときのように魔法による牽制もできない。

またバトルロイヤル時に使った詠唱による自力型の魔法『サンダーボルト』は俺が使ったことに気付いているのだろう。口元を見て詠唱に対する注意も怠っていない。

このままじゃジリ貧だ。

手札云々言ってられない。

そう思い“魔法を発動させる”。

技術はあるが魔力量の関係でなかなか使えない詠唱破棄だが属性エンチャントは自分で魔力量を調整できるので使用可能だ！強力なものほど魔力は多く、弱くてもいいなら消費魔力量は少ない。

ただし詠唱によるエンチャント中は常に魔力が減り続けるというリスクもあるから油断は禁物だけどね。

雷属性を自分の体にかけてスピード、反射を上昇させる。

俺が自分に魔法をかける際、敵に対する注意が一瞬弱まった隙を見逃さず美咲は剣を振り下ろす。

防御も回避も間に合わない。

やった！と美咲が思ったであろう瞬間に

バチッ！

という音を響かせ俺は彼女の視界から消える。

美咲が地面にぶつかる自分の剣を見て驚愕しているのがわかる。

しかし俺は彼女が動き始めるのを待たず後ろからその首に剣を添えた。

俺の姿を横目で確認し、今は抑えられているものの体から弱く迸る雷光を見たことで何をしたのか悟ったのだろう。

「まさか詠唱破棄まで使えるなんて…」

呆然とつぶやいた。

そしてそのまま大きく息を吸い込み自分を落ち着かせると

「ふうー……………降参します」

そう告げた。

「試合終了です！ 荒川選手の降参により、勝者は笹川選手となります！」

マイクで試合終了が伝えられると同時に大きな歓声が聞こえる。

今日行われた試合の中では一番派手な試合だったろうからな。試合中は集中してて聞こえていなかった歓声が耳に痛いくらい響き渡る。

美咲ちゃん目当てで試合を見ていた人たちも興奮したように声を上げている。

結果が作動し俺たちの傷や会場が修復されていく。修復作業が終わるまでは外に出られないからもう少しここにいなきゃ行けない。

東心峰の連中がどうしているか気になり、観客席の方を見ると俺を知ってる人は皆、驚きと興奮を顔に浮かべているように見える。今は興奮が強いけど、あつちに行ったらいろいろ問詰められるんだろうなあ…とちょっとテンションが下がる。

でも手加減なんてしてたら絶対に勝てない相手だったし仕方ないか。



「いくつか聞きたいことがあるんだけど良いかな？」

再生が済んだのであろう、試合前と同じ状態になった美咲ちゃんが話しかけてくる。内密な話なのかこつちを気遣ってか観客席には聞こえないようになっていた。

「魔法技術関連のことは答えないけどそれ以外なら大丈夫。」

「それをメインで聞きたかったんだけど……仕方ないわね。じゃあ、どうしてそんな剣を使っているの？」

俺の腰元にある剣を指示しながら言う。

「それ、ただのロングソードでしょう？あなたならもっと良いのが手に入るんじゃないの？もしもつと良い武器ならば詠唱破棄なんて使わなくても良かったでしょうに。」

「確かに魔法式なりマジックアイテムなり用意して学生商店で売れば資金を用意できただろう。それでよい武器を買えただろうけど、でも俺は公式には下級扱いなんだよ。だから中級の商品は買い取ってもらえないんだよな。不正扱いされかねないし。訓練優先で昇格試験を受ける余裕はなかったし。」

なんか呆れたような顔をしてこつちを見てくる美咲ちゃん。

「美咲ちゃんも公式には下級だけどどうして？俺は今言った通り訓練優先なのが理由だけ。」と聞いたところ。

「家庭の事情よ。親がうるさくてね。これ以上は秘密。」

「えー！？良いじゃん折角なんだし　つと修復が終わったか。そろそろ戻らなきゃね。次があつたら教えてよ。」

「次があればね。」と可愛らしく微笑みながら言う。

割り当てられた選手控室は正反対の方向にあるので、もう一度挨拶をし別々の方向へ歩き出す。

うん、なんだかんだ言つて楽しい試合だった。

惜しむらくは、さりげなく胸を触ったりセクハラができなかったことだ。もうちつと余裕のある試合だとできたのになあ…

そんなアホなことを考え俺は控室に戻って行った。

13話 東心峰勢、行きます！（元魔王編）（後書き）

武器についてですが自分のレベルより低いものを使う人はなかなかいませんが自分以上のレベルの武器を使う人は結構います。金とかコネで手に入るんで。

鎧の描写はあまりしてませんが下級では簡単な胸当て、肘と膝当て、ヘルメットくらいでつけない人も珍しくないです。

東心峰勢では池田、華柳が胸当てなどをつけてます。松田はちょっと強化されたローブっぽいものを着て、大祐は防具はつけてません。自分へのエンチャントの際に邪魔になることがあるので。

魔法についての補足です。アイスニードルを松田が1度に1本で3連射までだったのに対し大祐は30発を魔力の続く限りとなってますが、中級皆ができるわけじゃありません。大祐やそれに対抗した美咲ちゃんが優秀です。

魔法についての説明はまた機会があればしたいと思います。

14話 東心峰勢、行きます！（池田編）とエリア大会の終わり

オーケー！

準備は万端だ。

魔法式も魔力循環も最大、雷エンチャントも付与済み。

知覚を最大まで上昇させる。これで誰がどこにいるかも把握した。

行くぞ！

バチバチバチッ！！！！

雷を迸らせながら、控室から出て一気に廊下を走る。

途中にいる人たちが俺の姿を目に移すことさえできないスピードで一気に駆け抜ける。

風をコントロールしているため、何かを通った気配さえ感じていないことだろう。

観客席に上がり、待ち構えてる教師陣の目の前を通って一番上の席へとたどり着いた。

誰も俺に気付いていない。

魔法を解除する。

ふう…池田先輩の試合が始まればそつちに注目がいくだろうからそれまで大人しくしていよう。

本当は控室にいるつもりだったけど。次の人が来ちゃったし、廊下やロビーには松田を始めとしたうちのクラスの仲の良い連中が待ち構えていた。

捕まると質問攻めでめんどくなるのがわかりきっているからな。

幸い東心峰の学生が座っているのは5つ前の席まででそれより後方には誰もいない。しばらくは安全だろう。

座席には腰かけず前の椅子に隠れるように地面にしゃがみ込んだ。携帯端末を取り出し部下たちに連絡をする。

『我、勝利ス。敵八美少女ダツタ。』

メールの送信完了と。

あいつらは既に勝ち上がっているからこれで全員が本選への出場を決めたことになる。チームとしてまずは及第点だ。あとはどこまでいけるかな。

各エリアを勝ち上がってくる中級者たち、地球から来るだろう出場者の中には上級もいるだろう。

しかし一番の問題は大会レベルのバランスーとなる貴族代表だ。

今回は開拓者の上級者がほとんどいないということで大会のレベルは低い。当然大会レベルの調節のためにバランスーはガチで勝ちに来ると思われる。

この貴族代表を相手にどこまで今の自分が戦えるかが今後の訓練計画に影響するな。

そんなことを考えていた時である。

「何してんのリーダー？」

顔を上げると目の前に変な顔で俺を見るXことエロ太がいた。なんだ？

「なんでお前がここにいるんだ？お前は別のエリアだろうが。」

「俺の試合は午前で終わったから。閉会式も出る義務はないからこつちを見に来ただけだ。」

「あゝ…そうか。」

「それより勝ったんだってな。ロビーで西川たちが言ってたぞ。わかってはいたけどな。とりあえずはおめでとつ。」

「お、おう。」

しばし無言の時間が流れるが

「ちょ、ちよつと待って。とりあえず隠れる。」そう言いエロ太の腕を引つ張り隠れさせる。

「隠れてたのか？あゝみんなわいわいしてるもんな。でも気にし過ぎじゃないか？松田も勝ち上がったんだろ？それに池田が始まれば直ぐにそつちに夢中になるだろ。」

「相手の女の子が中級だったから俺も真面目に戦ったんだよ！」

俺の言葉を聞きエロ太は少し考え込んだ。

「全力で戦ったってこと？」

「全力ではない。けど中級レベルの力は出した。」

「別にいいんじゃない？どうせ本選で見られたらどろっし。」

良くねえよ〜試合のとき戦いながらチラッと見たら池田先輩の顔

がやばいことになってたもん。普段ならそこまでじゃなかったらうけど、今日は京子のことがあったから色々ヤバいんだよ。

「三坂さんのこと名前で呼ぶようになったのか！？それはやばいな。」

「わたしの名前を呼ぶと何がヤバイの？」

「そりゃもちろん池田先輩の嫉妬」

俺とエロ太が同時に上を見上げると後ろから京子が覗き込んでいた。固まる男二人を無視して京子は客席を回り込みエロ太とは反対側の隣に座ってきた。

何でここにいると分かったの？という疑問に対しては「違う会場にいる筈の佐々門君（エロ太のことだ）が誰かと話してるのが見えただから」だそうだ。

「大祐と佐々門君が仲良いのは知ってたしね。あ、佐々門君も勝ったんでしょ！？おめでとう。」

「お、おう…」

正面から微笑まれ、真っ赤になって口ごもるエロ太。こいつ普段エロいことばっかしてるけど実際に女と話すと動揺しまくりだからなあ…奴隷とか無理矢理女を襲う時とかは平気な顔するくせに。よくわからんやつだ。



フリーズしたエロ太を放置して俺と京子は話していた。

なんかこいつは普通だな。もっと試合のことについて突っ込まれると思っただけどそこまで深く聞いてこない。

正直ありがたい。

普段からワーワー男に言われてるから、騒がしくされると煩わしいってことがわかってるんだろっなきつと。

こうしてしばらく会話を続けていたが俺はこいつが人気者であることを忘れていた。

こいつが一人で上に行き誰かに話しかけた後、しゃがみ込んだのを沢山の人が目で追っていたのだろう。

京子にばれたことで知覚範囲を上昇させていた俺の意識は何人がこっちに向かってくるのを感じ取っていた。

「京子、お前、エロ太を連れて下に行け。誰かがこっち来る。」

「嫌です。それよりも大祐がもう堂々としちやえば？そっちの方が楽だよ。」

貴様が寄ってくるからそうするのが難しくなったんだよこの雌豚が！池田の相手がめんどくさそうなんだよ！責任とって犯られて来い！

言っ  
てやりたかつたけど大人な俺はこらえて視線でエロ太に命じた。

俺の意を受けたエロ太は京子を連れてこうとするも、無表情な顔に見つめられて撃沈。

使えない男だ。

もう家に帰りたいけど帰ったらあとが大変だしなあ…

ハア……………仕方ない。

京子といるのを見られるよりはマシだろうと魔力を全開にし、さつき出てきたばかりの控室に戻った。

関係者以外立ち入り禁止の廊下を通り、ロビーに出ると相変わらず松田カップルや西川たちがいた。

今来たばかりを装い出てきた俺を見つけさっそく質問せめにする友人たち

「お前、中級だったんか!」「隠してたのか?」「おめでとう、凄かったな」「あんな可愛い子に怪我させやがって」「いつから中

級なんだ？」

「待って！わかんねえ。一人ずつ聞いてくれ。まずは松田カツポウからどうぞ。」

寺島と松田がそろって顔を赤くしてる。初々しいねえ…俺は恋愛とかすっ飛ばして童貞卒業だったからなあ…異世界でだけど。

「なんだよカツポウって。」

「それは置いときなさい。それより笹川、あんた中級だったの？」

さっそく尻に敷かれてる感があるがそこは触れないでおこう。それより寺島の質問に答えるか。

「見た通りでございます。試験は受けていないので公式にはレベル2でございます。」

こんな感じで質問に答えていく。

ある程度、戦いに関する事に答え終わると今度は何故か京子との関係を聞かれたがこれはあの時一緒にいた、西川と虎川原が助け舟を出してくれた。まあ、自分の願望あるいは俺を介して京子と仲良くなるうという考えも多分にあるんだろうけどひとまず助かった。

こうしてしばらく話していると、いつまでも戻ってこない俺に業を煮やしたのか先生方を代表して担任の睦美ちゃんがこっちへ探しに来た。

ちょっと反省したのでからかうのはやめようと決心していたが、質問攻めのストレスからかついっついやってしまった。あと戦いの後で性欲が高ぶってたしな。これ大事。

ふざけてだよ！ということを示すために周りの連中には「ちゃんと俺の冗談に話し合わせるよ。」と言っておいた。

「いたいた。笹川君、おめでとございます！他の先生方も上で

」

話を遮り思いつきり抱きしめる。

「ありがと〜睦美ちゃん。恋人の勝利を祝福しに来てくれたんだ！」

右手は肩へ、左手はお尻の上に持つていきポンと軽く置く感じで。しかし腕には力がこもっているため体は密着している。

睦美ちゃんの巨乳が思いつきり当たってて気持ちいいですな〜。

左手もさりげなく動かすと柔らかく弾力のある手触りが実によい！

「ちよっ！？笹川君！？」

真っ赤になってる睦美ちゃんはビックリした顔でこっちを見上げてる。

たしかにここまで露骨に密着したことはなかったからね。

右手を肩から頭へと動かし睦美ちゃんのサラサラの髪を手で梳く。

「恋人にいいところ見せたくて頑張ったんだよ俺！見ててくれたならわかるでしょ？レベル2の俺があんな強い女性に勝ったんだよ。」

横を見ると寺島を始め女子は呆れたような顔をしてこっちを見てた。他の連中は冗談と分かってても嫉妬の視線が来ると予測していたが、真っ赤になった睦美ちゃんに見惚れてるようだった。

からかってばかりだけど睦美ちゃんは抜群にかわいいからな。特に照れてる時が可愛い。けど今はそれどころじゃない。

マズイ。

誰もツッコミをいれる人がいない。

女は呆れて男は見惚れフリーズしてる。

このままじゃ收拾がつかなくなると判断した俺は仕方なく睦美ち

やんから離れる。ホントはキス位迫りたかったけど。

「あつとこんな知らない人もたくさんいるところで言うことでもないか。」

そう言つて睦美ちゃんから体を離すと、「あつ」と睦美ちゃんの口から小さな声が漏れてきた。

コレももしかしたら本気で付き合えるんじゃない？普通の恋愛経験ゼロの俺にも彼女ができるんじゃない？

頭に浮かぶ考えを振り払い、睦美ちゃんに別のことを聞いてみた。

「ところで他の先生がどうか言つてたけど、何かあつたの？」

「え！？あ、あ、うん。笹川君がなかなか上来ないから探しに来たんです。校長先生とかも待つてたから早く観客席へ行きますよう。」

睦美ちゃんは未だ赤い顔で早口に告げると先立って歩き始めた。そして凄いスピードで階段を昇つて行った。

それを見送つた俺たちは（誰もまだ歩き始めていない）微妙

な空気になってしまった。

しばらくして俺は口を開く。

「あのだ。」

「何？」

特定の誰かに向けた言葉ではなかったが寺島が答えてくれた。

「俺、もしかして睦美ちゃんを抱けるかな？」

ノーコメントの寺島に代わり西川が口を開く。

「三坂さんは俺の嫁だから絶対手を出すなよ。」

その後再び無言となった俺たちは観客席に戻る。

すると興奮した校長たちがワーワー言っただ鬱陶しかった。睦美ちゃんも顔を赤くしたまま（さっきよりはまし）特に何か言っていることはない。

レベルのことなどを尋ねられたが西川たちにした説明をもう一度した。

しかし説明を終えたあとも「素晴らしい」とか言ってくるから上にいたエロ太を呼んでそっちに注意をそらした。

校長たちに捕まり称賛されているエロ太はこっちに非難のまなざしを向けてくるがそんなのは無視して周りの様子をうかがう。

やはり学生からの視線が変化してるな。好奇と嫉妬がより強力になっている。

そういえばいつのまにか京子は女子の席に戻っていたようだ。そして池田先輩に絡まれている。

先生方の近くにいないなあと思ったたら京子に話しかけに行っただのか。池田君にはいろいろ言われると思ってたから正直助かったぜ。

途中、京子とも目が合ったが空気を呼んでくれたのか特に何の反応もなかった。そしてそのまま先輩の相手をしてるようだ。

相手と言っても先輩が一方的に話しかけそれを適当に答えるか、周りの池田ファンに話を振っているようだ。



しばらくすると次の試合が始まりそうだったため適当なところで話を切り上げ自分たちの席へと座った。俺の周りの席の人はさっき下まで来てたやつばっかだからこれ以上は特に突っ込まれなく、ありがたかった。

少し離れたところに座ってる連中がいろいろ聞きたそうにしてたけど聞こえないふりをして無視した。

エロ太は自分のクラスのそこへ行ってます。

試合が始まったが公式実力ともに下級と中級の戦いだ。

中級同士の戦いを見た後じゃあつまらんだろうな。

凄い一方的な展開なんだもん。

中級が下級をなぶってるから決着がつかないだけだし。

みんなホゲ〜とした顔で見てる。ちょっとまじめな人は中級の態度に非難するような顔で試合を見てるけど。

10分経過するとさすがに遊び過ぎということでは会場からブーイングが開始した。

足元に倒れている相手の頭を中級の男が足でぐりぐり踏み始めたからだ。

が、このブーイングが流れを変えた！

魔法使いとしては頭が良くても一般常識がバカだったららしい男は観客のブーイングに対して怒鳴り返し始めたのだ。

曰く「弱いこいつが悪い」「何の覚悟もなく出てくるのが悪い」  
それに対してますますブーイングがひどくなる。

ぶっちゃけ俺は中級の言ってることが正しいと思う。

再生されるとはいえ首が飛ばされても合法的な環境に遊び半分であるのがどうかしている。

試合が終われば復活すると分かっているても戦いの最中は命がけなわけで甘い覚悟で出るべきではない。

何をされても仕方のないと認識した上で出場するべきだ。

だからといって俺は相手を弄ろうとは思わないけどな。

けど賢明な俺は特に何も言うことなく試合を見物していた。

ヒートアップする中級と観客。

この時、観客とやりあうバカな選手は試合中であることが意識から消えていた。

いつの間にか立ち上がっていた下級選手が未だマイクで叫びまくるバカを後ろからざっくりと切り裂いた。

瞬間、シーリーンとなったね。

誰も何も言えない中、アナウンスの女性は淡々と試合終了を告げ勝ち上がったのは下級の人だ。

負けたバカは文句を言うかと思いきやどんな手段であれ勝ち負けは勝ち、負けは負けと受け入れ去っていった。

こんな感じで実に微妙な試合だったのである。

次の試合までの待ち時間。違う空気を吸いたくなったのかロビーの方へ行ったり売店に行く人が多数の中、俺は自分の席にいた。

あゝ西川や虎川原も一緒にいる。松田夫妻は出て行ったけど。

観客席の下の方では池田さんが先生方、そしてファンの皆様と熱い言葉を交わしているようだ。

ただ時折京子の方を見ているのが面白い。京子は周りの友達が池田さんの近くに行くこうとする中、彼氏持ちの友達と自分たちの席で座っている。

俺はもう既に先輩には声をかけておいた。

前の試合が終わると同時に松田と一緒に行った。そのあとすぐ他の女子とか来たから俺は席に戻り松田は彼女と売店の方へ行ったというわけである。

試合まで残り15分ほどとなって先輩は控室の方へファンと共に向かった。

「大祐、どう思うあれ？」といきなり西川が言ってきた。ま、何となく言いたいことはわかるけど。

「別にいいんじゃないか？お前も虎川原もあの中に好きな人があるわけじゃないんだろ？」

「ボクチンはいないけど虎川原は」

「やめて。その話は出すな。」

「あゝ幼馴染と付き合ってたけど取られたんだっけ？」

今もフアンの群れの中にいたし。

「出すなって言ったじゃん。」

可哀そうだからこれ以上は触れないでおこう。気をつかい話題を変え会話しているとやつが来た。

「失礼します。西川君、ちょっとそっちに動いてもらえる。あ、大祐に話があつてきたんだから君は動かないで。よいしょつと。ありがとね西川君。」

真つ赤な顔で気にしないで下さいと答える西川。

ようやくわかった。こいつ京子が来るのを期待して売店に行かなかったな！

「今度はどうしたの？もう視線が嫌なんだけど。」

「いい加減に慣れなよ。私なんて毎日だよ。」

「俺は数時間前からだもの。慣れるなんて無理さ。で、どうしたの？友達といたでしょ。」

「あのコたちは彼氏のところに行ったよ。一人になったからこつちに来たんだ。良いよね？西川君と虎川原君ね？迷惑じゃないよね？」

西川はわかってたけど、さっきまで元カノ話でへこんでた虎川原も赤くして頷く。

奪われても仕方なくね？

ま、実際俺の心の平穩のためにも余計な反抗せず大人しくしておいた方がいいと判断したのでこれ以上は何も言わないことにした。

テンションを上げた2人　いつの間にかマイクもいるので3人が京子の相手をしてきているので周りも俺だけを睨まず分散して嫉妬を送るようになったのでありがたい。

あと5分ほどで試合開始という時間になり席を外していた連中が戻ってきた。

俺が席に戻った方が良いのではと進言したが京子が答えるより早く周りの男どもが別に良いじゃんとかバーに入り、京子が今座っている席の本来の人間はこれ幸いと寺島の横へと行っている。

松田の奴、少し前までは三坂さん三坂さん言ってたのに。なんてヤツだ。

まあ、良いけどさ。それよりも

「池田先輩が心配なの？」

ちよつとびっくりした顔でこっちを見る京子さん。

「わかった？」

京子の返事を聞きシヨックを受ける男ども。

でも違う。お前たちが予想したのとは逆の意味で心配してるんだ  
こいつは。

「たぶん勝つよ。対戦相手のケン＝マクリファスも先輩と同じレベルで二人とも剣を使ったオールラウンダーだから、基礎能力が少しだけ強い先輩が有利。でもこのレベルだとちよつとしたことでひっくり返ることもあるから絶対とは言えないけど。」

「そつかゝ勝っちゃうか……」

落ち込む京子。それを見て西川たちも状況を察したらしい。顔色が治っている、単純なやつらだ。

「でもなんでそんなに心配してるんだ？確かに本選へは行けると思

うけどそこで優勝なんて下級の先輩には不可能だぞ。」

「大祐がまさかの中級でしょう。だからもしかしたら先輩もそうなのかなって?」

あゝなるほどね。実力を隠してる可能性を疑っているのか。それでも心配はいらないと思うな。

「仮に上級だったとしても心配はいらないさ。今年は貴族が勝ちに来るはずだから。」

これは確定だ。世間でも賢い奴はそう予想している。

だから大会の勝敗の賭けを行ってる連中も大手なんか、今年は『優勝者ではなく準優勝者を予測する』となってるし。

告げると京子も（まだ多少不安ではあるだろうけど）納得したよ  
うで引き下がった。

もし仮に彼が勝ち上がったとしても僕が戦って倒してみせるよ！  
的なセリフを言えたら格好良いんだろうけど睦美ちゃんフラグと  
同様に京子フラグも立てる気はないんで自重しておいた。



そして池田先輩の試合が始まる。

結果を先に言うなら予想通り先輩の勝ちだ。

試合の内容は大したことなく普通の戦いで、両社ともに身体強化し切り合いながら牽制に魔法を放つ。

そして出来た隙に攻撃する。

当たれば追撃、外せば下がり体勢を立て直す。

単調な試合であったが、前の試合が微妙だったことと何より二人ともイケメンであるからなかなか見応えがある試合だったらしい  
(女子には)

数分の攻防ののち、池田先輩のフェイントに引っかかりケンは何も  
勢を崩す。

そこをすかさず攻撃し相手の武器を遠くへ弾き飛ばした。

下級のケンが自力型の魔法を使えるはずもないので、武器を飛ば  
され魔法を封じられた彼は降参した。

こうして東心峰勢のエリア大会は終わった。

2週間後から始まる世界大会に出場できるのは俺、松田、エロ太、池田の4人だ。

ようやく本気で戦える。

それが嬉しくて2週間ずっとテンション高く過ごす俺様であった。

## 15話 本選までの約2週間を日記風にしてみた

大会まで残り12日

一昨日の土曜がエリア大会の決勝だったから昨日は日曜で休日だった。そして今日は学校へ行った。

朝予想通りに体育館で朝礼がありめんどかった。今回は華柳先輩が壇上ではなく生徒の列の中にいたのが切なかった。

校長は余計な話をせず大会のことをいきなり話し始めた。

全体の総評を述べた後、個人の話をしていた。

エロ太については見てないから軽く褒めてた。

松田は寺島のことに触れられ生徒はみんな笑っていた。

池田先輩は前回と同様、長く褒められてた。女たちがきゃきゃー騒いで羨ましかった。

問題は俺のことだ。なんか前はあっさりだったくせに中級だと分かった途端、めっさ褒め殺しだった。鳥肌が立って寒気がしたから下を向いてたら、隣に呼ばれた。

松田が示す方を見ると俺が嫌がってるのがわかるのだろう西川たちが最高の笑顔を向けてきた。あとで×といた。

校長の話が終わった後、解散となった。

次の大会もできる限り全校応援だそうだ。ただし強制参加ではないということだ。

そのあとは普通に過ごしていた。睦美ちゃんにはちよっかいをかせず軽く日常会話をするだけにとどめておいた。

廊下で京子と挨拶をしたり会話をするようになった。それくらいが変化したことだと思う。

放課後はAとDと久々に会った。Xもいるけどね。

来週はフリーだけど今週は4人で訓練したいとのことだ。どうやら勝ち上がったことでみんなやる気満々になったようだ。おまけに学校でもちよつとした有名人らしい。

俺はAの学校に知り合いはいないがDは懐かしいBやCと同じ学校だ。もともとガキの頃からの関係らしくDが結果を出していることである。いろいろ面倒があるっぽい。本人がごまかすので聞かないことにした。

会話をした後は4人でバトルロイヤルやって帰った。

訓練してる場所は俺やXの地区の結界ありの訓練所だ。普通は地方大会が行われた場所で訓練するやつが多数なのでこっちはあまり人がいない。

今日は俺たち4人しかいなかった。

施設のオツチャンとは当然顔馴染みで4人が本選出ることを言ったら褒めてジューズをおごってくれた。

大会まで残り11日

学校は普通。授業も戦闘訓練を俺は取ってないので特別なことはない。教室で友達と話、廊下で他のクラスの知り合いと話したりっ  
て感じた。

放課後はいつもの場所へ。AとDは結構遠くに住んでるためここ  
に来るのに転移施設を使っている。

今までは親が金の関係で良い顔しなかったらしいが最近は問題な  
く出してくれているらしい。良かった良かった。俺も家から遠くだ  
けど自分で転移できるから問題ないしな。

訓練したあと、見学してた4つくらい下の男の子に話しかけられ  
た。強くなりたいとか言うので部下3人に任せた。リーダーは忙し  
いからな。

大会まで残り10日

学校では池田先輩と遭遇。話してたら京子が来た。その後3人で  
話すもののあの女は俺にばっか話しかけるのでいろいろ怖かったで

す。周りの通行人たちは遠巻きに見守っていた。

松田が笑っていたのでメといた。

あとは普通だと思う。

訓練後、また4つ下の子ども（チャーリーって名前）が話しかけ  
てきたので3人に任せた。

大会まで残り9日

今日は朝からムラムラしていた。けど噂がうんたらは困るから睦  
美ちゃんには近づかない。

今なら寺島でも抱けるわ〜って言ったたら寺島が反応するより先に  
松田が割って入ってきた。

赤くなる寺島。

「お前三坂さんはもういいの？」って聞いたら「俺には優香がいる」  
と返ってきた。

真っ赤になる寺島。

見つめあう二人は放置して西川と虎川原と3人でトイレに行つて  
愚痴っていました。

廊下で京子とその友達数名に遭遇。ムラムラしてるから来るなって言ったら軽蔑の眼で見られました。

これではらくは話しかけられないと思います。

放課後の訓練。チャーリーとその友達がいきました。部下3人に任せました。

戦闘したのでより性欲が高まっています。

大会まで残り8日

最近、魔法式関係の分からないところを俺に聞きに来るやつが増えました。めんどいけど空気をよんで教えてます。ただそこそこ可愛い子に來られると発情期の僕にはつらいものがあります。あと聞きに来る女に恋してる男からの視線が痛いです。

あ、睦美ちゃんとは毎日会話してます。世間話です。変なことはしてません。

放課後 以下略です。

大会まで残り7日

ムラムラ状態になってからなぜか、ですます調になってるので気を付けることにした。

俺は絶対に自家発電はしないと決めている。

金があれば政府認可型のエロいお店に行きたいんだけど、ダンジヨンもぐったり大会出たりで金が無くて行けない。我慢我慢。

今日は休日で学校は休みだ。訓練は午前からなのでぱっぱと着替えて出かけた。

いつものメンバーに松田がいた。あとチャーリーとその友達もいるけど。

松田は学校で俺が話したのを聞いて来たらしい。

正直今さらやっても大会までにレベルが上がることはないしと思っただら、

「勝つのが無理なのはわかってるけどできる限り頑張りたい！」

その熱意に感じるものがあつたのか他の連中はOKをした。

けど俺たちに混ざるのは不可能なので見学させた。

昼までやったらご飯を食べた。

そのあと部下に以下略。



松田には俺がついて指導した。対人戦に慣れることを優先して教え込んだ。

結果として大会2日前まで訓練をすることになった。

3時間くらいして解散。

性欲がやばいので大人しく帰って自分に魔法をかけて感覚を鈍くした。あとは本を読んだり魔法式の研究したりした。

大会まで残り6日

今日も訓練だ。

昨日と同じ日程で行い解散。

街を歩いていると京子に会いました。話しかけてきたんでムラムラしていると伝えて遠ざけようとしたんだけど流されました。

ふざけてると思われたようだ。

京子と一緒にいた友達と別れ俺を喫茶店に連れ込んだ。拒否したかったけど腕を組まれた際にあたった胸が気持ちよかったので無理だった。

少し話した後には1発やらせると頼んだら怒るところか微笑んで「

学校の友達とかに教えてもいいなら良いよ」と言われた。

トラブルが嫌なんでそこは流すことにした。

たぶんわかってて言ったんだと思う。

その後ウィンドウショッピングに駆り出された。思い返せば女の子とこうやって歩くのは超久しぶりで嬉しかったんで、この世界では表向きに存在しない性魔法をつかい性欲を強引に抑制させてピュアな気持ちで楽しんだ。

デートは緊張するけど楽しいです。

大会まで残り5日

朝から西川たちに絡まれた。

俺はバカだ。

ピュアなデートを楽しむあまり周りに知り合いがいる可能性を考えていなかった。こんなことならやらせてもらえば良かったぜ。

京子ファンの男の嫉妬視線、彼女持ちの楽しそうな視線、池田ファンの女の期待の視線を受けて居心地が悪かった。

仕方ないので睦美ちゃんにちょっかいかけて中和しようと思った。バカだった。

結果として睦美ちゃんファンからの視線が加わっただけだった。

放課後、松田とエロ太と訓練へ。以下略。

なお、今年の貴族代表が公表された。

十五貴族の中でも髪に特殊な色が現れる色持ちの家の一つ。虹髪の『佐藤』や緋色の『三宮院』と同じように紫色の髪を持つ家系『セラヴァイル』。

セラヴァイルの中でも分家にして有数の実力者で俺たちと同じ年代の女。

サーマレイスⅡセラヴァイル

こいつが貴族枠で出るらしい。レベルは当然10だそうだ。

大会まで残り4日

特にねえ。いつも通りだった。

大会まで残り3日

特にねえ。

大会まで残り2日

最後の訓練だ。チャーリーたちには明日からしばらく来ないことを告げている。

施設のオツチャン達とご飯を食べに行った。激励してくれた！

大会まで残り1日

放課後、まさかの全校集会。出陣式みたいことされた。一人一人一言ずつ言えと。

エロ太と池田先輩は聞いてたらしくスラスラと話すが俺と松田は初耳だからめっさ困った。あとで聞いたが睦美ちゃんが言い忘れてたらしい。

松田はテンパって詰まりまくりで笑われていた。俺は一言、「進めるところまで進んでいこうと思います。余裕があれば応援よろしくお願いします」とだけ言った。

教室に戻ると睦美ちゃんが俺と松田に謝ってきた。

みんなが帰った後、教室で睦美ちゃんにお仕置きした。

上下共に下着の中に手を入れていろいろした。付き合ったことないよと前に言ってたし反応的にも初めてだったからマズイと思って途中でやめた。

すつつつごい涙目になってたから抱きしめて30分ほど頭撫でてたらなんとか落ち着いてくれた。

そのあといつもどおり真っ赤になって「こういうことはしちゃダメですよ。」と行って足早に出て行った。

今さらながら誰かに見られてないか心配になったが誰もいない感じでほっとした。けど玄関に行ったら京子様がいらっしやって先ほどのことを聞かれた。

激励するために玄関で待ってたがいつまで経っても来ないから教室に来たらしく、よりにもよって胸に吸い付いてるところを見られたらしい。

口止め料として夕飯をおごらされた。4千円（火星も円の通貨を使ってる）の食べ飲み放題の店だ。もういつそ性魔法を使ってこいつもやつちゃおうかなと思ったけど自制した。

どうせなら大会が終わるまでは禁欲すると決めたのだ。睦美ちゃんとのことはセーフだ。

京子を家まで送った後は俺も帰って特に何もせず寝た。

酔っぱらってたのでそう勘違いしていた。

16話 エロエロ(いろいろ)やっちゃまった朝

ピピピピピピと携帯端末のアラームが鳴る。

うつせえーなあと心から思っけど今日はいよいよ本選の始まりだから我慢して起きるぞ。

仰向けで寝ている俺はベッドとから右手を伸ばし床に置いてあった端末のアラームを切る。

そしてそのまま音量をなしに設定する。

出かける日のいつもの習慣だ。

数秒後、寝たまま両腕を横に伸ばそうとしたら左手がやわらかい何かにぶつかった。

不思議に思い横を見ると京子がいた。

あゝなんだ京子かと思っベッドから出て箆笥から着替えを取ろうとしたとき、ここが自分の部屋ではないことに気付いた。

??

??  
??

あたりを観察するといろいろおかしいことに気付く。

部屋の大きさが違うし内装が女の子っぽい。

床には適当に脱ぎ捨てられた俺の制服、ワイシャツ、下着と愛用のロングソードがある他には綺麗に畳まれたキャミソールとショーツとブラ、色はピンクだ。

今さらながら俺は裸だ。

このあたりで何があつたか予測でき眠気も一気に吹き飛んだが、現実を認識するのを拒んだ俺はもう一度眠りにつくことにした。

だって有り得ないもの。こんな有り得ないもの。

寝るために布団をめくると目に映るのは京子の裸体、乱れた白いシートとそのシートの絶妙なポイントにある赤い染みだった。

つい最近の、初めて会話した日のことが思い浮かんだ。



「大丈夫だよ。私も処女だから。」

「違う！そこじゃない！俺の話聞いてた？どこに食いついてんの！？」

「

.....

.....

.....

夢だ。

これは夢だ。

だって有り得ないもの。こんな現実では有り得ないもの。

夢の中だから何をしてもいいので京子に抱きついた。

そして夢の中の京子の美しい巨乳を揉んでみた。

すつごく柔らかかったです。でも睦美ちゃんとは感触が違います。不思議だ。

このリアルな触感は夢では味わえないだろうな。

.....

自分に魔法をかけもう一眠りすることにした。

見事なまでの現実逃避である。

一時間後、枕元の方からいつもとは違うアラームの音がする。

すぐ近くで何か動く気配があるがどうせさっきの夢の続きだろう。寝入った頭がそう認識する。

「起きて、起きて。」

耳元で囁かれる言葉と共に誰かが揺すってくる。

声とともにすぐに目が覚めたがトラブルは後回しにするのが俺の主義だ。

京子の体に抱きついたまま寝たふりを続行した。

「寝たふりしないで」言葉とともに叩かれる。

仕方ないので目を開く。

顔を赤くした京子がいた。

睦美ちゃんはしょっちゅう顔を赤くしているが、話すようになって日は浅いけどこいつが顔を赤くするのは珍しい。

可愛い。

心からそう思い、同時に美しい裸体が見え性欲がわき出てきた。

俺は一瞬でケダモノに進化し京子に襲い掛かった。

3回戦が終了し、お互いに抱きしめあっていた。

「これ夢じゃないよね？」

「うん。」

そのまましばらく頭を撫でたりキスをしたりと30分。

お互いに身繕いをしてこのようなことになった状況を確認し合った。

結果は大したことないよくあるアホな流れだった。

飲んで酔っ払った俺が京子に襲い掛かった。

おまけに記憶にないし既に解けてるだろうから確証はないけど性魔法を使ったっポイ。

じゃなきゃ京子が応じる筈もないしな。

それで説明終わり。

禁欲生活と睦美ちゃんにセクハラしたのが完全にアウトだったか…

俺がバカなのかもしれないが魔王化の影響が出て性欲が増幅されているのか…ちゃんと確認しなきゃな。

現状では俺がバカなだけの可能性が高いけど。

ただ異世界から帰ってきた後に性欲が強くなったのも事実だ。今回のもヤバいけど子供とか取り返しのつかないことになる前に魔王についての研究も始めた方がいいかもな。

性欲だけならまだしも殺人衝動まで出てきたら………考えるだけでも恐ろしい。

京子のご飯を用意している間にそんなことを考えていた。

二人でご飯を食べてる間はほぼ無言。

何を言ったらいいかわからなかった俺はとりあえず一人暮らしをしている理由を聞いてみたりして会話をし、微妙な空気をかえるところに成功した。

そうして会話をしながらも、やっちゃまったことについては触れな  
いでいる中、俺の端末が呼び出し中になってることに気付いた。

表示を見るとエロ太だ。

まったく空気の読めないやつだな。

通話を押すと三次元的の立体映像でエロ太の姿が投射される。

「あゝい、なんですか〜？」

「大祐！？ やつと出たか！ お前今どこにいるんだ！」

緊迫したような声が聞こえる。さすがに不安になった俺は真面目に聞こうと意識を切り替えた。

「どっつてお前、きよ………家にいるよ。どうしたんだ？」

「家！？バカお前、今何時かわかってんのか！？」

何時って10時だけど

10時！

「開会式はもう終わったぞ！そんでお前の試合まで5分切ってる！とにかく早く来い！」

やべー！ヤべー！Yabeeeee！

まさかの失格になる！

「今すぐ行く。お前は人のいないところに行つて。」

「もう来てる。とにかく早くしろ！」

答えず通話を切る。

隣で話を聞いてた京子は通話の途中で準備を始めてた。

「京子準備できた!？」

「私はできたけど今からじゃあどう頑張っても間に合わないよ?」

「とにかく靴を履いて。あーあー俺、制服だ!……えええーい仕方ない。このままで行こう。あ、あと京子!魔力回復薬を1つ頂戴!」

返事を聞く前に冷蔵庫から回復薬をいただく。

急いで靴を履いた二人。

そしてエロ太の魔力を、正確には俺が部下に渡した俺専用の特別な魔法式を感知し詠唱型の転移を行う。

「魔法式確認。座標認識完了、転移起動。」



「到着。」

目の前には戦闘服のAとDとエロ太と松田がいた。

「やっときたか！？ってなんで三坂さんが？いやそれより早く、もう時間ない！」

みんな遅れたこととか京子と一緒にのこととか聞きたいことはあるのだろう、表情に出っていたがエロ太が代表して口を開く。

そして俺が口を開くより早く4人は走り始めた。

「京子、話はあと。客席行って。」

「わかった頑張ってるね！」

回復薬を飲みながら全力ダッシュ！転移は上級魔法なんで、俺の

全魔力の半分以上を持ってかれるからな。

仲間たちに追いつき一緒に試合前の確認にぎりぎりセーフ。

そしてそのまますぐに戦闘フィールドへ追い出された。

俺たちが入場すると同時にアナウンスが告げる。

「時間となりましたので結界を作動させます。選手の皆さんは結界の内部に進んでください。」

会場には選手が100人ほどいた。

観客席はほぼ満員で何万人いるのかわからない。

知覚を全開にし京子を探すと学校の応援席（ほぼみんな出席みただ）に合流してた。

先生と話した後、友達と話している。遅刻のことだろうな。

あと俺を見て間に合ったのは良いけども制服姿であることに気付きざわざわしてるっぽい。が、ひとまずそこから意識を離し仲間たち聞いた。

「簡単な状況を教えて。」

結界の準備完了まで5分ほどかかる。

Aが代表して説明する。

「50あるエリアから15人ずつくらい勝ち抜いてきて750人。地球枠で50人くらい。当然人多いから初戦はバトロイ形式。俺たちは故意か偶然かわからんがみんな一緒のグループ。試合のスタート地点は自由。1試合100人参戦で勝者は8名まで、8試合あわせて64名だ。この勝者+貴族など特別枠の人とかでトーナメント。バトロイの試合時間は1つにつき1時間。2日間にかけてやる。今から第一試合だ。」

「わかった。」

「こつちも聞きたいんだけど」とDが言ってきた。

「お前、ロングソードは？」

「京子の家に忘れてきた。」

薬を飲みながら気づいたけど手遅れだった。

それを聞いた松田が顔色を変えて何か言おうとした。たぶん京子のことじゃなく武器がないことについてだろう。

「だから自力型魔法と性魔法を使っていく。お前らは援護しろ。あと良い女は回せ。」

「それしかないよな。」

「大会までの2週間、鍛えた集団戦の成果がわかるなあ」

部下たちは俺の命令を理解したようだが、松田はわからんだろう。だから

「あと、松田にも戦ってもらおう。任せてもいい相手は松田に回せ。松田も言いたいこといっぱいだろうけどここは従ってくれ。」

真面目モードの俺の気迫に撃たれたのか余計なことと言わず黙って頷いた。

「1人いる上級はここで潰しておくぞ。状況を見て俺が仕掛ける。」

「「「「了解「「「「」

そう、フィールドを見渡すと1人だけ上級がいた。魔力で俺はわかったし、他の連中は開会式後に公表される情報を見てわかってたんだろう。

「あいつは事前測定で8レベル。地球出身だ。」とエロ太が教えてくれた。

事前測定とは地球では公式レベルというものはないことから、大会前に計測される便宜上のレベルである。

地球にはレベル9と10クラスの実力者は確認されていない。よって彼は地球の最高レベルの人間だ。

「以上で最低限の必要事項の確認は終わりか。おまえらからの質問は？」

「京子ってさっきのコ？めっちゃ可愛くね？なんで一緒だったの？なんであのコの家を剣を忘れたの？」

Aがいきなり聞いてきた。

同じことを聞いたかつたんだろう他の連中も答えを待っている。

無視無視無視無視。

質問に答えるかわりに言った。

「そろそろ始まるぞ。集中しろよバカども！」

「まあ、答えなくてもわかるけどね。」「良いな、俺もやりたい。」「集中とか学校の制服で剣を忘れたやつに言われたくねえな」「西川たちに報告だな。」

最後の松田のセリフだけは聞き流せなかったので、しっかり話し合いました。

この試合に勝てたら内緒ということまで話がまとまりました。

「それでは、第一試合を始めたいと思います。準備はよろしいでしょうか。それでは行きます。                    試合開始！……！」

こうしてエロエロしたばかりの俺の戦いは始まった。

## 17話 上級魔法は半端ねえ

『さていよいよ今年の世界大会、第一試合が始まります。実況はわたくし久留間、解説は十五貴族が1つ『吉宗』の分家筋にあたります吉宗明でお送りいたします。さて吉宗さん、今年度の参加者についてどのように思いますか？』

『そうですね。今年は例年と違い上級者がいないため、いつになく下級の人も多く出場しています。そのため

だと思えます。』

出場選手に関する全体の批評を述べる吉宗さん。

『なるほど。あ、選手が全員そろったようですね。そろそろ結果が作動します。

この試合は下級が半分、中級が半分で上級は地球から参戦の1人だけとなっております。

勝者は8名までとなっておりますが、吉宗さん誰が上がってくるでしょう？』

久留間の質問を受けて吉宗はまた長々と語る。

『  
というわけで誰にでもチャンスはあると思います。  
日ごろの努力、

他の選手への対策、そして何より運が大きなファクターでしょう。』

しかし「結論としてはわからねえ。運次第だ」と吉宗は語る。

「わかりました。ありがとうございます。選手の方ですが

1人だけ学生服の人がいますね。あれはどうしてなんでしょうか？魔法媒介も持っているようには見えませんが

「大祐、今完全にお前のこと話してるよね、実況で。」

「うっさい黙れ！」

100人の選手の中から公式レベル2の俺をピンポイントで狙うか普通？優勝候補について話すだろ。

「いや、百人の中に1人だけ学ランがいたら注目するのも無理はないだろ。せめて上だけでも脱げばいいのに。」

誰も俺の味方をしてくれない。

会場の観客も実況を聞き俺に注目しているんだろっなあ…泣きそ  
…っ



うちの学校の席では西川とかが爆笑しているのがわかる。

京子の家にお泊りしたと知らないからなんだろうけど。

「大祐の服装は置いておいて、上級をどうやって倒す気だ？」

Dが聞いてきた。

「さっきから観察してたけど、やつの魔力を見る限りのんびりしてたらやられることもありうる。だから試合開始と同時に『ロンギヌス』を使う」

はあ〜！？という顔をする部下たちと、よくわかっていない松田。

「なんだそれ？」「上級のオリジナルだろ？使えないはずじゃなかったか？」「マジか？」

「なんで君たちはいつも一斉に喋るかね。ちゃんと説明するから落ち着いて聞けよ。」

時間もないし一気に入らなから一度で覚えるように！

『ロンギヌス』とは

1・俺が作った魔法で上級レベルの効果（オリジナルだから公式に上級と設定されてはいない）。当然、“宝具”の聖槍ロンギヌスとは全くの別物。名前が格好いいから使っただけ。

2・『今の俺』の魔力量ではほとんどの上級魔法が使えないが転移を始め一部使えるものはある（ただし魔力の大部分を使う。）

なぜこの試合で使うかは

1・上級相手に下級や中級魔法を使っても魔法障壁で防がれる可能性が高い。

2・複合魔法（魔法を融合させ別の魔法を作り出す）や多重魔法（複数の魔法を同時に使う）で

いけなくもないが相手にダメージを与えるには何度も使わなければいけなく時間はかかるし、結果としてロンギヌスと同じくらいの魔力量を使う。

3・ロンギヌスは詠唱に時間がかかるため1人では使えない。よってこの試合以外では使う

場面がない。複合や多重魔法は下級や中級の組み合わせなので詠唱破棄が可能。

よって他の試合でも使え、手札を晒したくない。

「以上です。OK?」

「「「「OK!!!」」」」

「具体的な行動は、開始とともに俺は詠唱する。Dは女集め。他は俺の護衛だ。OK?」

「「「OK!!!」」」「女集めってなんだ?」

松田だけ疑問を浮かべた。

『ではそろそろ時間ですね。』

久留間の声が聞こえる。

もう時間無いな。

「時間がないから詳しくは言えない。とにかく松田は護衛すればいいんだ。それに集中!」

「わかった。」

松田が頷くと同時に久留間の声と

『今年最初の試合が』

試合のアナウンスの音が

「それでは、第一試合を始めたいと思います。準備はよろしいでしょうか。それでは行きます。試合開始！！！」

『今始まりました！』

「高らかに始まりを告げた。

試合が始まると俺はすぐに詠唱を開始した。

同時に俺の前方に魔法陣が地面と垂直になって現れる。

数は3つ、それぞれが重なり合うようにして存在している。

一方で他の参加者たちはどうしてるかという俺たちから離れたところではさすが上級というべきか、ド派手にぶちかましまくっている！

後衛タイプなのであろう立派な装飾のついた杖からは強い魔力を感じる。

上級を先に潰そうと襲い掛かる連中を強力な魔法で吹っ飛ばす！

魔法使用後の隙について切りかかってくるやつと接近戦で対等にやりあう体術はなかなかのものだ。

俺たちとは50メートルは離れているのでしばらくは大丈夫だと思うが、こっちはこっちで他の中級や下級に襲われている。

詠唱中の俺は完全に動けないのでただの的だが部下たちが上手く防いでくれている。

また松田に対処できそうな敵は松田の方に受け流し、メンドイ中級を自分に引き付けるようにAとXは戦っているようだ。

詠唱にかかる時間は約1分。

その間全く動けないので一人のときは使えないが今は仲間がいる。ありがたいことだ。

俺たちや上級の周り以外でも戦いが起きてるのでその流れ弾みたいのも結構飛んでくるがそれはエロ太が防いでくれている。

よく見るとDが遠くにいる。女集めに奔走しているようだ。

迫りくる攻撃をうまくかわし、俺好みの女に接近する。

そして弱い麻痺を付加させた双剣ツインファンクで下級の女を切り付け麻痺させている。

もっとも中級や上級相手だとレジストされる麻痺だろうけど。

そして動けなくなった女を担いでこっちに戻ってきた。

詠唱もあと20秒ほど。3つの魔法陣が純白に輝いている。

上級のヤローは既に20人はぶっ飛ばしている。それも全部中級だ。

俺たちは下級を3人、中級を2人倒したところ。

そして今も俺の周りで5人ほどを相手にして戦っている。あ、今はDもここで敵と戦っている。

敵の5人は1つのチームみたいで敵同士には攻撃せず俺たちだけを攻撃してくる。

なのでDとエロ太が前衛をAと松田が後衛という形で戦っている。

迫る敵を前衛二人が受け止めその隙に松田が魔法を飛ばす！

敵から放たれる魔法は俺に届く前にAが対処してくれているようだ。

Dは下級のそこそ可愛い女3人を？まえ拘束しここに持つてきた。だからその仲間たちがこっちに向かってきている。

半分ほどは途中で違う敵に戦いを挑まれ足止めされているが残りこっちへもうすぐ来る。

が、俺ももうすぐ詠唱が終わる。間に合いそうだ。

「貫くは闇、滅するは罪。汝聖者を裁きし槍よ、我が意を受けここある場所に具現せよ。」

同時に3つの魔法陣が1つになる。その中央からは魔法陣と同様に純白の槍が現れた。

槍から放たれる巨大な魔力に戦場の全員が動きを止めこちらを見る。

松田を含む誰もが驚愕している中、もともとこの魔法を知っている部下たちは

近くの敵が動きを止めた瞬間、倒してしまっている。

あとは俺の出す結果を見守るように動きを止めた。

上級は周りと同じく一瞬だけ動きを止め驚いたようだが、俺の視線と槍の穂先が自分を向いていることに気付いたのだろう。回避のために身体強化、防御のためにかなり強力な障壁を展開した。さすがというべき切り替えの早さだった。

魔法陣と俺を中心に吹き荒れる凄まじい風、それに飛ばされないように松田が食いしばっているのがわかるが俺は無視してさらに魔



力を込める。

徐々に強く発光する聖槍。

準備は完了した。

フィールドの端にいる俺と中央にいる敵はおよそ50メートルほど離れている。

そしてフィールドを囲む観客席では誰も声を発していない。いや、客席だけではなく実況や選手たちも動きを止めて静まり返っていた。

俺のほぼ全魔力が注がれひとときわ強く槍が輝いた瞬間

「貫け！ ロンギヌス！」

純白の聖槍が放たれる！

そのスピードと地面からは1メートル以上離れているのもかわらず、その溢れる魔力だけで会場を抉り焼き焦がしているのを見て上級は『回避は不可能』と強化された知覚で認識。

結界をさらに5重に展開。

魔力を注ぐと同時に聖槍が直撃した！

「ぐおおおおおおああああああ！！！！！！！！！！」

一瞬で結界すべてが壊され純白の輝きが迫る。

上級B M、マックマックは即座に結界を再生する。

ロンギヌスの威力を上方修正し魔力の温存を考えればすぐにやられると判断。

手を突出し全魔力を結界に注入した。

しかし聖槍は止まらない。

全魔力を注入した結界は壊されはしないが徐々に押されている。

最初いたフィールドの中央からは押し出され30メートルは移動させられている。

「チイイ…クううううー…」

ついに会場の端にまで追い詰められた。足と背中では会場の結界に当たっておりそれに支えられているような形だ。

未だにロンギヌスの威力は変わらない。対して徐々に魔力がなくなるマツク＝マツク。

数秒の拮抗ののち結界にひびが入る。

1秒ごとにひびは増え大きくなる。

そしてパライインという音とともに結界は消え去り、聖槍の輝きがマツクマツクを消滅させ、そのまま会場を包む大結界に激突した。

「まっぶしっしっ！でもこれで上級はやったなリーダー！ってさっそくお楽しみ中かよ。」

大結界に衝突した影響で聖槍は白く輝く大爆発を起こした。

そんな中、俺は捕えた女たちにキスをし性魔法で魔力を吸い上げている。

3人目の魔力をいただこうとしたとき、光が収まった。

「ううゝまさかここまでとは……俺は大祐をなめてたぜって……何してんのお前!？」

女の子にキスしてる俺を見て松田が叫ぶ!

周りのやつはまだ光とロンギヌスの魔力にあてられて動けそうにない。

「性魔法で魔力をまきあげてる。サキュバスはセックスで精気を吸い取るっていうだろ?その応用だ。」

ぐつたりする女の子の口に舌を入れて口内を犯しながらモゴモゴ解説する。

「いやだからってなんで」

「掌で触れるだけでも吸い取れるんだけど効率が悪い。粘液接触が一番効率よく回収できる」

ホントは実際にエロい事するのが一番なんだけどな。さすがにここでやるわけにもいかないし。

なおも何か言おうとする松田にエロ太が話しかける。

「松田、そのくらいにしておけ！そろそろ周りが動くぞ！」

見るとどのチームも回復したようだ。

遠く離れたところでは今の隙に襲い掛かっているところもある。

そしてそれに気づいて慌てて応戦する人もいる。

ただし、俺たちの付近は俺の行動を見て動きを止めている。

その間に魔力を回収し、俺の魔力が半分ほど回復したところで女の子の魔力が尽きた。

そしてそのまま体を離すと行動不能とみなされた女の子は大結界から分離した膜に包まれ、結果外に運ばれた。

死ぬ以外にも行動不能とみなされれば途中でこのように負け扱いとなる。

死んだやつは会場内にそのままだが生きてる場合は結果外に運ばれて再生のち帰ることになる。

「うっし、魔力は半分くらい回復した。そろそろやるぞ。」

呼びかけると同時に詠唱破棄で下級魔法アイスニードルをぶっ放す。

ポクッとこつちを見てた5人に刺さり敗退だ。

「護衛はもういらぬから好きにやれ。」

「了解」「」答えると同時に3人は周りでポケッとしてる連中に襲い掛かる。

「松田はついてこい。俺が前衛やるからお前は後衛をやって」

「お、おうわかった。」

俺は魔力消費を考慮し弱めに風のエンチャントを自分にかけて準備を整えると二人で近くの奴に襲い掛かった。

## 18話 今大会のバトルロイヤル終了

「試合終了です。勝者は8人。三柳 竜也、東 山彦、佐々門 風太、笹川大祐、松田 騎士、 となります。」

試合終了のアナウンスと同時に歓声が響く。

松田は客席の寺島の方へ手を振っている。他の連中も似たようなものだ。

『いやーいきなりすごい試合でしたね。吉宗さん。まさか上級のB Mがここで敗退するなど。それにあの学ランの笹川選手が使った魔法、あれはいったいなんだったのでしょうか？』

『あれは自力型の魔法ですね。笹川選手はどうやら魔法式を利用しなくて無かったです。詠唱による魔法を使いこなし、さらに下位のものだと詠唱破棄までしてましたからね。彼は間違いなくこの大会の台風の目となるでしょう。』

『なるほど。次以降の試合が楽しみですですね。……………しかし彼は途中で女の選手にキスをしてましたがあれはいったいどういうことでしょうっ。』

実況の久留間のやつが余計な話題を出してきやがった。



「大祐、あれ完全にお前のことと言ってない？」

さっきまでみんな観客席に手を振ってたくせにこっちを見てニヤニヤし始めた。いつもどおり無視しよう。

黙る俺に松田が近づいてきて肩をたたく。

「約束通り、三坂さんのことは西川たちに黙っておくけどさ。キスしたことで三坂さんとけんかするなよ？結局西川たちにはれることになるぞ？ちゃんと弁解しとけよ。」

どや顔がうざかったから顔に1発入れといた。

このあとは前回と同じくわーきゃわーきゃーだったから詳細は飛ばすとしよう。

ざっくりとだけ言うと

うっさい校長たちの話を軽やかに流して、試合についてのことは適当に話しておいた。

遅刻については友達の家で寝坊ということにしておいた。

制服なのは昨日学校帰りにまっすぐ行ったため、武器もそこに忘れたと。

俺が学校外にも親しい友達がいるということはAやDを見て理解したらしく、今後気をつけるようにと言われただけだった。

ちなみにこのとき西川たちも近くにおいて説明を聞いてたからこの後で特に突っ込まれることはなかった（松田は懲りずにニヤついてたけど）。

「三坂さんも遅刻しそうだったんだぜ。」と西川に言われたときはちよっとドキッとしたが問題なく話は終わった。

個人的には他の選手にキスしたことも突っ込まれるかと思っただけどそこは何も言われなかった。

昼の時間となりご飯を食べに移動した。

全校応援の学生たちは制服だから俺は観客の中では目立ってない。  
い。

あくまで試合に学ランだったから目立っただけだ。

俺と松田がいきなり試合だったためなんか終わった感があるんだ

けどまだ、イケメンの試合が残っている。イケメンは3試合目で午後の2時過ぎ開始の予定だからまだ2時間以上の時間がある。

「もつぶつちやけ帰りたくない？松田と大祐の試合終わったからもつ良いじゃん。」

俺と、西川、虎川原の3人で飯を食つてると西川がいきなり言い出した。

「確かに俺ももう帰りたい。池田なんてどうでも良いしさ。」と虎川原も同意する。

「虎川原は桃ちゃん（虎川原の元カノ兼幼馴染）のことがあるからな。」

「おい、それは言つなや！泣くぞ俺。」

「そつだぞ大祐。それは言つちやいけないことだ。」

珍しく西川が虎川原の味方になった。いつもなら俺と一緒にからかうのに。

「虎川原の傷ついた心を癒やすためにも三坂さん呼んで来い。」

「賛成。それ賛成。そしたら今の失礼な発言は許してやる。」

……………そういうことか。

今俺たちがいるのは会場施設にあるレストランの1つだ。

他の客もいっぱいいるから席はほとんどあいてない。

京子とは試合が終わった後に少し話したが周りの目もあるしそれほどゆっくりと話していない。

「京子を呼ぶのは無理だな。俺、あいつの端末の番号わからないし。」

「エロいことやっというてなんだけど番号はまだ聞いてなかった。」

「大丈夫。あそこにいる。」

ホラと西川が示す方向には席待ちの客の列だ。その中に京子が二人の友達といるのがわかる。

珍しいな、いつもはもつと大人数でいるのに。

「人数もちょうどいいしさっさと呼んで来い。」

俺たちの席は6人掛けだから確かに3つあいている。

ちなみに俺と西川が奥の席で虎川原が通路側だ。

「いや、無理。俺さっき生理始まったから動けない。おなか痛い。」

「なんでだよ。おかしいだらいろいろと。」

「実はさ、他の連中には黙ってたけどロングキヌス使うと生理になって妊娠するんだよね。」

「マジで！？じゃあ三坂さんに出産の手伝い頼んで来いよ！」

「ハア……………三坂三坂ってねえ。本気で口説く気あるんなら自分で行かないと。もう何回か会話してるんだからお前らが話しかけても別に大丈夫だろ？学校の廊下で会ったときとか挨拶してんじゃん。」

「いや、本気で口説く気はないんだよ。それは無理だろうから…でもせめて目の保養をしたいわけで。」

俺なんかじゃあ…と落ち込み始めた西川。虎川原が視線で非難してくる。

「そんなことないよ。頑張れよ！」とは言えない。昨日までは言えただけで京子とやっっちゃった今はもう言えない。

ホントもう酒は飲まないぞ。

あるいはちゃんと魔法でコントロールしてから飲むとしよう！

「……わかったわかった。行けばいいんだろ。」

抵抗をあきらめて呼びに行く俺。

後ろで西川たちが「作戦成功」「ボクチンは演技派なのだ」とか言ってたけど聞かなかったことにした。

廊下で席が空くのを待つてる京子たちに声をかけると、3人とも喜んでついてきた。

他の待つてる客の目が痛かったけど気にしないようにしてました。

席に着いてから他の友達はどうしたの？と聞くとどうやら池田先輩のそこに行ってるらしい。

さっそく女たちが注文した後、西虎コンビは京子に話しかけまくっていた。

他の女の子はいつものことだろうし、彼氏がいるし、西虎はイケメンじゃないしということと別に気にしてないようだった。

けど何も話しかけないのもあれなんで俺が対応しておいた。

試合でド派手にやらかしたこともあって結構会話が弾む。

一方で京子はもうウンザリなんだろう。ほどほどに話を合わせながらもこっちの会話に入ろうとしたり周りから見えないように足で蹴ってきたりした。

段々と蹴りの威力が増してきたからみんなが飯を食い終わったところで席を他の人に譲るために店を出ることを提案。

女の子3人が承諾したので男2人もしぶしぶ承諾。会計に向かいました。

俺の分は勝利祝いということで男2人がおごってくれました！

京子の家にロングソードを置きっぱなしということもあり一回ゆっくり話さんといかんのだがどうしようか。

次の池田の試合まであと30分くらいだからどこかの店に入るのも微妙だし…とウジウジしてたら京子の方からストレートに「話あるからちよっと来て」と言われました。

直球だったんで西川たちも割って入ってくる様子もなく連れ去られる俺を見送ってくれました。

誰もいないところということであまり使われていない選手控室の方へ行き、その中の空き部屋に入り込んだ。

京子が先に部屋に入ったので俺に背を向けている状態であるが気にせず話しかけた。

「ちょうどよかった。ロングソードを京子の部屋に置きっぱなしだからさ。あとで取りに行きたいって連絡しようと思ってただけで端末の番号は知らないし、みんなの前で言うわけにもいかないしで困ってたんだ。」

俺が話しかけたことで振り返る京子。

その顔は明らかに怒ってます！という表情だった。

「そんなことよりさっきの試合のあれは何？」

「あれってどね？」

「選手の女の子とキスしてたでしょう！？」



あゝそのことか。誰も聞いてこなかったから半分忘れてた。

「京子って一夫一妻主義？」と聞いてみた。

火星では婚姻関係に年齢制限はあるが人数の制限はない。本人たちの合意と子どもに対する責任、社会に対する責任を果たせば特に問題ないとされる。

ただ子供やその他に悪影響があると判断された場合は厳しい罰則が与えられる。そのための各家庭へ介入する機関の権限は強い。

現実的には一夫一妻を好む人も少なくないため、貴族などの実力者の男性が多く、妻を持つ、あるいは女性が多くの夫を持つというパターンが多い。一般人の中にもハーレムを築いてるゲームの主人公みたいなものもいることはいるけどね。

夫も複数、妻も複数というパターンも昔はあったがほぼ全てでトラブル発生となり公的機関の介入によって罰則が与えられるということが続いたらしく現在は表向きにそういう家庭はない。

また一夫一妻の国民も他の人がハーレムを築くこと自体に嫌悪感や忌避感はない。

例えば俺や西川のようなモテない男が妻を5人もつハーレム野郎を見た場合、「マジむかつくわ、あのハーレム野郎」と嫉妬はする

けどもハーレムであること自体に嫌悪感はないのだ。

いろいろ言っただけど要約すると、法的にも国民の考え方的にも『責任取れる範囲なら結婚人数は自由だよ』ということだ。

まあ、ごく一部では一夫一妻を義務にしるといふ集団（一夫一妻主義者）もいるんだけど我が国開拓者の場合、初代皇帝が15人も妻を持っていてその子供たちが現在の十五貴族となっているわけだからね。いろいろとね。

そんなわけで京子に質問してみたら、

「違うよ。けどちょっと前にわ、わ、わたしとあんなことしたあとなのに…さすがに腹が立つよ!」

「あんなことって?」

「……………」

「イタっ!？ちょっと痛いんですけど。」

無言で蹴られました。怒らせるのも怖いので素直に説明すること

にした。

「あれは魔力の回復をしてたんだよ。」

「……………」

無言でジッと見てくる。

「俺が上級BMをぶちのめすのに使ったロンギヌスの魔法は魔力全部使っからね。そのための処置だよ。」

そう言って、何か言い返そうとする京子の手を握って説明を続ける。

「今、手から京子の魔力を吸ってるのわかる？」

手を振りほどこうとした京子が動きを止めしばし手の感覚に集中する。

「なんとなくわかる。」と答えてくれた。

「そう。京子から吸い取ってる魔力を2だとしたら俺が自分のものにできるのは0.4くらいなんだ。」

無言で話を聞く京子にキスをする。

「ちよっ！？んー……何するん……」

暴れる京子をさえつけて思いっきり舌を入れて京子の舌を絡めとる。

ピチャピチャ音を立てながら激しくキスをする。

これと同時に唾液を介して魔力を吸い上げている。

程なくして京子も自分の魔力がガンガン吸われてるのがわかったのだろう、大人しくなった。

せつかくの機会だから少し楽しもうと魔力の吸収をやめて普通にキスを楽しんだ。

5分くらいしてようやく口を離す。

文句を言われそうだったんで抱きしめてそのまま解説を続けた。

「今のは、はっきりわかったと思うけど、手を握った時より魔力がたくさん吸収されたでしょう？手で吸収するときが2だとしたらキ

スだと200の魔力を京子から吸い上げることができて130を俺の魔力に出来るんだ。手で奪うより断然効率がいいんだよね。」

しばらく抱きしめられたままで呼吸を整えていた京子は顔を上げて言う。

「それはわかった。けどそれならあの女の子たちじゃなくても良いでしょ？」

「やだ、男となんてキスしたくない。」

「……………」

「……………」

至近距離で静かににらみ合う俺たち。

「……………理由はわかったよ。少し不満だけど納得はした。……………それでどこで覚えたのこんな魔法？大祐が自分で作ったの？」

「これはサキュバスとかの夢魔あるいは淫魔が使う技術の応用で、淫術、催淫魔法、吸精魔法とかいろんな呼び方があったけど俺は性魔法って呼んでる。ただ本来魔法と呼んでいいのか微妙なんだけどもね。」

「どうして？」

「魔方陣を介して無いでしょ？自力型、魔法式型ともに普通の魔法は必ず空中なり対象になり武器の内部であったりと魔法陣が現れるけど性魔法の場合は魔法陣を介さず発動するから魔法って呼んでいいのかわからないんだよな。」

「そうなんだ。どこでおぼ」

また思いつきキスをする。

どこで覚えたと言おうとしたんだろううけど異世界へ行ったことを説明するのは長くなる。

もうそろそろ池田の試合が始まるし戻らなきゃいけないから強引に話を終わらせてしまおう。

しばらくしてキスした後に睨んでくる京子の手を取り部屋を出た。

「私の顔大丈夫？みんなに変に思われないかな。」

「あーん…別に普通にかわいいと思うぞ。お前元々そんな化粧してないし変になってるとかもないぞ。」

「そうじゃなくて顔色だつてば。赤くなつてない？」

「そつちか。ちょっと赤いけど大丈夫だろ。走ってきたことにすりやいだろ。」

廊下の途中で手をほどき一人で観客席に向かう。

到着してからはそれぞれ自分の友達の元へ行った。

そしていよいよ池田君のバトルが始まった。

が、結果は予想通りというかなんというか………

さすがにこのレベルで勝ち抜くことはできずに試合序盤で敗退してしまいました。

池田を直接ブツ飛ばした相手は中級です。魔法で吹っ飛ばされています。

もうホントビックリするくらいあっさり負けたんで、観客席に戻ってきた本人も不完全燃焼ですって感じが丸出しだったけど負けは負けです。

おもしろいことに華柳と違ってまだ京子を諦め切れならしく先生方と話したあとに話しかけていました。

俺は離れてたんで何を話したかはわからないけど。

まあ、この後剣を取りにあいつの家に行くんでその時にでも教えてくれるだろう。

こうして本日の日程はすべて終了し現地で解散となった。

東心峰で勝ち残ったのは3人。

俺、松田、エロ太だ。

明日はバトロイの後半戦があるがうちの学校からは誰も出ないの  
でここには来ない。



トーナメントの組み合わせは明日の試合が終わり次第、ネットに出るから家でわかるしな。

そんなわけで俺は西川たちと帰宅した。

18話 今大会のバトルロイヤル終了(後書き)

明日からしばらく出かけるので執筆ができなくなります。

次の更新は来週の金曜日を予定しています。

19話 大祐の進化表 人間

魔王

人間（元魔王）

人間（発情

更新再開です。

まずは発情期の男が京子といちやいちやする話からです。

バトル好きには合わないかもしれません。気を付けてください。

またあとがきの方に『京子について』、『この物語の流れについて』ネタバレになることを書いているんで見たくない人は注意してください

「遅い！」

ロングソードを取りに来てすぐに言われてしまった。

西川たちに一緒に帰ろうと誘われたはいいけど夕飯も一緒に食うことになって結局ここに来るのが遅くになってしまった。

あ、自宅には泊まりですと連絡いれておいた。

「まったくもう。私にも予定があるんだから時間は守ってくれないと困るよ。」

「予定つてもう寝るだけじゃん。」

「ミーちゃんたちにカラオケ行こうって誘われてたのに。」

「池田先輩も一緒だから京子はどうせ行かなかっただろ。」

「それはそれ。ま、いいよ。とりあえず入って。」

お邪魔します、と言って部屋に上がりこむ俺様。

昨日も結構きれいだったけど今日はより片付いているな。

「女の子の部屋をじろじろ見るのは失礼だよ。」

「そう固いこと言わずに。家族と幼馴染以外の女の部屋に入ったことなくてさ。なかなか新鮮だなと思って。今朝はそれどころじゃなかったし。」

話しながら部屋を見渡すと食事がテーブルの上にあった。

量的に二人分だな。

「ご飯作ってくれてんだ。じゃあいただきます。」

「え？食べてきたんじゃないの？」

「量が少なかったから物足りなくて。」

ホントはかなり食ったけど、せっかく用意してくれたのを食べないのもつたいないしな。

学ランの上を脱いで、カバンを置いてテーブルの前に座る。

二人でご飯を食った。

味は普通の家庭の味でした。

けど同級生の女の子の手作りだというだけでおいしく感じるのは

何故なんだろう？まったくもって不思議だ。

食後は二人でテレビを見たり会話をしたりで時間が経っていった。

そもそも話すようになってまだ2週間ほどだからな。好みだとか趣味だとか知らないことも多い。

お互いのことを話すだけでもかなりの時間が経った。

しかし、会話をしながら1つだけ思うことがあった。

京子は可愛い。

凄く可愛い。

目はパツチリしてるし肌は白くてツヤツヤだ。髪はサラサラストリートで細いのに出るとこは出てる。巨乳好きの俺にとってはもうたままないくらい良い女だ。

性格的にも相性がいいみたいで話は弾むし、京子も既に俺を警戒して無いから、かなり近い距離で過ごしている。

他の男、あるいは昔の魔王になる前の俺なら緊張して顔が赤くな

ったり心臓がバクバクしてずっとドキドキしっぱなしなんだろうが、今の俺はまったくそんなものとは無縁だ。ずっと落ち着いて会話をしている。性欲はあるけどな。

そしてたぶんこれから先、京子以外のどんな可愛い人に対しても、どんだけ好きになった人にも俺はドキドキなんてしないんだと思う。魔王ではなくなったけどやっぱり人のときとは変わってしまったているのだろう。

それが何となく寂しいなあ…なんて思ったりもした。

そんな感じで過ごすうちにそれなりに遅い時間になった。

「だいぶ遅い時間だな。」

「もう帰るの?」

「シャワー貸して。」

「あ、うん。良いよ……………え？シャワー？帰るんじゃないの？」

「今日は泊まってくぞ。着替えも途中で買ってきたしな。」

そう言って着替えの入ったカバンを見せる。

「え……………!？」

「え……………じゃなくてせつかくだから一緒に入ろう。」

京子が戸惑ってるうちに強引に風呂場まで連行しちゃいました。

「わたしもうお嫁に行けない。」

風呂場でいろいろされちゃった京子は泣いたふりをしながらなん



か言ってる。

特に返事をせずにタオルで身体を拭いてやった。

風呂場では何もしないつもりだったがやはりしてしまった。

命がけの出来事とか激しい戦闘があると性欲が強まるとかいうけどホントだよな。

おまけに俺の場合は性魔法で魔力の続く限り興奮を維持できるからなおのことやらかしてしまった。

「はじめっからわたしの体が目当てだったのね。」

まだなんか言ってるが顔は笑っている。

「いや、勝負下着をつけてた京子に言われたくないんですけど。」

「ち、違っよ。今日はたまたまそっいう気分だったただけだし。てか勝負下着じゃないもん。」

「ハイハイ。」

紐っばいやつだったからね。前はノーマル？なやつだったし。

ムキになって言い返してくる京子が可愛くてまた性欲がわき出る。

「じゃあ、せつかく勝負下着まで用意してくれた京子のために2回戦と行きましよう。」

宣言すると同時に京子を布団まで運んで襲い掛かった。

俺はとんでもないケダモノです。

「ねえ、わたしのこと好き？」

情事のあと、京子を抱きしめながら頭を撫でている時に聞いてき

た。

模範解答を答えようと思ったけど京子の目は真剣で、ウソを見逃すことはないと言っているようだった。

だから正直に答えた。

「好き。大好きだよ。ただ…」

「ただ？」

「恋愛感情なのかわからない。」

「そっか。」

「うん。」

俺が最後に恋をしたのはいつだろう？

魔王として過ごした1000年以上の期間でも恋をすることはなかった。

性欲の塊だったけど。

最後に恋をしたのはきつと魔王になるよりも前のことだな。

幼馴染の沙夜を好きになったのが……切ない思い出。

お互いに抱き合っている腕に力を込めて強く密着する。

おもむろに京子が顔を上げるとキスをしてきて話し始めた。

「わたしも。」

「うん？」

「わたしも正直わかんない。好きなのは間違いないんだけど。」

「わたしの話ちよつと長くなるけど良い？」って聞いてきたから頭を撫でて話の続きを促した。

「中等部の頃は付き合ってた人いたんだけどね、親に「異性に触れるのは何年も一緒にいてホントに信頼できる人だと分かってからだよ」みたいことを言われてたの。だから手も繋がらないでいたんだけど、そしたらそれが原因で喧嘩になって結局別れることになってね。それが何人も続いたから『あゝ男って身体目当てなんだ。』って思ってたそれ以来誰とも付き合わなかったんだ。」

なるほど。いろんなストーリーでよくある場面だな。

「わたしを見る男の視線って彼女がいるいないに関係なく同じだからね。そんな中で大祐はわたしを見ても特に強い反応がなかったから興味を惹かれたっていうのはあるけど」

そこまで言うといきなり俺の頬を抓りあげてきた。

「まさかいきなり身体を許しちゃうなんて!」

「痛い!ちょっと痛いんですけど!」

京子の腕をペシペシ叩いてやめさせる。マジで痛かった…

「もう自分が信じられないよ」 「言って俺の胸に倒れこんでくる。

この点はウソつかず話した方がいいよな。

「あ~~~~~京子さんや。」

「何？やっぱりわたしに性魔法ってやつ使ったの？性魔法っていうくらいだから当然そっち方面の使い方あるんだよね。」

「するどい。エスパーかこいつ？」

「最初のおときはおそらく使いました。正直、初めての記憶は酔っつたんで覚えてなく何とも言えないけど。京子は最初のおときの記憶あるんだよね？俺が性魔法を使ってた気配あった？」

「……………わかんないけど痛くはなかったから。あんなに血が出たのに……………」

顔を赤らめて言う京子。なるほど

「痛くはないというか気持ち良かったのか、はじめてなのに痛いです。今俺が痛いです。」

「うお、指をかまれた。歯形がついてるしよ」

「あ、2回目以降は自分の性欲の調節や避妊には使ったけど京子には一度も使ってないぞ。」

京子は特に答えず俺の胸に頭をのっけてゴロゴロしている。

しばらくのほほんとしてると唐突に思い出した。

「でも待って！よく考えれば試合観戦のときに京子から手を繋いでこなかったか？」

うん。間違いない、松田の試合の後、こいつから手を繋いできた。つまり最初に触れてきたのは京子ですね。

「え！？……あ………」

無言で見つめあう二人。

いや、京子は直ぐに目をそらした。

「まあ、そんなの今さらだよ。大祐がわたしにしたことに比べれば大したことないよ。」

何言ってるのこいつ？みたい目で見つめていたら京子が冷や汗っばいのをかいてるのがわかったから仕方なく流すことにした。

そんなことよりだ。

ついでだから俺からも質問してみた。

「京子は俺が睦美ちゃんにちょっかいかけるの嫌だと思っ？」

聞くと視線を改めてこっちに向け答える。

「多少はモヤモヤするけど、それほどでもないかな。」

「意外だ。さっきは試合でキスしたことを怒っていたのに。」

「あれはわたしといた直後なのになってことだよ。」

「違いが判らないんですけど。」

俺の質問には答えず違うことを言う。



「わたしの家はお父さん1人にお母さんが2人だからね。」

「そうなの!？」

「うん。あ、家庭内での問題はないよ。私を産んだお母さんももう一人のお母さんも同じく仲良しだし。弟はわたしと異母兄弟になるけど仲良いし。」

「ほほ〜」

「だから露骨な鼻屑をしたりしなければわたしは平気!なんだけどわたしとしてはもう少し今の関係でいたいと思ってる。」

「?????????」

「こんなことしておいて何を今さらだけどもう少し時間が欲しいの。」

確かに、怒涛の展開だったからな。出来過ぎなくらいに。

「それに大祐の方も今は大会が優先でしょ？」

「大会第一なら今頃、他の選手の対策をしてるって。」

「じゃあわたしが辞退してって言ったら辞退してくれる?」

「あ〜……それは無理だな。」

確かに無理だな。

大会が京子がどっちか選べって言われたら大会を優先するな間違  
いなく。

「でしょう？だからもう少しこのままでいよう。」

「良いけど、客観的にはセフレにしか  
痛い！暴力はやめ  
よう。」

「大祐が余計なことを言うからでしょう。……まったく。最終的に  
はちゃんと大祐に責任とってもらうんだから問題ないの。」

「それだったら今から俺の女ってことでも  
」

京子が俺の口をふさいで言葉を止める。

「三坂家では本来は何年か付き合ってから身体を許すの。それはで  
きなかつたけどね。……とにかくこれはわたしのなかでのけじめだ  
から決定なの。良い？」

「え？いや、疑問と突っ込みどころだらけだけど……京子の中で  
折り合いをつけるためってんならわかったよ。」

「よろしい。では今日はもう寝ましよう。おやすみなさい。」

そう言って布団をかぶり目を閉じた。

あと1回はやったるぞと思ってたのになあ…

なんか触ったら怒られそうな気配が出てるから今日は大人しく寝ることにした。

なお翌日の出来事を簡単にまとめる。

お互いの関係を確認したということであれはもう遠慮しなかった。

今は付き合っていない。でも『最終的には俺が責任をとる』。

なら襲ってもいいと判断した！

朝ご飯を食べ終わり二人でくつついてテレビを見てたら俺はまた発情期になった。

これは俺がケダモノなせいもあるが京子がすごくいい匂いなせいもある。

そんな風に自分に都合よく言い訳をし、乗り気じゃない京子に堂々と性魔法を使い襲い掛かり、やっては疲れて寝て、起きたらまた襲うというサイクルで1日を消費した。

エロ太たちから今後の対策会議をしようというメールが来ていたけど行けない旨を返信し朝から晩まで2人で過ごした。

あ、今日も泊まっていきました。夜は5回です。

性魔法は素晴らしい！

俺に性魔法を教えてくれたサキュバスには心から感謝したい。

下記にあるのはネタバレです。注意してください。

あらためて京子ちゃんのことです。エロいことやりまくってますがメインヒロインではありません。他のヒロインが出てくると出番は減る予定です。ちゃんと責任とってずっと一緒にいますけど。

この大会編はプロローグ、ゲームで言うなら共通ルート(ちよつと違うけど)にあたります。他のヒロインは大会後に出てきます。

しかし筆者が真のメインヒロイン(?)としているキャラが話に出てくるのはもうホントずっずっずっずっずと先のことです。

まだまだ未熟な私の作品ですがこれからもどうかお付き合いくださいませ。

## 20話 歴史のお勉強と西川の戦い

今日は平日。

バトルロイヤルが終了してトーナメントの組み合わせが決まり、今日からその1回戦が始まっている。

全校応援は俺、松田、エロ太の試合があるときだけだが今日はない。

3人とも試合は明日だ。

なので普通に授業があるが俺たち3人は大会に行って試合を見るのなら学校を休んでもいいとなっている。

俺は敵の情報収集はエロ太にまかせて学校に来た。

松田は寺島といたいから学校に来ている。

そんなわけで普通に授業を受けているのだ。

今の時間は歴史。

この火星に人が生きるようになった歴史を中年のおっさん教師が話しているのだが、初等部から中等部、高等部と何回も学んだこと

なので飽きている。

周りを見ればかなりの数の学生が寝ている。

「ふわ〜あう。」

思いつきりあくびをした。

口元は手で隠してたがおっさんに見つかってしまった。

「なんだ笹川、眠そうだな。体調管理はしっかりしないといけないぞ。」

「他の試合の録画したのを見てたらなかなか寝れなくて。」

堂々とウソをついた。

「そうか。熱心なのはいいけど無理はしないようにな。一つ上の池田が敗退したし残るのはお前らだけなんだからな。」

この先生はうちの学校の学生が活躍するのを喜んでる人なんて俺に対して割と好意的だ。

中には学生が活躍するのをよく思わないやつもいるから（睦美ち

やんのことも関係してると思われるけど、この先生の対応はありがたい。

素直に気を付けますというところ、おっさんは授業に戻った。

俺もちょっとだけ授業に集中することにした。

それは人類がまだ地球にしかいなかった時代の話。

世界大戦が終結して数十年後のある日、のちに魔法式と呼ばれるものが見つかった。

これは今までの化学、物理法則とは大きく異なる現象を引き起こす未知の物であると発表される。

当初はウソの類と思われ一部でしか研究が行われていなかった。

しかし研究が進み、やがて人類が夢物語だと思っていた魔法のよきな現象が現実存在する技術になったとき、世界中で競って研究



されることとなる。生物の中に流れるエネルギー（魔力）もこの過程で見つかった。

そんな時代、日本に一人の男が現れる。

のちに初代皇帝と呼ばれるようになる男は魔法学における真の天才であった。

魔法式を組み合わせ魔法陣を作る技術、魔法式をものに組み込み物質を強化するなどのエンチャントの技術、さらにはそこから魔法式を用いないで魔力のみで魔法陣を作り出す技術など今では当たり前のものだがその基礎を彼は作り出した。

他にもさまざまなものを生み出したがその中の1つに魔法によって石油を産生するというものがあった。

当時、付き合っていた女性の一人に財閥の御令嬢がいた。

その女性の紹介で財閥トップの彼女の父親と会談。

結果として財政、人材など大きなバックアップを得た彼は石油を人工的に産生する施設を開発。巨大な資金を手に入れた。

余談ではあるがこの財閥御令嬢の子供はのちの十五貴族の一つとなる。そして日本の財閥は令嬢の弟が継ぐこととなる。

話は戻ってその得た資金を元手に優秀な人材を集めさらなる研究

を進める。このときのチーム名が『開拓者』だ。

数年後、『開拓者』は火星への進出を表明した。

彼が石油を開発したこと、また魔法式に関する基礎技術を確立させたことなどで世界的にその名声は広がっていたが今回の声明は多くのものが「失敗する」「焦り過ぎ」「調子に乗り過ぎ」「このように受け止めた。

大部分のものが失敗すると思え、止めることもしない中で彼らはあっさりと火星に到着。

そして現在も火星の中心となっている首都の巨大な建造物

『始原の塔』を設立する。

この塔が持つ機能の一つである環境改変により人の住める環境へと変えられた。

このときになって他国は大慌てになったが時すでに遅い。

火星に行き来する技術は魔法を使用するものであり開拓者のみを持つている。ロケットを利用し火星まで行けなくもなかったが始原の塔より展開される結界が火星への侵入を阻むこととなる。

あつという間に火星は開拓者のものとなり国がつくられはじめた。

もちろんこれは開拓者だけではなく日本やその友好国、企業の援助の元ではあるが。

当然納得しない大国の中には戦争を仕掛けてくるものもあった（この時矛先はまず日本である）。が、これらの国はすべて敗北することとなる。

人類の戦争に用いられる武器が剣や槍、弓から銃へと変わりやがては戦車や戦闘機と移り変わったように、この時は初めて魔法が用いられた。

開拓者の人間は宣戦布告をした国々と正面から戦わず、空間転移を用いて直接敵の主要機関の親玉を捕獲。そのまま自陣へ持ち帰り痛めつけた後にメディアの前に連行、敗北宣言をさせた。

こうして戦争は軍人や自衛隊が戦うまでもなく終わったのである。

これが1年戦争ならぬ『1日戦争』と呼ばれた戦争である。

中にはリーダーが捕らわれたため副リーダーが後継者となり戦おうとした国もあったがこの場合、捕えた元リーダーは殺して次のリーダーを捕獲 敗北宣言。これを繰り返してうちにあっさりとおうとする国はなくなつた。

この敗北は魔法技術の差だと気付いた国々は爆弾などの軍事兵器から魔法技術を用いた研究にシフトしたが地球にいる限り開拓者には追いつけるはずもなく意味のないものである。（このことについてはまた別の機会にでも触れるかな。覚えていたらだけど）

時は流れ開拓者のリーダーは皇帝に即位し火星の単一国家が誕生したのである。

と一般的には教えられている。

しかし実際のところこれが真実なのかはわからない。何せ数百年前のことだ。

戦争に勝ったのが開拓者である以上いくらでも情報操作はできただろうしな。

話自体もどこか嘘くさい感じがするし。

まあ、生まれた時からこの国にいる一般的な人間にとってそんな大昔のことはどうでもいいのかもしれない。

今では地球も認める火星の単一国家だから領土の問題とか起きることもないしな。

「以上で今日の講義の内容は大体終わりだが質問ある人はいるか？」

おっさんが聞くがほとんどが寝てるんで意味ないな。

それにこの講義の内容は初等部から聞かされることだからわかってることだし。

クラスの様子を見ても顔色一つ変えないおっさんはもうこの状態に慣れてるんだらうな。

特に注意もせず教室を出て行った。

俺の方からいくつか補足をするとだ、始原の塔の機能である環境改変だとか惑星一つを丸ごと包む結界とかいくつかの機能は実際に存在するものだがいまだにどのように行われているかは不明だ。

ただ環境改変の方は先代か先々代の皇帝が似たような機能を持つ『生命の種子』と呼ばれるものを開発したことで木星にも生身で人が入れるようになったってことはあるけど。

しかし生命の種子も作成者の皇帝以外には今現在作れていないんだけどな。

魔王として長い時を生きてる俺でさえ不明な技術。まさに天才と呼ばれる所以だ。

当然、初代が生きていた時代の連中に太刀打ちできるはずもなかったわけだな。

あゝちなみに皇帝は世襲ではないぞ。詳しくは今度政治の話をするときにでも言つと思つが。

先代がなくなつてからもつ50年ほど。それから現在まで皇帝不在で、総帥と呼ばれるものが政治を取り仕切っている。

ま、この辺はまたの機会だな。

「ふう〜疲れた」

「お前ずっと寝てたたる西川。」

起きていきなり疲れたと言い出す男にツッコミを入れる。

「そんなことよりも次は選択授業だぞ。やだなー俺絶対に安田にい

びられるし。」

近くにいる松田が憂鬱そうな顔で言う。

松田の選択授業は戦闘系である。

講師の安田は歴史のおっさんと違って学生が勝ち残ってることにあまりいい顔しないみたいだ。

俺の方が安田より強いから廊下で会っても俺に何か言うことはないけど松田は実際にはレベル2だからな。

「本選参加者がこんなこともできないのか。」とか嫌味ったらしいことを言うやつなんだ。

「まあ、そこは仕方ない、耐えるんだ松田！あとで寺島に癒やしてもらえ。」

「松田は寺島がいるから良いけどさ、俺はどうすればいいんだ？」

机へばりつきながら西川が言う。

「どうすればって？西川は本選関係ないじゃん。てかボクチンやめたのか。」

「ボクチンはやめだ。」

言いながら体を起こす。

「そんなことよりだ。安田のやつ俺とか橋本とかロイワードとか地方大会で敗退した奴に対しては「こんなこともできないから地方大会どまりなんだな。よくこれで出場しようと考えたもんだ」とか言ってくるの！もうマジむかつくんだよ！」

それは確かにムカつくかも。仕方ないから寺島に頼むか。

「寺島」

「なに？」

松田に話しかけるためこっちに来てたみたいだ。ちょうど良い。

「次の選択でこいつら安田に苛められるらしいから終わったら癒してあげて。あ、虎川原はどうする？」

「よろしくお願いします！」

空気を読む虎川原。



しかし寺島はこちらには全く反応せず松田の頭を撫でながら二人の世界に入り込んだ。

「クツソ　！松田だけ彼女がいてズルい！あいつは裏切り者だ。大祐、虎うち！俺たちも彼女作ろうぜ。」

「そうだな。俺もいい加減、桃（池田ファンとなった幼馴染）のやつよりいい女見つけて幸せになるべきだよな。」

「そ、そうか。頑張れ。」

言えねえ…京子との関係は言えねえ……………

「おいー！何その反応？おかしくない？悔しくないわけ松田だけ幸せで。」

「いや、俺は今は大会優先だから女とか言ってる場合じゃないし。」

視線を感じるのでそっちを見ると、松田がニヤニヤしながら俺を見てた。

てめ！余計なこと言っんじゃないぞ！

思いを込めた視線を魔力と共に松田へ叩き付けたら大人しくなった。

「松田がどうかしたのか？」

「何でもない。気にするな。」

危ない、虎川原のやつ何気に鋭い。意識を逸らそう。

俺はちよつと離れたところでイケメングループとイケてる女グループで集まっているマイクを呼びかけた。なんだ？と聞き返すマイクに対して率直に言った。

「西川と虎川原に女紹介してやってくんない？彼女欲しいんだって。」

「良いけどどんな女がいいんだ？」

「「カワイイ女！」」

2人はためらうことなく即答する。

「それなら大祐に三坂さんを紹介してもらえ。」とマイクが言えば

「そうだけどそろそろ俺たちも現実を見てもう少しレベルを下げようと思つてさ。な、大祐、虎？三坂さんほどでなくても良い。」とかなり上から目線発言の西川。

傍で聞いてた女たちは不快に感じたようでストレートに言った。

「自分のレベル考えて言いなよ。鏡見ろっつーの。」

当然、西川は反論し女子グループとバトルとなった。

「何の取り柄も無いくせに可愛い女と付き合いたいだとか身の程知らずでウザい。」

「誰もてめえみたいなヤリマンは求めてねえよ。」

「ハア！？誰がヤリマンだ！」

「お前だお前！前の男と別れて1週間もしないうちに次の男と付き合ってたろうが！このユルユル女が！」

急速にヒートアップするバトルに俺やマイクはついていけない。

虎川原は最初は静観してたが、「笹川君は中級だから別として、あんたや虎川原みたいに顔も才能もない奴が可愛い女と付き合えるわけないじゃん！」の言葉を聞き戦場へと向かっていった。

「じめんマイクとみんな。」

イケメングループの男友達に謝罪する。女はみんな戦場だ。

「いや、大祐のせいじゃないよ。どうにもならんさ。」

そして現在は松田や寺島も含めてみんなで観戦している。

女たちの主張は、『可愛い彼女を作りたいなら顔か実力（勉強、運動何でもいいけど）がないとダメだ。今の状態で彼女が欲しいなら相手の顔とかに注文付けるな』というもので西川たちは『可愛い女と付き合いたいと思うのは普通なこと、今の俺たちが可愛い女じゃなきゃ付き合えないというのはおかしくない』というものだ。

うん、状況にもよるけど早く彼女を作りたいというなら女の子の主張が正しいよね。

しかし西川が「大祐、お前は俺たちの言い分がわかるよな!？」と聞いてくる。

困った俺はマイクに話を振った。マイクも困ってたけどいつの間にかまた戦争に戻っていた。

「正直なところ女子の意見が正しいよね」と松田が言うとギャラリ  
ーはみな同意した。

「早く彼女が欲しいならね。いつまでも待ちますっていつなら別に  
可愛い子以外とは付き合いませんでも良いと思っけど。」と寺島も  
補足する。

ていつかそろそろ授業の移動をしなきゃまずいんだけどどうしよ  
う。

「お、なんか凄いことになってるね!？」

「京子が、どうした?」

いつの間にかうちのクラスの仲に京子が入ってきてた。俺の質問  
に答える前に京子がマイクや松田たちに挨拶すると、松田が微妙に  
見惚れていた。

それを寺島が後ろから殴っている。

「仲良いんですね。」

笑いながら京子が言つと寺島は松田の腕を掴み照れながら言つ。

「いや、そういっじゃないんですよ。こいつバカだから。」

「松田は完全に尻に敷に敷かれてるな〜」「うんうん。」「仲よしカットプルなんだね。羨ましい。」

マイク、俺、京子のセリフだ。

からかわれてさらに赤くなった寺島は松田を連れて教室を出て行った。

それを微笑んで見送った後、いつの間にかバトルをやめて近くに来ていた西川たちに京子が挨拶し、そこで俺は改めて用件を聞いた。

どうやら次の授業のお誘いに来たようだ。

俺は戦闘系の選択授業を取ってないから次の時間は魔法式研究の方だ。

戦闘系は1学年まとめて、研究系は研究内容によってもさらにいくつかに分かれるが俺は京子と同じく大部分の人がとる『物質へのエンチャント』と『マジックアイテムの作成』の授業を選んでる。

もちろん必修の戦闘系や研究は別枠であるぞ。

ちなみに選択授業では学年の男の7割は戦闘系をとり、女子は2割くらいが戦闘系だ。

てなわけと同じ授業を受けるから一緒に座ろつといつことらしい  
(席は自由だ)

「なんで急に?」と問うと「大祐、今やってるところとかもう全部わかるでしょう? わからないところあつたら教えてもらえるし。」

成績優秀な京子に必要なだろうと思つたら廊下に京子の友達もいた。

あまり成績がよろしくない子たちもいる。

「わかった。」

「ありがとう!」

微笑みながら俺の腕に抱きつく京子。

ヤバイ!みんなヤバいけど特に西川と虎川原がヤバイ!

「あの京子さん。」

「なに?」

「胸が当たってるんですけど。」

「大丈夫だよ。わたしは気にして無いから。それよりもそろそろ遅

刻しそうだから早く行こう。」

ずるずると引きずられる俺の後ろで女子たちが「ほら、顔はあんたたちと同じくらいでも実力があれば三坂さんだって仲良くなれるけどあんたたちじゃ無理だね。」という声と西川たちの悲しみの声が聞こえた。

顔のことを言われた俺も少し悲しかった。



## 21話 トーナメントの開始です(前書き)

2話に分かれていたのをくっつけたためいつもより長めです。

## 21話 トーナメントの開始です

さていよいよ俺たちのトーナメント最初の試合の日が来た。

身支度を整えた俺は京子と一緒に家を出る。

うん。今日はちゃんと戦闘用の服装だしロングソードもっている。

完璧だ。

「本当に完璧なの？忘れ物ない？」

「ありません。服も武器も問題無しでしょ。てか何で俺の考えてることわかるの？」

「声に出てたよ。」

制服を着た京子は呆れたような顔でこちらを見てくる

誰にだってミスはあると思うから俺は気にしない。

そんなことよりこれからの試合のことを考えよう。といっても今日は俺や部下たちの相手は下級だったり中の下だったりとそれほど警戒する必要のない相手だ。

むしろバトルロイヤルで、はっちゃけた俺たちの方が注目され警戒されてしまっている。少し調子に乗りすぎた。

昨日のニュースとかでも話題の選手ということであれは出ていたし……特に俺は服装やら使用した魔法やらで目立ちまくっている。

ロンギヌスは完全に1から俺が作った魔法だ。当然俺と部下以外は誰も知らなかった。他にも誰も知らない魔法を使うのではないかとかなり警戒されている。

まあ、当然だな。知ってる魔法よりも知らない魔法への対処の方が難しいもんな。

おまけにオリジナルの魔法を作り出すのは上級BMが専門の研究者と相場は決まっている。

新しいダンジョンで見つかる新種の魔法式を用いて作られたものがそれだ。ただそれもすぐに検証されて有用であれば公式魔法として登録されることになる。有用でないとされればオリジナルのままだが有用でないと考えられるものをいつまでも使うものもないだろう。

また、新規のダンジョンは全て開拓者が作り管理しているためそこで得られた魔法式を独占し隠し通すことなどはできない。

自力型の魔法が開発されることなどもっと少ない。

何度か自力型と魔法式型の説明をしているが、自力型は魔法式型に比べて難易度が高いしめんどくさい。

例えるなら木材に火をつける際、手で「うお〜！」と木と木擦り合わせる原始的な方法で火をつけるのが自力型で、ライターやチャッカマンなどで火をつけるのが魔法式型だ。

だからいまだき珍しいオリジナルの詠唱による魔法を使う俺は今大会のダークホースらしい。

とはいっても公式の賭けでは俺は3位だと予想されている。例年は優勝者を予測するというものが多いのだが、今年は貴族が勝つと思われているため2位と3位二人を当てるといいう賭けが多い。あ、3位決定戦は無いから3位は二人だ。

俺が3位と考えられているのは俺が順当に勝ち進めば準決勝で貴族代表『サーマレイス』と当たるからだ。

話が逸れたな。

とにかく俺たちは他の選手から警戒されている。

それはいいが、いや良くは無いがそれ以上に問題なのは松田だ。

ニユースを見る限りではなんと松田も要注意人物の一人だとされていた！

まあ、これも原因は俺たちなわけで、俺たちと行動しているからつてのと俺たちが公式レベルが2となっているからだ。だから松田も「実は中級なのでは？」とニユースで言っていた。ひどいところになると「実は彼がああチームのリーダーで一番の実力者なのでは？」と報道しているところもあった。

昨日の夜、京子と二人でニユースを見ていると松田が半泣きにな

りながら「どうしよう？なんかすんごい勘違いされてるんだけど…」と通信してきた。

このときすぐ隣で俺に引っ付いていた京子も通信範囲に入っていたから松田にも京子のラフな格好が見えていたはずだけど、それにも気づかないようでも「どうしよう？どうしよう？」と言っていた。

正直、今更どうにもならんだろと思ったけど自重しておいた。

かわりにほどほどに慰めた後、寺島に連絡し松田の事を頼んで置いた。

あいつは前の試合のときも緊張していた松田の相手をして上手く落ち着かせていたし大丈夫だろう。

そう判断した俺は松田のことは忘れ、寝坊しないように早めに寝ることにした。ちなみに今回はエロいことしてません。普通におとなしく寝ました。

さてさてそんなことを思いながら2人で歩いていると転移施設に到着した。

少し早めに来たからか現地集合だからここに学校の人はいない。

二人で施設に入り、身分証明を見せる。俺のほうはテレビでまくっていたからか職員は俺を知っているようだったが身分証の提示は確認された。まあ当然か。

料金は学校が払ってくれるので俺たちはそのまま施設の奥に進み、直径が60メートルはあるつか巨大な転移の魔方陣の中心へと進む。客は俺たちだけみたいだな。

「では起動します。」

職員の声が聞こえた数秒後、魔方陣から光が漏れる。そして一際強くなると同時に転移の魔法が発動。

次の瞬間には首都の試合会場に最寄の転移施設へと移動していた。

「お疲れ様です。具合が悪くなったりしてませんか？」

「大丈夫です。」

いつものやりとりをしたあと店を出る。

エリア8は曇りだったがここは雲ひとつ無い快晴だった。

「お〜いい天気だな！今日は気持ちよく動けそうだ。」

「そつだね！でもあんまり無茶しちゃだめだよ。」

そんなことを話しながら手を繋ぎ歩き出す。

試合会場は巨大だからここから既に見える。

遅刻の可能性はないしのんびり歩くことにした。

京子と二人でいるときはいつもだけど周りの視線が集まる。

男はみんな京子の顔と胸をガン見して、隣を歩く俺をすごい嫉妬の籠もりまくった視線で見てる。

女は京子を見たあと俺を見て「え？何あの組み合わせ？」という顔をするし、時には「つりあってね〜！もったいないねあの娘。」といってる人さえいる。まあ、俺はさほど気にしないから良いんだけどな。かわいい子に言われると傷つくけどブスに言われても気にならない。

だが今日はちょっと視線が違った。

おそらくは連日の報道のせいなんだろう。顔が知られてしまったらしい。いつものような京子のオプシオンとしてではなく俺自身に対して好奇の視線が寄せられる。

「が、最近は何かに視線に慣れてきているので周りを軽やかにスルーして二人でのんびり歩いている。」

先ほどもいったように話をしながら歩く俺たちの視界には試合会場が映っている。そしてその奥の背景全てが始原の塔で埋め尽くされている。

「しっかし相変わらずでつかい塔だよなあ。横幅もどこまでも続いているんじゃないの？ってくらいあるし。上を見ても頂上なんて見えないし。」

「あたり前だよ。下層には街が入ってるんだし、高さだって雲の遙か上まであるわけだし。皇帝しか入れないって言われてる最上層なんて大気圏の高さだって話しだもん。」

「確かにな。でも良くこんなもの作ったよな。どうやって造ったのかさっぱりだ。俺でも造れないだろうな。」

「というか造ろうと思わない。魔王の力があつたとしてもこんなハンパなく巨大なもの設計しようとも思わない。」



あと100メートルで会場の入り口つてところで俺たちは手をはなした。堂々行っても大丈夫だろうけど大会が終わるまでは面倒は避けるにこしたことはない。

入り口には選手や応援など既にかなりの人がいる。うちの学校の制服を着た人も十数名ほどいるようだ。話したことある人はいないみたいだけど。

俺と松田は午後からだけど、エロ太のやつが午前中から試合なので11時集合となっているところを10時に来ているとは！

「ちーす！」「おはようございます。」

俺と京子が挨拶しながら近づくと向こうもこちらに気づき「おはようございます」と返してくれた。

会場のほうからは歓声が聞こえる。早い時間から始まる予定の試合が行われているのだろう。

「先輩今日もがんばってくださいね。」

初めて見る人だが先輩と呼びかけるぐらいなんだから後輩なんだろう、いかにもロリですという感じの女の子が話しかけてきた。

「ありがとう。応援してくれるなら俺もう頑張っちゃおうよ！」

「ハイ！わたし一生懸命応援します！」

両手をぎゅっと握りしめ力強く答えてくれるロリ子（仮名）。

胸の薄い女は好みじゃないがこんな感じの素直そうなコは可愛いと思う。

「俺のテンションを高めるためにロリちゃんを抱きしめていい？」

「え〜ダメです〜。ロリちゃん三坂先輩に怒られてしまいます〜。」

思いのほかノリも良いね！いや、内心ではこいつキモイとか思われてるかもしれないけど…

でもそんなことまで俺は気にしない。

てなわけで普通にロリちゃんと話していると俺や西川と同程度の外見の持ち主の多分後輩が話しかけてきた。

「やっぱり笹川先輩は三坂先輩と付き合ってるんですか？前は先輩は三上先生派だと聞いてたんですが。」

外見は俺たち同様残念だけどクラスの笑いの中心にいるような雰囲気  
の男だなあ、となんとなく感じながら俺は聞き返した。

「君はどつちが好みなんだ？京子？睦美ちゃん？ロリちゃん？」

「何でわたしが入ってるんですか？」と訴えるロリちゃん  
の言葉を聞き流して彼の返事を待っている

「あ、え、あー……自分は……三上先生ですね。」と照れながら答えてくれた。

「睦美ちゃん派か！ポイントも童顔の年上か？もしくはロリ顔巨乳か？俺的には巨乳ってところが大きいな！あと睦美ちゃんは  
まだ誰とも付き合ったことないらしいし。」

「マジっすか！？それは知らなかったっす！あんなに可愛いんだから男だつて放つておかなかつただろうに……これは俺と先生が結ばれる運命ですね。」

「なんでだろう？西川とかもそうだがうちの学校の男は妄想レベルが激しいと思う。」

「運命かどうかはおいといて、睦美ちゃんのどこに惚れたんだ？」

「自分は一目惚れですね！だってあんな可愛い人ほかにいないでし

よう!?!三坂さんくらいですよ。」

「貴族の次期当主とかはすごい美少女美女ばかりだぞ。」

「貴族は含めませんよ。そもそも住んでる世界が違いますから!あくまで現実的なところでの話です。いや、貴族を含めたとしても先生や三坂さんは貴族の美女たちに負けてませんもの!」

おーーーーー意外なところに睦美ちゃん派の人がいるなあ…そういうえば最近京子とばかり一緒にいるから睦美ちゃんにはあまり話しかけていなかったな。今日の試合が終わったら少しくらい話しかけてみるか!

俺がそんなことを考えてる間にも後輩君は睦美ちゃんの良い所をひたすら挙げ連ねて話しつつづけている。

地雷を踏んだかな…近くで知り合いの後輩と話している京子とかにも後輩君の語りが聞こえているのだろう、微妙な視線でこっちを見ている。

この微妙な空気は10分後に工口太が来るまで続いた。

会場入りし、しばらくすると工口太の試合10分前となった。既に学生も教師も大多数が到着し応援席に移動している。

客席は満席で数万人の人がこの会場にいて考えると何かすごいことのような気がする。

そういえば言ったことなかったが、当然会場内に入れない人もいる中で俺たちが毎回席を取れているのは、俺たちが試合に出るからだ。選手のいる学校は全校応援で優先的に席が取れる。社会人は仕事もあるしそういう優先権はない。学生のと時のみの特権だ。

さてさてそんな人がたくさんいる会場の中で俺は再び微妙な空気を感じている。

原因は完全にあれだ、池田先輩と俺の隣にいて手をつないでいる女だ。

京子の話によると

「あの人がわたしに付き合ってた回数が二桁になったの。もう流石に嫌になったから大祐のことが好きって言っちゃった。だから大祐もちゃんと上手く合わせて！ね？」

この発言のおかげで普段は、多くの男が俺を睨むはずなのに池田先輩のオーラがやばすぎて他の男は俺を見るどころじゃなくなっている。先輩のファンたちもドン引きしてるもの。

西川たちに声をかけると

「大祐、諦めろ。うちの学校で先輩を敵に回しても大丈夫なのはお前が佐々門しかないし。俺たちはちゃんと状況を把握してるからさ、陰ながら助けられる部分は助けるから。」

「実際、先輩がストーカーっぽいのがそもそも原因だからなあ…三坂さんの出した条件を達成できなかった以上、素直に身を引けば良いのに。」

というように西川と虎川原が言う。

まあ、確かに先輩はストーカーっぽいけど俺はそこは非難できないな。俺が京子に手を出したってのもあるけどそれ以上に、池田先輩はかなり本気だったからな。

俺も昔、本気で幼馴染みを好きになつてすごく傷ついて、それでもどうしても諦められないって思ってたことがあったから気持ちはわからなくもない。

幼馴染といえばあいつらは今頃どうしてるんだろ？この会場にはいないからおそらくは木星のダンジョンのほうに行ってるんだろうな…たぶん沙夜も。

今も好きってわけではないけど何となく切なくなる感じ。

「どっしたの？」

俺の頬を突きながら京子が聞いてくる。

それには答えず、違う話を持ち出した。

数分後、エロ太が会場に入ってきた。

『まもなく次の試合を開始いたします。各選手はそれぞれ1番、2番の割り当てられ結界内に進んでください。』

アナウンスに従い選手たちが結界によって2つに区切られた戦闘区域のうち自分の試合場所として決められたフィールドへ進む。

1回戦や2回戦などは2試合を同時に行い、準々決勝からは1試合ずつ会場丸ごと使い行われる。

また試合時間は準々決勝の前までは30分で準々決勝からは無制限となる。

エロ太の試合は東心峰の客席からは離れているが俺は視覚を強化して見れるし他の人もモニターで問題なく見ることが出来る。

現在会場では2つの試合が同時に行われている。

先ほどまでは気まずい空気が漂う東心峰の客席だったが、今は工口太に声援を投げかけることに精一杯力を注いでいる。

俺の見立てでは真面目に戦えば10秒で終わる試合がいまだに続いているということからワザと長引かせているようだ。

「瞬殺するよりも接戦の方が盛り上がる。俺も女が欲しいからちよつと魅せてくるぜ。」

試合前にあいつが言った言葉はこういうことだったらしい。



2つの試合の選手たちはいまだ戦っている。エロ太の相手は中の下というところなので余裕で勝てる相手のはずなのに何故かあの馬鹿部下は何箇所か傷を負っている。

あいつの顔を見る限りワザとなんだろう。まったく何やってんだか。

そんなことを考えながらしばらくぼーっとしてると京子が唐突に話し始めた。

「ねえ、少し複雑なんだけど三上先生のことはいいの？さっきすげーい悲しそう顔をしたよ。」

「あーー京子も気づいてたか。」

試合が始まる前はほとんどの人がこっちを注目していたからな。睦美ちゃんも当然こっちを見てた。もうホントショックですという顔をしてたけど、まさか他の先生と一緒にいる睦美ちゃんを口説きに行くわけにもいかないし。

「俺の試合が終わったら話しかけに行こうと思ってたところだ。」

「それなら良いけどね。でもここ数日わたしの部屋にずっといたから今日はダメだよ。ちゃんと先生のところに行ってあげなきゃ。」

真顔で言う京子ちゃん。

俺は睦美ちゃんの家に行ったことなんてないんだけど……

……

あ、そうか！？そもそも京子と関係持ったのって俺が睦美ちゃんにセクハラした日だ！あの時は下着の中に手を入れてたし、睦美ちゃんの胸にいたってはほぼ丸出し状態だったか。

あの場面を見たなら睦美ちゃんの家にお泊り位してるって思うのも当然か。

まあ、それはそれとして今日は睦美ちゃんに迫ろうと俺は決意した。

どうせうちの学校のやつが喧嘩を売ってきてても対処できるし。

嫉妬の視線も気にしないようにするし。

こんな悪いことを考えていると試合は終わっていた。京子にエロ太がどうなったのか聞くと、対戦相手の猛攻に追い詰められ「負ける!？」と思った瞬間、攻撃をギリギリで回避!そしてきれいな力ウンターを決めて勝ち上がったそうだ。

そんなうまく良い試合を演じ客席に戻って来たエロ太はクラスの連中に囲まれてきゃーきゃー言われている。

特別かわいいコじゃなくてもたくさん女の子に褒めて貰えるのは気分がいいんだよな。あいつも微妙に誇らしげだし。

ふとエロ太がこっちを見てきたから俺も視線でからかいをこめつつもおめでとうと伝えておいた。エロ太は少しだけニヤリとしたあとまたクラスの連中と話し始めた。

「良いなあ〜」

いきなり京子が言うてくる。

「何が?」

「目と目で通じ合っつて言っの？そんな感じがさ。」

「やめてー！気持ち悪いから。別に京子だって仲のいい女友達と視線で会話できるだろ？」

「出来なくはないけどね。でも仲の良い大祐と佐々門君を見ていると妬いちゃうかも。」

「おかしいよ。いろいろおかしいよ。京子とあいつなら躊躇うことなく京子を選ぶから。」

「からかい足りない顔をしてる京子が何か言う前に立ち上がり昼ごはんを食べに行くことを提案した。」

西川たちにも声をかけると一緒にいくことになった。

さすがに食堂はどこも混雑していたため食事が終わると直ぐに店を出た。

特別何かしようということもないため客席に戻り再び試合を観戦する。

そして2時間後、俺の試合が終わった。

『始まった』ではなく『終わった』だ。

もう1つの試合は当然まだ続いている中で俺は開始10秒で終わった。

対戦相手の学生はトーナメント初戦であること、注目選手の俺と当たったことを見るからに緊張していた。

たぶん松田と似たような経緯で勝ち上がってきた下級の彼は相当パニックになってたんだと思われる。

試合開始数秒後に俺が「な、なんだあれは!？」と彼の後ろを指差したら彼は普通に後ろを見てしまった。

そこを俺が斬って終わり。

実況、解説、観客が何か言う前にアナウンスが試合の終わりを告げ俺は退場した。

通常はこのあと結界の修復作用が働いたためしばらくはその留まるのだが俺は魔力も体力も消耗してないので修復前に出てきた。

さつさと客席に戻ると工口太と事前にこうやって戦うと伝えておいた京子以外の学生と教師はまだ呆然としていた。

睦美ちゃんの目前まで来て、京子に視線を合わせる。

京子が頷いてくれたので周囲と同じく呆然とし「あ、あのく、さ、笹川君と………」と言葉を上手く出せないでいる睦美ちゃんを抱きかかえと”ある場所”へと転移する。

一瞬で視界が変わる。

今いるのは俺の”宝具”の中にある寢室の1つだ。

ここは一番質素な部屋で15畳くらいの大きさだが内装は平凡な学生の部屋と同じようなものだ。ドアから見ても奥に窓があるがカーテンが閉められていてその付近にベッドがある、マンガや小説の本棚が壁際にダンスとともに並び、部屋の中央には床に座って囲むようなテーブルがある。あ、部屋は電気がついてるので明るいぞ。

睦美ちゃんが再起動する前に自分の靴を脱ぎ、睦美ちゃんの靴を脱がす。そしてベッドまで運んで寝かせた。

ここでようやく睦美ちゃんが再起動した。手をつき上半身を起こ

すと

「えー？さ、笹川君ここは何？」と聞いてきた。

「ここは俺の宝具の中だよ。睦美ちゃんから勝ち上がったご褒美を貰おうと思ったんだ。」

言いながら俺もベッドに上がり、後ろから睦美ちゃんを抱きしめる。

うん。良い匂いだ。京子はほのかに甘い匂いがするんだが睦美ちゃんはまた別の匂いだ。香水とかの人工的な匂いじゃなく………上手く言えないけど文字通り女の匂いを感じる。

「宝具持ちなの！？それとご褒美って！？ちよつと笹川君！？」

腕の中でジタバタ暴れてる睦美ちゃん。もう少し遊びたいところだけど松田の試合もあるからあまりふざけてないで言うことは言いたほうが良いな。

睦美ちゃんを抱きかかえて1回転させる。俺と向き合う状態で足を開かせ俺の膝の上に置いた。

そのままギューツと密着した。

睦美ちゃんはしばらく暴れていたが俺が無視して抱きしめていて諦めたのか力を抜いた。

大人しくなったので一旦身体を離し目を見つめる。

今度は左腕でもう少し優しく抱きしめながら右手で頭を撫でる。

「睦美ちゃんも俺を抱きしめて。」

お願いすると珍しいことに素直に抱き返してくれた。ちょっと強めに抱きしめてくれておでこを俺の肩につけている。

身体に密着する胸の感触が実にいい。しばらくそれを堪能していると

「三坂さんに怒られるよ。」

小さな声で囁かれた。

「大丈夫だよ。京子は俺と睦美ちゃんがラブラブだって知ってるからね。」

「え？な、なんで…いや、その前にラブラブじゃありません！先生はご褒美って言うから仕方なく……」



「睦美ちゃん。それは自分で無理があると思わない？ご褒美なら他の生徒にもしちゃおうの？」

「うっ……………」

「それはそれとして京子のことだけどさ、この前の大会への所信表明みたいのをやった日の放課後に、睦美ちゃんにお仕置きしたでしょ？あれね、京子に見られてたんだよ。」

バツと顔を上げた睦美ちゃん。

数秒停止したのち真っ赤になって「えーーーーー！？」と大きな声を上げた。

目を大きく開いて俺を見つめてくる。口がパクパクしてるのがまたなんとも可愛らしいな。

「あのときは睦美ちゃんは胸を丸出したから言い訳なんて出来ないでしょ？ちなみに京子と関係を持ったのはその後だよ。」

俺の言葉はたぶん聞こえてないな。まだパクパクしてるし。

松田の試合まであと30分。試合前に話しかけておきたいからここにいられるのはあと15分ほどだな。

睦美ちゃんが「や、えー！？うー…………どうしよう…………」とボソボソ言

い始めたが完全に回復するのを待ってたら時間切れになってしまっ

「睦美ちゃん睦美ちゃん。」

唇が触れるギリギリまで顔を近づけて呼びかける。

「な、なに？」

顔を離そうとしてるけど頭を撫でてた手で押さえているから逃げられない。

「睦美ちゃんって一人暮らし？」

「うん。そうだけど…」

「そっか！じゃあ今日泊まりに行くから！」

「うん。……え？いや、ダメだよそれは。」

「そっ？じゃあ今日はずっと二人でここにしようね。」

言って額と額をくっつける。くっつけて数センチしかない距離でじっと見つめる。

睦美ちゃんは身体を動かして逃げ出そうとしたり、「ダメだよ。」  
「三坂さんに……」「先生だし……」などいろんなことを言って誤魔化  
そうとしたけど、俺は至近距離でじくじくっと見つめたまま微動だ  
にしなかった。

さすがに俺の相手を何年間もしてるだけあってYESの返事をし  
ない限り俺が動かないことを悟ったんだろう。

静かになった睦美ちゃんは俺とおでこをくつつけたまま視線は下  
のほうを向けていた。

そして小さな声で俺のお願いを了承してくれた。

「お、松田！これから試合か！？」

転移して客席に戻ってきたらちょうど松田が下へ降りようとして  
いるところだった。

「大祐か。もうお前にはいろいろ言いたいことがあるけどそれは良  
いや。とりあえず試合に集中したいし。」

苦笑しながら言う松田だが、それほど緊張していないようだ。寺島がどうにかしてくれただろうな。

「気楽にやれよ！」

「ああ。相手は中級だからな。勝つのは無理でも精一杯がんばってみる！」

男らしい顔で宣言する松田。

隣にいる睦美ちゃんにも一声かけられた松田は、そのまま控え室へと向かった。

俺と睦美ちゃんも自分の席へと戻った。

既に関き直ることを決意した俺は周りの視線からダメージを受けることはない。

西川たちと会話してた京子の隣に戻り試合の観戦を始めた。京子も「おかえり〜」といった後は空気を読んでくれたのか西川たちと会話をしていた。

最初からわかってたとおり、松田は負けた。

しかし中級相手に一歩も引かず最後まで戦う姿勢を見せた松田に東心峰以外の観客も温かい拍手を送った。

試合後、松田がこっそり泣いていてそれを寺島が慰めているのが見えたので俺や西川は声をかけずにそっと立ち去った。

こうして本日の試合が終わり解散となったわけだが俺にとってのメインイベントはこれからだった。

学生は帰宅だが教師は仕事があるとかで学園へと戻っていった。

親には大会が終わるまではちがうとこに泊まると言っており、着替えとか必要なものは京子の部屋にあるから睦美ちゃんの仕事が終わるまで京子の部屋で過ごした。

今から学校を出ますとの連絡が来たので俺は京子に出陣の旨を継げる。

「いってこい！」

親指をグツとあげた京子がそう告げる。

『行ってこい』なのか、『逝ってこい』なのか不明だがとにかく俺は出陣した。

待ち合わせ場所で睦美ちゃんと合流した俺は、手を繋いで睦美ちゃんの家に向かった。

このあと何があったのかは詳しくは語らない。

ただ翌日は試合がないため授業だったのだが、首元に少しだけ赤いあざのようなものが見える睦美ちゃんは時折ぼくっしたり、にやぐっとした顔をしてることがあり生徒に注意されたいらしい。

そしてもう一つ。風呂上りの下着は黒の紐っばいやつだった。こ

れだけは報告しておく。

唐突だが一つ大きな問題がある。

ここ最近の性欲。これは前から懸念していたように魔王化の影響だな。

俺は本来性欲が少なめの人間だったのにも関わらず、近ごろのムラムラ感はいくらにも不自然。それこそ性魔法がなかったら抑えきれないくらいだし。日に日に強くなっている。

異世界への渡り方はゲートアウトだった。つまり魂だけが異世界に行き身体はこの世界に残ったままだった。

そこから考えるに俺の魂の方が問題なんだろう。

肉体と魂は相互に影響し合う。脆弱な人の魂が魔王と化した身体に1000年以上もいれば魔王に侵食されるのは当たり前だ。

そうして火星に帰ってきて元の身体に戻った後、魔王化した魂がオリジナルの身体に影響を与えているのだろう。



とはいっても魂だけで世界に干渉できる神核レベルまで魂が変異したわけではない。

魔王の魂といえどあくまで肉体を介することで世界に存在する以上、やはり肉体の影響を受けるんだと思う。

だから今までは魔王の影響が出ていなかったが時間の経過とともにじわじわと性欲という形で影響が出始めている。

以前、BとCが魔王の力を取り戻すべきだと主張していた。

俺は魂に魔王の痕跡があるからそれを調べれば取り戻せるだろうと予測できていたが、BとCに告げることはなかった。

魔王の力を取り戻すことに興味はなかったし何よりも俺には『目標』があったから！

しかしそうも言ってられなくなりつつある。

まだ時間に余裕があるとはいえ研究は行わねばならないな。

魂の研究となると上位の研究室の設備じゃないと無理だろうが、幸いにも今大会で好成績を残せそうだから何とかなるだろう。大会後、始原の塔の研究室を使えるように申請し研究開始だ。

ま、詳細は大会終わったから改めてしっかりと考えようじゃない

か  
!

## 22話 男達の会話(前書き)

今回はタイトル通り男たちの会話がメインです。

次の23話からは再びバトルパートへと戻ります。

笹川君の戦いは24話からですのでバトル好きの人はもう少し待っててください。

## 22話 男達の会話

「聞いてくれお前たち。」

俺たちは久しぶりに仲間だけで集まった。

場所はいつもの訓練場だ。

訓練所のロビーにあるテーブルを囲んで俺、A、D、Xの4の人が座っている。

毎度のことながら俺たち以外の人はいない。経営大丈夫なのかと思わなくてもないけどそれより話し合いをはじめようと思う。

今回集まった目的は訓練することではなく試合について話し合うという名目だ。

あくまで“名目”だ。

実際のところは俺が今の充実した性生活を唐突に自慢しなくなったために集めただけだ。

睦美ちゃんの部屋でお泊りしてから10日ほどが経った。

試合も進んで既に準々決勝なのだがそれはおいておこう。

睦美ちゃんの初体験以来俺は京子と睦美の部屋を交互に泊まっている。

京子とは「大祐」「京子」と呼び合っているのだが、睦美ちゃんとは「ダイちゃん」「睦美」と呼び合うようになった。

そうあれは2回目のお泊りのときだ。

睦美の手作りご飯を食べ、試合について話をし、風呂に入り、そのままベッドインした。

まだ痛がる睦美に対し微弱な性魔法を使い、魔法を使用するという許可は貰った上でだが、痛みをやわらげ楽しんだ後だ。

散々乱れたことを恥ずかしがって掛け布団の中に潜り込んでいた睦美が上気した顔だけ布団からひょこつと出して言ったんだ。

「あのね笹川君。」

「なに？」

俺が聞き返してもモジモジするばかりで話し出さない彼女に、優しく尋ねたんだ。

「どうしたの睦美ちゃん？」　　すっごく優しい声で

「うん。あのね……せ、先生のことは睦美って呼んでほしいの。」

「????? いつも名前で読んでるよ。睦美ちゃんって。」  
めっさ優しい声で

「そっじゃなくってね……」

「呼び捨て?」

「…うん」

「えーと…じゃあ、行くよ。……睦美。」　　可能な限り甘い声で

「はい。」

呼ばれた瞬間、その日一番の顔の赤さになった睦美と見つめ合ってたさ！また睦美は布団の中に潜っちゃったんだ！

部屋の電気は消してるけど魔法で強化すればいくらでも顔色なんてわかるしさ！

もうすごい可愛いんだって！

「どう？良いだろ！？もう睦美は本当にヤバイんだよ。超萌える！」

部下3人に尋ねてみた。

3人が微妙な顔でそれぞれの顔を見渡した後、Aが口を開いた。

「そうだな。可愛いんじゃないかね？俺はどんな人か知らないけどさ。」

Dが続けて話す。

「ああ。可愛いと思うよ。　　　　　　　　んで、それよりさ昨日家のボイラーが故障してさ、水道からお湯が出なくなっちゃったんだよね。」

「え？マジで!？」

「それはヤバイな！大丈夫なの。」

「大丈夫じゃないよ。母さんと妹がうるさくて

「ストーーーーーッブ!!!!!!!!!!」

Dがいきなりボイラーの話始めてAとXも何故か俺の話よりもボイラーの話に食いついている。

おかしくね!?

「どうしたリーダー？」とDが言う。

「どうした？じゃねえよ！俺が話してたじゃん！なんでボイラーの話なの！？おかしいだろ!？」

「大祐、落ち着けよ。ボイラーの話は大事だろ。なんせ山彦(D)の家のお湯が出なくなるんだから。」

「そつだよ。山彦の家庭にとって大事な問題だと思う。」

「魔法で沸かせや！出来るだろう、それくらい!」

Dを援護するXとA。

お湯を沸かすくらい魔法でいくらでもできる!ぜんぜん大事じゃ



ない！

「ボイラーなんてどうでも良い！とにかく話を戻すぞ！」

何か言いかけたDの口を塞ぎ睦美との話をもう一度再開する。

さっきの続きだが、次の日は京子の家に泊まったんだ。勿論するべきことはしたぞ！

で、翌日はまた睦美と一緒に過ごしたんだけど、この日は祝日で試合も学校もなかったから午前中からデートしたんだよな。

二人でデートの定番“約束の丘”に行ってきたさ、楽しかった！

のんびりと自然公園を散策しながらいろんな植物を観賞して、手作り弁当を食って、膝枕してもらって昼寝して過ごしたんだよな。

午後はまた二人で散歩してたら初等部のときのクラスメイトに会ったんだが、そいつは睦美を俺より年下と判断したみたいでその後二人になったら睦美がふてくされて大変だった。

でも仕方ないんだよな。睦美は童顔だし身長だつて150cm前後だから間違つても教師には見えないから。胸だけFカップで大きいんだよ。すごいやわらかいし。

話は戻してだ、大体の名所を見て最後にあの『カップル広場』に人生で初めて入ったわけなんだが、あそこは噂どおり凄かった！

ホントにカップルしかいなかった。

1人もしくは同性だけで入ったら大変なことになる場所だつたぞ。

あちこちカップルだらけでキスしまくりで、俺たちが座つた場所はまだ少し過激な場所で、本番をしてる人はさすがにいないけどボデイタッチは当たり前だつた。

俺も睦美とキスしながら服の下に手を入れて胸を揉んだりした。

最初は抵抗されたんだけど周りがそういうカップルだけだつたから、あてられたのか空気を讀んだのか大人しくなつたから最後には直接胸を触りまくつた。

「ここでイチャイチャして暗くなるまでいたんだけどこの時にダイちゃんって呼んでも良い？って聞かれたんだよ。具体的には

」

「待って大祐。」

気分良く話してる俺を制止するA。

「何だよ？」

「イチャイチャ広場からの景色はどうだった？」

「カップル広場な。……景色は絶景だったぞ！小高い丘になってるんだけど、眼下にはいろんな花が綺麗に咲きまくってて、遠くには街並みが見えるんだよなあ。そしてさらに遠くには首都までは結構距離があるにも関わらず始原の塔が見える！あの広場からでも天辺が見えないし……言葉で言うのと陳腐な感じになるけども、とにかく絶景だった。デートスポットになるのも当然だな。」

「そうなんだ。俺ガキの頃あそこでウンコしたことあってさ！それが肥料になったのかな？　グワツ！」

言い終わると同時にAを殴り飛ばしてやった。

残った二人を見ながら訊く。

「なに！？お前たちもあそこで汚いことしたわけ？」

「し、してないしてない！なあ、風太？」

「あ、ああ。ありえないぞ。ホント竜也（A）は信じられないな。」

慌てて否定する二人。

まったく主君の幸せな話なんだからしつかりと拝聴するのが礼儀だろうに失礼なやつだ。

「そ、そうだ！俺は同じ学校だし三坂さんも睦美先生も知ってるわけだが、エロいことする時ってやっぱり違うのか？」

「質問が漠然としてるけど……たぶん違うな。」

行為の内容も違うし俺の気持ちよさも違う。

京子は160cmくらいの身長だから170に届かない俺と顔の位置が近いからな、ことあるごとにキスばっかしてる気がする。や、ただ単にキスが好きなだけかもしれないけど。

睦美は背が小さいからキスするにも下を向かなきゃいけないな。本番は抱きかかえてすることが多い。特に最近はベランダで頑張ってる。俺が結界を張っているから周囲からはこっちを視認すること

はできないのだが、それを知らない睦美は

「は、恥ずかしいよダイちゃん…」とすごい恥らった顔で呟く。

それがまあ、可愛いなのよって。

こんな感じのことを具体的にDとXに説明してあげた。

「マジか、あの先生の恥ずかしがる姿は可愛いだろうなあ」

「いや、俺はチラツとしか見たことないからわからないし。」

それぞれXとDの台詞である。

「まあ、そんなわけで俺は幸せいっぱいなわけですよ。大会で有名になったし、準々決勝までできるからな！一部のミスターな女ならやれそうな気もするけど京子と睦美がいるからなあ。うちの学校の女には魅力を感じるやつはいない。」

「そりやそうだろ！あの二人がツートップで3位以下を大きく引き離してるからな。それにもともとお前は魔王だった頃から女の理想が高いしな。」

「でもお前らだってそこそこ有名になってるだろう。AとDは3回戦敗退だけど学生にしては十分な成績だしエロ太は次の準々決勝でサーマレイスとセラヴァイルと戦うだろ？」

俺の質問に対し、対照的な表情を浮かべるDとX。Dは苦笑するような顔でXは嬉しそうな顔だ。

先にDが口を開く。

「確かに可愛い女子も話しかけてくれるようになったけどな。その中には俺好みのコもいてあっちも俺に興味あるとは思っただけど…」

「可愛いのか？だったら俺が初夜権を行使するぞ!？」

ふざけて言うと

「睦美って人は知らないけど京子ちゃんだっけ？あの人は見たことがあるからな。京子ちゃんの方が百倍可愛いさ。」

と返ってきた。

まあ、昔からめちゃくちや可愛い貴族級の女は俺が独占してたからな。

高嶺の花といえるレベルを俺は好むが、Dは普通よりちょっと可愛いくらいの頑張れば採れそうな花を好むからなあ…AもDと同じでXは普通以上であれば何でもイケる。

「で、で、その女の子とどうなったんだ？」といつのまにか戻ってきたAが訊く。

「まだ、何もしてない。メールは結構してるんだけどな………学校だと和也（B）とジョニー（C）の視線がきつくてな」

あゝなるほど。BとCとは幼なじみだしやっぱり気を使ってるのか。

「じゃあ、Aはどうだ？」

「セフレが出来た！」

「マジで!?!」

Xがものすごい勢いで立ち上がり椅子がガタンと音を立てる。

食いつきすぎだ。いや、気持ちはわかるけど。

「ちょ、おまえ、どーゆーことだよ!」

「落ち着けエロ太。で、話の続きは？」

「大したことじゃないぞ。大会出たことで話すようになった人が可

愛いけど遊んでるタイプで俺とも遊ぶようになったただけだ。まあ、あいつは他の男とも遊んでるけど女友達を紹介してくれたりするしなかなか良い関係ですよ。」

微妙に勝ち誇ったように言うA。それに対し俺たちは

「…淫。」「淫だな。」「イポ。」

「最後のリーダーのセリフは何！？むしろピンピンだっつーの！」

「不！」「不潔！」「性病…」

「病気じゃないし！俺も少しは性魔法が使えるからその点は問題ない！そもそもリーダーだって複数の女がいるだろ！」

「俺は純愛だし。」

「どこが！？ろくでなしだろ！」

「あーハイハイ。じゃあ、Dと淫の話は聞いたからエロ太はどうだ？お前は最近クラスの女子とキヤイキヤイしてるじゃねえか。」

「淫って俺か？俺のこと言ってるのか！？」

まだ喚いているAは無視してエロ太の話を聞いてみると、



「俺もDと同じくまだだな。二人で話したりとかは増えたんだけど… 正攻法で口説くのが難しい。レイプは得意なんだけど。」

「あーわかるわかる。俺も和也とジョニーのことを抜きにしてもなかなか難しく感じる。」

工口太の意見にDも同意した。

レイプするのは異世界での話しな。火星でレイプなんてしたら人体実験場へと送られるから。

地球の国家は人権がうんたらと非難してるけど、火星では性犯罪にはかなり厳しい罰則が設けられていて『自分の意思で強引に襲ったりしたら』確実に 魔法や医学などの実験体にされる。

おかげで再犯はまず起きないし(たいてい、実験で死ぬから)、実験体にされる恐怖から性犯罪は他国に比べて少ない。おまけに魔法や医学の発展にも大いに役立つている。

犯罪者にも人権があると叫ぶ国の方が性犯罪が多いのは皮肉なことだ。

まあ、更生できる可能性があるやつでさえ実験体にするのはどうかと思わないでもないが火星の住民は概ね今の制度に賛成している。

冤罪っぽい可能性のあるものはちゃんと調べられるしな。嘘をついても記憶を読み取る魔法があるからすぐわかる。実験体にされる

のは100% が自分の意思で性犯罪を犯したものだだし。

「でも正面から女の子と話すのは楽しいしな。今、俺がいろんな女と話せるのは中級まで来れたのが大きいし、リーダーにはその点だけは感謝してるぜ。」

おっとぼんやりしてる間にいつの間にかいい話っぽくなった。

正面から感謝されると悪い気はしない。

少し良い空気になったのでしばらくはまじめに語り合った。

さて女の話から過去の話になって、現在の話と話題が変わった。

試合についてだが先に言ったようにAとDは3回戦で敗退している。相手は地球出身の上級と火星の中級（中級のなかでは上位だ）のやつだ。

しかしこいつらは俺なら問題なく勝てる相手なんで別に良い。AとDにしてもかなりの接戦で観客も盛り上がったみたいだしな。どっちが勝ってもおかしくない試合だったから今後の訓練でいくらでも取り返せる。

今のこいつらの実力と足りないものはわかったから今大会での目標は達成だ。

俺とエロ太は準々決勝まで来たわけで校長たちがキャッホーしてたな。

俺の相手は中級のなかでの上位のやつだ。レベルは7かな。まあ、フルパワーを出せば俺の敵ではない、と思う。

ここまで戦った相手は1回戦のように楽に勝てた。というのモヤはり詠唱型魔法の特徴である好きな場所に魔方陣を発生させられるというのが大きい。

普通のやつは媒介付近からしか魔法を出せないから、自分の上下左右とオールレンジで迫ってくる魔法の攻撃には慣れていないよう

だ。

ロンギヌスを使った時点で力を隠すことをやめた俺は容赦なく魔法を撃ちまくりどの試合も20秒以内で終わらせた。同じように次の試合も問題なく勝てるだろう。

問題は俺の準決勝の相手になる、エロ太 VS サーマレイス  
セラヴァイルの試合だ。

貴族代表のサーマレイスⅡセラヴァイル。

透き通るような白い肌に紫色の髪を持つセラヴァイル家の分家の人間。年齢は俺たちより2つ上。セミロングの髪をポニーテールにしていて身長は180センチ近くもある。当然というかスタイルは抜群で胸も腰もエロい！顔はかわいいと言うより綺麗と呼ばれるような美貌。最も貴族のほとんどが美女美少女なのだが。顔はきつい印象を与える顔立ちだな。

そんなサーマレイスは俺と同じくどの試合もあっさり終わらせている。

特別なことはしていない。

試合開始と同時に敵へ接近して、男なら腹を殴る、女なら首に手刀を入れて気絶させる。これだけだ。

もちろん相手もただ見てるわけではない。

攻撃したり距離を取ろうとするが一切通用せず敗北している。

本気の場合の実力がさっぱりわからんが少なくとも基礎身体能力は今の俺よりも遥かに上なんだろうな。

それら俺の印象をエロ太に話したらビビるどころかワクワクしているようだった。

「だって、落ちこぼれだった俺が貴族の代表と戦うようなところまで来れたんだぞ！すごく楽しみだ！」

気合の入ったエロ太の言葉を聞き、触発された俺たちはこの日遅くまで語り合った。

…まあ、あまりいい案は出なかったんだけど。

## 23話 十五貴族 セラヴァイルの実力

今日は準々決勝だ！

よって一度に1試合ずつ行われるようになり、戦闘フィールドも2倍の広さになる。

試合の順番は決められているが1試合あたりの時間が無制限なため、何時から自分の試合になるかはわからない。

まあ、一般的に1試合で1時間を越えることはない。

1対1の試合での過去最長は47分だったらしい。

なので準々決勝の4試合は全て今日中に行われる見通しだ。

ちなみに明後日が準決勝で、その2日後が決勝戦だ！

さて俺の試合は第3試合で第4試合がエロ太となる。

第一試合から俺や東心峰の関係者は会場にいるのだが、俺とエロ太は東心峰の客席には座っていない。

少し離れたところでAとDと4人で座っている。

これまで関係ない試合は観戦しないで会話してたり、端末をいじったり、寝てたりしてたが今日はちよつと真面目モードだ。

西川たちクラスメートや京子たちも俺たちから発せられる気配でそれを悟つたらしい。

挨拶をした後は特に声をかけてくることもなく試合を見ていた。

第1、第2試合ともにそこそこ盛り上がる試合だった。試合時間はそれぞれ25分程度。

さすがにここまで残るだけあって実力はあるし、力も近いもの同士が戦っているので観客も大きな歓声を上げていた。

が、それでもあのレベルなら何とかかなると思う。

魔法式のみ、剣技のみで戦うとなるとさすがに厳しいが全力で戦えば問題なく勝てると思われる。

次の俺の第3試合。開始時間は11時からだ。

以前も言ったが対戦相手は中級のレベル7の男だ。

おっさんだし格好良いわけでもダサいわけでもなく微妙なやつだからな。

モブおじさんと呼ぼう。

俺は控え室に向かう前に東心峰の客席まで言って先生や友人に挨拶してきた。

まず校長とかに挨拶した後、

「睦美ちゃんくん。行ってくるよ！君のために！」  
一人きりじゃない時はちゃん付けで読んでる

「睦美ちゃんではなく先生です。もう！……………怪我しないようにね。無理しちゃダメだよ。」

京子に



「行ってくるよ！君に勝利をささげて見せる。」

「ハイハイ頑張つてね」と呆れた様な口調だが俺の胸を軽く叩きながら返してくれた。

クラスメイトたちに

「松田！」

「どうした？」

「俺が勝つたら寺島は俺がもらう。もちろん処女だろうな？」

「「死ぬ」とカップルで言ってきた。」

「じゃあ西川など他のみんな、行ってくるぜ！」

「などってなんだ！」「頑張れよ！」「三坂さんと別れる」「逝つて来い」「頑張つてね」

いろいろな声を背に会場へと向かっていった。

『さて次の第3試合は今大会の注目選手の一人、笹川選手が出てきますが吉宗さん。どんな試合展開になると予想されますか？』

いつものように実況の久留間と解説の吉宗の声が聞こえる。

が、特に気にせず目的地へと向かう。

そしてフィールドに降り立ちモブおじさんの正面で向き合う。

こうしてモブおじさんと向き合ってるわけだが、やはり負ける気がしない。

なんとというか彼からはモブオーラしか感じないのだ。

だが油断してやられるのは馬鹿のすること。

魔王の俺ならともかく人間の俺には調子にのるだけの余裕なんてないはずだ。まして相手はレベル7。

少なくとも基礎身体能力は俺を超えているはずなんだ。

そう自分に暗示をかけ集中力を高める。

目の前の敵にのみ集中した俺にはさっきまでうるさかった実況や解説の声も聞こえなくなった。

事前情報で彼は遠距離から魔法を撃ち相手を倒すタイプとわかっている。

俺はそれを正面から叩き潰すつもりだ。

「それでは時間となりました。これより準々決勝、第3試合をはじめたいと思います。両者ともに準備はよろしいでしょうか？」

試合開始!!!」

準々決勝第3試合が始まった！

「あれ………???ウソ………???」

戸惑っている俺の足元ではモブおじさんが血溜まりに倒れこんでいる。

「試合終了！勝者、笹川大祐！」

ワー！っと歓声が鳴り響く。試合時間は48秒だ。

「なんで?????」

あまりにもあっさり試合が終わり俺の方が戸惑っている。

俺は特別なことなんて何もしてない。

試合開始後、正面から魔法の撃ち合いをした。

さすがに中級の遠距離タイプだけあって数十の魔方陣を正面に展開し下級や中級の魔法を放ってきた。

それに対抗して俺も同じ数だけの魔方陣を魔法式を用いて展開、激しくぶつかり合った。

20秒くらいの拮抗の後、詠唱を終えた俺はモブおじさんの左右と背後に魔方陣を出現させ攻撃！

それ対しておじさんは結界とか魔法で叩き落とすように行動してた。

なのでモブおじさんはその対処で力を分散したため、正面で撃ち合う魔法の弾幕が薄くなった。

まあ、もともと遠距離タイプだ。ゲームとかでも出てくる、魔法は凄い強力だけどスピードとか低めで肉弾線に弱いタイプだったらしいから回避という選択はなかったんだろう。

そんなわけで正面の撃ち合いは俺が有利になったため魔力を高め  
身体強化！

一気に距離をつめた。

そしてそのまま斬りかかったわけだ。

おじさんは反応するまもなくバツサリやられて倒れてしまった！

なんでこんなのが勝ち上がってるのだろう？そう思った俺が調べ  
たところ、わかったのは以下のことだ。

中級の中で一度に数十の魔法を出せるのは一部のエリートだけ。  
肉弾戦派には勿論無理で、遠距離タイプでも出来るやつはごく一握  
りだけ。

俺はエリア大会で戦った美咲ちゃんが使ってたから一般的に出来  
るものだと勘違いしていた。

美咲ちゃんはかなり優秀な女だったってことだな。

モブおじさんはこれまでの試合は全て圧倒的な魔法の火力で反撃を許さぬままに勝ちあがってきたらしい。

中にはひたすら結界をはってモブおじさんの魔力切れを狙おうとしたやつがいたらしいが、魔力が豊富なおじさんは結界を壊しまくって、最終的には相手の方が先に魔力を失ったらしい。

他には接近戦タイプが魔法を回避しつつ近づこうとしたり魔法を使われるより速く近づこうとしたらしいが、膨大な弾幕に回避が不可能であったり、運よく近づけても攻撃を停止して防御に回ったおじさんには攻撃を当てることができなかつたらしい。

そんなわけでエリートのモブおじさんとの撃ち合いを制しあつさりと勝った俺は余計な注目を浴びてしまうが、こんな試合なんて霞んでしまう様な強烈な印象をサーマレイスは第4試合で見せ付けた。

観客席に戻った俺はいつもどおりに先生たちのところへ行く。

「笹川君！君は我が校の誇りだ！」

校長やその他、学園の知名度を考える皆様の言葉に対し内心で「ハイハイ、良かったね」とか適当なことを思ってたけど口からは形式的な挨拶だけを出して対応した。

続いて、睦美と京子の胸に飛び込み、寺島に処女を要求し、松田にあげるからだめだそうだし、友達に話しかけた後は部下たちの元へ向かう。

そして次の試合へと意識を切り替える。

エロ太は俺と拳をコツンとぶつけ合った後、何も言わず控え室に向かった。

サーマレイスの試合は今まですぐに終わっていたため実際のところどのくらい強いのかはわからない。

しかし一見しただけでわかる強者の気配というようなものを漂わせている。

俺の勘ではおそらく魔王の眷属だった頃の部下たちと同等だと思う。人に戻ったエロ太が勝てる相手ではない。



俺たち3人は静かにエロ太の試合が始まるのを待っていた。

しばらくしてエロ太とサーマレイスがそれぞれ反対方向にある入り口からフィールドに入った。

エロ太の服装が下級でよく使われる簡易な金属製の胸当てなどをつけているのに対し、サーマレイスは俺と同様、いや俺が防具はつけないが運動に適したズボン（色は青とか黒とか日によって違うが）に半袖の服を着るのに対し、彼女は完全にプライベートの私服だ。

なんせ黄色を基調としたワンピースだからな。それでも見た感じかなり高そうな衣服だが魔法などはかかってなく明らかに戦闘用ではない。

彼女はどの試合もこうして戦闘向きではない服装だったらしい。

まあ、余裕で勝てるという意思の表れなんだろう。

エロ太ことXもそれを感じているのがわかる。武器さえ持つてきていないサーマレイスに対し敵意をむき出しにしている。

武器がない。媒介がない。つまり魔法はほとんど使えないのだ。

当然肉弾戦となるわけだが、魔法による強化もしないで接近戦を得意とするエロ太に挑み、それでも勝てるという意味表示はこれ以上ないくらいに屈辱だろう。

戦意がやばいくらいにあふれてるXに落ち着き払って目を閉じているサーマレイス。

実況と解説が2人の紹介をしてる間に結界の準備が終わりいよいよ試合が始まる。

「それでは次の試合を始めます。準々決勝第4試合、佐々門風太選手対サーマレイス。セラヴァイル。準備はよろしいでしょうか？」

「試合開始！」

Xは即座に大剣を抜き魔法を発動。身体能力を最大まで強化する。のんびりと歩いて近づいてくるサーマレイスに対して、ダッシュ

で距離をつめて剣を振り下ろす。

かなりのスピードで叩きつけられる攻撃は一般的な中級でさえ防ぐのは難しいだろう！そんな一撃をサーマレイスは魔法を一切使わずに必要な最低限の動きで回避。

振り下ろし後の隙を突いてXの腹部に強烈なパンチを叩き込んだ。

「ぐはあっ！」

あまりにも重い一撃に意識が飛びそうになるがXはこらえたようだ。

それを見たサーマレイスは、あれ？っという様な顔をしながらも続く二撃目を繰り返す。

Xは大剣でとっさにガードし、サーマレイスの拳は大剣の真ん中に当たったが大剣ごと後方へ大きく吹っ飛ばされるX。

サーマレイスは追撃せずにXが立ち上がるのを見ていた。

そして立ち上がったXに声をかける。

「驚きました。まだ立てるんですね。……なるほど……わたしが予想していたよりもあなたは強いようです。」

髪と同様に紫色の瞳でXを見つめて言うサーマレイス。

「俺も驚いた。強いのはわかってたけど魔法無しでもこれほどの実力だなんて想定外だ。十五貴族を侮っていたぞ。」

挑発的な笑みを浮かべて答えるX。

「それでもだ、ここまで手加減してる相手に負けるのは俺のプライドが許さん。なによりあんたは俺の好みだからな。押し倒して俺の女にしてやるぜ！」

Xのちょっとしたきもいセリフに対してやわらかい笑みを浮かべて返事をする。

「ごめんなさい。わたしは婚約者がいるのであなたの女にはなれません。」

「ダメだ！断られるのを断る！あんたは背が高いからな、リーダーの守備範囲外だろうし。久々に最高級の女を自分のものに出来るチャンスなんだ！絶対勝って押し倒す！」

「どつよあれ？」

俺の質問にAとDが答える。

「いやーバカだろ。」「バカだよね。」

せつかくクラスの子と仲良くなってきたというのに…アホ。  
せめてマイクを切って言えよ。

俺たちは呆れながら、でも真剣に試合を見ている。

「リーダーの守備範囲外ですか。リーダーとは笹川選手のことですか？」

サーマレイスが問う。

それをXは肯定する。

「なるほど。興味深いですね。」とサーマレイスは言う。

「何がだ？ 言っておくけどリーダーは自分より背の高い女はダメだぞ。だから俺にしておけて。」

あの野郎！ 余計なこと言いやがって。

心なしが周りから生暖かい視線が向けられている気がする。

「ドンマイ」「あとで殴つとけばいいだろう。」

AとDが言う。

顔が楽しそうなのが気に食わないがとりあえずは試合を見てよう。

「興味深いといったのはそういうことではありません。一般の学生でありながら中々の実力者が集まっているのが興味深いという意味です。あなたがたに特別な師がついたわけではないのでしょうか？」

「そうだな。しいて言うならリーダーが教師も兼ねていた。」

「自分たちだけでそこまで力を磨けるという話はあまり聞いたことがありませんね。」

「それがなんだ？」

「いえ、これ以上のことは準決勝であなたがたのリーダーから聞くことにしましょう。」

その既に勝負が決まってると言わんばかりの発現にXは闘志を燃やす。

魔法式に魔力を注ぎ込み風のエンチャントを発動させる。Xは普段は身体強化だけでエンチャントはめったに使わない。これは本気で殺す気だということだ。

「話が終わりならそろそろ行くぞ！」

そう言い先ほどまでとは比べ物にならないスピードで斬りかかる。

反応できないのかまったく動かないサーマレイスに対し大剣を振

り下ろす。

(当たった！)

Xがそう感じる直前で大剣がピタリと止まる。

サーマレイスが左手で刃を握っていた。

「な！？うそ！？」

愕然と声を漏らすX。

無理もない。Xが最大限の強化をしエンチャントまで付けた場合、瞬間的には上級レベルの能力を発揮できる。

それが魔法を使わない女に片手で止められていた。

完全に硬直したXに対し、サーマレイスの右腕が動く！

声もなく10メートル以上を殴り飛ばされるX。あいつの武器の大剣山割はサーマレイスが掴んだままだ。

「…ちつくしよっ…」



なんとか起き上がるXの声にも力はない。

だが立ち上がろうとするXを見つめるサーマレイスは大きな目を見開いて告げる。

「今を受けてもまだ立ち上がれますか。これは驚きです。」

さらに柔らかい笑みを浮かべ言葉を続ける。

「ええ、いまだ戦う意思を示せるあなたは確かに強い。本来なら敬意を表しわたしも武器を抜くところなのですが、今回の大会は私的なものではなく公的な立場としての参加です。ある例外を除き、圧倒的な勝利を見せつけるように命じられています。」

言いながら大剣をXに向かって放る。

それを地面に落とさず掴み取ると

「ふん。動けるうちは最後まであきらめないのが俺の主義だ。」

「そうして再び剣を構えると

「行くぞ！」

サーマレイスに攻撃を仕掛けた。

合計で23発。サーマレイスに殴り飛ばされた回数だ。

今までの試合では上級中級関係なく一撃で沈めてきたサーマレイスの攻撃をここまでくらいようやくXは倒れこんだ。

『試合終了です。勝者サーマレイス!! セラヴァイル!』

観客は立ち上がって拍手をした。

それはサーマレイスを称えるものでもあり、最後まで果敢に挑みかかったXに対する称賛でもあった。

そんななかで俺は拍手をしながらも頭で今後について考えている。

サーマレイスはエロ太を相手に魔法を一切使わず勝ってしまった。

俺もヤバくね？

24話 久々のダンジョン（レベル10『不死鳥祭殿』）へ

準々決勝が終わり家に帰宅した。

今日は睦美ちゃんや京子に断つてから久しぶりに自宅へ帰ってきた。

準決勝は明後日。

今日の試合を見る限り、正面からぶつかれば俺でもサーマレイスには勝てないと分かってしまった。

技術とかの前に基本的な身体能力で差があり過ぎる。エンチャントをして何とかやりあえるっていうレベルだ。

何か作戦を立てねばならなかった。

だから実家に帰り一人で考え込むことにしたのだ。性欲は性魔法で抑え込んでから問題ないしな。

家族は気をつかってくれて静かにしてくれている。

あ、サーマレイスは今までの試合で魔法を使っていないが、俺のときは使うと考えられる。

あの女は圧倒的に勝利すると言っていた。そしてオールレンジで魔法を使う俺には今までのように媒介抜きでイケるとは思わないはずだ。

それがわからないような馬鹿な奴じゃない。

必ず武器を持ったうえで戦いに来て、俺をボコボコにするだろう。

今大会に出場した目的は今の实力を知ること。

真つ向勝負では貴族には敵わないことはわかった。ならば搦め手でやって勝てるかどうか検討しようと思う。

しかしどうしよつかなく？

公式魔法、それも下級や中級ではどうにもならないだろう。どんな魔法を持つてるか詳細は知らないがああ感じからして通じないと思う。そしてそれらを数多く撃とうが複合魔法として使おうが結果は変わらない。

勝つかどうか別にしてもともに戦うならオリジナル魔法でいくか最大限の強化をしたうえで風雷のエンチャントをして攻めるしかない。エンチャント抜きで接近戦なんてやったら武器を合わせることはできないだろうし。

……何をするにしても魔力量の少なさが問題だな。性魔法をフル

パワーで使うなら魔力の問題も何とでもなるけどあれは使いたくない。性魔法に頼ると根本的な成長を望めないし。

何かいい方法がないだろうか？

そんな感じでこの日は考えまくった結果、1つの作戦を思いついた！

翌日。

俺が考えた作戦に必要な魔法式は上級のものだ。

つまり今はまだ持っていない。

これからダンジョンに潜って式をとって解析して稼働させるとなると時間的に泣きそうになるが不可能ではない。

朝飯を食って戦闘服に着替え、ダンジョンに潜る最低限のものを

持ちすぐに首都に向かう。

目的のものは木星のダンジョン、レベル10の『不死鳥祭殿』にあるが、そこに行くための星間転移を行う設備は首都の転送施設の本店だけだ。

ちなみに自力での転移はできない。一度も木星に行ったことがないからだ。

転送屋についたけどかなり混んでるな。

人が多すぎて嫌になりそう。

しかし幸いなことに木星行きの場所はすいている。まあ、基本的にダンジョン関係の物しかないからねあの星は。

そんなことを思いながら係員に話かける。

「すいません。木星行きたいんですけど。」

俺に気付いた受付が対応してくれたがこの人も俺の顔を見て、あつ!?というような顔をした。

今日というより最近、外を歩くとこっぴつ反応される。

有名人は困りますなあ〜と少し調子にノリながら受付をした。

地球行きと違い木星は開拓者の所有物なのでパスポートはいらない。すぐに手続きは終わり魔法陣へと移動。

ピカッと光ればここは既に木星だ。

「お疲れ様です。具合の方はどうですか？」といったもの挨拶。

「大丈夫です。」

そう答えすぐに移動した。

外に出ると青空が見える。周りにはビルや研究施設が立ち並んでいて火星と大して変わらない。

これはかつての皇帝が作った『生命の種子』が星の核へと入り込み環境を人が済めるように強引に変えているからだ。

とはいっても人がいられるのは木星全体のほんのわずかだけなんだが…



おっと、そんな説明はどうでも良い。今日は時間がないんだっ！

余計なことは一切せずダンジョンへと向かわねば！そう思い直し、端末に表示されたマップを見ながらダンジョンへと向かった。

不死鳥祭殿は20年ほど前に作られたダンジョンだ。

大量の魔法式をごちゃ混ぜにし適当に変異させてダンジョン内にばらまく。

すると一部の魔法式が自然環境中の魔力を吸収しモンスターが生まれることがある。このモンスターを倒すことで魔法式を回収できるわけだが、このダンジョンに眠る最深部の魔法式は不死鳥・フェニックスの形をとるらしい。

だからこそ、このダンジョンは不死鳥祭殿という名前なのだ。

が、今回俺が求めるのはフェニックスの魔法式ではない。いやフェニックスを手に入れられればありがたいが、やつがいるとされるのは最深部の地下237階だ。

時間がない状況でそれは無理だ。

てなわけで俺の狙いは30階層ごとに出るように調整された『不

死鳥の巫女』というレベル9相当のモンスターから得られる魔法式で、今日はこれを手に入れたら帰るつもりだ。

ちなみにこの巫女は深い階層であればあるほど強くなり質の良い魔法式となるらしい。

しかし俺が必要なのは30階層のものでも十分だ。この階層の巫女は炎属性だけだしそんなに手こずらないだろう。

ダンジョンの入り口に到着した俺は入り口近くにある固定端末で探索の受付をする。身分証明を通信で送り、料金を払うと入り口が開いた。覗いた感じこのダンジョンは赤く光る構造のようだ。

すぐには入らず端末で他の利用者の有無を調べたところまだ誰もいないし、予約も入っていないようだ。まあ、上級者はほとんどが新規のダンジョンに行っているからな。最近は何も来てないらしい。

続いて探索用ポーチにある薬の確認をする。俺の魔力量なら飲めば全回復する回復薬は5つほどある。傷薬は簡易なものが3つほど。

うん。今日は一人だし時間も限られている。出し惜しみはしないで行こう！

そう決めると身体能力強化と雷エンチャントを付与して、一気に

内部へ突入した！

バチバチバチッ！と音を立てながら、ものすごいスピードでダンジョン内を駆け抜けていく俺。通った場所の床は若干焦げている。

途中で、炎の狼、フワフワ浮かぶ目玉のモンスター、足が蜘蛛で上半身が馬のモンスター、3メートルほどの泥でできたゴーレム、上位っぽいゴブリン、鎧をまとった人の身体に猫頭のモンスターなど多数の敵がいたがやつらが反応する前に駆け抜けていく。

今日はいつらは標的ではないし、俺のロングソードは魔法式の整理をしたとはいえ標的以外の魔法式は入らないので倒しても意味が無い。

道の途中で畏があるも、発動する前に駆け抜ける俺様！一人のときじゃないとこんな荒業はできないな。Aは遠距離タイプだから身体能力は高くないし。

そうして下へ降りる道を探しどんどん潜っていく。

わずか5分で30階層、不死鳥の巫女が出る広間の前についた。

ここに来るまでと今から飲む分を合わせて2本の魔力回復薬を消費した。

帰りは探索終了手続きがあるから転移でダンジョン入り口まで戻るので1本は残しておかなければいけない。戦闘で使えるのは2本だな！

「すーすーすー。ふうふうふう。」と大きく深呼吸する。

呼吸を整え覚悟を決める。

ドアを開け広間に入った。

内部はただの広間だ。

天井も壁も床も赤く発光する材質でできていて、縦横の長さが30メートルくらい、高さは10メートルほどだ。床は完全に水平となっており障害物は何も無い。

ただ中央に全長4メートルほどのモンスターがいるだけだ。

『不死鳥の巫女』

レベル9相当のモンスター。このダンジョンの中ボス的な奴で、見た目は全身炎の人魚に天使っぽい羽が生えて飛んでいるような奴だ。手には巨大な炎のハルバードを持っている。今は目を閉じているが顔は人間でいうところの美人になるんだろうな。長いウェーブの髪も炎でできていて触ると危険だろう。

一種の芸術のような見た目だが、発せられる気配は中級モンスター  
ーの比じゃない。

俺が動くより先に巫女は目を開けて告げる。

「汝、聖域を犯すものよ。命が惜しくば即刻たち去るが良い。」

忠告を無視して剣を構える俺を見て巫女も臨戦態勢となる。

「愚かものが！死をもって贖え！」

言葉と同時に口から強烈なブレスを吐き出す！

が、エンチャント強化をしている俺には当たらない。

こいつは炎でできているので物理攻撃は効かないがロングソードにも雷を付与させているので問題なく攻撃が通るはず！

瞬時に近づき巫女の横から思いつきり剣を振り下ろす。さすがに高位モンスターだけあり俺の攻撃に反応しハルバードを動かすが、遅い！

縦に思いつきり引き裂いた！

「ギイヤアアアア〜！！！」

巫女は叫び声とともに体全体から炎をまき散らす。

「ちっ！」

回避のために一旦距離を置く。そしてすぐに巫女に視線を戻すとたった今切り裂いたばかりの身体がすでに再生していた。

これがこいつの特徴である。

フェニックスほどではないが、それでも凄まじいレベルの再生能力をもつ。再生は魔力がある限り続く。また魔力は自然の中、正確にはこの部屋の中に満ちる魔力を吸収している。しばらく誰も来ないから魔力は十分に満ちている。

つまりこいつを殺すには魔力がなくなるまで殺すか、魔力の吸収量より体の再生の方が魔力を使うことを利用し瞬時に何十回か殺すしかない。

おまけに今ので俺の実力を再認識したのか明らかにさつきよりも警戒している。

めんどくさい。

思いながらも魔法式から『耐火障壁』を展開、もう一度接近するためのタイミングを計る。

バチッ！バチバチバチバチバチッ！

雷の音だけが響いている。

……………動かない。

どうやら巫女はこちらの動きを見ているらしい。

俺のエンチャントは詠唱によるものだから常に魔力を消費し続けている。

仕方がない。俺から動くか！

決めると同時に巫女の後ろに魔法陣を出現させる。

詠唱破棄で『重力玉』をはなつた！

魔法陣から飛び出したスイカほどの大きさの黒い球が巫女を貫く。

あれは重力を凝集させた玉で、弱めの威力だが防御無視の物理ダメージを与えるものだ。結界だろうが鎧だろうがその上からダメージを与える魔法だ。

「ッ！！」

言葉にならないうめきを漏らし巫女は体勢を崩す。

隙を逃さず接近！

即座に4分割するとまたも炎を飛ばしてくるが障壁が防いでくれる。

再生。

斬撃。

再生。

斬撃。



再生。

斬撃。

繰り返すと今までとは違う気配がする。

炎が凝集している？……………マズイ！

即座に離れる！

と、同時に巫女は全身から炎のレーザーを一斉に放射する！

ぎりぎりセーフ。

あれは貫通性を持たせた攻撃だ。逃げなきゃ死んでたな。

そんなことを考えていると

「おのれ！おのれ！もはや許さぬぞ！」と、再生を終え憤怒の形相をした巫女が形を変えていく。

身体から吹き晴れる炎を強くなり、腕が6本へと増えた。そして腹と背中からは10数本の触手が出てきている。

俺との近接戦闘に対応したつもりだろうが、スピードは圧倒的に俺の方が早いからな。意味ないと思う。それよりも全方位レーザーの方がヤバイな。上級の出力だけあって俺の結界では防げない。正確に言うと防げるレベルの魔法を使うと魔力を大量に使ってしまう。

かといって遠距離からチマチマと魔法で戦っても同じで、あいつを殺しきるために放つ魔法の数を見ると結局魔力消費が多すぎてガス欠になっちまう。下級魔法だとあのレーザーでかき消されるだろうしな。中級以上じゃないとダメだろうし……………

仕方ない、部屋の魔力が尽きるまでヒットアンドアウェイで行くしかないか。

戦法を決めた俺は改めて巫女に襲い掛かった。

十数分後

「ちつくしょう。これで帰還用の回復薬しなくなっちゃった！」

思わず声に出してしまった。もうめんどくさい。

ひたすらにヒットアンドアウェイを繰り返していたが予測以上にしぶとい！

攻撃は一度も食らっていないのだがいつまで経っても死ぬ気配がない。

俺が攻撃するたびにレーザーだったり、爆発であったり、切り裂く火の粉をまき散らしたりしてきたが、すべて回避または魔法で受け流すことができた。

何度か広間全体を攻撃対象とする技を使ってきたがその時はエンチャントを解き全力で防御することで乗り切った。

そうして圧倒的なスピードを持って30回以上殺したはずだが、まだ再生する。

ついに自由に使える最後の魔法薬を飲んでしまったから次に魔力が切れたら撤退するしかなくなる。

何かいい手はないもの

うおーいーい！

レーザーを慌てて回避する。

危ない、集中が乱れてきた！意識を切り替え回避に集中。

同時に魔法の検索。

接近戦ではこっちの方が持久力で負ける。

何か使える魔法はないか！

一発当たって消滅する魔法ではだめだ。長く効果が持続するもので、できれば魔力を奪うようなもの！

そんな都合のいいものはあつた！

忘れてた………最近ほぼ自然系の魔法しか使ってなかったからな。例外はロンギヌスと重力玉くらいだし。

巫女の攻撃を回避するために動き回りながらも思いついた魔法の詠唱を開始する。

逃げるだけの俺を見て好機だと考えたのか、巫女の攻撃頻度や激しさが増す。

しかしそのおかげで大ぶりの攻撃も増えて回避がしやすい。

これならイケる！

「我が魔力を苗床に冥府の淵より這い出でよ。血涙の灯、三途の呻き、死者の腕。汝、恨み狂いし黄泉咲く花よ。死への道連れ生者を呪え！」

巫女の足元に半径5メートルほどの黒紫の魔法陣が浮かぶ。

「くらえ！呪怨大樹！」

魔法陣から突如、白く太い樹が生えてきた。

それはそのまま巫女に巻き付こうとするが回避される。

しかし幹から枝が分離し“腕で”巫女を掴む！

そう、この樹は無数の骨が寄り集まってできている。枝に見えるものは人の腕の白骨だ。

逃れるためにレーザーで枝を破壊するもそのころには別の5つの腕が巫女をとらえていた。

そして新たに魔法陣から湧き出した大樹が巫女に巻き付き、その枝や新たに湧き出た大樹が次々と巻き付いていく！

この樹はただ？まえるだけではなく魔力を吸収する効果もある。性魔法と違って俺が自分のものにすることはできないんだがな。

吸った魔力を養分にして種を生成、種を俺の近くに飛ばして呪いの花を咲かせる。そしてその花の実を　　ってそれは良いか。

今回はそこまで使う気はなく魔力を吸い取ってくれば良いし。

突如、閃光が視界を染め轟音が聞こえた。骨を壊そうと頑張ってるみたいだが次々と新しい樹が来るし壊れた骨は吸った魔力で再生

するして意味が無い。

オリジナルの上級相当の魔法 『呪怨大樹』

この魔法の発動は今の俺の魔力の6割ほどでよく、あとは敵から吸収する。吸収した分だけ強力になる魔法で一見凄いの思われがちだが1つ致命的な弱点があるんだよな。

まあ、骨だし、いかにも闇とか邪っぽい魔法だから弱点はわかりやすいと思うけど。

しかし改めてこの魔法の存在を忘れてた。試合で使うのは自然系魔法ばかりだったから。

でも逆に考えれば相手に知られていないからな。

そこはメリットでもある。

サーマレイス戦では霊系、闇系、重力系を使うことも考慮しよう。

3分ほどして魔力を全て吸われた巫女は消滅し、魔法式が出てきた。

こんなにあっさりとケリがつくなら最初に使えば良かったな……時間も節約できただろうし。

そんなことを思いながら俺は大樹を消して式を回収する。

ひとまず目標達成！

よし！時間的にも何とかかなりそうだな！

ほんと休む間もないがさっさと帰ろう。

魔法薬を飲み魔力を回復させた後は転移で離脱。

受付で探索終了の処理をしてすぐに転移施設へと向かう。

家に帰れば回復薬があるはずだから、規制ギリギリのスピードで



駆け抜けていくと学生っぽい集団がちらほら見える。

この星にいるってことは上級か将来性のあると判断されたやつなんだろうなーと思い、通り過ぎていく。

「ダツシユ、ダツシユ、ダッーッーシユ!」

周囲に誰もいなくなったのをいいことに叫びながら走っている。知らない人が見たらキモイ奴にしか見えないだろうな……

こんな感じで昼過ぎには帰宅することに成功した!

あとはこの魔法式を解析し使うだけ!

何とか間に合いそうだ!

そう考えた俺は休むこともせず早速、魔法式を取り出し作業に取り掛かった。

明日の試合はこの作業にかかっているぞ!

24話 久々のダンジョン（レベル10『不死鳥祭殿』）へ（後書き）

今回のダンジョンはレベル10なのにあっさり目標達成できたのは浅い層だからです。雑魚モンスターも浅い層の方が深いとこに比べて弱いのです。そして今の主人公では最深部の不死鳥そのものには勝てません。

25話 準決勝の開始、そしておかしな展開へ

朝、目が覚める。

ついに準決勝。

自分が貴族と戦うような舞台に来るなんて魔王になる前の俺は考えもしなかっただろうな。それを思うとなんだか不思議な気分だ。

起きて、ご飯を食べ身支度を整える。

両親や弟妹から声援を受けた俺は家を出た。

「出ると玄関の外に3人のカスがいた。おはよ〜」

さわやかな笑顔で挨拶をする俺。

「おはよ〜じゃねえよ！わざわざここまで来たのにカスって何？」

3人を代表してDが口を開いた。

「おだまり。あんま生意気なこと言ってっとD！お前のメガネをかち割るぞ。」

言いながらメガネの上からアイアンクロー。

痛いと喚くDを無視してAが話しかけてきた。

「朝から荒れてんな。なんだ、珍しく緊張してんのか？」

「違うし。お前らの顔を見たから気分悪くなっただけだし。」

「痛い痛い、マジ痛いって。」

「ちよつとちよつとそれはひどくね？」

俺の言葉に今度はエロ太が反応する。Dのことは完全に無視だ。

「いや、お前らちよつと考えてみるって！せつかく京子の魔力を感じてルンルン気分を外に出たらお前らの顔だぞ。そりゃ気分も悪くなるだろ。な、京子？」

声をかけると塀の陰に隠れていた京子が出てきた。

「あれ？バレてたか。おはよ！」

言いながらDの顔を掴む腕をとり自分の腕を絡ませてくる。

「うう…痛かった。ありがとね、三坂さん。」

Dが京子に感謝を述べる。

あれ、こいつらいつの間に関わり合いになってんだ？

「俺は三坂さんと同じクラスだし、竜也や山彦にしたってお前といればいくらでも話す機会はあるだろう。」とはエロ太の言葉だ。

それもそうだな。

「大祐、調子はどう？緊張したりしてない？」

心配そうな顔で京子が聞いてくる。

可愛いし気遣いもできるし俺なんかにはもったいない女ですよ。いつは。

「大丈夫だよ京子。ありがとう！」

言いながら京子の体を抱きしめる。制服がシワになっても困るしそれほど強くではないけどな。

ホントにいい匂いだ〜すげえ柔らかいし。

京子も抱き返してくれ、より密着する。

清々しい朝にいきなり現れた3バカのせいで下がったテンションがみるみる回復していく。

調子に乗った俺は京子の頬に手を触れキスをした。

「ちよつと!?!それは  
んむっ……………」

なんか視線を感じるけど気にせず1分くらい堪能した。

ついでに少しだけ京子の魔力を頂戴した。いや、意味はないんだけどな。

真っ赤になって息を整えている京子の肩を抱き、歩き始める。

「そろそろ行くぞ。」

気分よく告げると3人も無言でついてきた。

転移施設に向かいながらのんびり歩いている。

落ち着いた京子は頬を膨らませて睨んできたので、何とか宥めた後は手を繋いで歩いている。

その間、部下たちはボソボソと呟いていた。

「死死死死死死死死死死死死死死死死死死」とD

「淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫淫」とA

「羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい」とX

傍から見ると幸せそうなカップルの背後で不気味なことをつぶやく3人がいてかなりやばい状況だが幸いにも周囲に人影はない。

俺はともかく京子も特に気にした様子はなかったのがビックリだった。

まあ、俺と気が合う女だけあってやっぱりどこかぶっ飛んでるのかも？と失礼なことを考えていたが口には出さなかった。

「お前ら、そろそろ人通りの多いところに行くから静かにしろよ。恥ずかしいから。」

俺が言うと、はあ、とため息をつきながらAが言った。

「幸せそうで良いですね〜リーダーは。」

「Aだってセフレいるだろうが。」

「そうだけど、人がイチャイチャしてるのを見るとゲイボルグで後ろから刺し殺したくなる。」

「何？そんな槍持ってるの？」

「持ってないけどそういう気分。」

グダグダ会話をしてる横でDとXが京子と話してる。

「三坂さん。リーダーより俺の方が良いって。同じクラスだしきつ



と運命だよ。」

「私と一緒にいたら、池田先輩に睨まれるよ?」

「あーーーーそれは辛いな……」

意味の分からない口説き文句をXは言ってる。ふざけてるんだろ  
うけど。

「三坂さんはなんでリーダーと一緒にいるの?三坂さんはすごい可  
愛いしもつといい男を狙えるでしょう?」

今度はDが話しかけている。

「強引に純潔を奪われたの……だから仕方なく……」

演技をしながら言う京子。

「やめてくんない。知らない人が聞いてたら俺、人体実験場に送ら  
れるから。」

準決勝の緊張とは無縁な状態でのんびり歩いていると端末が震え  
た。

誰だろうっ？と思い確認すると睦美からだった。

『余裕があれば駅前のいつもの喫茶店でまつつますので来てくださ  
い。』

「まつつますってなんだと思うっ？」

待ってますだと思っけど。

「待ってますじゃないかな？」 「待ってますだろう。」 「うん。」  
「だな。」

順に京子、X、A、Dのセリフだ。

あ、またメールが来た。

『間違いました。待ってますです。』

「」「」「」……「」「」「」

俺も、横で覗き込んでる京子や部下たちも特に何も言わない。

微妙な空気が流れた。

「あーとにかく睦美が“待ってまつ”から行くか。行くよ京子。

」

京子の手を握りなおして歩き出すと、部下たちもついてきた。

ま、いいか。

「おはよ！睦美！」

声をかけると返事が来る前にベンチに腰掛ける。俺の両隣に京子と睦美がいるかたちだ。

あ、人数が多いため、メールで外のベンチにいてくれと言っておいたんだ。

俺だけが来ると思ってたんだろつ。

余計なのがぞろぞろいるために驚いてフリーズしている睦美。

「リーダー！ズルくない！？なんでそっちは両手に花でこっちは両手に男なんだよ！」

エロ太が隣のベンチで叫んでいる。エロ太の隣にAとDだ。

なぜか知らないけどエロ太は二人に腕を組まれている。

「冗談でやってるんだろっけどかなりキモイ！駅前を歩いている男たちは俺に嫉妬の視線を送るけど直ぐに隣の3人を変な顔で見つめてる。たぶん正面から見るとそうとうやばいんだろつ。」

知らない人のふりをしよう。

「あ、え、あの……」

睦美はまだ混乱中だ。

のんびり話す時間も無くなりつつある。

だから何も言わず頭を撫でると、仕方ないな〜という顔になってそのまま肩に頭を乗せてきた。

右手は京子と手を繋ぎ、左では睦美が身体を寄せている。

そんな俺たちの隣のベンチでは男3人がふざけて俺たちの真似をしていた。

道行く人の視線は既に99%が男たちに向いており、中にはこっそり写真を撮っていく人もいた。

こっちの真似をするためにバカ3人は俺の方を見ている。

制服的にはAの学校の女子だと思うが、彼女が写真を撮っていたことには3人も気づいていないようだ。

あとでどんな噂が広がるか楽しみである。

しばらくして俺たちは会場に移動していた。

睦美とはそれほど会話をしていない。ただ一言「俺、頑張るね！」とだけ言ったらニコツとして俺の頭を撫でてくれた。

会場につき、松田たちクラスメイトや先生方、あまり話したことのない他のクラス、他の学年の人も話しかけてきてくれ挨拶をした後は選手控室へ向かう。

429

俺の試合が最初で、もう一方の試合はそのあとだ。

緊張はしていない。

けどいい感じの高揚は感じている。

ようやくここまで来た！

部下たちと仲間になる何年前、幼馴染とまだ一緒に過ごしてた頃、引きこもりだった自分がここまで来れた。

けどまだだ。

ここで立ち止まる気はない！

よし！

気合を入れ立ち上がるとフィールドの方へ歩き出す。

俺の姿が客席からわかるようになってと大きな歓声が上がった。

まだサーマレイスは来ていないようだ。

解説や実況が毎度のごとく話している。

客席では東心峰の連中が名前を叫び手を振っているが部下たち（AとDは学校が違うけどエロ太と一緒にいる）、京子や睦美ちゃん  
は静かに座ってこっちを見ていた。

空を見上げると雲一つない青空が見える。雲があれば、魔法陣を  
雲に紛れさせて魔法を使う気だったが今日は無理なようだ。

昨日手に入れた不死鳥の巫女の魔法式の状態を確認すると一応作  
動はしていた。さすがに時間的な問題で100%の機能は発揮させ  
られないがそれは仕方ない。

今の状態でできる限り戦うだけだ！

ふいに強い気配を感じる。同時に再び大きな歓声が響き渡った！

「貴族様の入場か。」

声に出しながら相手が来たであろう入り口を見る。

いつもとは違い武器を所持しているサーマレイス「セラヴァイル  
がいた。

金色の細長いむき身の長剣にミニスカートだがスパッツらしきも



のが見えてるため下着は見えないうらな。

なんて馬鹿なことを考えているが服装は動くのに支障はないものだ。まあ、魔法的な補助のあるやつではなさそうだがそれは俺も同じことだ。

サーマレースが近づくとつれ歓声が徐々に小さくなる。

そしてスタート地点につくと同時に歓声が消えシーンとなった。

俺たちはお互いの顔を見つめ合っている。が、俺のほうが背が低いからちよつと微妙な気分だ。

見つめ合ってるうちに結界が作動した。

完全に展開が終わるとアナウンスが鳴り響く。

「それでは本日1試合目。」

1秒ごとに意識が研ぎ澄まされていく。

「準決勝、笹川大祐選手とサーマレイスIIセラヴァイル選手の試合を始めたいと思います。」

今の俺がどこまでやれるかはわからない。

「両者ともに準備はよろしいでしょうか？」

だから俺はただ

「  
試合開始！」

全力を尽くすだけだ！

開始の声と同時にロングソードの切っ先を敵に向け魔法式へと魔力を流し込む。

身体能力が強化されると同時に、10の魔法陣が即座に浮かび上がる。

中級魔法『ビッグボム』

その名の通り、1つで周囲数十メートルを吹き飛ばす、10の輝く爆発物を放つ。

しかしそれはサーマレイスまで届かない。

ちょうど二人の中間地点まで到達した瞬間、サーマレイスの放った炎のチャクラムのようなもの、  
下級魔法『炎月輪』  
、  
がボムを打ち抜く。

この炎によって1つが爆発しかけ他のボムも誘爆を引き起こされそうになる。

ここからの距離だと俺も巻き込まれると判断し、一気にその場を離脱。

会場の端に着くと同じくして、キィィィンと言う音が鳴りその直後大爆発が起きる！

巨大な爆発による閃光と轟音が発生するが、それが消えるまで待たずに魔法陣を発生させる。

爆発は収まったが土煙が濛々と上がっていて向こうの状態はわからないが、サーマレイスのいる場所は感じられる。

先手を取る！

しかし俺がそこから魔法を放つより先にサーマレイスが魔法を撃ってきた。

炎月輪が数百個ほど土煙を吹き飛ばしながら俺の方へと迫ってくる。

クッソー！せっかくもう一回ボムを撃とうとしてたのに！

けど嘆いても仕方ない。

魔法陣をキャンセルしエアシールドを展開する。

風の盾に阻まれて炎は俺の左右に逸れていった。

だが安堵する間もなくいきなり巨大な魔力が感じられる。

サーマレイスの前に巨大な魔法陣ができていた。

俺の記憶だと確かあの式は上級の『タイダルウェーブ』。

強力な津波を引き起こす大魔法だ！

いきなり上級かよ！俺は上級はほとんど使えないのに！

回避は無理だな、邪魔をするか。

しかしこの距離だと魔法式型じゃあ間に合わないな。

即座に判断し詠唱破棄によって瞬間的にサーマレイスの周囲に魔法陣を展開する。

上級と下級じゃ当然下級魔法の方が発動は簡単で早い。

あいつが魔法を発動させる前に炎、氷の矢、風の刃、岩の矛などによりオールレンジ攻撃を行った。

サーマレイスは魔法をキャンセルすると回避行動に移ったがこれが凄いい。凄まじい数の魔法をめちやくちや速いスピードで動いて躲しまくる。どうしても間に合わないものは魔力を帯びた長剣でかき消していた。

結果としてただの一撃も食らわず魔法陣の囲みから脱出し再び俺に魔法を放ってくる！

それに俺も正面から全力で応戦する！

お互いが放つ魔法が戦場の中央でぶつかり合う。

ときに相手の魔法とのぶつかり合いに勝利し敵にまで到達する魔法も、障壁に阻まれてしまい両者の身体に届くことはない。

さきほどのオールレンジ攻撃を受けて上級を使う隙はないと悟ったんだろう。

サーマレイスは下級と中級の魔法のみを使用するようにしたようだ。

さすがに上級を使いながら他の魔法を使うのはなかなか難しい。魔法式型は魔力を注ぎ込むだけとはいえ、上級ともなると消費魔力量は膨大で、さらには魔力の注ぎ方にも細心の注意を払わねばならないからな。

しかしこれにより戦局が硬直することとなった。

下級や中級のみ絞ったサーマレイスだが一度に飛んでくる魔法の量が尋常じゃない。

先ほどの炎月輪は遊んでいたのだろう、準々決勝でぶつかったモブおじさんの数倍の量の魔法が飛んでくる。おかげで魔法式型の魔法だけでは処理しきれず詠唱破棄による魔法も正面の撃ち合いに使用しなければならなかった。

だが、ここで焦れた方が不利になる。

俺は落ち着いてこの魔法の撃ち合いを続けた。

一進一退の攻防は10分近くも続いている。

未だにつづく魔法の撃ち合いに観客や実況は大声を上げて盛り上がっているが、俺は凄い違和感を感じていた。

それは相手が使ってくる魔法だ。

サーマレイスが放つ魔法はほとんどが下級や中級の炎や氷、水の魔法だ。あとはときたま不可視の魔法だったり厭らしい攻撃をしてくるだけだ。

それがおかしい！

上級を使わないことがおかしいのではない。上級は時折隙を見て使おうとしていたが俺が使わせないように攻撃してるから正確には使えない状態だ。

そうではなくセラヴァイル家の一族が得意とする属性を使っているのがおかしい！

おまけにあいつの身体能力を考えれば俺は常に雷エンチャントをしてなきゃいけないの今は普通の身体強化しかしなくても対応できている。オリジナルの魔法を使わなくても正面から戦えている。

どう考えてもおかしかった。



あの女は貴族代表として出場している大会レベルの調節役のはずだ。エロ太と戦った時も、「圧倒的な勝利を見せつけるように命じられている」と言ってたはずだ。

なのにどうして手加減をしている？

俺が疑問に思っているのだ。

「もう充分です。」とサーマレイスは言いながら魔法陣を消し武器を収めた。ついでに目を閉じている。

「なんだ急に？」

あの女が不意打ちすることはないだろう。

俺も臨戦態勢を解き尋ねてみた。

「あなたの実力は充分にわかりました。」

「それがなんなんだ？」

「あなたに勝利を譲りましょう。」

「.....はあ!?!?」

え？何言ってるのこいつ？

バカなの？

「バカではありません。」

やべえ、小さい声だったのに聞こえていた…

俺がちよっとだけ反省していると、構わずサーマレイスは言葉を続ける。

「何も驚くことはないでしょう？わたしは大会レベル、正確には優勝者の質を保つために参加しています。」

「……………」

「あなたは優勝するのに相応しいだけの実力を持つと判断しました。だからあなたに勝利を譲りましょう。」

……………認めたと言われてもな。

そもそも俺の基礎能力は上級には届いてないのにいいんだろっか？

疑問に思ったから率直に聞いてみた。その返事は

「魔法でカバーできています。」だそうだ。

「付け加えれば身体能力の脆弱さを帳消しにできるくらいにあなたの魔法技術は高い。」

「上級魔法はほとんど使えないぞ。」

「どんなに強い魔法であつても使いこなせなければ意味が無いでしょう？実際この試合でわたしは上級魔法を使えませんでした…あなたの妨害によつて。そう、状況によつて下級や中級で上級魔法以上の成果を引き出すことだってあります。すべては使い手次第です。」

サーマレイスの真意を探るようにじくっと見てるけどこの女は目を閉じていてよくわからない。

「俺が次の決勝で負けたらどうするんだ？」

「わたしはあなたの実力を認めたと言いました。あなたは優勝者として最低限必要なレベルに達していると。そのあなたを打ち負かす実力者が優勝するのであれば何の問題もありません。」

まあ、実際のところはもう一方の準決勝の選手は大したことない奴らだ。こいつとの試合こそが事実上の決勝戦だ。

当然この女もそれを理解しているんだろうな。

しかしまさかの超展開になんて答えたらいいんだろう？

俺が悩んでるとサーマレイスの方が口を開いた。

「ただしわたしが試合を辞退する前に2つほど確認したいことがあります。」

「なんだ？好きな女のタイプは可愛い巨乳だけとお前は背が高いからダメだぞ。エロ太も言ってただろう？」

ゆっくりと目を開いて問いかけてくる。

「なぜ、あなたの魔法を扱う技術はそれほど高いのですか？」

「……………」

俺の冗談には完全無視で真面目な質問をしてきた。

ちょっと悲しいけど仕方ない…………

それにしても魔法技術に関してか…異世界のことを話すのはメン  
ドイしなあ……

俺がそう考えている間もサーマレイスは話し続ける。

「特に自力型の魔法に関する技術はあまりにも高すぎます。おそらくは貴族や他の上級の自力型を用いる魔法使いと比べてもあなたは遜色ない。いえ、それ以上の実力を持っているでしょう。少なくとも私の知る限りでは最高の使い手です。」

とりあえず余計なことは言わず彼女の主張を全部聞くことにしよう。

「そして問題なのは一昔前の時代ならばともかく今の時代は詠唱による魔法を使う人がほとんどいません。その状況でどうやってその技術を身に着けたのか？あなたの仲間の佐々門さんは師はいないと言っていました。」

あの野郎！余計なこと言いやがって。あとで殴つとこらう！

「もちろん。初代様がそうであったようにあなたも生まれながらの天才という可能性もありましたが、調査した結果その可能性はないと判断しました。」

調査？なんか調べたのこの人？

「調査というと大げさですね。あなたの幼馴染たちから話を聞きました。」

「……………あくなるほど！お前たちが知り合いだっていう可能性は矢念してたわ。あいつらみんな、上位の研究室だもんな。お前と知り合いでも不思議じゃないか。」

「ええ。あなたの6人の幼馴染のうち友美と雄介はわたしと同じ職員ですから。あなたが友美たちと一緒に過ごしていた数年前まではこのような実力はなかったようですね。」

「……………」

「彼女たちは皆上級の実力者です。その全員から実力を隠しぬいてきたということはあり得ません。それくらいには彼女たちの才能を信じています。」

特に否定も肯定もしないがそれには構わずサーマレイスは話しを進める。

「つまりあなたは幼馴染たちから離れたこの数年の間に急激に力をつけたということになります。だからこそどのようにしてそこに至ったのかを聞いておかなければなりません。」

「どうしてだ？」

いや、理由はわかるけど敢えて尋ねてみた。

「あなたが努力の果てに辿り着いたのなら問題ありません。しかし何らかの特殊な方法で強くなった場合、それが誰にでも可能な方法となるとわたしたちは対応しなければなりません。でなければ火星の秩序に大きな影響を与えてしまいます。」

まあ、その懸念は仕方ないか。みんなが簡単に力を持てば治安などにも影響が出るだろうしな。

「あと、これは根拠はありませんが……ただこうしてあなたと戦って受けた印象なのですが………」

一度言葉を区切るサーマレイス。

何を言うのかと待っているがなかなか続きを言おうとしないな。

「印象がどうしたって？」

それでも言おうとしないな。さっきまでとは違う自信なさげな表情からすると言葉通り自分でもいまいち確信が持ててないのか。

数秒の沈黙の後、サーマレイスがためらいがちに言葉を絞り出した。

「…あなたは本当はもっと高度な魔法を使えるのではないですか？」

「??????」

「魔法だけではなくもともとの潜在能力にしても本来はもっと高い。けど今は何らかの理由で使えなくなっている。そのような抑制されているような印象を受けました。…そう、少なくとももっと高次元の戦いを知っているような印象を。」

「……………」

何こいつ？

鋭すぎね！？

「その顔を見る限り、はずれてはいないようですね。」

「ふん。……………それよりもう一つの確認したいことってなんだ？」



まずは全部聞こう。

「あなたの望みはなんですか？」

「望みって…なんか漠然とした質問だな。」

「いえ、今大会で優勝した時のという意味です。お金、名誉、地位、魔法式、武器いろいろありますが何を望みますか？」

「その質問は重要なのか？」

「もちろんです。あなたという人を知るためには重要なことでしょう。」

「や、なんで俺の人間性を知らなきゃいけないんだよとかいろいろ言いたいことはあるがそれは置いて別のことを問いかける。」

「最初の質問にしても2つ目にしても俺がウソつくかもしれないぞ？」

「構いません。それも含めてあなたという人を見極めますから。」

…ハア…なんかわけわからん展開になってるなあ……

でもわざわざサーマレイスに俺が教えてやる理由もないしな。

京子とか睦美が話してっっていうなら教えても良いけどさ。

どうしようか？

サーマレイスは言いたいことは言い終わり返事を待ってます！  
みたいな状態だ。

それによく考えたらこいつにバカ正直に教えたらそのまま俺の勝ちになるのか！自分の実力を測りに来たのに、対戦相手に辞退されたら意味ないな…

よし！決めたぞ。

「なあ、お前はバトル物の漫画だとかアニメとか見るか？」

いきなりの質問に不思議そうな顔をするサーマレイス。

「いえ、見ませんが。」

「そっか。じゃあ教えてやるけどさ！最近の開拓者の人気作ではな、こんな場面だと戦って力づくで聞きだすんだ。」

言葉と同時に魔法を発動する。

俺の周囲にさまざまな重火器が浮かぶ。

ビーム砲×4基、ミサイル60発、ガトリング×12基、カノン砲×6基。すべて金属系の魔法で作りに出したものだ。

その戦つ気満々の俺を見て、サーマレイスは困ったような顔をした。

「勝利を譲ると言っているのですが…仕方ないですね。」

言いながら再び武器を構える。

それを確認した俺は

「行くぞ————!!——!!——!!」

全弾をサーマレイスに向けて発射した!

## 26話 サーマレイスは予想以上に強かった

俺が魔法で生み出したミサイルやガトリング弾が迫りくるにもかかわらずサーマレイスは動く気配がない。

まあ、あくまで開戦の合図程度の気持ちで使っただけだしな。

やはりというべきか攻撃が届く直前に何かかすばやくサーマレイスの身体を覆い隠した。ミサイルなどはその上に直撃するがサーマレイスの魔力には何の変化も見られずダメージなど全く受けていないのが感じ取れる。

そして俺の攻撃によって生じた煙が晴れると1本の樹がとぐるを巻いてるのが見える。やがてそれは時間が遡るように地面の中へと消えて行く。

先ほどの渦巻く樹の中央部分に当たる場所には無傷のサーマレイスがいた。

植物の魔法を司るセラヴァイル家。

一般では農業や林業、さらには薬学など植物が関係する分野では多大な影響力を持つ貴族の家系である。魔法を用いる、用いない関係なく植物の研究開発に貢献している。

それを使い始めたということは少しはやる気になったらしい。

花粉などを利用した毒や催眠を警戒し身体に風のエンチャントをかける。身体の表面にも風の層が出来たため、吸引してしまうことはないだろう。

サーマレイスの魔力が徐々に高まっているのがわかる。

ここからが本番だ！

先ほどのミサイルやガトリングは物理属性だ。それを受けた樹にはキズ1つについていなかった！

一般的には樹の弱点は炎だ。まあ、こいつには効かないだろうけど確認を込めてやってみよう。

俺の出方を窺っているサーマレイスにさっそく魔法を放つ。

中級魔法『フレイムストーム』。広範囲に広がる炎の嵐が地面を焼き焦がしながらサーマレイスに迫る。

が、サーマレイスはやはり微動出せず魔法を発動、彼女の正面に20本ほどの太い樹が生えた。1つ1つが太く30メートルくらいの高さがある。先ほどと違って黒っぽい樹だ。それらが並ぶ様子はまさに巨大な壁。

そして嵐が壁に衝突するも、全く燃える様子がない。

10秒ほどのせめぎ合いの末、炎は消滅したが樹は一つとして焦げ跡さえついていなかった！

サーマレイスが消したのだろう、樹がなくなると再び俺の様子を窺っている。

どうやら自分から動く様子はないようだ。

……………これはあれだな。

好きなだけ試してみると。

何をやっても通じないぞと。

そういう意思表示だな。

確認の意味を込めてサーマレイスを見つめると綺麗な顔でニコツと微笑んだ。

まあ、正面からぶつかれば敵わないのはわかっていたからな。せっかく本人が試していいと言ってるんだ。じっくり調べさせてもらおう。

動かないサーマレイスに詠唱破棄でサンダーボルトを使う。

するとサーマレイスの頭上には紫電が進る魔法陣が生成された。今回は以前使ったのと違い力を一点に凝集させている。あの時と比べて数倍の威力があるが……………

「サンダーボルト！」

声と同時に天空から極太の雷がサーマレイス目掛けて飛来する。



強烈なフラッシュを浴びたかのように視界が眩み、轟音が鳴り響く！

が、サーマレイスは微動だにしていない。今度は黄色い針葉樹のようなものが身を守っていた。

今のサンダーボルトを防ぐということはあの樹は電気を通さず、熱にも耐性があり、物理的圧力にも強いということだ。

なるほどなるほど。

俺が考えをまとめている間にサーマレイスは樹を消した。

次は風だ。下級魔法『エアスラッシュ』に中級補助魔法『ブースト』で威力を強化！さらに同じ魔法を複数発生させ融合する。

上級に匹敵する切れ味を持つ、30メートルほどの巨大な風の刃『エアスラッシュ・極』の完成っ！

通常では不可視のはずの風の刃があまりにも凝集しすぎて視認可能になっている。

右手の指を2本立て、それを横に振る。同時に魔法がサーマレイ

スに向かって進んでいった。

ちなみに指を振る動作は必要ない。観客へのポーズだ。

エアスラッシュがサーマレイスに到達する前にぶつとい倒木のような生え方をした樹が出現。今度の樹は金属のように銀色の光沢をもっている。

参考までに強化版のエアスラッシュは厚さ1メートル程の鋼鉄なんて余裕でぶつた切る！

が、大方の予想通りこれも防がれた。ただ今までとは違い植物にはつきりとした斬撃の後は残っていた。幹の部分の3分の1ほどに到達したところでかき消されたな。

同じように水や氷、岩石、土流を使ったがどれも防がれることになる。

スピードで圧倒しようとしたがああ樹の生える速さもまた尋常で

はない。今の俺の手札では自分自身のフルパワー状態のスピード以外では対応できないだろう。

パワーも同じだ。あの樹を正面から壊すとすれば効果があるのは身体強化マックスで風と雷の二重エンチャント状態の剣での攻撃や攻撃用の上級魔法だけだろう。

数で圧倒しようにも一番最初に使われたようにサーマレイスの体全体を植物が覆い隠せばどうにもならなくなる。

結論として自然系の魔法では上級以外では傷をつけることさえ難しいということだ。

「もう気はすみましたか？」

考え込む俺にサーマレイスが話しかける。

「いや、まだだ。」

「…ハア……わたしとしてはそろそろ質問に答えていただきたいのですが。」

「まだまださ。こんな機会は滅多にないだろうからな！有効に活用する。もうちょっと待って。」

そうして考え込む俺。

「はあ……」

サーマレイスはその凶太さに呆れたように溜め息を漏らす。

「ですがあなたならもうわかってるはずですよ。下級や中級の魔法ではどうにもなりませんよ。あなたにわたし自身へと攻撃を届かせる方法はないはずですよ。」

「お前が避けなくてくれるならロンギヌスで倒せるんだけどな。」

そうロンギヌスなら植物をぶち抜けるだろうが、あれは詠唱が長いし、直線にしか飛ばない。この女のレベルだと簡単に躲される。

何かいい方法はないものか………

「その高度な魔法技術はおそらくあなただから得られたものなのでしようね。」

考えている俺に向かっていきなりサーマレースが言い始めた。

「どづしてそう思うんだ？」

不思議に思って聞いてみると

「天才かどうかは別として、あなたもまた精神が一般とはかけ離れてますから。常人ではこの状況でそのような態度はとれませんし。」

馬鹿にされてるのか？微妙なところだな。

悩む俺が言葉を発する前にサーマレースが続けて話す。

「このままだとあなたの好奇心が満たされるまでいつまで経っても終わらないでしょう。試合の時間制限もありませんし。」

言いながら剣を再び構えなおす。

「ここからはわたしも攻撃を開始します。」

言つと同時にこつちへ向かってくる。

やばい！速い！

弾丸のような勢いで突っ込んでくる。

そして俺が構えると同じくサーマレイスが俺に剣を振り下ろしていた。

「おらっ！！」

二つの剣がキーン！という音を立ててぶつかる。かなり重い一撃だ。

だがサーマレイスの猛攻は続く！

俺が体勢を立て直す前に次の斬撃が迫る。なんとかそれをはじめ返すも、今度は下から切り上げてくる！それに反応し弾き返すも次々と連撃が来る！

美咲ちゃんと戦ったときの反省からロングソードは耐久力をアップさせる魔法式を取り込んでから壊れることはないと思うけど…

武器の心配より俺がヤバイな。

1、2、5、10と斬撃の応酬が増えるにつれ俺の反応が間に合わなくなってくる。

次はもう間に合わない！

詠唱破棄で弱めに雷を付加し、即座にその場を離脱した。

しかし距離にして50メートルは離れたはずだがサーマレイスは次の瞬間には10メートルほどまでに迫っていた。

魔法で牽制するも植物に防がれてしまう。が、ここで昨日の経験が役に立った！

サーマレイスからは見えない角度で重力玉を放つ。

俺が放った自然系魔法を防いでる植物たち、その合間を縫って重力玉は飛んでいく。下級程度の魔力しか感じなかったから自分の身体にかけている魔法障壁で防げると油断したのである。回避行動をとらなかつたサーマレイスは重力玉をもろにくらって後方へと吹っ飛んだ！

追撃をかけようとする俺の前で植物たちに変化が起きた。木の枝に生えていた葉っぱの色が赤、青、黄、銀色など緑色から変化したのである。

そしてそれらが枝から離れ俺に向かってきた。小さく軽いだけかなりのスピードで飛んでくる。

あれは危険だ！

自分の勘に従い追撃を停止し後方へと跳んだ。

俺が先ほどまでいた場所に赤い葉が到達した途端爆発を起こした。他の葉も凍らせたり、硬化していたりと色ごとに能力が付与されているらしい。

大量の葉が俺を包囲するように襲い掛かってくる。

次々と迫る葉に対し回避ではなく下級魔法を撃ちまくり消し飛ばすことで対応している。

俺がすべての葉を消したのと同時に体勢を立て直したサーマレイスが再び接近してきた。

それからのサーマレイスの攻撃は熾烈を極めた。



さまざまな能力を持つ葉を飛ばし、頑丈な弦で俺の動きを拘束しようとする。迫る植物を俺が切り裂けばそこから強力な酸が降りかかり、向かってきた種子を回避すればその種子が俺の後ろで発育しいきなり背後から攻撃されることになる。

直接攻撃以外にも植物の粘液で地面を動きにくくしたり、色の濃い濃密な花粉によって視界を遮るなど流石はセラヴァイル家と思わせるような多彩な攻撃の数々で俺は何度も傷を負ってしまった。

さらにサーマレイスは一度受けた攻撃はすべて完璧に回避した。

重力玉は最初の一度以外はすべて躲かれ、霊・闇系魔法『ゴーストパレード』により作り出された数十体の死霊モドキは植物をすり抜けてサーマレイスに到達し、一度はそれなりのダメージを負わせたものの即座に回復、二度目は聖系魔法『神聖・浄化』によって防がれてしまう。

次に俺は本来は上級相当であるため使えない『邪神の波動』をわざと弱めることで発動させた。サーマレイスの左右から巨大で醜悪な手が現れて指先から広範囲に広がる闇の波動を放つと一度目はもろにくらった！

しかし弱めていたため倒すには至らず、俺も無理に使用したため追撃がかげられなかった。そして2度目以降は邪神の波動の魔法陣を見ると即座に離脱することで回避、俺自身も連続では使えないためにこの魔法は打ち止めとなる。

ここまでくると俺が植物を通り抜けたら、植物ごとダメージを受ける魔法を選んで使いはじめたことに気付いたのである。魔法陣上のものを強烈な重力で押しつぶすオリジナル魔法『グラビティプレッシャー』も植物は圧殺したもののサーマレイス本人はギリギリのところまで範囲外に逃げられてしまった。

そうして今はお互いに少し離れたところで向かい合っている。

「さすがですね。自然系だけでなく闇や重力まで扱うとは。おそらくは聖系やその他の物も扱えるのでしょうかね。」

サーマレイスが俺に賛辞の言葉を述べる。

「お前こそ。植物系の魔法を極めるとあんなにも多彩な効果を発揮

させられるんだな！汎用性で言えばサーマレイス、お前の方が高いんじゃないか？それにまだすべての手札は出してないだろ？」

「それはお互い様です。あなたは治癒魔法を使っていないのに傷が治っている。どんな手段を用いたのでしょうか？詠唱型で詠唱破棄によって行ったとしても魔法陣は現れるのが普通です。ですがあなたの傷口周辺には魔法陣は出ていませんでした。」

あんな戦いの中でもよく見てやがる。

「それに他にも疑問があります。」

何のことか俺が尋ねると

「なぜ未だに動けるのですか？今までの試合を見た結果と、わたしが感知するあなたの魔力量を考えれば既に魔力切れを起こしているはずです。」と返ってきた。

サーマレイスに教える気はないがそのためにわざわざ『不死鳥の巫女』を狩りに行ったんだからな。

ホント昨日ダンジョンに言って正解だった。じゃなきゃとつくの昔に敗北していたな。

けど再生回数にも限度はあるからそろそろ試合を終わらせなきゃ

まずいかな。

「言ったはずだろ？その質問も力づくで聞きだして見せる！」

俺は自分の限界が迫っているのがわかるけども戦いをやめる気はなかった。

数分後。

二人はずっと接近戦を行っている。

観客からは一進一退の攻防に見えるだろうが実際には俺が押し寄せられ気味だ。

というのも俺たちの戦い方が大いに異なっていることが原因だ。

サーマレイスは身体能力の強化に重点を置いている。俺の魔法の中には植物の防御を透過したりするものがあるので、逆に邪魔になると判断したのだろう、ほとんど魔法は使っていない。

それに対し俺は風と弱い雷のエンチャントを使って対抗しているが、もとの能力はあっちが上だ！魔法で牽制しながら戦っている。

雷の付与も全力でできればいいのだろうけど、フルパワーで行くと巫女の魔法式による再生に悪影響を与える可能性がある。だから使えなかった。

けどエンチャントや牽制に魔法を使い続けている俺は確実にサーマレイスより多くの魔力を使っていた。

迫る黄金の剣に対し、魔法を放つことで微妙に軌道を変える。それをぎりぎり回避し、反撃に移ろうとするがその頃には次の一撃が迫っている！

もう間に合わない！即座に判断しノーダメージではなくかすり傷で済むようにロングソードを振るう。

再び剣がぶつかり合うが押し負ける。

「……」

俺の左腕にサーマレイスの剣が当たる。

傷は浅いため、即座に再生する。

かすり傷程度の再生ならまだまだ行けるはず。

牽制に多数の重力玉を一斉に放つことで一旦、距離を取ることに成功した。

しかしマズイな…防戦一方だ。

この状況を変えるには呪怨大樹の能力が適切なんだが……サーマレイス本人へは攻撃が当たらないだろうから……なんとか植物の魔法を使ってくれればいいんだが……

悩む俺だったがそのチャンスは意外なほど早く訪れた！

サーマレイスが焦れたのか、俺が待ち構えてるのに気づいて敢えて撃つたのか、今の俺では本来なら反応できないタイミングだが待ち構えてたため反応できたのか…

それはわからないが鏢迫り合いの後、お互いが下がったとき俺を囲むように地面からたくさんの樹が生えて向かってきた。

待ち望んでいた瞬間である。タイミングを外さないように魔法を使う。

「呪怨大樹！」

詠唱破棄で呪怨大樹を発動させる。発動魔力量はそのまま詠唱破棄を行ったため魔法の威力がかなり下がっている。が、今回はこれで倒すことを目的としているわけではないからそれはいい。

骨でできた白い樹がサーマレイスの黒い樹に絡みつき押し止める。そして魔力を吸収し始めた。

サーマレイスは少し驚いたようだがそのまま力づくでねじ伏せることにしたようだ。さらなる魔力を注ぎ込まれた黒い樹は白い樹を絡みつかせたまま、徐々に近づいてくる。

しかし俺にとってもこの展開は好都合であった。

呪怨の樹が壊されかけているが黒い樹により魔力が注ぎ込まれていることで魔力の吸収も早くなっている。おかげで直ぐに種が生成された。

種を回収し、巫女の再生を停止させ自身にフルエンチャントをする。

そして即座にその場を離脱！

エンチャントを解き再生を再開させながら次の作業を行う。

一方で先ほどまでいた場所ではサーマレイスの神聖魔法で簡単に呪怨大樹が破壊されたが（これがこの魔法の弱点だ）、それには構わず種子を地面に叩き付ける。

そうすると黒いラフレシアのような花が咲く。

「植物系と闇系の複合型ですか。見たことないタイプですからあなたのオリジナルですね？どのような効果があるのでしょうか？」

サーマレイスは戦闘行動を停止し興味深そうにこちらを見ている。やはり植物を司どる家系だけあって好奇心がわくのだろう。

まあ、何が起きても対処できるという自信があるからこそだろうけど。

「お前の魔力を吸収していたのはわかったよな？」と俺が尋ねればサーマレイスは静かに頷いた。



「その魔力を解析し種子を作る。その種子からこの黒い花が咲き、その中心からは呪いの実が霧状になって周囲に散らばる。」

言葉通りにラフレッシュアの中心からはすごい勢いで黒い霧が噴出し  
ていた。

「どんな効果があるのですか？」

「サーマレイスの魔力を解析し、それに対する抗体のようなものを作り上げる感じかな。簡単に言えば魔力を吸い上げた奴の能力を下げる呪いだと思えばいいさ。」

会話をしている間も呪いは広がり、サーマレイスの周辺も汚染されている。

サーマレイスはそこへ呪怨大樹を壊した神聖魔法を放つが呪いは消えない。

「無駄だよ。お前の魔力に対する呪いだからな。お前の魔力によって発動する神聖魔法も効果を封じられるというか威力が下がる。結果として呪いを消すだけの出力は出ない。」

「なるほど。」

俺の解説を聞きコクコク頷いている。

「わたしへのダメージなどはないのですか？」

「ないよ。能力を下げることに特化させた呪いだし。魔法だって発動したでしょ？威力は極端に下がるけどな。」

「凄いですね」と呟きながら周囲を見渡している。

効果を発揮し終わったラフレシアはすでに枯れて消滅し会場は完全に汚染されていた。

「どうして最初にこれを使わなかったんですか？」とまたまた尋ねてくる。

まあ、これには答えてもいいか。

「元々はお前が焦り始めた時に使う予定だったんだ。」

サーマレイスは手加減をしつつも余裕あふれる貴族っぽい勝ち方をしてくると考えてたから、俺は魔法式で再生能力を高めしごとく粘り、隙を見て強力な魔法を使う。

それによってスタミナを削られたサーマレイスは徐々に焦りだし、全力で俺を叩き潰そうとする。その時に呪いで能力を下げたり、

一気に逆転！俺が勝つ！

こんな筋書きだったのに現状は全くの逆だ。

サーマレイスは未だ余力を残すが俺はもう再生回数に限界が見えてきた。

まったく貴族ってやつはとんでもないな。事前の予測をはるかに超えている！

そんなことをサーマレイスに伝えた。

「あなたも十分に強いですよ。わたしは貴族の中でも戦闘に関しては上位ですし。私より強い方はそれこそ本家の当主の方々とかですよ。」

そうなのか！

いや、今はそんなことはどうでも良い。それよりもだ。

「この状態で戦ってそれでもお前を倒せないようだったら2つの質問に答えてやるよ。」

呪いの説明を聞いても動じなかった女が俺の言葉を聞き大きく目を見開いている。

「どうしたんですか、急に？あなたは殺されても答えないと思ってました、部下の佐々門さんがそのような方でしたから。だからこそどうやって吐かせようか悩んでいたのですが…」

別にそこまでして隠すことでもないしな。めんどくさいというだけだし、自分の実力を測るという目的は半分は達成した。

この呪いをかけた状態でも勝てないようだったら、もう雷エンチヤントMAXで行くしかない。

おまけにその場合、巫女の再生が働かなくなるから事実上の最後の手段になる。

「まあ、良いじゃないか。それよりもそろそろ続きを始めるぞ。覚悟はいいか？」

俺の確認に対し、首を縦に動かしたサーマレイスを見て俺は再び戦いを開始した。

再び行われる斬撃の応酬。

だがこれまでとは違い今回は両者一步も引かず対等のレベルでの戦いだっただ。

そう『対等』だった。

まさか呪いの影響を受けてなお、対等だとは！

心から驚嘆する！

この呪いはレベルで言うなら2段階ほど能力を下げるものだ！その上で強化された俺と対等だという。

ならばサーマレイスの全力はいったいどれほどのものなのだろうか！？

もちろん武器の性能による差はある。その中に入っている魔法式の量と質による差も。

でもそれを扱い使いこなすのはサーマレイスだ。

この女はホントに強い！

俺が前に感じたように、こいつなら魔王の眷族たちの中でも中程

度の奴なら普通に倒せるだろうな。

そんな思いを抱きながら二人で戦い続けている。

既に時間のことなんて頭にない。俺はただただ剣を振るうことに夢中になっていた。あとで確認すればこの時点で過去最長試合時間を記録していたそうだ。

サーマレイスも楽しそうな顔で剣を扱っている。その顔にはまだ余力があるぞというような色も見て取れた。

俺も楽しい。いつまでもこうしたいとさえ感じる剣舞の中、終わりは唐突に訪れる。

ズキッ！と強烈な痛みが全身に走った！

次で再生限界という証だ。

俺の対戦相手は突然硬直した俺の隙を見逃すような女じゃない。

痛みでわずかに動きが止まった俺に対し久々の魔法を放つ。

俺を囲むような球形の魔法陣が作られるとそこから植物が一斉に出現した。今までと違い完全に密集しており、わずかな隙間さえない！

呪いの影響下でこれほどの魔法を使えることに驚きたいがそれどころじゃない。

隙間がない以上、スピードを上げてもしようがないな。

仕方ない…

魔力を大量に消費するが空間転移で包囲から脱出！

離れた場所に移動すると今の空間転移でなくなった分の魔力を回復するために魔法式が作用した。

まさかラストの回復をこんなに早く使うことになるとは…

考えながら呪いを解除する。

これ以上は使っても無駄だろうし再生ができなくなった今魔力量的にも維持するのが厳しい。

「魔法式を用いずに空間転移まで使えるんですね！ここまでくると驚くを通り越して笑ってしまいそうです。」

俺が呪いを解いたのを見ながら話しかけてくる。

それには答えずに

「2つの質問に対する答えだけだな」

と話し始めると直ぐに真剣な顔になって聞く姿勢になったようだ。

「力は他のやつから与えられたものを参考に自分用のものを開発したって感じだな。優勝賞品としての望みはない。この大会に出たのは商品が欲しくてではないからな。敢えて言うならお前、というより上級者と戦うことが目的だったから。」

「……………」

「……………」

「…え？今ので終わりですか？」

「うん。ちゃんと言ったろ。」

「……………」



「……………冗談だ。ただけっこう長い話になるぞ。」

「構いません。時間制限はないのですし。」

サーマレイスは聞く気満々と言うか聞き終わるまで動きませんって感じのオーラが出ている。

…なんか凄い勘違いをしてそうなんだよな、この女は。

別に聞いても楽しい内容じゃないし、壮大な物語があるわけでもない。

どちらかというところだらない感じの話なだけだな。

まあ、本人がそれを聞くと言い張るのだから仕方ないか。

俺がロングソードを地面に突き刺し手を放すと、サーマレイスも同様に黄金の剣から手を放した。

そうして俺たちは戦いを一時中断し過去の話が始めるのであった。

26話 サーマレイスは予想以上に強かった(後書き)

次の27話の後の28話から『悪ルート』へと分岐することになります。

大会編ももう少しです。今週中には終わらせたいですね。

27話 過去の話 (東心峰入学以前) (前書き)

話が長くなつたため悪ルートへの分岐は次話のあとになります。

前書きの一部を削除しました。

27話 過去の話 (東心峰入学以前)

さて話すと決めたはいいがどこから話せばいいかな…

もう一回言っておくけど全然盛り上がらない話だぞ!?

他人が聞いても何の面白味もない話だ。

「お前は俺の弟妹や幼馴染を知ってるんだよね？」

「はい。幼馴染の人たちはみんな同じ研究室ですから。あなたの弟妹もそれほど接点はありませんが候補生として我々の教育機関に来ていますし知っています。」

「そっかそっか。ま、家族のことは置いといてだ。俺と幼馴染を見てどう思うっ？」

「どうとは？」

サーマレイスは聞き返してくるがホントは俺の言いたいことがわかってるのだろう。

けど人の外見のことを率直に言えるような性格ではないか。

観客も俺の話を聞こうとしてるのかシーンと静まり返っている。俺がどうやって強くなったのか知りたいのかな？

けど他の人にはほぼ不可能な方法だし聞いてて盛り上がるような話ではない。

何気なく観客席を見渡しながらマイクを切るうかと考えた時に京子や睦美が見えた。

2人ともホントに可愛いな〜

手を振ってみたら2人とも返してくれた。ってか東心峰の人たちの多くが振り返してるんですけど！

「あ〜」

サーマレイスが躊躇いがちに呼びかけてくる。

心配しなくても大丈夫。今から始めるから！

マイクは切らなくてもいいな。京子や睦美にもいつかは言った方が良くないことだろうし一緒に聞いてもらおう！

サーマレイスの方を向くと改めて話し始める。

「俺とあいつら6人は仲のいい幼馴染だったけどさ、明らかに俺だけ浮いてるんだよな。わかるだろ？」

「え？あーいや、どうでしょう…」

サーマレイスは外見が俺だけ明らかに劣っていることに気付いているんだろうけど、それには答えない。

かなりキョドって目が動き回ってる。

こんな感じの話は苦手なのかな。意外だ！

まあ、凄い動揺してるし、いじめるのは可哀想だから話を進めるか。

とりあえず極力サーマレイスに話は振らないでおこう。

俺の幼馴染は6人いる。

満野樹 ハヤテ

鈴木 雄介

ロイヤードゥストーンハウス

長谷川 沙夜

水木 友美

茉莉「カーヴェスタン

男3人に女3人だ。このうち雄介と友美が1つ上の学年で他は俺と同じ年だ。

言うまでもなく全員が美男美女だ。まあ、タイプは違うけどね。

おまけに頭も良く運動もでき、魔法使いとしても優秀だ！さらには性格も良い人たちでまるで物語の主人公みたいな人たちだ！

6人のうち俺の話で深くかかわるのはハヤテと沙夜だからこいつらのことだけはもう少し詳しく言うぞ。

ただ最後に会ったのは結構前だから今は変わってる可能性はある。まあ、超低い確率だけど。

ハヤテは黒髪黒目、高身長、爽やかイケメンだ！性格は男女ともに好かれる良い男！よくある物語の主人公みたいなやつではあるが決して鈍感ではない。むしろ鋭い人間で周りの人の機微に敏感で気を回せる優しい性格。

そしてただ優しいだけではなく怒るべきところは怒るし戦うべきところでは戦えるやつだ！困ってる人は助けるし冗談も言えるもうホント弱点はなしかよ！って感じだったな。

沙夜は綺麗というより可愛いタイプの女だ。大人しくて家庭的で料理を作るのが上手で、尽くしてくれるタイプの女の子。身長は150後半くらいでスタイルはスレンダーな感じで胸のボリュームがちょっと物足りない。無いわけではないけど巨乳好きの『今の』俺には物足りないな。

沙夜は大人しいんだけどいざという時はやるべきことをやれる女だ。

そんでスペックの高い幼馴染の中で俺だけは残念な存在なんだよなあ。

身長は170に届かない。顔が大きめで足が短い。あり得ないほどの不細工ではないけど格好良くもない。勉強、運動、魔法全てにおいて幼馴染には大きく劣っている。

悲しいことに弟妹は違うんだ。2人は俺と顔の1つ1つのパーツは似ているのに美男美女の主人公側の高スペックなんだよね。



俺はまるでイケメンになりうる顔のパーツを変になるように配置されたかのようだ。

そんな俺は幼馴染とずっと一緒に育ったわけだけどあいつらは良い連中で仲良くしてくれて俺もみんなが好きだった。

ずっと仲良く過ごしていたんだ。

あゝ俺の初恋は沙夜だった。

けど幼いながらも俺なんかじゃあ無理だと悟り直ぐに違う人を見るようになったけどな。

雄介と友美は1つ上だから自然とそこで仲良くなって、ロイヤードと茉莉は親同士が元々仲が良いらしく家族間での交流も多い。自然と子ども同士も親しくなっていた。

そんなわけで残った俺とハヤテと沙夜で過ごすことが多かったわけ単純な俺は可愛くて優しい沙夜が好きだった。

けどハヤテも沙夜が好きだった。行動でバレバレだし、俺と二人

で話したこともあるからな。

沙夜の方はよくわからん。多分だけど子供の頃はそういう恋愛感情そのものを意識して無かったと思う。

ハヤテは優しいけど戦うべき時は戦う男で、沙夜のことは絶対に引かないだろうとわかっていた。

俺が戦っても勝てない男だとその当時から認識してた俺は、沙夜を諦めるのに時間はかかったけど他の女の子を意識するようになった。

そんな感じで時に喧嘩もすることはあったけどみんなで仲良く過ごしていた。

変わったのは中等部の頃だ。

学生時代ではありがちな話だがこの当時の俺は外見で女を判断していた。

この時好きだったのはちょっと不良グループだが見た目は良く、スタイルも良い女だった！

名前は美幸だったかな。

性欲を覚え始めたこのころは、スカートが膝くらいの子が多い中でパンツが見えそうなほどミニの美幸ちゃんに夢中だったんだ。

美幸ちゃんは毎日俺に話しかけてくれて、俺と凄く仲が良かった！

まあ、結論から言うとそれはすべてハヤテ目当てだったからだけ  
ど……………

この後、何が起きたか簡単にまとめるとだ

1・美幸ちゃんは俺からハヤテの情報を聞き出す。

2・俺は、ハヤテは沙夜が好きだがまだ付き合っていないことを伝える。

3・美幸ちゃんは二人が付き合う前にハヤテを誘惑しようとして、ハヤテに拒絶される。

4・美幸ちゃん、ネバーギブアップの精神で迫りまくる。ハヤテは最初やんわりと拒絶してたがあんまりにもしつこいから、がつつりと拒絶した。

5・泣いてる美幸ちゃんを慰めようとする俺、あり得ないくらいに罵倒される！

6・傷つく俺。幼馴染が慰めてくれる。特に沙夜は家に来て、泣き

まくる俺の話をじつと聞いてくれた。おまけに頭を撫でてくれた！

7・沙夜への恋心復活！

「ここまでの話はわかった？」

黙って話を聞いているサーマレイスに問いかけた。

微妙に柔らかい風が吹いていて、サラサラの紫色の髪が揺れている。

俺より背が高いから守備範囲外だがこいつもまた相当綺麗なんだよなあ

俺が見惚れているのに気づいてるのかわかんないけどサーマレイスは静かに頷いた。

「じゃあ、続きだけだな。改めて沙夜に惚れたわけだけど直ぐにそれも終わってたんだ。」

あれは半年後くらいだったかな。

マンガを買いに街へと出かけたなら沙夜とハヤテが“手を繋いで”歩いていた。

それだけだ。

たったそれだけのことだけど俺は打ちのめされた。

悪口を言われたわけでも無視されたわけでもない。

ただ二人が手を繋いでいるのを見ただけで美幸ちゃんに罵倒された時より激しく傷ついたんだ。

「今にして思えば俺は沙夜のことを諦めてなんていなかったんだろ  
うな。諦めたふりをしててもやっぱりずっと沙夜が一番好きだった  
んだと思う。沙夜は優しくて可愛い女の子だし。」

笑いながらそう言うとサーマレイスも「そうですね。」と答えてくれた。

「人によつて恋愛の大事さというか比重は違うだろう？親の庇護下にあり金に困るわけでもない、仕事をしているわけでもない、守るべき子がいるわけでもない学生の多くにとつて恋愛は大きな部分を占めるものだと思うんだ。少なくとも俺にとつてはそうだった。」

当時の俺にとつてはそうだった。

『今の俺』から見れば些細なことでも『昔の俺』にとつては何よりも大きなことだった。

沙夜がハヤテを選んだ。

俺はそれだけで動けなくなった。

自分の部屋に引きこもり不登校になつたんだ。

「な、くだらないだろ？」と苦笑しながら聞いてみた。

「え？あ、いや〜どうでしょうね？難しいですね。」

やっぱりサーマレイスは困ったようにしている。てか動揺しすぎて悪いことした気分になってくる。

「あれから時間が経ちいろんなことを経験した今の俺は笑って話せる。けど当時の俺は笑うどころか学校にも行けなくなったださ。まあ、他にも原因はあったんだろっけど。」

二人が出来ることがショックならそれを隠していたこともショックだった。親友なのに裏切りだ！とハヤテを恨みまくったな。

まあ、これにはいろんな意味での嫉妬も混ざっていたんだろっけど。

自分でも気づかなかっただけで、小さなころからハイスペックでモテまくる幼馴染全員に俺は嫉妬していたんだ。

けど仲がいいし、俺もみんなが好きだし、自分へのプライドもあるから気づかないフリをしていたんだ。

その貯めこまれていた嫉妬もこの時一緒になって爆発し、でも悪いことをしたわけでもないあいつらにぶつけることもできなく、結

果として引きこもるといふ逃避行動をとったんだろうな。

家族も親友たちも学校の友達もみんな心配してくれたけど、どうしても動けなかった。

俺は理由を言わなかったけどみんなは察したんだろう、沙夜とハヤテは最初の1回だけ来てあとは友美や雄介たちだけできていた。余談だが沙夜とハヤテが付き合っているという話は結局誰も何も言わなかった。

半年くらい経つとクラスメイトは来なくなった。

けどまたハヤテや沙夜が来るようになった。どうやら俺の機嫌がいい日になると親や弟妹が教えているようだった。

来てくれて嬉しかったけど俺は冷たい対応をしていたんだよな。

もう意地を張りまくり状態だったんだ。

それなのに親友たちは俺を見捨てずに毎週来てくれてたんだ。

俺だったらとっくに見限ってたかもしれないのに……実際クラスメイト達とは結局ずっと会ってないし。



変化が起きたのはそのあとすぐだ。

いつものように一人でゲームをしてるとすごく唐突なんだけど急に自分がみじめに思えてさ。

あまりにもダサすぎだし、みつともないって！

や、最初から知ってたけど気づかないフリをしていたんだ。

そして一度自覚するともう駄目だった。

何をしてもみじめにしか思えなくなっとな。

最初はいらいらしてたけど徐々に頭が冷えた今度は悩み始めてさ。

悩んで悩んで悩んで悩んで悩みまくってようやく俺は前向きなことを決意したんだ！

もう1回だけ頑張ってみようって！

今までも勉強、運動、魔法であいつらに、特にハヤテに勝ちたい

と思っていた。そこそこの努力はしてたんだ。結局何一つ勝てなかったけどな。それも引きこもりの理由の1つだったんだらうけど…

恋愛はもう無理だけど、他のこととにかく何か1つあいつらに勝てるものを入れようって！

これまでの努力では足りなかった。だからこれからは食事とか風呂とか睡眠とか最低限必要な時間以外は全て訓練に使って頑張っであいつらを超えてやろうと決めたんだけ！

このとき選んだテーマは『魔法』だ！

魔法使いとして俺は上に行くって誓った。

そして今度やってダメだったら、使える時間全て使ってそれでも負けるならもう仕方ない。

これは運命なんだと、引きこもるなり自殺するなり好きにすればいいと思った。

決意した後は久しぶりに外へと出た。そんでみんなの家に行きこれまでの事の感謝と謝罪を伝えて、しばらく会わないように頼んだ。

あ、学校には戻らなかった。かわりに図書館とか特別授業みたいなを受けて勉強した。

そして高等部はみんなから離れた別のエリアの学校に行くことにしたんだ。これまで甘えっぱなしだったから、自立するためにもな。

## 28話 過去と現在の話、そしてこれからの選択

俺は東心峰へと入学した。

決意したように俺は魔法の特訓に時間を費やしまくっていた。

東心峰の近くには魔法訓練ができる場所は2つある。あ、学校でもできるけど人が多いから利用しなかった。外部にある2つの施設のうち1つは多くの一般市民も利用するそこその規模だったから俺はもう1つの今にも潰れそうな施設で毎日訓練してたんだ。

だけど何の才能もない俺が一人でやっても上手くいくわけがなくて。知識は増えたけど実践はダメダメでなかなか上達しなかった。

「まあ、それは最初からわかってたから黙々と訓練していたらあそこにいる部下たちが施設に来て一人で訓練するようになったんだ。」

言いながら客席の部下たちを指し示す。

ホント懐かしい話だな。

あいつらは同時に来たわけではない。個人で来ていていつのまに

か施設の常連になっていたんだっただ。

あいつらは不登校とかはないけど俺と同じ負け組で似た者同士だ。

シヨボーイ施設に4人しかいなかったからな。俺たちは自然と時折会話するようになって一緒に訓練するようになったんだ。

負け組4人だからそんな簡単に上達しないけどやっぱり仲間がいた方がモチベーションは上がるし意見も言い合えるし楽しいからな！喧嘩もしたけど…

そんで2年になる頃に4人ともレベル2になって喜んでると部下の一人、Dの友達のBとCも顔を出すようになったんだ。

学校ではいつも一緒にいるDが最近放課後の付き合いが悪くなり成績も上がってるから気になってついてきたらしい。

そんなわけでBCコンビもたまに顔を出すようになったがあいつらは基本的には訓練しないで駄弁っていたな。

まあ、それはどうでも良い。そんなことより大事なのはここから！

久しぶりにBCコンビが来て6人で話してたある日のことだ。

いつものように訓練し帰ろうとして外を歩いていると、目の前の空間が突如歪み何もない漆黒の空間が現れたんだ。

そう、異世界への扉『ゲート』だ！

過去の記録から知識はあったが本物は見たことなかった。けどなぜだかわからんが俺にはそれがゲートだと直感でわかった。

そして俺たちが驚いている間にゲートが開き俺たちを飲み込んだんだ。

「ゲートの向こう側、異世界で起きたことは長すぎるから省略するけど」

「待ってください！」

俺が一人で語りまくっていると初めてサーマレイスの方から口を開いた。

「なんだ？詳細は無理だぞ。長すぎるもの。」

「それでもできる限り詳しく知りたいです！！わたしも知識では知ってますがこうして実際に異世界に行ったことがある人の話を聞く

のは初めてですから!！」

興奮したように言うサーマレイス。ここまで感情を出すのを見るのは初めてだな、

「てか、いきなり異世界の話が来たけどウソだと思わないの?」と聞いてみれば

「あなたはウソをつくような人ではないです。」だってさ。

「嬉しい言葉だけど詳細は無理だ。なんせバカみたいな期間異世界にいたからな。話しきれぬわけない。どうしても知りたかったら別の機会で話してやる。」

そう告げると渋々引き下がったようだ。

異世界に着いた俺は魔王の力を与えられた。

もともとその世界には魔法技術もモンスターもなく、人類の科学による文明が発達していたらしい。

しかし文明の発達とともに資源の枯渇が起き、結果滅びることになった。

だからその世界の神は新しく作り直した人類に魔法を与え科学の発達を抑えるとともに、モンスターを創り科学の発達している地域を滅ぼす役割を与えた。

そのモンスターを統括し世界を管理、支配するのが魔王である！

俺がその世界の神によって課せられた制約は2つ。

- 1．人類を全滅させないこと
- 2．人類の文明をある一定水準以上にさせないこと

この2つを守れば何をしてもいいということだった。

俺の魔王の力を部下5人に分け与え、眷属としたあとは制約の範囲内で好き放題しまくった。というか魔王の本能に従って気に食わないやつを殺しまくって、美しい女は犯して手元においていたら制約は意識しなくても守れていたな。

こんな感じで過ごしながら長い長い時間が経った。



その間にもいろいろあったけど基本的には力づくで解決できたから特筆するべきことはない。

そうして魔王としていられる期間が過ぎると開拓者へ戻ってきた。

問題はここからだ。

魔王の力は肉体に与えられるものだから帰ってきた俺たちは力を失っていた。

それに対しBとCは魔王の力を取り戻す研究を行うことを主張した。

けど俺はそれに賛同しなかった。

そりゃ魔王の力を取り戻せば簡単に幼馴染たちの上に行けるけどな、それは『俺が』強くなったのではなく『魔王が』強いだけだ、俺の目標とはズレている。

ここまで話したところでサーマレイスが質問してきた。

「……………その魔王の力とやらはそんなに強いのですか？あなたの幼馴染たちは優秀ですよ。特にハヤテやロイヤードはわたしと同格ですから。」

マジでか！？凄いなあいつらは！

そこまで強くなっているのか。

驚きだがそれは置いていて、ひとまずサーマレイスの質問に答えるでしょう。

「魔王の力があれば、俺一人で開拓者に戦争を仕掛けて滅ぼせるぞ。俺は無傷でな。」

笑いながら告げると、探るような視線を向けてくる。

だけどそれは無視して元の話が続けよう。

そんなわけで俺は魔王の力を必要ないと判断したんだが、それによつてうちのチームは2つに分かれてしまつてなあ…色々めんどくさかつたんだわ。

魔王の力がなければどうにもならない場面だつてんなら俺も賛成したけどな。

現状では『魔王の力がなきゃ終わり!』なんて問題はない。

あるいはA、D、Xの誰かが提案したんなら俺も少しは考えた。けど提案したのは異世界に行く前から訓練なんてしてないBとCだ。あいつらは提案しておいて実際の作業はやらないタイプだ。

506

わかりやすい例えとしては 旅行だ。

BとCは旅行に行こうと言い出すが、実際に行くための交通手段、宿泊場所、食事などの手配は一切やらないんだ。おまけにあとになつてから「俺だったらあつちのホテルにしたのに」「この料理はまづかつた」とか文句言うタイプでな。正直鬱陶しいんだ。

異世界では魔王に逆らうことはできないから問題なかったけど開拓者に帰ってきてからはもうダメだ。アホなことばかりやって…

一年半ほど説得し続けたけど無駄だったからもう諦めた。

ま、これは内輪の話であまり関係ないことだし、こいつらの話はここまでにしよう。

魔王から人間に戻って今日までの約2年間、俺は異世界での知識や経験をもとに訓練したんだ。そのおかげで今の中級レベルのスペックを得たってわけだ！

師もない俺の魔法技術が無駄に高い理由もわかっただろう？

あ、この2年間は友達と遊んだりもしてるぞ！訓練しっぱなしよりも効率よく成長するってわかったからな。

最後にこの大会へ出た理由の説明だ！

これは単純に今の自分の実力を把握するため、それだけだ。

だから優勝賞品なんてどうでも良い。

地位も名誉も金も必要ない。武器と魔法式は欲しいがそれは自分で用意する。

実際に自分がどれだけ成長したのかを確かめるため、上級者を相手にどれだけ戦えるか知りたかった。

だからサーマレイスが聞きたがってるような望みなんてない。

「敢えて言うならば、お前と戦うことこそが俺の望みだ。わかったかなサーマレイス？」

長い話を終えてサーマレイスに問いかける。

「ええ。ありがとうございます。いろいろと興味深い話でした！特に異世界の話は機会があれば改めてお聞きしたいですね。」

サーマレイスは微笑んで答えたあと、目を閉じる。

そのまま何かを考えるように押し黙る。

「この試合のことですが……」

しばらくして、サーマレイスは静かに口を開いた。

「あなたの望みから考えるに、私があなたに勝利を譲るとするのは  
」

「そう！ありがた迷惑以外の何物でもない！」

サーマレイスが言い終わる前に俺が口を差し挟む。

この礼儀知らずな話し方に俺の本気を感じ取ってくれたんだろう。

俺の意思を受けてやる気になってくれたようで、サーマレイスの気配が変化した。

今までのような『情報を聞き出すために』加減して戦うのではなく、『俺を倒すために』戦う気になったのだろう！

余計なお喋りはここまで。

ここからは本気の殺し合いだ！

俺は地面に突き刺していた剣を引き抜き、サーマレイスに対して切っ先を向ける。

サーマレイスは閉じていた眼を開き、黄金の剣を構える。

少しずつお互いの魔力が高まっている。

俺の再生はもうほとんど機能しないだろう。

正真正銘これが最後だ。

体内の魔力を循環させる。……………簡易身体強化完了。

魔法式起動！……………攻撃力、敏捷、知覚の上昇確認。

自力型エンチャント……………風属性の付与完了。敏捷、斬撃の威力が上昇。

2つ目のエンチャント……………雷属性の最大付与完了。攻撃、敏捷が大きく上昇。

丁寧に魔法をかけ能力を強化していく。

身体と剣に付与した雷が全身から迸りものすごい音を立てている。

俺の周囲の地面は身体から放出される雷光で焼け焦げてしまっ



いた。

これが今の俺にできる最高の状態だ！

「俺の準備は終わったけどそっちはどうだ？」

「いつでも。」

短い答えを返すサーマレイスの全身から、ここまで感じなかった独特の魔力が放出されている。

おそらくは一族に伝わる魔法 感覚的に身体強化系だと思われる。

「お前も真面目に戦う気になったようだな。」

俺の魔力量、サーマレイスの実力から考えて戦えるのは5分程度だ。

それ以上長引けば魔力切れで俺の負けだ。

「ええ。それが話を聞かせてくれたあなたに対する礼儀でしょう。わたしは勝ちに行きますよ！」

空気の読めるいい女だ。

身長差が無ければ口説きたかったなあと少し本気で思うぞ。

場違いな考えが浮かぶが、すぐに追い出して深呼吸する。

深呼吸してワンテンポ置き、告げる。

「よし、はじめるか！」

簡潔な言葉と共に俺たちの試合、最後の戦いが始まった！

今の俺は間違いなく最高の状態だ。

俺の一振りによって十数メートル先まで雷を帯びた斬撃が飛ぶ。

強靱な脚力によって一歩動くだけで地面が砕かれる。

だがサーマレイスはそれに遅れずついてくる。

一太刀合わせることに強烈なスパークが発生するこの戦いは観客からはかなり見ごたえのあるものだろうな。

「ウオオオオオオ……！！！」

叫びながら渾身の一撃を放つ！

しかしサーマレイスはすべて抑えきる。それだけにとどまらず隙をついて的確にこちらの急所を狙ってくるのが凄い！

お互いに一瞬たりとも同じ場所にはとどまることなく動き続けている。

特に俺が絶えず動き回るせいで会場の足場はボロボロになっているがそんなことに気を回す余裕も無くなりつつある。

こうしてる間にも魔力がなくなり続けているからだ。

魔力量が残り90%

・ ・ ・ 80%

・ ・ ・ 70%

・ ・ ・ 60%

時間の経過とともにドンドン減っていく。

このままではジリ貧だ。

粘って戦い続けてもサーマレイスはミスをするような女じゃない。俺が意図的にミスを起こさせようとしてもその頃には俺の力が残ってないだろう。

ただ魔力が減るだけでやがてはエンチャントが解け敗北してしまう。

勝ちを狙うならば余裕があるうちに全魔力を使い一撃で決めるし

かない！

俺はそう決意すると、サーマレイスの攻撃後のほんのわずかな隙を狙い距離をとった。

そしてサーマレイスが追撃をかけるより早く、ほぼ全ての魔力を雷のエンチャントへと注ぎ込み脚へと付与する。

極大に高めたスピードで切り伏せる！

限界以上の魔力を注いだことで地面どころか俺の脚さえ焼けかけているのがわかるが、次の一撃で決めるつもりだから気にしない！

意識をすぐに敵へと戻すところちに向かおうとしていたサーマレイスの動きが止まっていた。

俺が何をしようとしているのかわかったのだろう。

受ける構えを取った。

俺たちが動きを止めたために、ただ雷の音だけが響いている。

ここまで来て余計な言葉はいらないだろう。

俺は仕掛けるタイミングを計っていた。

膝を少しずつ落として飛び出す構えを取る。

そして！

サーマレイスが瞬きをした瞬間に全速力で駆け出した！

わずか1秒にも満たない一瞬でサーマレイスに肉薄する。

今まで以上の速度                      俺の限界を超えた神速を持ってサーマレイスを射程に捕えた！

しかし流石は貴族代表というべきか。サーマレイスはこのスピードにも反応してきた！

回避どころか迫る俺を逆に斬り捨てようとしてくる。

だが俺にとってもこれは予想の範囲内。

サーマレイスと交差する直前に脚へ付与されていたエンチャントを腕と剣へ移動させた。

それにより破壊系上級魔法に匹敵する威力を持った一撃をサーマ  
レイスへ向かって振り上げる！

これで終わりだ！！！！

衝突によって生じた爆発的な閃光が収まったあと、俺たちはお互  
いに背を向けて立っていた。

背後でサーマレイスがこちらに振り向く気配が感じられるが俺は  
動けなかった。

「ちくしょつ……」

俺の身体は斜めに大きく切り裂かれている。

ぎりぎりで心臓には届いていないが致命傷だろう……血がドクドク出ていくし。

やばい。

血が足りないせいか立ってられない。

少し頑張って振り向いてみようとしたけど無理で、そのまま前に倒れてしまった。

もう痛みも感じない……



「見事です。」

段々と遠くなっていく意識の中、サーマレイスの声が聞こえる。

「あのわずかな瞬間での雷の移動！さすがに対応が間に合わなくわ  
たしも手傷を負ってしまいました。」

ちらつと視界に入るサーマレイスの右腕は服の袖がなくなり肌は  
真っ黒に焼け焦げていた。

あれが俺の戦果か……

「勝つ以上は一撃も食らってはならない。圧倒的な勝利を示す。こ  
の決まりを破ってしまった。」

……

「例えあなたが

」

でもわたしは

サーマレイスが……何か言ってるが……

……聞き取れなくなってきた……

……

……

……

……

……ああ……

……俺は……このまま負けるのか……

……エロ太のやつは……あんなに粘っていたのに……

……俺は……俺は……



28話 過去と現在の話、そしてこれからの選択（後書き）

選択肢

諦める

悪ルート 『最初の目覚め』へ

まだちょっと動く！最後まで戦う

頑張るの次話へ

勝利する！

まだ選択できません。『魔王の力の支配率10

0%』『リリエットがいる』二つの条件を満たしたうえで選択してください。

ゲームでの分岐だとこんな感じですかね。まあ、最後の『勝利する！』の選択肢は微妙に違うのですが……

## 29話 決着

諦める……わけには……いかない！

ここで諦めて……エロ太より……根性がない……とか言われるのは……マジで耐えられない……京子や……睦美が見てる前で……無様な姿を見せる……のも嫌だしな……

……魔力を……集める……

……雷……起動……

……

……よし！

思考力が戻った。

あとは血も止めなければ！

.....

.....

なんとか応急処置も完了だ。

少なくとも今すぐ死ぬってことはない。

今やったのはわずかに残った魔力を雷に変換し強引に細胞を活性化させる。さらに微弱な障壁を張り体外へこれ以上血が流れないようにしたってことだ。

ホントに簡易な応急処置だ。日常生活なら死にかけて病院送りは間違いなしのケガだからな。この状況では完治は不可だ。

これからどうするにしろ、とりあえず立たなければ。

サーマレイスのやつがこの状況でとどめを刺しに来るってことはないだろう。

立とうとして、もがいてる奴をグサツと刺すような女じゃない。

あくまで俺の行動を見届ける筈だ。

ゆっくりと四肢に力を込め立ち上がるうとするが、そもそも腕も足もほとんど動かない。

「うーーーーーっ!?!あっ!?!」

いっつたい!思いつきり顔を打った。

両手で何とか上半身を起こしたと思ったたら支えきれなくて地面に激突だ。

手も足も黒焦げだから感覚はかなりボケているからな。

実際のところ力が入ってるのかどうかも良くわかってない…

仕方ない…

風を操作し手足を覆い風の力で無理やり動かす。

これでもう下級魔法さえ発動できない魔力量になってしまったがロングソードが近くにあるのは幸いだった。

無理せずゆっくりと手を伸ばし剣を掴む。

万が一の時のために貯めこまれている予備魔力を吸い上げる。

この予備魔力は本人が魔力切れを起こした際に魔法式へと流すための魔力で通常は人間の身体に戻すことはできないが、俺は性魔法の応用で強引に吸い上げることができる。

1分くらいかけて何とか簡易な魔法を少しくらいなら使える程度には魔力が回復した。

そしてその魔力を使って“自分の体の中にある”機能を停止したはずの魔法式を強引に作動させる。

「…ッ!?…いてえ…」

おかげで麻痺してた身体に激痛が走るが構わない。むしろ回復している証だ。

「うっ……くっ!…よっ……と…」

そのままノロノロと手足を動かして何とか立ち上がることに成功。

真顔でじつと俺を見つめるサーマレイスに剣を構える。



「待たせたな。では再開しようか。」

格好良く言ったつもりだけど掠れてみっともない声が出た。

サーマレイスは最初に驚き、微笑み、そして真面目な表情になつて静かに言う。

「血は止めたようですが、それでもその傷は深すぎます。」

そんなこと言われても諦める俺じゃない。

ここで諦めたら俺は俺じゃなくなる。そんな予感がある。

第一エロ太にできて俺にできないって言うのが何より気に食わない！

そう思ったから立ち上がったんだ。

「あなたは十分に戦いました。そしてあなたは紛れもなく強者です。それは」

「エロ太のやつは、俺の部下はお前と戦った時どうしてた？」

サーマレイスが話してるけどそんなのは気にしないで言うてやる。

俺は既に選択してるからな。

何を言われようとまだ手足が動くんだ！

戦いは続行だ！

俺の言葉を聞いたサーマレイスは苦笑して答える。

「そう…でしたね。あなたは彼のリーダーでしたね。ええ、理解しました。」

サーマレイスは俺に話しながら焼け焦げた腕を魔法で回復している。

ほんの数秒でサーマレイスの腕は元通りになった。

服は腕の部分がなくなっていて、わずかに残っている部分も黒く変色している。それ以外は多少汚れているくらいだ。

一方で俺の方はもうボロボロ。服は上半身はほとんど裸の状態、下は膝からつま先の部分が雷の影響で燃えて消えた。短パンしか穿いていないみたいだ。

最も体中の傷のおかげで観客はそんな印象も浮かばないだろうけ

どな。

血は止まっているものの胸はざっくり斬られて内臓が見えかけている。腕と脚は焦げているしな……ひどい状態だ。

まあ、強引に魔法式を作動させたおかげで少しずつ再生が行われているがいつ止まるかわからんしな。完治の期待はしない。

四肢は少ししか動かないから魔法で強引に動かしているが、肝心の魔力は1割以下だ。

意思や心が折れたら、魔力が切れたら、俺はもう完全に動けなくなる。

ここまでくるとサーマレイスと戦うというより自分との戦いっばいな。

そんなことを考えながら静かに相手を見つめる。

魔力が切れたら歩くことさえできなくなる。

このまま話しているだけで俺は勝手に倒れ負けるだろう。

だからもう行くぞ！

俺の意思が伝わったのかサーマレースも真剣に構えを取る。

本当にいい女だよ。既に構える必要だつてないだろうに俺に付き合ってくれるのか。

ちょっと感動したが、それを振り払い一呼吸。

最後の力を振り絞りサーマレースに向かって走り始めた！

さすがに大したスピードは出ない。けど風で強引に動かしているから一般人程度のスピードは出ているだろう。

サーマレースを射程に捕えるまで時間にして数秒ほど。

けど俺の感覚ではやけにスローに景色が流れている。

一歩がやたら遅く感じられる。

サーマレースまであと10歩ほど。

サーマレースを見つめつつ走りながら、剣を左下に構える。

サーマレイスまであと5歩。

接近する俺に対しサーマレイスはその場で待ち構えている。

サーマレイスまであと2歩。

サーマレイスは抜刀の構えを取る。あの長剣でやる気が凄いな！

サーマレイスまであと1歩。

俺は左下からロングソードを振り上げる！

俺の腕が首の少し下まで上がった。

その瞬間！

サーマレイスの手にある黄金の剣が閃いた！

不思議な浮遊感を感じて気が付けば、剣を振り切ったサーマレイスとその向こうに“俺の身体”があった。

“サーマレイスに首を飛ばされた”。

“強引に起動させた不死鳥の巫女の魔法式のおかげかまだ意識がある”。

この2点を認識すると同時に最後の魔力を使い2つの魔法を発動させる。

首だけになろうと意識と魔力があるのなら魔法が使える！

最後まで戦ってやるぞ。

俺の口元に魔法陣が浮かびそこから極細のビームを発射する。

中級魔法『サンダービーム』

本来は直径50センチほどのビームが出るのだがさすがに今の俺では直径1センチにも満たない極細のものだ。

しかしサーマレイスは今、俺の身体の方を向き完全に油断している。

首を刎ねたのだから当然なのだが　その無防備な頭を

目掛けて魔法を放つ。

簡単な障壁で防げる下級程度の威力しかないビームが、試合が終わったと思いい、まったく防御もしていないサーマレイスに向かって飛んでいく。

あと数十センチであたる！

というところまで来て、俺を見た観客がざわめいたせいでサーマレイスは異変に気付く。

そして瞬時にこちらへ振り返り飛来する魔法を視認する！

「なっ！？」

俺が見た中で一番の驚愕を張り付けたサーマレイスは即座に首を横に傾けギリギリのところまでそれを回避する！

同時に俺のロングソードが背後からサーマレイスの心臓を貫いた！

「……………な……んで！？」

あり得ない激痛が走り呆然と自分の胸元を見るサーマレイス。

そこには真っ赤な血の付いた俺のロングソードが突き出ていた。



「……ウソ!？」

愕然としたまま背後を振り返れば誰もいない。

いや、少し下を見ると首より上のない俺の身体が剣を握っている。

俺からは見えないが血濡れでポロポロの身体には弱い電気と再生の炎が迸り、所々がひび割れているだろう。

ゆっくりと剣を引き抜かせる。

「……」

途端、大量の血しぶきが上がりサーマレイスは倒れこんだ。

それによってようやく自分の身体が見えた。

予想通りに半壊している身体を遠隔操作しこっちへ歩かせる。

自分で自分の身体を遠隔操作するというのは半端じゃない違和感を与えてくれるけど、そこは我慢し、ここまで移動させた。

首のない身体が首を持ち上げるといっ子供が見たらトラウマになりそうな場面だ。

首の切断面では頭の方も胴の方も切り口から再生の炎がうつすらと出ている。そこを合わせるように頭を置くと、炎が傷口を塞いで首と身体をくつつけた。

その様子を見てたサーマレイスは倒れながらも言葉を発した。

「……諦めないと言ってましたが……首だけでも戦うとは……」

サーマレイスは小さな声で囁くように言葉を続ける。

「改めて……見事です。……この試合はあなたの」

勝ちです、と続けようとしたのだろうがそれを遮り俺は言う。

「いや、お前の勝ちだ。」

俺が言い終わると、パリーンという音を立てて黒く変色していた左腕が“割れた”。

そして体中に進っていた炎や電気が消え、全身に無数のひびが入

る。

「さすがに今度こそ完全に終わり。これ以上の再生は不可能だ。」

話してる間にも少しずつ身体が剥がれ落ちていく。

さっきまで電気で無理やり身体を遠隔操作した影響で、首から下はもう全く動かない。

魔力も完全にからっぽだ。

頭だけでも動かして攻撃しようかと思いかけたが、それをやると間違いなく前に倒れて全身が割れる！

それに加えて

「お前はまだ動けるだろ？」

「う……」

バレたか！というような表情をして渋々サーマレイスが立ち上がる。

「そんなに勝ちを譲りたいのか？」

「出ると分かっている芽を摘む気はありません。将来性が大きく見込める人にチャンスを与えるのもこの大会の役割です。」

生意気なことを言いやがるなあと思っていると、サーマレイスの方から「どうして気づきましたか？」と尋ねてきた。

「心臓を刺したのに血溜まりが全然大きくなってない。」

そう、サーマレイスが倒れていた場所にはそれなりに多量の血が流れているが致死量ほどではない。心臓に穴が開いてるんだからもつと多量の血が出る筈だ。

立ち上がったサーマレイスの胸を見ると真っ赤になってはいるが、新しい血は流れていない。魔法で回復したのだろう。

「お前らしくないミスだな？」

俺がそう言うと、サーマレイスは子供のようによねた顔をして答える。

「まさか首なしの身体が動くと思いませんでしたから。動揺するの  
も無理はないと思いますが。」

微妙に顔が赤くなってるな。

このまま見ているなり、からかうなりしたいが時間がない。

「何か聞いておきたいことはあるか？試合後の質問には答えないぞ。さすがに精神的に疲れたから休みたいしな。」

それを聞いたサーマレイスは表情を真剣なものに変えて聞いてきた。

「あなたの再生は不死鳥の巫女の魔法式によるもののはわかりましたが、あれはそこまでの再生力はなかったはずですよ。何をしたいのですか？」

俺は言葉ではなく、視線を自分の身体に向けて答えた。

「！？……まさか自分の身体に魔法式を組み込んだのですか！？」

「正解！」

「…なんて無茶を！？」と呟くのが聞こえた。

確かに無茶は承知だが、こうでもして再生力を上げなければ戦い

にならなかつたろうしな。

その分のリスクもでかいけど……

魔法式を武器に入れた場合は限界を超えれば魔法が発動しなくなるだけだ。

身体に埋め込んだ今回は再生限界以上に働いたがその結果として自己崩壊することになっている。

現在進行形で、人としてありえない身体の壊れ方をしているし……普通は人の身体でパリーンなんて鳴らないからな。

こうしてる間にも崩壊は進んでいる。

遂には右腕が甲高い音を立てて砕け散った。

さつきから顔もパキパキ音を立てているから凄いことになっているんだろうな……

俺からも言いたいことを言っておこう。

「しかし、貴族がこうなのかお前が特別なのかはわからんが、とんでもない強さだったな。」

俺の言葉を聞きサーマレイスは首を傾げる。何を言いたいのかい  
まいちわからないということだろう。

「結局最後まで、お前は本気じゃなかったろ？」

「失礼ですよ。わたしは最大限の敬意を払うために本気で戦いまし  
たよ！」

サーマレイスは心外ですというような顔をして言い返してくる。

「言い方が悪かったか。本気で倒しに来てはいたけど全力ではなか  
っただろ？」

「……………」

これだけ戦えばわかる。

この女は一度も全力を出さなかった。

そう、サーマレイスが全力ならば俺は瞬殺されていた。

俺をバツサリ斬った時のぶつかり合いでサーマレイスも腕を焼け  
焦がしていたが、あれはそれこそ俺への敬意だったのだろう、わざ  
と受けたに違いない。

最後の心臓への一撃だけがサーマレースの想定外のダメージだったはず。だけどそれにしただって不意打ちだしな……次に戦うことがあれば絶対通じないだろう。

それしかできなかったことに悔しく思う気持ちはある。

でも今の俺はそれ以上に得られた結果に満足していた。

「一年半だ。」

「何がですか？」

「あと一年半あれば今のお前くらいの強さにはなれる。」

俺とサーマレースでは基礎能力が違いすぎる。そのために俺の敗北という結果になった。

だが、まだ俺には強くなる余地がある。

今回の大会で持ち込んだ魔法式のうち上級は1つだけで、残りは全て下級と中級だ。

もっと沢山の魔法式が入る武器を用意して、上級の魔法式を手に



入れる。それによってよりハイレベルの身体強化を行い、魔力消費を抑える魔法式も組み込む。魔力消費を抑えられれば詠唱でオリジナル上級魔法もたくさん使えるようになるからな。爆発的に強くなるだろう。

「ただ1年半あればお前だって成長するだろうから……俺が追い付くのは3〜4年後ってところだな。」

サーマレイスと同格だという幼馴染たちにもそれくらいで追いつけるだろう！

昔は何をやっても勝てないと思い知らされたあいつら。

時間はもうしばらくかかるけど、それを追い越せるところまで来ている！

ゴールが徐々に見えてきた！

これだけで十分に今大会へと出場した目的は果たせたがやっぱり負けたことは悔しいからな。

せめて一言お願いしたい。

「次の決勝では一撃も食らうなよ！」

話したり考えたりしているうちに俺の身体は肩が消え、ついに左半身が割れかけている。

もうそろそろ終わりだなあとわかる。

サーマレイスも終わりを感じ取ったのか最高に可愛い笑顔を浮かべて

「もちろんです！」と請け負ってくれた！

ちっぽけなことだけでも優勝者に手傷を与えたのは俺だけってなると何となく良いだろう？

サーマレイスの言葉を聞き遂げると同時に俺は前へと倒れこみ、

全身が碎け散った。

『準決勝第一試合 勝者サーマレイスⅡセラヴァイル』

こうして俺の大会は終わった。

良かったところ、悪かったところ色々あるけども全体として考え  
ると出場して良かったんだろっな！

何より目標までの距離がわかったことだし。

これかも精一杯頑張っていこう！

俺は固く決意した。

そう思えるのはサーマレイスとの試合で諦めない選択をしたから  
なのだろう。

もしあそこで諦めていたら……………

俺がそれを知るのはずっと先のことだった。

## 29話 決着（後書き）

何とか準決勝が終わりました。

前回の選択肢で『勝利する』というのがあることから、多くの人はサーマレースに敗北することがわかっていたと思います。

勝利する、を書くのはまだ先ですが次は『諦める』を選んだ悪ルートを更新する予定です。それは連休中に更新できればと思っていますがまだわかりません。

改めて注意ですが悪ルートでは主人公が魔王になります。完全に別の人格といってもいいくらいに性格が変わります。殺人、強姦などのシーンが出てきますので気を付けてください。

また今回のラストでは悪ルートとのつながりが示唆されています。今後、悪ルートを読んでなければわからないシーンが出た場合は、どこかで補足する予定です。読まない人もご安心ください。

29・5話 ターダーター！（前書き）

勘を取り戻すために本来は飛ばす予定だった一場面をここで書くことにしました。

短いアホ話です。

29・5話 ダーダーダー！

「ダー！！！！！！！！」

「え？ちょっと！？やめ……リーダー！」

「ダーダーダー！ダーダーッダー……………！！」

客席に戻った俺は奇声を発しながらAの頭を掴み思いっきり振りまくっている。

「大祐、落ち着けて

「っダダダダダダダー……………！！！！」

今度は生意気にも仲介に入ってきたDの頭を振りまくってやった。

ついでにエロ太の頭を振ろうとしたけど、やつは俺の攻撃の気配を察していつの間にか少し離れた場所へ移動していた。

「ダー！！ダーダーダー……………！！！！はぁ、もう飽きたな。

言いながら二人の頭を離してやるとエロ太も戻ってきた。

「どうしたいきなり？」

「や、悔しさを発散させた。」

「おまえ、目的は果たしたから満足したんじゃないのか？……つてかまだ頭がガンガンするし。」

「おだまりなさい、アホA！そりゃ目的は達成したけど、それとは別に勝負には勝ちたいと思うのが普通だろ！」

「いや、おまえ勝ち負けには興味ないって言って

「ダダダダダ……！！！」

生意気なことを言うAの頭をもう一度シェイクする。

「人間なんだから矛盾することがあつたって良いの！他の人が訳の分からん矛盾を言ったらム力つくけど俺は言いの！自己中だから！」

「それはダメだろ。」

「ダーダー……！！！」



反抗してきたからDの頭ももう一度シェイクしてやった。そうしてると京子が近づいてきた。後ろには他の連中もいるけどこっちの様子を呆然と見てる感じだな。

「戻ってきていきなり何をやってるの？」と京子は呆れたように聞いてくる。

「聞いてよ京子、こいつらが頑張った俺に負け犬とか言ってきてさ、！ひどくね？」

激しくウソをつきながら京子の手を握る。部下たちが背後で何か喚んでいるがそんなのは聞こえない。

「ハイハイ。仕方ない人だな」

苦笑しつつ抱きしめてくれた。戦いの後の癒やしだわ。おまけにニコツと笑いかけながら、「いろいろ聞きたいこととか言いたいことはあるけど、まずはお疲れ様！」と言ってくれた。

ありがとう！と返して、そのまま抱きしめあっていると睦美が困惑してるのが見えた。寂しそうな感じもうつすら漂ってるから京子に一声かけた後、睦美に向かって突撃した。

「ダーダーダーダー！！」

「きゃあ！ちよつと大ちゃ……笹川君！やめ　　あ、ちよつと待  
つて！」

睦美の胸に思いつきり顔を埋めている。そして叫びながら微妙な  
位置で頭を動かしてるから一瞬色っぽい声が出そうになってたな。  
おまけにびっくりして大ちゃんと呼びそうになってたのがまた可愛  
くてさらに頭を動かしまくる。

「お願いだから止まって　　きゃ！？んん〜大ちゃん！わたし  
だって怒るときは怒るんだよ！」

可愛い顔でぶんぶん怒ってる睦美。が、問題なのはそれではなく  
今の発現を西川たちクラスメイトが聞いていたことだ！

「大ちゃん！？え、今先生が大ちゃんって言った？」

「やくそれはないでしょう。三坂さんがいるのに睦美先生までとか  
はありえないでしょう。」

「いや、言ってたよ。俺聞いたもの。なあ、優香？」

「うん、言ってたね。わたしも聞いたよ。」

西川、虎川原、松田に寺島が次々と言っている。

睦美の胸から顔を上げると目の前で可愛い顔が真っ青になっているのがわかる。さすがに世間体もあるし助けてあげることにはしよう！

そのまま睦美をギュッと引き寄せて、優越感たっぷりの顔をして言う。

「良いだろ！？準決勝まで来たご褒美に大ちゃんって呼んでもらえるのさ！羨ましいだろ？」

「うわ〜ドヤ顔がうざい…」と寺島。

「どうせ大祐が無理やり駄々こねて押し切ったんだろ？」と虎川原。

「違うし！睦美ちゃんから呼びたいって言ってきたし！ね？睦美ちゃん？」

人前だから呼び方に気を付けて話しかける。だけど睦美はウソをつけないタイプだから誤魔化すために堂々と尻を揉んでおいた。

案の定、みんなが大慌てで止めに来た。

「おいー！何羨ましいことやってんの？」

「おだまり西川！これは頑張った俺に対する正当な報酬だ！ね？睦美ちゃん。」

「ち、ちが」

俺の胸元に頭を押し付けて余計なことを言えないようにする。こうしとけば、いつものように俺が強引にバカやってるように見えるだろう！

「とりあえず、先生は解放しとけて。」

見学していたイケメングループのマイクたちが話に入ってきた。

「だーから、これは正当な報酬なの。それにもし俺が優勝したら来年には子作りを始める予定だったし。ね？睦美ちゃん。」

さすがに暴走気味な俺を止めようと真っ赤な顔して何か言おうとしてるけど、俺の胸に密着してるから「むーむーふがふが」としか聞こえない。

まあ、でもこれで完全にさっきの大ちゃん発言は流されることに鳴ったからもう大丈夫だな。寺島とかは露骨に呆れてるし。

睦美ちゃんを解放し（手は繋いだまま）、京子や部下たちを呼び寄せいつものようにわいわい騒ぎ始める俺たち。

俺たちの試合は終わりいつもの日常に戻る。

正直なところ多少の悔しさはあるけども、これからの目標に向かうワクワクした気持ちの方が大きいな！

まず間違いなく上級者たちの研究室への配属許可が下りる筈。そうすれば魔王化の研究を始めるし、久しぶりの幼馴染たちにも会うだろう。他には映像でしか見たことのない貴族本家の美少女達も直接見る機会があるだろう！

もちろんより強くなるための研究、訓練をするしいろいろ楽しくなりそうだ！

ちなみに大会の優勝者はサーマレイスだぞ！当然ながら決勝戦は余裕の勝利だったぞ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1245v/>

---

元魔王様、頑張る!

2011年10月20日01時16分発行